

に叶ふべし、

雜於害而患可解也

雜於害とは、利を害に雜へて思慮するなり、患とは災難なり、解とは絲のむすばふれてとけぬ様に、事のむつかしき災難のほどけ去ることなり、可解とはとかるゝと云ふことなり、事の害出來て難儀に及ぶ時、つねの人は其害ばかり心にありて、害の中に利の具はることをしらぬゆへ、其害に退屈して、志挫け氣衰へ、終には其災難を免かるゝこと能はず、智將は一邊に目前の害ばかりをば思はず、害に利の具はることを知て、よく其害の中より利を見出して、其方略をなすゆへ、其災難のむすばふれたるもとかるゝなり、杜牧が注に、たとへば敵に圍まれたるは害なり、我が心の害に陥る時は勝利の手筋は見えず、たひひたすらに圍を破て逃れ去んとす、是一邊に其心害に陥るゆへなり、士卒を勵まし、勢を奮て戦ひ勝ち、其利に乗して圍をとく時は、其圍ときやすきは、害に利をまじへて慮るゆへなりと云へり、昔張方と云もの、洛陽へ攻入り、數度うち負けければ、人皆夜中に洛陽を落

ち去るべしとすゝむ、張方對へて勝負は軍の常なり、負を以て勝ちとなすことをこそ、名將の作略とすれとて、其諫を用ひず、夜中に敵陣へおしよせ、敵を追崩し、大に勝利を得たり、是數度打負けたるは害なり、敵は利を得たるなり、されども敵の心驕り生じて、味方を見侮り、油斷生するところ、是味方の利なり、味方の内からさへ夜逃にせよと諫むる程なれば、敵よりも大形一兩日の内に、張方こそ洛陽にたまりえず引去るべしと皆々思ひ、夜打ちに寄せ來るべしとは思ひもよらぬ所へ、押よせたるゆへ、敵の實極まりて虚となり、味方の虚極まりて實となり、遂に勝利を得たるなり、是害には利を雜へて思慮する時は、其災難のとくる例證なり、

是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利

是は上の文に利に害を雜へ、害に利を雜へて思慮して、利害に泥まぬことを云たる、其しるしを云へり、上の文の利害は、味方の利味方の害也、此本文の利害は、人の利害也、諸侯は敵にてもあれ、又敵

とも味方ともつかぬ國にてもあれ、鄰國の諸侯をさして云なり、屈するとは屈服することにて、鄰國の諸侯の吾が威勢に屈服して、臣となり従ふことなり、害とは其諸侯の害になることを指して云なり、役するとは役使する義にて、奴僕を使ふ如く、鄰國の諸侯を使ふことなり、業とは利害まざりて、利とも害ともかた付けて名付られぬことを指して云へる也、趨しむとははしり赴むく義なり、利とは鄰國の諸侯の利となることを指して云なり、上の文に云へる如く利害に泥まぬ人は、よく鄰國の諸侯を我が心まゝにはからふなり、何にても害のあることをおどして、屈服させたきと思へることも、其方便がよくきゝて、心まゝに鄰國の諸侯が屈服すると云ふことを、屈諸侯者以害と云へり、又利害入れまざりて、利とも害ともつかぬ事を以てなりとも、鄰國の諸侯を奴僕の如く使ひ、東へなりとも西へなりとも、たてになりとも、よこになりとも、わがしたき様にする時、それも心まゝになると云ふことを、役諸侯者以業と云へり、又何にても利のあることをしかけて、鄰國の諸侯をそこへはしり赴く様にする時、我が心まゝに走り赴くなりとも云こ

とを、趨諸侯者以利と云なり、是皆利の上に害を見、害の上に利を見て、一邊に泥まぬゆへなり、利害の道理明かならぬ人は、害を以て鄰國の諸侯を屈服せんと思へば、彼れを害するわざばかりして、屈服せんとするなり、利害に泥まぬ人は、害に利を雜へて取りはからふゆへ、彼を屈服せんと思ふ時は、彼れに屈服すれば利あり、屈服せねば害ある様にはからふゆへ、一邊に害を以てはからふとはかはりて、其方便ことの外にきゝて、よく屈服するなり、又利害の道理明かならぬ人の利を以て鄰國の諸侯を趨赴かしめんとするわざは、彼が悦ぶべき利ばかりを以てはからふなり、利害に泥まぬ人は、利に害を雜へてはからふゆへ、彼を趨り來らしめんとする時、彼が趨來る時は利あり、趨來らぬ時は害あるやうにはからふゆへ、一邊に利を以てはからふとはかはりて、其方便ことの外にきゝて、よく趨赴くなり、又利とも害ともつかぬ業を以て彼を役使する上も、同じことなりと云意なり、上の文には利と害との二つをならべて、二句を以て云て、こゝには又利害業の三つを以て云へるは、文法の變化なり、總じて軍書の内にて、

孫子ほど文の奇妙なる書なし、歴代の文人是を稱美せるも、孫子が文章をたしなみてかきたるには非ず、其道理の妙處を得たるゆへ中に弼て外に彪はる、道理にて、自然と文章他書にすぐれたるなり、古來の注にはこの三句は上の文を承けて利害に泥まぬしるしを云たることを會せず、三句を一句くわけて説たるゆへ、文勢前後に貫かず、而も其義淺くして差別わかれ難し、屈諸侯者以害と云を、或は彼が嫌ふことをすると云ひ、或は其國の賢臣をこの方へうらがへらせ、或は姦人を其國へ遣はし、出頭させて其國の政道を亂り、或は間を入れて君臣のあひだをはなし、或は細工の上手をおくりて、其國の君の普請作事或はさまざまの器物を作りて、金銀を費すやうにしかけ、或は淫樂をおくりて其國の風俗を變じ、或は美女をおくりて政道に怠らせなどする類を云と云へり、皆さることなれども、前後の文に貫通せぬ注なり、役諸侯者以業と云をば、曹操が注には、彼が勞する様なることをしかくことなり、彼が引けば我は攻めゆき、彼が切て出れば我は引きなどして、彼をなやますことと云へり、此注にては業の字の意きこへず、

杜牧張預が注には、我が國富饒なる時は勢強きによりて、敵おのづから我につかはるゝと云へり、是は業を田業の意に見たれども、字義穩ならず、杜佑は其國に普請作事等、或は結構なる器物音樂等はやりて、民の勞するやうにすると云へり、是にては役の字の意聞へぬなり、王皙は左傳の田常が語に、吾兵業已加魯矣と云を引て、軍をしやくることを業と云と見たり、左傳の意は業已の二字にてすでにと云意なることを知らず、何れも從ふべからず、又直解の一説に、諸侯屈せらるゝことは害を以てなり、諸侯に役せらるゝことは業を以てなり、諸侯に趨らしめらるゝことは利を以てなりと讀て、利害に滯り泥みて、利に害を雜へ、害に利を雜へて慮ることのなる愚將の、鄰國の諸侯に屈服させらるゝことは、害を見ては害の一邊に泥むゆへなり、鄰國の諸侯に役使せらるゝことは、事業に苦みてそれに泥むゆへなり、鄰國の諸侯に引動かされて趨赴くことは、利を見ては利の一邊に泥む故なりと云意なりと云へり、此説は今の解と、其義相通す、されども紆曲なる説なるゆへ是に從はず、

故用兵之法、無恃其不來、恃吾有以待也、無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。

是は上の文に利害に泥まず、利害に明かに練熟する時は、鄰國の諸侯をよく吾が手に入れ、屈服役使奔趨せしむることを云を承けて、合戦の法も目前の利害に泥まじきことを云へり、用兵之法とは、軍の道と云ことなり、其とは二處とも敵を指して云、無恃其不來とは、敵のよせ來らぬは利害の上にて云へば當分の利なり、されども利と害と離れぬものゆへ、敵の來らぬを待みにして、心安く思ひ油斷する所、是味方の虚にて、敵にうたるべき所なれば、害こと具はるゆへ、敵のよせ來らぬを心安がり、待みとすることなかれと云へり、恃吾有以待也とは、吾に敵のよせ來るを待うけてよく是に應じ、敵より不意をうたるゝことのない所あるを待みとせよと云意なり、敵のよせ來るを待うけて、よく是に應ずることは、利あれば害あり、害あれば利あり、安き中に危き所あり、危きところに安き所ありて、何事もうらおもてうらお

もてと離れぬものなることを、よく徹底して知る所より、害なき處にも害を慮り、安き中にも危きを忘れず、思慮周密にして一邊に落ちず、萬變に應じて如何様の變をも待うけて、よくそれゝに應ずるなり、無恃其不攻とは、敵のわれを攻めざるを見て、心安しと恃むことなかれ、恃ところ油斷にて虚なり、是敵に攻らるゝ所なりと知て、當分の安危に泥むことなかれと云意なり、恃吾有所不可攻也とは、われに如何様にしても敵に攻られぬ所のあるを待みとせよと云ことなり、如何様にしても敵の攻ることのならぬと云は、利害は離れぬものと云ことを知て、油斷なくすまなき所を云なり、畢竟此句は上の句と同意なり、くりかへして丁寧に云たるものなり、此條の注に何氏吳略を引て、君子當安平之世、刀劍不離身と云へり、君子たるものは安穩治平の世にて、干戈を動かす時節にてなければ、刀劍は身をはなさぬと云意なり、是聖人の教に安不忘危との玉へる意なり、禮記にも長者に侍る禮を記する中に、長者の退屈せる體あらば、機嫌を見はからひ早く退くべきことを云とて、長者たる人劍の首をもてあそび、日影の移る

か移らぬかと庭などを見玉は退くべしと云ことあり、是を吳略の文に考へ合すれば、古の聖人の三代の時は、吾邦唯今の風俗の如く、士大夫たるもの朝夕刀劍をば身を離さざりしなり、秦の始皇帝の時、臣下を氣遣ふ心深くて、殿上に侍るものを皆無刀になしてより、世の風俗となり、異朝にては今はみな無刀なり、此方禁裏にても武官の外は帶劍せざるも、唐朝の禮の移れるなるべし、本文には關らぬことなれども、事のついでに記すなり、

故將有五危

將は大將なり、五危は五つのあやうきことなり、上の文に利の中に害あり、害の中に利あることを云をうけて、大將の身の上にも五の危きことあることを云へり、此五は人の氣質の上に於て、何れも取り所ありて、ひとかど用に立つ氣質なり、かくの如く用に立つ所あれば、又それ／＼に其害ありて、是を知らぬ時は軍の勝利を失ふこと、是より生ずるゆへ、是を五の危きことと云へるなり、この五危すなはち上の文に云へる五利なり、五の危きことを五の利と云へるは、

是を五の危きことと知らぬ時は五危なり、危きことなりと云ことを知て、それ／＼に其手あてをする時は是すなはち五の利となる、又敵將の上を此五危にて察して、それ／＼の氣質に隨て是を挫く時は、是則ち味方の利となるゆへ五利なり、總じて利害のはなれぬことかくの如し、

必死可殺也

是五危の内の第一なり、勇ありて智なき將の過を云へり、必死とは死を必とするよみて、心を死に決することなり、凡軍と云ものは人を殺すわざなれば、劍戟を執て戰場に赴くもの、誰か敵を殺すことを思はざらん、わが敵をころさんとする如く、敵又われを殺さんとするなれば、死を怕れては軍はならぬことなり、もの／＼の道たれもかく思へども、急切の場に臨ては勇なるものまれなるゆへ、古老の物語りにも、そなへは必杉なりになるものなりと云へり、されば身命を棄て、必死を心がくるもの、常に真先にすゝみて、勇の少づゝ劣りたるものほど段々にあとさがるゆへ、覺へず杉なりになると云へり、此すぎなりにな

りたる一の尖りに居る人、必一番鎧をつき衆人に勝れたる勇功をなすゆへ、是軍中第一の手柄とすることと通法なり、是は士卒の上のことにて大將の道に非れども、急切の場に臨みては、自身に士卒に先だゝずんは、士卒何として其下知を用んや、故に勇猛の大將は皆身命を輕んじて士卒を率るゆへ、士卒も又其勇氣にひかれてつぎなるものも勇になるゆへ、名將の下に臆兵なしと世俗にも云ひ傳るなり、如此なる時は、我は死を何とも思はず、敵は死を惜む心あるゆへ、我が鋒の強きこと敵に十倍し、よく少勢を以て多勢を打破り、敗軍をももち返して、危き場を踏なをすこと大將の勇氣にあり、是軍旅の第一とする所にして、此本體立ざる時は、智謀計策も用に立たず、故にもの／＼は勇を尙ふこと、和漢古今みな異途なく、臆したる將の武功を立ること、和漢古今に又其例なし故に將に必死の心ありて勇剛すぐれたるは、まことに寶とすべきことにて、あしきことと云には非ず、されども如此の勇氣ばかりにて、智のたらぬ所ある時は、勇の一邊に陥るゆへ、いつも必死とばかり心がけ、軍にかけ引きあることを知らず、戦ふ場戦はぬ場

のあることを知らず、引くべき場をも引かず、戦はぬ場にも戦ふゆへ、必不覺を取ることなり、但し勇猛の人は生擒などになることは大きな恥辱と思ふゆへ可殺と云へり、其將を殺すことはなれども、生擒にすることはなりにくきことゆへかく云へるなり、曹操張預が注に、奇伏を以て是を殺すと云へり、是は勇將を殺んとせば、其人勇者なれば力わざにて殺んとすれば、味方を多くうたるゆへ、奇兵伏兵を以て是を殺すとすなり、勇にして思慮なきゆへ、勝に乗じて追ひ來り、奇兵伏兵にはさまることを知らぬこと、多く勇者にあることなるゆへ、かくの如く注せり、されども一途に拘るべからず、

必生可虜也

是五危の第二なり、智ありて勇なき將の過を云へり、必生とは生を必とするよみて、生きて返らんと心を決定したることなり、可虜とは生取にせらるることとなり、總じて軍は死場にて、命を的にかくるはもの／＼の定まりたることなれば、誰人も戰場に赴きては、生きて返るべき心はあるまじきに、生きて返

らんと心を決定することは、智の勝れたる人のすることなり、元來軍の方便、奇正虚實かけ引の道によく練熟して、軍か手に入りておるゆへ、如何様の危き場にて人は皆打たるゝとも、吾は生きて返ること治定なりと心を落しつゝること、誠に智慧抜群にすぐれ、つねの人の及ばぬ所ある人ならでは、かく迄におとし付ることはなるまじきことなり、されども天地の間には智慧の及ばぬことあるものなり、何程の名將なりとも、運盡る時はうたるゝこと古今其例多し、人生には生くべき場なりとも、義理のかくる所に於て死なで叶はぬは臣たるの道なり、然るに我が智のすぐれたる所にくらはれて、智慧にてならぬことはなきものなりと思へるところ、是智餘りありて却て其智にくらまさるゝ所なり、何故に如此なると云に、智勇は車の兩輪にて、日と月との如く、陰と陽との如し、日升れば月入り、月出れば日沈む、陰極れば陽生じ、陽極れば陰生ず、故に智のすぐれたる人は必その勇足らざる所あり、勇のすぐれたる人は必其智たらぬ所あり、心を必生におとし着ること、其智あまりあれども義勇の心たらぬ所より、死すべき場をばつす失あると云は、其根元氣に使はるゝ所あるより起るなり、智勇兼備したる將にても、かくの如き失はあるものなり、昔司馬仲達、孔明より婦人の装束を贈られ、怒て戦んとせしこと、姚襄が苻黄眉に侮られて、怒て戦ひうたれしこと、皆すぐれたる大將の上にもあることなり、此氣を以て功をたて、又此氣を以てあやまつなり、可侮也と云は、氣に使はるゝことなき人は侮りても取合はぬゆへ、侮る計も何の役にたつず、是を侮られぬと云なり、氣に使はるゝ人は侮らるゝ時は、持病の怒り起りて、すまじき合戦をして不覺をとるゆへ、是を侮らるゝ所ありと云ことにて、可侮と云たるなり、愚なるかな、人に侮られてこらえぬは、其心には侮をうけぬと思へども、人に侮らるゝことを嫌ふ一念より、侮を以て其怒りを動かして、すまじき戦をさせらるゝ所、却て人の侮を受ると云ものなることを知らず、人の侮るに取合はねば、彼れがしかくること皆無用なることになりて、我には一點の動きなきによりて、是却て侮を受けぬと云ものなり、戒むべく慎むべし、

りて、たとひ生擒になりても智慧を以て生きて返らんと思ふによりて、かくの如き將は生擒になるものなり、司馬法に上生多疑と云へり、上生とは生をたつとぶとよみて、其心にとかく命を全くするをよきことと思ふ人を云、命さへあれば衰へたる國をも再び興し、運もひらかるゝと云ことを知て、心を必生に決定するなり、多疑と云へるは智慧多き人のことを云へり、智慧多ければ一事を萬理に見るゆへ、其心に疑ひ多きものなり、疑ひあれば一途に決せず、是勇の自然と足らぬ所なり、古來諸注にはこの必生と云ことを皆臆したる將のことに云へり、尤臆したる意よりも、必生きて返らんとすることなれども、その如なる將はもと將の器量に非ずして、云に及ばぬことなれば、孫子がこゝにこゝらに擧げて論ずるに及ぶまじきことなり、故に今其説に従はず、

忿速可侮也

是五危の第三なり、たとひ智勇備はりても、氣につかはるゝ失ある將のことを云へり、忿速とは忿はいかり、速は急なることなり、忿をこらえず短慮なる失あり、

廉潔可辱也

是五危の第四なり、智勇兼備はりても、名聞の深き人にある失なり、廉潔はきれいなることなり、廉はかどとよみて、物の差別さかひめのはきと立ちたることを云て、立派をこのむことなり、潔はいさぎよしとよみて、一點のけがれなきことなり、名聞の心深きとは、或は武道の名聞ふかく、或はわが一己の立派をこのむことなり、かくの如き人は一點の瑕瑾けがれもなき様にと心がけ、少しも人の褒貶をうけぬことを第一とするなり、此心ある時はたとひ智勇兼備してもこの一念大きな害となり、武道の瑕瑾か、又は一己のたゞぬ様なることを以て、是をけがし辱むる時は、すまじき戦をして不覺をとるものなり、昔項羽の師の范増と云し人は、智勇抜群にすぐれたる人なりしかども、陳平が謀にて間者を入れて、項羽と范増との君臣の間をへだて、范増が計の用ひられぬ様にしつれば、かく吾が計を用ひられぬ上は、項羽につき従ふとも遂に勝利を得がたし、范増が居りながら項羽にまけさせたと當代後代にも思はれんこと、わが

智勇のなをりなりと思ひ、項羽の幕下を立ち去り、故郷に歸り、憤りの餘りに、終に發背を煩ひて死したることあり、是一點の瑕瑾をうけじとする心より、莫大の功業をやぶり、始終の勝利に心づかぬ失あるなり、名聞の心ふかく、一點の瑕瑾を受けじとする上にて、涯分に弓矢をはげみ功業を立る得あれども、又かくの如き失ありと知るべし、

愛民可煩也

是五危の第五なり、仁徳ある人の失を云なり、仁徳ありて民を愛すること、人の上たるもの、徳これに越たること又もあるまじ、君は勿論なり、將たるものも君より數萬の軍兵をあづかり、數萬の軍兵は皆將を父母とたのむことにて、其生死は將の一心にあることなれば、仁徳なくて將となること、まことに其器に非すと云つべし、されども仁徳あまりありて決斷たらぬ時は、又是に失あり、煩すとは骨折らすることなり、仁徳あまり有て民を愛する心ふかき人は、其心専ら民を安んずる上にあるによりて、それにひたものに取りかけ、其民を苦むる様にする時は、吾が民の敵

に苦めらるゝを見ては、其通りにさし置くことせず、吾が辛勞をかへり見ず、又もく敵の出る度ごと、に、後詰加勢に出るにより、遂にはつかれくたびれ、却て國のよはりとなるなり、是を可煩也と云なり、骨折り疲るゝ様にせらるゝと云ことなり、義を以てよく決斷する人は、全體の害にならぬことなれば、民の苦むをも事によりては見棄て、敵の方便に取合はぬによりて、敵より是を疲らかさんと思ても、疲かすこと能はず、されば仁は義を以て輔とす、義の決斷なき時は、仁徳さへ害となるなり、以上の五危皆將の徳なり、必死は勇なり、必生は智なり、忿速は氣の勝ちたるなり、廉潔は功名を立る人なり、愛民は仁徳なり、然れば五つともに皆利なり、利に害は離れぬものゆへ、五危其内に具はる、萬事皆かくの如し、こゝをよく會得する時は、變化の道こゝに盡く、故に九變の篇是を以て説き終れり、

凡此五者將之過也、用兵之災也

これより下は、上の五危を結びたる詞なり、凡此五者

孫子曰凡處軍相敵

この一句一篇の綱なり、凡とは總じてと云詞なり、處軍とは陣を取るにても、備を立るにても、總じて軍兵をおく場所のことなり、相敵とは物見なり、此篇に軍兵を置く場所のこと四つ、物見のこと三十三あり、故に發端にこの二を云へり、絶山依谷と云より、伏姦之所處と云までは軍兵を置く場所を云、近而靜者と云より必謹察之と云までは物見なり、兵非益多と云より末は人を使ふ道を説けり、此相の字を講義には兩軍相對する義に説けり、用ゆべからず、

絶山依谷、視生處高、戰降無登、此處山之軍也

是軍を處くことを説ける四箇條の一なり、山に軍兵をおくことを云へり、絶山とは山をこえて山をうしろにすることなり、總じて軍は前へ進むことを主とす、行くさまに山あるに、其山のきわまで行きつめて、山をこさるるときは、先きに山塞がりてあるゆへ、前へ進むに害あり、又さきを見はらさぬ失あり、

將之過也とは、總じて右に云へる五危は、各將たるもの、一徳にて、其上に具はる過ちなりと云ことなり、用兵之災也とは、將は軍の司命にて、軍の勝負は將にかゝることゆへ、軍の上にて、災はこの五危に根ざすと云意なり、

覆軍殺將必以五危不可之不可察也

覆軍とは一軍皆うたることなり、殺將とは大將のうたることなり、一軍の敗北より大將の生害必この五危より出ることなれば、利の上に害具はり、害の上利の具はること、察せずして叶はぬことなりと云意なり、孫子が丁寧の戒なり、

行軍第九

行軍は軍をやるとよみて陣押しのことなり、此篇は陣押しより、陣を取り、軍兵をおく場處、并に物見取合までのことを云へり、皆軍兵を押しゆく内のことなるゆへなり、

又山へ上るは逆なるゆへ、敵ひそかに山上へ取上げ、上より落しかくる失あり、殊に山には草木などあるものゆへ、敵の物見など鼻の先きの山の上に、草木にからまり居るべき氣遣もあり、山をこすときは前ひらきて向を視おろす得あり、後高く前ひきく順なるゆへ、すゝみやすき得あり、自然とあとへ引きにくき得あり、敵より吾が後を見すかぬゆへ、人数の多少もはかられず、山を此方の物にするゆへ、山中の草木等をきり取て用立る得あり、如此の得失にて、山をこして陣を取るを法とするなり、梅堯臣は山にへだてらるゝときは谷に依るとよみて、前に山あるときは谷にそふと見たり、絶山の二字を山にへだてらるゝとよむこと、字法穩ならず、施子美は断絶山險と注して、山をたちきることに見たり、絶字の古義を知らず、何れも非なり、依谷とは谷は山水のながるゝ處なり、依るとは近つき傍ふ意にて、谷川にひしとひきそふて居ることなり、山水の流るゝ處には必草あるものなり、故に劉寅は地有水草曰谷と云へり、山中にて水もあり草もある處を谷と云と云意なり、谷川の流にそふて陣を取るときは、水に事かゝず、

馬草のたよりあり、ひしと引そふて陣取るときは、敵に水草の地をとられぬ得あり、昔武都羌と云えびす、山上に陣を取り、馬援に水草の地を奪はれ、戦ひまけたるも、依谷の法をしらぬゆへなり、但吳子に、無當天竈、天竈者大谷の之口なりと云へり、是又谷ある處に陣を取る用心なり、視生とは生は草木のある處なり、視るとは見つくらふことなり、森林又茅野など草木のある處を見つくるひ、其森林又かや野などの取り様にて得多きものなり、總じて草木のある處は、陣具の用意に事缺ず、兵糧盡きても食物あるものなり、急なることにて陣屋を張らずとも、風雨のふせぎにもなり、又人数を見すかされぬ得もあり、草木なき處とくらふれば生類に便りある場所なり、鳥獸も多くは草木ある處に栖むものなり、故に草木の生ずる處を本文に生と云なり、曹操の注に、生者陽也と云へるをうけて、李筌、杜牧、陳暉、賈林、梅堯臣、張預、劉寅、黃獻臣、彭繼耀みな視と云を只目に見る意にして、陽を前にうくると云義にて、東南に向ふことを云と説けり、兵は陰道なれば、陽氣を受るときは勝つなど、云説あり、皆迂遠の僻説なり、下に平陸に軍

を處くには、死を前にし生を後にすと云文あり、平陸にては西北を前にして、東南を後にすべき道理なし、又是を日輪を前にうくれれば、軍に利なき道理に引き合せて説く人もあれども、山と水邊にては東南を前にして、平地ばかりに西北を前にし、東南を後にすべき道理なし、唯草木ある處を生と云ひ、見はからふことをも視と云と見れば、前後の文さはりなく通するなり、總じて古書は字義を第一とす、生の字は土に従ひ山に従ふ文字にて、中は草なり、草の土より生じたる貌なり、故に字の本義は、草木の土より生ずることを生と云て、それより轉じ用ひて、其外の生類のうまゝにも、又生活の義にも用ることなり、古書の字義に暗くして、古來の注みなあやまれり、處高とは地形の高き所に居る意なり、陣を取にも備へを立るにも、地形の高き處をよしとすと云ことなり、是も吾は高き處に居て、高きより卑きを撃つは勢順なるゆへなり、此一段は總じて軍兵を山に處くことを云て、山は必高きものなるに、かく云へる意は、山に軍兵をおくとて、山の頂上山の脊などに人数を置かるゝものにてはなし、必山中の少しにても平なる處を見たてゝ、

陣をも取り、備をも立ることなり、故にその平なる處の内にては、高き方に此方の軍兵を置て、敵をひき、處に受るやうにせよと云ふことなり、戰降無登とは、坂を降りて戦ふべし、坂を登りて戦ふこと勿れと云意なり、降り順、登り逆なり、只兩人あひてむかひの闘にても、打つ太刀になる方に勝ちあり、自然の勢ひなり、諸本に降の字を隆の字に作る、隆は高しとよむ、其時は本文を隆きに戦ふには登ることなかれとよむべし、敵高き處に陣取り居て戦ふに、其場へ攻め登ることなけれ、卑き處へ引出して戦ふべしと云意に見る、義理は同じことなれども、何法穩ならず、杜牧張預が注に、一本には降に作ると云へり、故に今其説に従て本文を改るなり、此處山之軍也とは、右の三句は、山に軍兵を立ておく法なりと云意なり、

絶水必遠水

是また軍を處くことを説ける四箇條の一つにて、軍兵を水上におくことを説けり、絶水必遠水とは、水とは川なり、人数を押すに川をわたりて行くべき路

ならば、必川に遠き處に陣取るやうにすべしと云こ
となり、是に兩説あり、曹操、李筌、梅堯臣、王哲、張
預、施子美、黃獻臣は川をわたるべき前のことに云へ
り、先きに川ある處に陣を取り備を立てば、川端へ近
づくべからず、吾が陣と川との間にらいた地を明けて、
川へ遠くすべしと云意に見たり、一つには敵の川を
半分わたりたる處を撃つ利あり、一つにはわが進退
自由なり、川にひしと付きたる時は、前は川なれば進
むべき處なく、唯退くことばかり自由なり、其上川は
たにひしと人数を出して、川を盾にとるところ、川を
たのみにする一邊なり、故に川をわたらるゝ時は負
ること必定なり、川より手前に遠く扣へたる時は、敵
に川をわたれと場を明けて敵を引つくる所、勝利の
具はる場なり、又劉寅、彭繼耀は川を絶りて陣を取る
は、川に遠きをよしとすと云へり、是は川をわたり
て、陣を取り備を立るには、先陣は川をはなれて遠く
すべし、されば後陣の川をわたりて備る場をあけて
置くによりて、あとより濟るものゆるくと備を立て
て、敵に半渡をうたるゝ失なしと云意なり、兩説とも
に通ずれども、前の説の方古今の定法なり、川を渡り

て陣を取り備を立るには、事によりて、川は直に後に
あつることもあるべし、又間を遠く置くこともある
べし、決して川との間を遠くすべしと云べからず、
客絶水而來勿迎之於水内、令
半濟而擊之利

客とは敵を云、總じて待つものを主とし、寄せ來るも
のを客とす、亭主と客人に喩へたる詞なり、客絶水而
來とは、われ川より手前に陣を取り居る時、敵川をわ
たりて寄せ來る時のことなり、勿迎之於水内とは
之とは敵を指して云、水内は川中なり、迎るとは吾が
人数を川中まで出して、川をわたる敵をうつことな
り、敵も味方も一つに川中にてもみあふ時は、主客の
勢ひ混亂して、陣法も亂れ、思ふやうなる働きならぬ
ゆへ、川中まで出て迎て戦ふことを禁じたるなり、昔春
秋の時、宋の襄公楚王と泓と云處にて戦ひし時、楚の
軍兵先手ばかり川を渡りて、後勢つゝかざる所を打つ
べしと公子目夷申しけれども、襄公用ひず、先陣後陣
皆川をわたりしまひて、いまだ備立とゝのほらざる
所を撃つべしと、目夷又申しけれども、襄公それにも

従はず、備を立固めたる處へかゝりて敗北したるこ
と、古今の笑ひぐさとなれり、又三國の時に魏の將郭
淮、漢中と云處を固めて居たりけるに、劉備漢水と云
川をわたりて押寄すべき體なりければ、郭淮が方の
諸將、味方は少勢敵は多勢なり、川をわたられては利
を得がたし、川ばたに人数を出してふせがんと云け
れば、郭淮用ひず、川ばたより遠々と備を立て待ちけ
れば、劉備人数の半ば川をわたらるゝ所を撃つべき
謀なることを知て、漢水を渡らざりしことあり、この
外韓信が、龍沮を淮水と云川にて殺し、夫槩王が、楚
王を清發と云處にてうち、公孫瓚が、黃巾賊を東光に
て攻敗り、薛萬均が、范陽と云處にて竇建德を敗りし
るに、皆敵の人数のなかば川を渡りたる處をうちし
なり、杜牧王哲が注に、水内の内の字を泅の字の誤な
りと云り、泅はほとりなり、然れば水内は川ばたのこ
となり、勿迎之於水内とは、川ばたへ人数を出すこ
となかれと云意に見たるなれば、味方より人数を川
ばたへ出す時は、敵必川をわたらぬゆへ、勝つべき所
なしと云意なり、さもあるべけれども、それにては下
の文の無附水而迎客と云と同じ意になるなり、用

ふべからず、令半濟而擊之利とは、敵の人数の半分
川を渡りて陸へあがり、残る勢のいまだ渡らざる前
に撃つべしと云ことなり、軍の備をも立て固めず、後
勢もつゝかぬ所なれば、敵の備亂れ力も専一ならぬ
ゆへ、必勝利ありと云ことなり、敵の人数の川を半分
ほど渡る所を、川中へおり立ちて打てと云ことには
非ず、然る時は前の勿迎之於水内と云詞と齟齬す
るなり、半の字を敵の人数へかけて見るべし、川へか
けて見るべからず、

欲戰者無附水而迎客

附水とは川を前にあてゝ、川ばたへひしと人数を備
ることなり、客とはよせくる敵を云なり、戦んとする
ものは、前に戦ふ場を明けおくべし、川ばたに人数を
ひしと附けて備る時は、前に戦ふべき場所なし、その
うへ古より川を楯にとり、川ばたへ人数を出して、よ
せくる敵を待ちて利を得たること少れなり、川を前
にあつれば、進むべき場なきゆへ、退くまでのことな
り、川ばたに備へたる敵を見ながら、川を渡りてはせ
升る勢、ふせぎ止めがたきものなり、川を渡りて岸へ

上りて、勢ひたゆむ所あり、しばし間あれば備を立固めて、背水の陣となる、故に人数の半分川を濟りたる所を、間をぬかず打つこと定法なり、春秋の時に、晋の將軍陽處父と、楚の將軍令尹子上と、泝水と云川を夾みて陣を取りたる時、陽處父楚の軍兵に川を渡らせ、半渡を打つべき爲に、備をあとへくりければ、楚の將軍子上も、晋の軍兵に川をわたらせんと備をあとへくり、互に川をわたらせず、合戦に及ばずしてかへりしことあり、

視生處高

視生の解前に見えたり、水邊に人数を處くにも、草木の生ずる所を見はからひ、其うけやう心得ありと云ことなり、處高とは、水邊は總體地卑きものなり、其内にも高き處あるべし、人数をおくにはとかく高き處をよしとす、敵よせ來る時、高下の勢順なり、其上ひき、處にては、敵より水をせきかくるか、又山川などは一夜にてもふと水出ることあり、其時陣場へ水押入るなり、敵來らずとも士卒濕氣にあたり煩ふ害あり、まして水の押入りさばく處を伺ひて、敵よ

せ來る時は、まくること必定なり、故に水邊にては、高き處に人数をおくを殊に宜しとするなり、張預が説には、川ばたに陣を取るにも、又川中に舟を浮るにも、東南に向ひ高き處をよしとすと云へり、視生と云を東南に向ふこと、云へるは、誤なること前に解せり、川の中に舟を浮るに、高き處をよしとすると云こと、心得がたき説なり、

無迎水流

是は舟戰のことなり、川の流れを、川下より川上へ攻め上ることを云へり、敵は水の流るゝ勢に乗じて順なり、味方は流れに逆ふて逆なれば、川上へ攻め上るべからずと云へり、是は狭き川のことを云、異國の江水と云川などは、廣き百里と云へば、日本の十里ばかりもあるべし、その如なる大河に舟を浮るには、舟に帆をかけて風に乗じて往來するゆへ、あながちに川の流れの順逆にかゝらず、風の順逆を見ることなり、本文に拘るべからず、又この本文を、川下のひき、地に陣とらぬことなりと云へり、是も同じ道理なり、水はとかくひき、處へ流るゝものなり、故に水邊の地

にさま下高下も見へずとも、川上のかたに陣を取り、敵を川下の方にうくる様にすれば、味方の足下高く、敵の足下は卑く、走りかゝる勢ひ順なり、川下に陣を取て、敵に川上の方を取らるれば、少しつゝにてもつまさき上りにて勢ひ逆なり、故に川中にては、川ばたにても、とかくに川下より川上へのぼるは逆にてありしと云意なり、古來の説に、川上より敵毒藥を流すことありと云へり、さることもあるべし、そればかりの用心に限りて、川下に陣を取て禁ずるには非ず、

此處水上之軍也

この一句絶水必遠水と云より、無迎水流と云迄を結ぶ詞なり、是皆川のほとりに、人数を居、法なりと云意なり、水上はかはのほとりのことなり、みなかみとよむは俗よみなり、

絶斥澤惟亟去無留

是又軍兵を處くことを説ける四箇條の一つにて、斥澤を押し行くことを云へり、斥澤とは、斥は鹽鹵之地と

注せり、鹽はしほなり、鹵は海邊などの鹽のある地を云、澤は水のたまる處、水海などのほとりを云なり、絶斥澤とは、海邊の鹽地、又は湖邊を押し行くことなり、惟とは是に限て此外はなきことを云なり、亟去無留とは、急に押しとをりて必逗留すべからずと云意なり、湖海のほとり鹽のある土は、土の性あしく、多くは沙場にて、足下あしきものなり、地形必うち開きて、たよるべき要害なく、水もなく、馬草も少なし、濕氣多くして煩を生ず、陣を取り備を立るに、至極の惡所とす、唯急におしとをりて逗留せざるより外、かくの如の場にては、別によき仕形はなきと云意なり、

若交軍於斥澤之中必依水草而背衆樹

上には斥澤をば急に押しとをり、必足をとめぬことを云へり、こゝにはされども不意の變にて、ふと敵に斥鹵の中に出逢ふことある時のことを云へり、若交軍於斥澤之中とは、もし思ひかけず斥澤の中に、敵と軍を交へ合戦に及ぶとあらん時と云意なり、必依水草とは、必水あり草ある處を離れぬやうにす

ることなり、背衆樹とは、衆樹はおき樹と云意にて、森林のるいを背にあつることを云なり、斥鹵の中は足場あしく、陣を取るにも備を立るにも、合戦にも宜しからぬ處なれども、水と草と木とのある處は、地堅きものなり、水とは川なり、川上より、年々水の流るゝ勢にて土を流し來るゆへ、斥澤の地外は皆沙場なれども、川のあるほとりには地の堅き處あり、草ある處は土あるゆへ地堅きなり、沙には草は生せず、沙にても沙淺くて下に土近ければ草生するなり、斥鹵の足場あしきは沙なるゆへなり、沙場にても草の生する處は、沙淺くて土近きゆへ、足場少しはよきなり、其上草の根とち合ふて、足もと堅き道理もあり、又水にかつえず、馬草に事欠ぬ爲もあれば、水草に近づくをよしとす、又森林少しにても樹のある處は、是も土堅く、其上斥澤の地にては、樹木ならでは要害に取るべきもの外にはなきゆへ、是を背に當て、戦ふと云ことなり、異國にて北狄の地は皆沙漠とて、數千里が内沙場なり、海邊には非れども皆斥澤の類なり、さるゆへ干幹突厥と云ふ北のえびすと戦ふ時、川をとり切て陣を設けしは、味方は水に渴えず、突厥は水

を汲むべき處なくて、人馬水にうえ、遂に突厥敗れたり、又赫連勃勃と云えびす、王奚と云ものと戦ふ時も、勃々腹を断ちきりしかば、王奚が軍兵、水にかつえて敗軍せることなど、この本文に叶へり、

此處斥澤之軍也

是上を結ぶ詞なり、斥澤の地を押し行き、敵に出逢たる時の仕形なりと云意なり、

平陸處易、右背高前死後生、此處平陸之軍也

是又軍を處くことを説ける四箇條の一つなり、平地に軍兵をおくことを云へり、平陸とは、平は平地、陸は陸地なり、山も川もなき平地を云なり、處易と云は、易は坦易とてたいらに足場よきを云、地の總體山も川もなき處に陣を取り備を立るには、其内にも又地に高下なく、かけ引の足場よき地を用ゆべしと云となり、右背高とは、山にても丘にても高き處あらば、右と背とに當つべし、されば左と前とひきくなるなり、劍を持て働くも、矛を持て働くも、弓鐵砲のるい

にても皆前と左に敵を受る時は、手むきよく順なり、故に曹操も戰便也と注せり、戰ふ勝手のよきことなり、前死後生とは、死は死地にて草木のなき處を云、生は生地にて草木の生じたる處を云、後にあつれば要害になり、前にあつれば邪靡になるゆへ、草木あるをば後にするなり、但この死生のことを杜牧が注に、死者下也、生者高也と云へり、此説にては上の句の右背高と云と重言になるなり、賈林は岡阜を曰生、戰地曰死と云へり、是も同意なり、王皙の兵皆陽に向ふべし、前死後生と云へるは、後死前生と云べきを、文誤て顛倒したるなるべしと云へり、是は東南のことを生と云ひ、西北のことを死と云へると見たるゆへ、かく云へり、是又生の字死の字の義を失へるなり、施子美は前は死路を敵に與へて、後は生に據て固めとすと云へり、何を死路とし、何を生路とすると云ことを云はず、張昭は高に處て高を右背にする時は、前に來る敵を死なしめて、後は吾が軍氣を生ずべしと云へり、かくの如く見れば、是又重言になるなり、皆生地死地とは何を云へると云ことを知ずして、まげて道理を附けたる説なり、用ふべからず、此處平陸

之軍也とは、上を結ぶ詞なり、上の三句に説ける所、平地に軍兵を居く法なりと云意なり、

凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也

是は上の文を結ぶ詞なり、篇の首より以下を結でかく云へるなり、四軍とは、上に云へる處山之軍、處水上之軍、處斥澤之軍、處平陸之軍、この四つを云、利とは山に軍兵を處くには如何様にする、水邊に軍兵を處くには如何様にするなど、四つともに其地々に具はりたる勝利あり、是を四軍の利と云なり、黃帝は五帝の一人にて古の聖人なり、有熊氏とも云ひ、軒轅氏とも云、風后より握奇の陣法を傳授し、井田の法を定めて、八陣の法是より起る、故に是を軍家の元祖とするなり、黃帝の前にも共工祝融の戰のとなど云ひ傳れども、黃帝の時蚩尤と云もの、首山の銅を採て五兵を作りしより兵具始まれば、合戦も黃帝より始まるなり、四帝とは四方の帝と云となり、尤黃帝の時四方の帝ありしと云こと、何れの書籍にも見えねども、蚩尤がことを大戴禮には庶人とあり、史記の應劭

が注には、古の天子なりと云へり、然れば後世亂れたる時には、四方に王號を稱せしもの多き如く、黃帝の御宇天下いまだ一統せざりし時には、四方に帝號を稱せしものありて、蚩尤なども其内の一人なるべし、それを號して四帝と云たるなるべし、是曹操、李奎、張預以下の諸注の意なり、されば本文の意は總じて右にのぶる、處山之軍、處水上之軍、處斥澤之軍、處平陸之軍、この四軍の勝利の道は、古黃帝もこの道を以て、四方の帝號を稱せし亂賊を誅伐して、天下を一統し玉へり、是兵家の元祖黃帝より傳はりたる軍術なれば、尊び信じて守るべしと云意なり、黃獻臣が説には、四帝を伏羲、神農、少昊、顓頊の四帝とす、伏羲、神農は黃帝より前なり、少昊、顓頊は黃帝より後なり、又或説に勝をまさるとよむ、右の四軍の法は、黃帝の立て玉ふ軍法にて、黃帝はかくの如く軍の道を説き玉ひ、後世までも亂賊を平げ、天下を一統する道を教へ玉ふ、是黃帝の徳のこりの四帝にまさりて、五帝の内第一とする所なりと云意なり、此説にても道理通することなり、又梅堯臣、王皙、何氏は四帝の帝の字を、軍の字のあやまりと云へり、其時は黃帝右

の軍法を用ひて、山にて軍をし玉ふ時は、山の軍に勝ち、水邊にて軍をし玉ふ時は、水邊の軍に勝ち、斥澤にて軍をし玉ふ時は、斥澤の軍に勝ち、平陸にて軍をし玉ふ時は、平陸の軍に勝ち、玉ふと云意にて、黃帝の四軍に勝ち玉ふ所以んと見たるなり、前の二説文字をなほさずして通すれば、この説は文字を改めたる説なるゆへ、用ゆべからず、

凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生而處實、軍無百疾是謂必勝、

前に山と川と斥澤と平陸との四軍のことを云ひ、こゝには又右の四軍に拘らず、總じて陣を取るこゝろえを説けり、故に發端に凡軍はと云へり、總じて軍にはと云意なり、高を好んで下を惡むとは、地形の高き處をよしとして、地形のひき、をば嫌ふと云ことなり、地形高き時は四方を見はらして、敵を目の下に見おろし、高みより、かさおとしにかけおろす利あり、風も吹きぬきて疾も生せず、士卒の氣も屈せぬなり、

故に高きをよしとす、地形卑き時は四方も見えず、敵より見おろされ、敵にかさよりおとされ、卑き處には濕氣盛んにて、士卒の氣も鬱すれば、卑を嫌ふなり、陽を貴んで陰を賤んずとは、陽は山を西北にうけたる處、陰は山を東南にうけたる處を云、山を西北にうくる時は、日あたりにてあかるく、暖かに夏は涼しく、陰濕少なく人の疾生せず、兵具の爲にもよきなり、山を東南にうくる時は、日あたらずらく、冬はさむく夏は熱し、陰濕多く人の疾生じやすく、兵具も損じやすきなり、故に山を西北にうくるをよしとして、山を東南にうくるをあしとすなるなり、養生而處實とは、水に乏しからず、馬草薪の澤山なる處は、人馬の命を養ふ地なるゆへ、是を養生と云、地形の堅き地に居ることを實に處ると云、土のやはらかになく、虚けぬ意なり、曹操の注に、實猶高也と云へり、是も高き地はかたきものなるゆへ、かくの如く注せり、高きことを實と云には非ず、高き地は實するものなり、軍無百疾とは、百疾はもろくの病なり、右に云へる如きの地に陣取る時は、軍中に人馬の病なきものなり、軍を押し敵地をゆく時は、人馬飲みつけぬ水を

飲むゆへ、水あたりて煩ふこと多し、殊に軍中の栖居は平生とは違ひ、衣服食物家具に至るまで、皆不自由がちにて、人人病を生じやすし、人馬煩ふ時は多勢も無勢と同じく、強き兵も弱兵と同じく、軍兵おのづから勢ひを失ふ、是敗北をとる根元なるゆへ、孫子は專陣中にて病を生せぬことを第一に云へるなり、是謂必勝とは、右に云へる如の所に陣を取る時は、人馬病を生せぬゆへ、是を必勝の道とすると云意なり、必勝はかならずかつとよみて、必定勝利を得る意なり、勝利の根元は軍兵の一和に本づく、衣食家居不自由に、病氣の生ずる様にある時は、下々怨怒りて一和せぬなり、されば陣取りに病の生せぬ様にするを、必勝の道とするなり、

丘陵隄防必處其陽而右背之、

丘は土の高きを云、陵は丘の大きなるを云、隄防はつゝみなり、陽とは東南を云、前には山川、斥澤、平陸の陣場を分ちて云たるによりて、こゝには山川、斥澤、平陸に限らず、總じて如何様の地にても、とかく高き處を右うしろに當て、東か南に陣を取るべきこと

を云へり、前に云へる如く、日あたりにて、病を生ぜず、是を右背にあつる時は敵を順にうけて、かさよりおとしかくる得あるゆへなり、丘陵隄防皆高き處なり、

此兵之利、地之助也、

是は上の凡軍好高而惡下と云より下を結びたる詞なり、右に云へるところ、皆兵道の勝利、地形の助けを得て、勢ひつよくなることなりと云ことなり、兵道の勝利、陣を取る地形の善惡に隨て、必勝負の分るべきにあらねども、人は地の上をばこびて、合戦も地上にてすることなれば、地形の勝利を助くること多きなり、

上雨水沫至、欲涉者待其定也、

張賁が注に、是は上の處水上之軍と云へる内の文の錯簡なりと云へり、さもあるべし、上とはみな上を云、水沫は水のあわなり、山中には私雨あるものなり、それゆへみなかみ雨ふりて、川すそはふらぬことあるなり、上雨とは川上ばかり雨のふることなり、

山川の川上より水沫たちて流れ來らば、川上は雨と知るべし、必暴かに水の出ることあるべし、欲涉者待其定也とは、かくの如き川を涉んとせば、暫くひかへて其水勢のしづまるを待ちあはせ、とくと見定めてわたるべし、ふと涉りかゝりたる時、急に川上より水出て來り、押し流さるることあるべきと云ふ氣遣ひなり、箇様なることは山川にあらではなきものなり、

凡地有絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也、吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之、

是六害の地なり、六つともに大きに害のある地なるゆへ、六害と云なり、絶澗とは絶たる澗と云ことなり、絶たるとは峻しく切立てたる様なることなり、澗は兩山夾水を澗と云と注せる字なり、兩方山にて中を川の流るゝを澗と云、山の間にある水と云意にて、散水に間と云字をかくなり、絶たる澗と云時は、兩方はやま、中は川にて、しかも其岸けはしく切立てたる

様にて、人の通ひなり難き處を云なり、曹操が注には、山深く水大なるを絶澗と云と云へり、山中へ深く入りてある大河は、大形右の如くなるものなるゆへ、かく云へり、賈林は兩岸深澗にして、人行を斷つと云と云へり、兩方の岸高くそばだち、水底まで殊のほか深く、しかも川は濶くて人の往來のならぬと云意なり、張預は、谿谷深峻にして、過ぐべきとなきを云と云へり、谿谷は二字ともにたになり、谷ふかく峻しくて、人のとをられぬと云意なり、何れの注にても聞ゆるなり、とかく絶の字に意を付けて見るべし、人のわたられずこされぬ谷川のことなり、天井とは天然自然の井と云意にて、人の掘りたる井にてはなく、天然と井の如くなる處あり、人馬の中へ入りては出ることならぬ地なり、曹操の注には、四方高く中央下き、を云と云へり、杜牧が注には、地形凹下にして大水の及ぶ處を云と云へり、凹はなかくば、下はひき、なり、大水の及ぶ處とは、方々の水の流れ落ちる處と云意なり、外の諸説は皆曹操杜牧が注を合せて注せり、但し井の如くなりと云に付けて料簡の違ふことあり、人々都會の地にある井を見慣れて、井と云はちい

さき丸きものと思ふなり、田舎の井はかくはなきなり、とかく四方高く中ひき、しかも深くて方々の水の落合ふ處と心得べし、天牢とは天然の牢獄と云ことなり、曹操の注には、深山の過ぐるところ蒙龍の如くなるなりと云へり、深山うちかこみて、其中をとるに草木うちおほひて暗き處と云ことなり、杜牧は山間迫狭にして、以て人を絶つべき處なりと云へり、山の間せばくせまりて、人のとをられぬ處と云ことなり、賈林は四邊澗險にして、水草相兼ね、中央傾側にして出入皆難きを云と云へり、四方は谷にてけはしく、水も流れ草もはへしげり、中は路かたそげにてそこへ分け入ること、又出ること難き所と云意なり、張預は山險しく環り繞りて、入る所せばきを云と注せり、劉寅、彭繼耀は、けはしき山四方をとりまきて、入りやすく出難き所なりと云へり、牢獄に似たる意なれば、劉寅、彭繼耀が注を用ゆべし、天羅は天然のあみと云意なり、杜牧、張預、黃獻臣、彭繼耀、施子美が注には、何れも林木しげりて縦横に入り亂れ、或は蕪草深く生ひしげり、或は荆榛しげりあひ、弓なども用に立たぬ地なりと云へり、賈林が注には、

道高下ありて、或はひろく、或は狭く、とをり難き處なりと云へり、今按ずるに天然のあみと云時は、草木はへしげり、まつはりまほし自由ならず、弓矢を外りたる如く、身のふりまほし自由ならず、弓矢をの外の兵器も用がたき所なるべし、天陷とは天然のおとしあなと云となり、曹操の注には、地形陷るを云と云へり、杜牧が注には、谷川ひろくして水色藍をたへ、淺き深さも測られず、道ぬかり泥深くて、人馬通せぬを云と云へり、賈林、施子美は泥路のことなりと云へり、張預、黃獻臣、彭繼耀は、道かたそげにて泥深きを云と云へり、今按ずるに或は沼、ふけ田、古川のあとなど、皆人馬の足を働かせぬ自然の落しあななり、天隙は天然のわれめと云意なり、壁垣などにわれめすきまのある如く、行路にところくほり切り有て、ゆきにくき處なるべし、曹操の注には、山間の道せばく、地形深さ數尺、長さ數丈ばかりなるを云と云へり、杜牧は地にもぞあな多く、木石亂れてある處と云へり、張預は道狭くてあな多き處と云へり、賈林、黃獻臣は兩方けはしき山にて、其間四五里ほども通るに深く暗くて、出入りにくきを云と云へり、前の諸

説は、皆通る路に木石ほり切りあるを、物のひきわれめに喩たる意なり、賈林、黃獻臣が説は、山のわれめの間をとる意に見たるなり、必亟去之勿近也とは、右の六害の地は、皆極悪の地なれば、不慮のことある時は智慧も勇力も出がたき故、かくの如き地をば、速かに立去りて近よることなかれと云意なり、吾遠之敵近之とは、右の六害の地には、われ遠のく様にして、敵には近よらすべしと云意なり、吾迎之敵背之とは、われ右の六害の地の方へ進み迎る様にもてなす時は、敵必この地をうしろにあつるものなり、敵に六害の地を後にさせて置く時は、軍には進退あるものなるゆへ、敵退くとして必六害の地へおちいるなりと云意なり、昔宋の武帝、南燕の慕容恪を退治し玉ふ時、大峴山を事ゆへなく通りて、天に仰ぎて喜び玉ふは、この六害の地を知れるゆへなり、又李陵匈奴と戦ひし時、鞬汗山の草木の中にかくれ、匈奴に高き處より射られ、進退心にまかせざりしは是を知らぬ故なり、凡地有絶澗と云ふ絶の字の下澗の字の上に、天の字あるべしと王哲云へり、是は下の五つには皆天の字ありて、こゝに天の字なきゆへにかく云へるなり、

されば凡地有絶天澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、とよむなり、されども下の井、牢、羅、陷、隙の五は、皆人の作りたるものを借り用ひて喩へにして、是は天然の井なり、天然の牢獄なり、天然のあみなり、天然のおとしあななり、天然のわれめなりと云意なれば、天の字あること尤なり、測はもとより天然のものなれば、あらためて天の字を加ふるに及ばぬことなり、絶の字を加ふるに、通路たえたる澗と云義に見ること、道理穩かなれば、此説をば用ひぬなり、

軍行有險阻、潢井、葭葦、山林、蘙蒼者、必謹覆索之、此伏姦之所處也、

軍行は陣押しなり、險阻とは險は溝堀坑がけのい、阻は一方高く一方卑き所なり、二字を合せて總じてせつしよを云なり、曹操の注に、險は一方高く一方ひき、處、阻は水多き處なりと云へるは、前の軍爭篇の注と相違せり、そのうへ阻の字を、散水にかきたる沮の字と見あやまりたるなり、用べからず、潢井とは、

潢はため池なり、井は深き坑なり、葭葦は二字共にあしとよむ、萩よしなどのしげりたる處なり、山林はやまはやしなり、樹立ちしげりたる處を云、蘙蒼は草木のしげり蔽ひたる處を云、覆索とは、覆は反覆の義にて、いく度も丁寧にする意、索はもとめあなぐるとよみてさがすことなり、反覆丁寧にさがすべしと云意にて覆索と云へり、直解には覆と索とを二つに見て、左傳の三覆七覆を引き、味方よりは伏兵を置き、又敵の伏兵をばさがしむると云意に見たれども、文勢穩ならず、反覆丁寧に敵の伏姦をさがす意に見てよし、敵の伏兵のあるべき處なれば、味方よりもかゝる處に伏兵を置くことは云ずして明かなり、伏姦とは伏は伏兵なり、不意を打つべき爲にかくし置く軍兵を云、姦は姦細とて、敵の様體を窺ふべき爲にかくし置く物見なり、一段の意は、軍兵の押し行く先きに、險阻にて山川入りくみたる處あるはかくれがあり、或は池堀あながけ、森林草木のしげりたる處、茅野葦原のい、何にても人数のかくれ居るべき様な處あらば、必謹ていく度も丁寧にさがすべし、是は敵より伏兵を置き、又は物見すつばを隠し置き、味方

の様體を窺はする場所なりと云意なり、謹と云文字を心につけて見るべし、少しの伏兵に大軍を敗られ、或は味方の様子を敵に知らるゝ處より、敵の計に落ちること皆油断より生ずるなり、油断して敵をあなどる心なく、慎み大切に、伏兵物見をさがすべしと云意なり、諸本に軍行を軍旁に作る、軍の旁とよみて、陣を取り又は軍兵の押しゆく旁と云意なり、義理同じことなり、險阻、横井、叢葎、山林、叢蒼を、諸本に險阻、横井、林木、叢葎、叢蒼に作り、又險阻、横井、叢葎、叢蒼と作りたる本もあり、何れも義理同じことなり、今は集注本に従ふなり、叢葎と云は叢はをぎなり、篇の首より是までは、軍を處く場所のことを云へり、

近而靜者、恃其險也、

是より下の三十三條は敵を相る法なり、敵を相る法とは物見のことなり、近とは敵間近きことなり、靜とは靜まり返り合戦もしかけず、物音もなきことなり、恃其險也とは、其地形の險阻にて、よりつかねぬを恃みて居ると云意なり、此條の意敵間近くなりては、互

其所居易者利也、

是は上の遠而挑戰者、欲人之進也と云へる句の意を説けり、其とは敵を指して云、所居易とは、險阻なき平地に陣取ることなり、敵を偽引きて奇兵伏兵を以て勝つことは、平地に陣を取居る敵の勝利を得る所、多くは此術なりと云意なり、かくの如く上の簡條へつけて見ること、賈林、梅堯臣、張預が注の意なり、李筌、杜牧、張預が一説には、總じて陣を取るは地の險阻をかたどるとなるに、敵平地に陣を取り少しも要害を構へぬは、必別に勝利を得る計ありと知るべ

に合戦をしかけ、勝負を決する心得あるべきに、さばなくて敵靜まり返りて物音もせず、合戦をすべき様子も見えぬは、敵の備たる場所險難節所なるゆへ、味方より取りよすべき様なき故に、敵これを恃みにしてそしらぬふりをして居ると云意なり、是は尉繚子に分險者無戰心と云意なり、險阻をかたどり、是より、手前は敵のいろふことならぬ處なりと界を分て守るゆへ、戰ふ心なき道理なり、昔司馬仲達遼東を退治する時、敵將文懿遼水のかはを隔て、陣城を固め、取合はざりしは是なり、仲達わき道より本城へ取かけたりしゆへ、文懿やむことを得ずして合戦に及び、敗北したりしなり、

遠而挑戰者、欲人之進也、

遠とは敵間遠きなり、挑戰とは、彼の陣所より人数をさしこし、合戦をしかけ味方を引出すことなり、欲人之進とは、こゝにては敵より云ふ詞なるゆへ、味方をさして人と云、味方の人衆を進めて、敵の陣處へよする様にさせたきこと、敵にあると云意なり、一段の意、敵の陣所と吾が陣所と間遠くて、いまだ取合

衆樹動者來也、

衆樹はもろくの木なり、多の木を云、來とは敵のよせ來るなり、高き處へ人をあげて遠處を眺望するに、多く木の動きて見ゆることあるは、敵のよせ來るなりと知るべし、子細は、敵木をきりて道を作りて、とをる先きをあげ、引く時の爲を慮りて來るものゆへ、木共多く動くものなりと云意なり、一説に、敵木を切りて兵具を増すことありと云説あれども、つねにはあるまじきことなり、

衆草多障者疑也、

衆草は多き草なり、草を多く結びて物かげをこしらへ、方々に障へ蔽ふやうにしてあるは、伏兵を置きたるとわれに疑はしむる術なり、敵潛に退く時跡を慕れんことを氣遣ひて、味方の疑ひて妄りに進まぬ爲にする計なり、又直解に伏兵のあることもあるべしと云へり、されども本文の正意に非ず、

鳥起者伏也

鳥起とは鳥の地より飛び起つことに非ず、鳥の何心なく平らに飛びゆくこと、ある處に至てふと高く飛び上るは、其下に敵の伏兵ありと知るべしと云ことなり、鳥は目のはやきものゆへ、草村などの中に人がかくれて居るを、上より見付け、そこまで平らに飛び來れども、其處に至て彼の人の居るに驚きて、急に高く飛び上るなり、

獸駭者覆也

獸駭とは猪鹿のるい、總じて山中に居る獸の、山かけ或は森林のかけより駭きたるていにて、走り來るを云なり、覆はむき合ひて戰ふ敵の外に、横合よりかくれて寄來る敵を云なり、此文字くつがへすとよむ時はふくの音なり、おほふとよむ時はふの音なり、こゝにてはおほふ意にてふの音によむことなり、是は網より出たる字なり、鳥などを取るにかたわきより追はせて、彼れが思はぬ方より、網を以ておほひ打ちかぶせて取ることなり、それに喩へてむき合て戰ふ外

こともあるべけれども、覆の字を古來より兵書に用ひ來れる常訓を知らぬ説なり、

塵高而銳者車來也

是より下の四條は、武者ほこりを見て敵を知ることなり、塵とは人數の往來するには、必ずちりほこり起つなり、是を倭俗に武者ほこりと云なり、高而銳とは、上へ高く先きとがりて杉なりにほこり立つことなり、車は軍車なり、武者ほこり上へ高く、さきとがり杉なりに起つは、敵軍戦をすべきため、車にてよせ來ると知るべし、車は重きものにて、其はする勢ひきびしく前後につくものゆへ、徒武者とはちがひ、横せばく上へ高くたつなり、昔楚の潘黨が、塵を見て晉の兵の來ることを知りたること左傳にあるも、此法を用ひて知りたるなるべし、

卑而廣者徒來也

ほこりの起ちやう上へ高くあがらず、横は廣く見ゆるは、徒武者の來ると知るべしと云意なり、徒武者は車より足おそく、又車よりふみつけ軽く、又行列を

に、思はぬ方より横合ひを打つを、掩とも覆とも云、皆おほふ意なり、一段の意、山陰或は森林のかけより獸多くにげ來るは、その方より横を打つ敵來ると知るべしと云意なり、施子美が説に、伏と覆を混して、少勢を伏と云ひ、多勢を覆と云、伏も覆も皆人數をかしく置くことなりと云へり、尤伏は少勢なるものなり、覆は大勢なるものなり、伏も覆も皆かくすことなり、されども伏はものかげに臥しかくれて居て、ふと起き上りて切てかゝるなり、故にそのふしかくられたる上を、飛ぶ鳥驚きて高く飛び上ることなり、覆は臥しかくれて居るものに非ず、一方の物かけより横合ひによせ來るを云、故に其方より獸ども逃げ來るなり、日本にても、昔八幡太郎奥州陣の時、飛鳥の忽ち亂るを見て、大江匡房より傳へし軍法に、伏兵在野飛雁亂行と云ことありとて、草の中をさがせて伏兵を搜し出したることあり、是鳥起者伏也と云へる意なり、義經鰐越を落せし時、野獸多く内裡の方へ逃げ來るを平家知らざりしこと、是獸駭者覆也と云へるに叶へり、又黃獻臣が一説に、覆をくつかへすと見て、敵陷阱をほりて待ゆへ獸駭くと云へり、さる

なして一人／＼の間を明けて、横にひろく備へ來るゆる、卑くして廣きなり、

散而條達者樵採也

散するとは、ほこりの起ちやう一處に聚らず、方々へ分るゝなり、條達とはすぢたちてつゞくなり、樵採とは薪をこることなり、薪を取るには方々へ打ち散りて思ひ／＼に薪あるべき處々へゆく故、そのほこり方々にちりて一處に聚まらぬなり、陣所へ山より往來するゆへ、塵ほこりもすぢ立ちて、細くつゞくなり

少而往來者營軍也

少とは塵のたちやうのかろきことなり、往來とはほこりの動きやうに、往來のてい見ゆるものなり、營軍とは陣を取ることなり、是は陣を取らんとする時は、騎馬の兵を四方へつかはし、地形を見つゝろひ、又陣を取り固めぬ所を敵ねらひて寄せ來るものなるゆへ、敵の來るか物見をも出すなり、騎馬の一二騎ほどづゝも、方々へ馳せ違ふ故、ほこりもすぢなく、往

來のていあるものなりと云意なり、
辭卑而益備者進也、

辭卑とは、使者の口上なるほどへりくだりて聞ゆることなり、益備とは合戦の支度をますます油断せぬことなり、進とは寄來る敵なりと云意なり、是は敵より使者來りて云ふ口上をきくに、殊の外にへり下り、つよみなることはなく、又人を遣はして敵陣のていを伺はすれば、合戦の支度油断なく見ゆるは、攻め來るべき敵なりと知るべしと云意なり、使者の口上へりくだりたるは、吾をあさむき油断さすべき爲なり、昔趙奢關興の後詰をする時、敵の間者來りければ、殊の外に馳走して、間者歸ると其跡より急に取かけたることあり、是使者の詞卑きとはかはれども同じ道理なり、又齊の田單即墨を守りし時、燕の將騎劫是を圍む、田單降參すべきよしを使者にて申し遣し、又城中の大神なるものより、私に使を敵方の諸將へ遣はして、城落るとも妻女をとりこにし玉はぬやうに頼むとて、金銀を送らせ、城中にては自身士卒と同じくすきくわを持って、城の要害を修理し、妻子までに骨

折るわざをさせて、士卒をば馳走しけるを、騎劫愚將にて、まことに城中衰へたりと思ひ油断したる所を、人数を出して打ち破りける、是も騎劫この本文の法を知りたらば、など田單に破られんと思はるゝなり、

辭強而進驅者退也、

辭強とは使者の口上詞のはづれに強みをあらはし、必死の一戦をすべき様に云ひなすことなり、進驅とは人数を進め馳來るべき體に見せかゝることなり、一段の意敵より來れる使者の口上強みを含み、戦ひを好むやうに聞え、人数をも進め、馬など馳せ違へかゝり來るべき様に見ゆるは、必引く敵なりと云意なり、昔吳王夫差兵を中國に出し威勢をふるひ、時の盟主晉の定公と、黃池にて會盟あるべきに定まれり、されども吳王夫差と晉の定公と、何れか先きに血を敵るべきと兩君雄を争ひて、いまだ會盟はなかりける所に、越王勾踐謀反して、夫差の留守をねらひ攻入ると注進ありければ、夫差太た恐れて、大夫を聚めて評議あり、王孫雄議して曰く、これほどに中國の盟主と

約諾ありて、會盟あるべきにきわまり、越王起ると聞き會盟なく歸り玉は、敵より追打ちにせられ、不覺を取るべし、越の起ることをば隠して會盟あるべしと申す、吳王夫差とくに會盟あるべきを、先後の争によりていままで延引せり、さらば晉の君を先きにせんやとありければ、王孫雄こゝろやすく、晉の君より先きに會盟の血を敵り、諸侯の長となり玉はんこと一つの計ありとて、三萬の軍兵を以て、夜中に晉の陣場の一里手前まで押よせ陣を取る、其聲天地を震動せり、晉より董褐を使者に來らしめ、會盟に定まれるに何ゆへにかくはし玉ふぞと問ひければ、吳王自身使者に向ひ、和睦に及ぶべきも今日にきはまり、和睦やぶるべきも今日にきはまるとありければ、董褐歸て晉の君へ申しけるは、吳王の顔色大きな憂あるに似たり、勝負を一戦に決すべき體なりと、即吳王先きに血を敵るべきに極まり、會盟畢て本國へ歸りけることあり、是董褐が此本文を知らぬゆへ、吳王の顔色までを見ちがへ、あとにて越の起りたるを愛ひしを、生死を一戦にきはめたるていなりと思ひけるなり、又秦の國より晉の陣所へ使者の來れるに、晉の

史駢對面して、使者自動、而言肆、悞我也と云けり、使者の目睛定まらぬを以て、殊の外に恐れたることを知り、口上のほしひまゝなるを以て、我をだまして強みを見せたりと知れり、果して其夜秦の軍は引きけるなり、是は孫子の本文の意に叶へり、

輕車先出居其側者陳也、

輕車はいくさ車なり、兵器兵糧をのする車を重車と云て、丈夫に重くこしらへたるものなり、いくさ車は手がろく、馳引の自由なる様にこしらへたるゆへ是を輕車と云なり、先出居其側とは、輕車を先きへ押し出して、備を立つべく思ふ場所の兩旁に備ゆるとなり、備を立固めざる處を、敵にかけ破らるゝことあるものなるによりて、輕車を兩旁へはり出して、敵を押しゆるなり、陳也とは備を立つるなり、備を立るは戦はんとする敵なり、されば輕車の諸勢より先きに兩旁へ張出すを見れば、備を立て、合戦を始めんとする敵なりと知るべしとなり、

無約而請和者謀也、

無約とは、合戦を始めて、

古來の注には、前方に何の約束もなく和を請ふと見たる説あれども、和を請ふこと即約束なり、前方より和を請ふべしと約束することあるべからざれば、此説は従ひ難し、又何の故もなく和を請ふと見たる説あり、道理は殊のほか勝れたる説なり、されども約なきと云を、何の故もなくと見ることを字義に叶はねば、是又用ひがたし、又たしかなる誓約をもせずして、和を請ふと見たる説もあれども、誓約ともにてだてにてすることあれば、此説も従ひがたし、又陳偉が説には、未屈弱而無故請和と云へり、是は約の字をせはしとよみて、困み難儀に及ぶことに用ることあるゆゑ、合戦にまけたるにてもなく、何のこまりたることもなきに和を請ふと云意なり、此説まさされり、今是に従ふなり、謀也とはてだての爲に和を請ひたるに、眞實に和談をこのむに非ず、或は味方を油断させて打んとか、或は後詰加勢を待合するか、或は味方に内通のものありて、其一左右を待つかなるべし、

奔走而陳兵車者期也、

諸本に車の字なし、今集注本に従ふ、奔走はかけはしることなり、陳兵車とは、兵車はいくさ車なり、いくさ車を押出し、備を立てるを陳すると云なり、期とは日限刻限の約束なり、一段の意敵陣馳せちがへ、急ぎあわて、兵車を押出し、備を立てて見ゆるは、遠方よりの加勢、又は内通うら切りの約束の日限、刻限到来するゆへ、急ぎて戦ひをはじめ、力を合せて戦んとするなりと云意なり、直解講義には、期を誓約の義に見て、軍兵を聚めて誓約をするゆへに、使方々へはせちがひ、諸手の大將などを呼び集めて、行列をなすて見ゆると云へり、迂遠なる説なり、用ひ難し、此段は上の段に連ねて見るべし、此方へいつはりて和談を請ひて置ての上にて、かやうなるてい見れば、加勢後詰の待合せの時節到来すると知るべしと云意なり、

半進半退者誘也、

半進半退とは、一隊の中の人數、半分は進み半分は引くことなり、誘とは偽引ことなり、一隊の中にて人數半分はすすみ、半分は引くは、號令亂れて整齊ならぬ形なり、かくの如く見ゆるは、多くは敵を偽引ん爲

に、偽てすることなりと云意なり、是は取合に及び、鋒を交ゆるに及ぶ時のことなり、懸る時は一度にかけ、引く時は一度に引くは常法なり、軍法立たず、勝れて弱き備は、鋒を交へぬ前にも見崩れとて、敵の猛勇のけしきを見て崩るることあり、其中に武勇なるものは踏み留まるを半進半退くと云、是將の號令と、のはぬゆへ、士卒ばらばらになり、勇なるものは進み、懸したるものは退くなり、號令調ふ時は士卒も勇怯なく、進退一度なり、されどもかほどに見崩れをする、又むざとあるべくもなき、至て弱き敵なるゆへ、箇様にあるまじき敵の箇様にあるは、味方を偽引く謀と見るべきことなり、又諸備の内にて、かゝる備もあり、引く備もあるは、人敷を分け手配りをするなれば、却て敵の氣遣ふべきことにて、敵を偽引く謀にはならぬなり、とかく一備の士卒は、かゝるも引くも一同なるべきを、一同ならぬ様にするを、亂れたる形をして敵に見すると云たるなり、昔吳國より楚國を伐ちける時は、罪人を備に作りて取かけ、或は進み或は退きて、楚の兵を偽引たることあり、是はかけつ引つ様々にしたることなり、本文とは少しかはれ

杖而立者飢也、

杖而立とは、兵具を杖につきて立ちてをることなり、士卒飢え憊れたるていなり、杖の字を一本には仗の字に作る、仗はよるとよむ、物によりすがる意なり、義理通するなり、

汲而先飲者渴也、

水汲みに出たるもの、水を汲て陣所へ持てゆく間をましかね、先づ取て飲むは、水にうえたる故なり、一人かくの如なるを見て、三軍皆渴することを知らんと云へり、されども炎天の時節など、陣場より水のある處へ路の程もあらば、水汲むものばかり咽渴くこともあるべし、神理は筆につくされぬと云こと、如此なる類なるべし、

見利而不進者勞也、

直解説約大全には、不の字の下に知の字ありて、不知進に作れり、なき方まさされり、見利とは勝利ある

べき場を見ることなり、或は手負などの仆れて居るを見つけ、或は旗幕太鼓等のい取り得ては、一かとの高名になる物の、取り落してあるをも利と云べし、かくの如きるいを見ては、必争て是を取るこゝ兵卒の常なるに、今是を見ながら取らずして行くは、士卒の疲れたるなり、勝利あるべき場を見つゝ、かゝらずして引くは、一軍の士卒皆つかれたるなり、

鳥集者虚也、

鳥集とは鳥のとまることなり、虚は空虚なり、陣屋に鳥とまらば、其陣屋には人なしと知るべしと云意なり、陣屋は常の屋とはかはり、平生は人もなき野原に小屋をかけ、人数夥しくあつまり居て、劍戟を並べ立て、旌幟をたて置くゆへに、百鳥畏れ驚きてとまらぬものなり、然るに陣屋の上に鳥のとまるは、敵其陣を明け去て人すまぬゆへ、鳥恐るゝことなく來るうへに、大軍のすみたるおとなれば、食物の落ちこぼれあるゆへ、諸鳥是を食せんとして來るなり、故に古より鳥あるを以て人なきを知ること、其ためし多し、左傳にも楚國より鄭の國を伐ちたる時、楚は大軍猛勢な

れば、鄭の方には戦に及ばず落行く支度しける時、物見の者告て、楚幕有鳥、楚兵去矣と云たることあり、幕は帷幕とて陣屋に打ちたる幕なり、又晉より齊を伐ちたる時も、晉の大夫叔向が語に、城上有鳥、齊師遁矣と云へり、城の上に鳥のあつまるを見て、齊の軍兵の落たることを知れるなり、是は今日の城とはかはり、界目の城などはまわりに堀をほり、屏をかけたるばかりにて、内にはさまで大きな屋もなきに、人多くあつまり、軍の支度にて劍戟を立並ぶれば、人の居る時は鳥はとまらぬゆへ、鳥のあるにて人のなきを占へるなり、

夜呼者恐也、

敵の陣所にて、夜よばる聲のしきりに聞ゆるは、士卒恐るゝと知るべしとなり、是大將勇なきゆへに、士卒までこゝろ臆して、夜になればかしましく呼ばるなり、總じて平生夜道などをゆくに、火もとばさず唯獨り物も云はず静かにありくは、極めて甲斐々々しき者のすることなり、高聲にてよばるありくは、臆したるものゝすることなり、軍中も同じことなり、大

將勇にして法令嚴なれば、軍中静まり返りて、夜は拍子木の聲と馬の嘶く聲ばかりするを、名將の陣所とす、やかましく呼はり叫ぶは、心に畏るゝ所あるゆへ、自然と聲に發することなり、

軍擾者將不重也、

軍擾とは陣中さばぎ立つことあるを云なり、將不重と云は、たとひ臆したる大將には、非ずとも、其將の人となり、軽々しくて威なき時は、陣中さばぎ立つことあるものなり、故に是を以て將に威のなきことを知るなり、昔周亞夫七國を退治する時、夜中に陣中さばぎ立ち、本陣まで騒動したることあり、周亞夫をしらぬふりして起きず、やはり臥して居ければ、しばらくの内に静まりたりと云ことあり、又三國の張遼も長社に屯せし時、夜中に陣中ふと騒動せり、張遼さはがす本陣に立ちて居ければ、頃くありて静まりたりとなり、將の物に動せぬ所より威生じ、威あるところ法令嚴にして、軍中静なりと知るべし、

旌旗動者亂也、

旌旗ははたなり、はたの動くは備の亂るゝなり、旌は一軍のかなめにて、一軍の軍兵是に目をつくるなり、備を分け組をわくるも、この旗の立處を以て其備の場所を定め、旌進む時は進み、旌退く時は退く、旌いまだ動かざる時は士卒一足も引くべからず、引く時は旌を立てたる處まで引きて留置ることなり、然るに旌動きわたり亂るゝ時は、其備たとひ動かすとも、必崩るゝなり、是將の法令たゞざるゆへ旌亂る、旌の亂るゝほどのことなるゆへ、必崩るゝことなり、故にはたの動くを以て士卒の亂るゝを知るなり、古魯の莊公齊と長勺と云處にて戦ひける時、齊の軍崩れたり、もし伏兵を設けて偽り引きて、横を入れん謀かと氣遣ふところに、魯の將軍曹劌車より下りて、敵軍の車の轍の亂れたるを見、はるかに望で旗の靡きたるを見て氣遣なしとて、莊公にすゝめ逐打にして、大きに勝利を得たるも、此本文の意なり、

吏怒者倦也、

吏とは將の下に屬したる官人を云、今日本にては小組頭より、足輕大將諸役人のいまでをも云べし、吏

怒者倦也とは、士卒疲れ草臥る、時は下知をうけず、頭の手にまわらぬゆへ腹立るなり、故に吏の怒るを見て士卒の草臥れたるを知るなり、

殺馬肉食者軍無糧也

馬は軍中にて第一に大切なるものなり、故に人馬と云ひ、兵馬と云ひ、古より士卒に並べて是を云なり、周の世に武の事を司る官を司馬と云て、馬を司るとかきたり、武道に馬の肝要なること見つべし、然るに馬を殺して其肉を食するは、軍中に糧なき故なり、糧なければ士卒のいのちなきゆへ、大切なる馬なれども、殺して其肉を食することなり、

懸甌不返其舍者窮寇也

甌はやきものなり、甌を懸るとは、やきもの、類を樹の枝などにかけて、飯をこしらゆることなり、不返其舍とは、舍はいるなり陣屋を云、陣屋を出て戦ひたる敵の、もとの陣屋へ返らず、野原に臥すなり、窮寇はきはまれるあたとよむ、あたとは敵を賤むる詞なり、きはまるとはゆきつまりたることなり、行きつ

まりたる敵と云ことなり、ゆきつまりたる敵とは、死に狂ひに覺悟を極めたる敵のことなり、陣屋を出たるものが、本の陣屋へも返らず、野原に臥し、飯をたくに竈をもぬらず、樹の枝に甌をつるしてたくは、今日を限りのいのちと覺悟して、明日のことを思はぬ敵なりと云ことなり、一本には此條と上の條を一つにして、粟馬肉食、軍無懸甌、不返其舍者窮寇也と作る、粟馬とは粟は米のことなり、米を馬に食はすと云は、明日の食は入らぬと覺悟したる敵ゆへ、貯へ置かず、取出して馬にも米を食はするなり、肉食すると云は、小荷駄などつけさせる牛馬を殺して、其肉を食するなり、是も今日を限りと思ふゆへ、牛馬は入らぬなり、又魚肉等を買て食すると見てもよし、有無の一戰と極むる上は、金銀の費も惜まぬなり、又士卒を馳走する道理もあるなり、軍無懸甌とは、異國にては多くは米を甌にて蒸て飯にするなり、甌の釜には多く甌を用ゆ、陣屋はせはきゆへ、飯をたき仕舞ては、其甌をば外へ出してかけて置くなり、然るにまらばしすて、常の如くにかけて置かぬは、今日切りにてはや入らぬと思ふゆへなり、如此にして日暮るれども

陣屋へ返らぬは窮寇なりと云意なり、是にても義理通するなり、昔孟明が陸へ上りて舟を焚きすて、楚軍の釜を打破りし皆この類なり、

諄諄翁翁徐與人言者失衆也

諄々はくりごととよみて、くりかへし丁寧にものを云ことなり、翁翁は收斂する貌なり、收斂するとは威勢を張らず、肩をいからかさず、すくみすばまりたるていなり、徐與人言とは、ゆるやかに靜かに士卒とものを云ことなり、失衆とは士卒の心を失ふ義にて、士卒の心はなれたるを云なり、一段の意將吏の士卒にも云ふ體を見るに、くり返して丁寧に、威勢もなく靜かにものを云は、士卒の心はなれたるゆへ、士卒の機嫌をとり、きびしく物を云ひ付ることならず、だましなごむるありさまなりと云意なり、翁翁を講義開宗武備志には、言偏を加へて諺々に作る、正字通に疾言なりと注して、はやくちに物云ふことなり、徐與人言と云へるに碍れば用ゆべからず、曹操の注に、諄々は語る貌、翁翁は失志貌と云へり、諄々はくりかへしても云ことなれば、物がたりする貌なり、

上より屹と士卒に物を申し付ることはならずして、はなしなどの様に云は、衆の心はなる、故なり、翁翁は威勢の落ちたるていゆへ、失志貌と云ひたるなり、志を失とは、氣をとられたることなり、此注右に解せると同意なり、直解には諄々は懇至の貌、翁翁は和合の貌と云へり、杜牧は諄々者乏氣聲促也、翁翁者顛倒失次貌と云へり、梅堯臣は諄々吐誠懇也、翁々曠職事也と云へり、何れも穩かならず、李奎、賈林、王哲、何氏、張預は諄々徐與人言と云へるを、士卒のていにして失衆也と云へるをば、將が衆の心を失ひたるにして見たり、士卒が肩身をすべくりかへし、靜かにさ、やきてもの云は、上を恐れ上を怨むる體なるゆへ、是を以て士卒の心の離れたるを知ると云義なり、是にても通すれども、此條より下は、皆將の上を云たれば、類例合はぬゆへ用ひぬなり、

數賞者窘也

數賞するとはせつ／＼褒美を士卒に與ふることなり、窘也とは勢ひゆきつまりて、急にせまりたることのあることなり、ひたもの勝利を失ひ、計もちがひ、

後詰加勢の約束もはづれぬ程のこと皆失計なれば、勢だん／＼にゆきつまり、未々は滅亡すべき様子見ゆるゆへ、士卒皆二心をいだき心はなるものなれども、合戦に勝利を得れば、士卒の氣も又勇み出るものなるに、それもならぬ時は、愚將は大形は士卒に物を與へ、士卒の機嫌をとるなり、故にひたもの褒美を與るときかば、其如此なることを知べしと云意なり、この窘むと前の窮寇とは、皆ゆきつまりたるなれども、前の窮寇はせんかたなくゆきつまりたれども、上下の心一致して二心なきゆへ、必死の一戦を心がくるなり、是は士卒の心離れんとし、將もさほどにたぎりたることなく、唯褒美をせつ／＼與へて士卒の心をだまし、一日々々と日數を送て待つ所あるなり、

數罰者困也、

數罰するとはせつ／＼士卒をとがに云ひ付ることなり、困するとはくたびることなり、士卒くたびれて精を出さず、上の命を用ひず、法令をも守らぬゆへ、ひたものとがを云ひ付け、士卒を罰して、勵みの出るや

うにすること、庸將のすることなり、故に敵方にてせつ／＼刑罰を行ふと聞て、士卒のくたびれて精を出さぬことを知るとなり、この困すると云と、前の窘むと云との相違は、窘むと云は、だん／＼に勢ひのゆきつまりてくることなり、困すると云は、士卒の草臥れて使ひにく／＼なりたることなり、又上に吏怒者倦也と云へると、この條と大かた同じことなり、吏怒者倦也と云へるは、時にあたりて一備一手の上を、備の上にて見て知ることなり、是は其手の總體をしることなり、是其差別なり、

先暴而後畏其衆者、不精之至也、

先暴とは暴は暴虐なり、あらげなく士卒を使ひて、士卒をあはれむ／＼のなきなり、最初には物ごとあらげなく、士卒を使ふを先暴と云なり、後畏其衆とは、其衆はその士卒を云、後になりては士卒の二心をいだき、或はにげ去んかと畏ることなり、不精之至也とは、くはしからざるの至りとよみて、不吟味の至極と云ことなり、一段の意、最初は士卒をあらげなく

使ひ、士卒の難儀をも顧みず、後になりては思ひの外に士卒の心服せぬ所を見つけて、士卒が二心をさしはさみ、或は落行んかとひたもの氣遣ふは、其將のしかた不吟味の至極と知るべしと云ことなり、此一事を聞て、諸事武道の上に不吟味なることあるを知らんと云意なり、よく武道を吟味したる將は、何ほどあらげなく士卒を使ひたるとして、それに士卒が畏るものには非ず、とかく無理なることなく士卒を使ふを、吟味のつまりたると云なり、又將の人がら暴悪なる人も、士卒をあらげなく使へども、それは後まで士卒の叛んかと畏ることなし、最初はあらげなく使へば、士卒がわれを畏れて命に従ふ様に見ゆるゆへ、それをよきことかと思ひ、後に至りては士卒の心服せぬことを知て、殊の外に士卒を氣遣ふは、不吟味より起りたるものなり、曹操、李奎、杜牧并に張預、劉寅が一説には、暴を卒暴の義に見て、先暴と云を、最初は敵をかく思ふことなりと見、其衆と云を敵の大軍と見て、後畏其衆と云をば、後に至りて敵の大軍を畏る／＼と見、不精之至也と云を、敵を料り察することの精しくなき至極と見たるなり、初めは粗忽にて敵

をかく思ひて、後になりて敵の大軍なるを見て殊の外に畏る／＼は、其將の敵を料ること精しからず、粗末の至りなりと知るべしと云意なり、是にてもきこゆれども、下の文に無慮而易敵と云へると、重言になるなり、故に用ひず、

來委謝者、欲休息也、

來委謝すると云は、人質を送てわびごとをすることなり、委は委質として人質のことなり、來委は委を來たすとよみて、人質を送ることなり、謝はわびごとを云ことなり、欲休息也とは、暫く人數をやすめ、時節を待て再びとりかけんと思ふことなり、總じて休息すると云は、末に働くべき爲に休息する道理にて、休息せんと云ふ詞に、時節を待て再びとりかけんと思ふ意こもれり、一段の意敵より人質を送てわびことを云は、此方に心安く思はせ、是非ともに合戦をやむる了簡なり、かくの如く是非ともに合戦をやめんとするは、士卒も殊の外に草臥れたるゆへ、先づ士卒にも休息をさせて、時節を待つ了簡なりと知るべしと云意なり、李奎、張昭が注には、徐かに進み疾く退くを

委謝と云と云へり、字義詳かならず、用ひがたし、賈林が説には、委をたはむとよみて、氣さきたはみよはくて、わびごとを云と見たり、是非とも休息せんと思ふ時は、人質を出して戦ひをやむること定法なれば、此説は宜しからぬなり、

兵怒而相迎、久而不合、又不相去、必謹察之、

兵怒而相迎とは、敵兵の氣象ことの外に怒り、威勢をふるひて、あの方よりよせくるを云なり、迎るとは出迎ることにて、此方より取りかくるによりて、それに應ずるにはあらで、彼が方よりよせくることなり、久而不合とは、時刻を移せども合戦を始めぬなり、合するとは戦を合せ、鋒を交ゆることなり、又不相去とは又引きもせぬことなり、必謹察之とは、右の如なる敵は、味方の動きを待ちて、奇兵伏兵などを以て撃つべき方便なるによりて、殊の外にむづかしき敵なり、必謹で大切におもひ、よくよくこのろを付けて察すべしと云ことなり、この敵は最初の怒てよせ来る所はや方便なり、怒てよせ来るほどにては、是

非とも一戦を始むべきことなるに、久しく戦ひを始めぬは、怒りの一邊にて思慮なき敵と思はせ、此方より戦を始めさすべき計なり、然るに此方より戦を始めぬゆへ、人敷をくり上げずして様子を見るなり、眞實に怒て寄せ来る敵も、功者なれば、戦て利なきを見れば、戦を始めぬことあるなり、されども怒てよせ来る勢ひなれば、戦をはじめてはあしきと思はば、早速引くべきを、引もせぬはいかさまにも六借しき敵なり、とかくに方便ありて、見えにくき敵なり、又決斷なき敵にもあることなり、故に孫子も是をば何ともさだめず、たゞ謹察之と云へるなり、右相敵の法合て三十三箇條、但し殺馬肉食と懸瓶不返との二箇條を一つにしたる説なれば、三十二箇條なり、是皆孫子大略を擧て、敵を察するすぢみちを數へたるなり、此法を堅く守て、敵を視る法は是に極まりたり、此外に法なしと泥むべからず、其意を開宗に委く論せり、劉鄩晉と對陣せしに、靜にして物音なかりしかば、晉軍より人を遣はして伺はせたるに、旗を懸背にくづりつけて殘し置き、屏のあたりをありかせたるばかりにて、人は一人もなく、いつのまにか陣處を移しける

ことあれば、近而靜者、特其險也とも云ひ難し、趙陣が王景榮を攻めし時、壁を堅くして出ざりしかば、味方の軍兵を、敵方の加勢の兵にこしらへて見せぬれば、景榮力を得て人敷を押し出したることあれば、戦を挑むばかりを敵を引出す計とは云ひ難し、永昌公が栢を伐て庵とし、軍勢を合せしこともあれば、木の動くを見て寄せ来るとばかりも云ひがたし、張須陀が人数を草中にふせたることもあれば、疑兵にはあらで、まことの伏兵なることもあるなり、于謹大敵に逢へば、山中の鳥獸を逐出させ、われは高き處へ上り、指揮するていを見せたるは、獲伏をば設けずして、設けたるやうに思はせたるなり、武者はこりを見て、其形の高きを卑きを狭きを廣きぞとて、それに泥んで伺んとせば、昔晉と齊との取合ひに、晉軍わざと薪に繩をつぎ、地の上をひかせて、ほこりを影しく起せたるなどを見ては、大軍のよせ来ると思ふべし、使者の口上へりくたるに、眞に和談をこのみ、使者の口上強みあるに、眞に進むもあるべきことなり、輕車を兩方へはり出すち引くべき方便にするもはかり難し、難儀なることなきに和を乞ふも、われ知ずとも、本國

に憂出來たらんもはかり難し、かけはしりて備を立るにも、又いかなる謀やあらんすらん、半進半退にも、眞に亂れたる備もあらん、杖つき立つにも疲れたりと詐りて見することもあるべし、水を汲で飲で見ると、秦の國より涇水の流に毒を入れたる類も、疑はすまじき爲には、のみてこそ見せんすらん、利を見て進まざるも、法令の嚴なる備は、將の命令を待つことあり、鳥の集るは虚なりと云へども、田單が即墨城にて、鳥に食物を與へしかば、群鳥城中にあつまりし類、あるまじきに非ず、軍士の夜呼ばるは恐るゝなりと云へども、吳の戰舟を楚へとられしに、吳の兵僞て楚國のものとなり、ひそかに夜中に敵船の側に忍び入り、敵の伏船こそひそかに味方の船にまさりたれと呼はりしかば、楚國の船ども騒ぎ立ちたるひまに、彼船を奪て歸りしこともあるなり、孫子が語を一邊に守らましかば、味方の者の敵陣にて呼ばるをば知らずして、愚かなるわざにもなりぬべし、軍擾れて旌動くにも、伴り崩れて伏兵を設ることもあるべし、吏の怒るは士卒の倦たるなりと云へども、楚の子革が、摩厲して以て王の出るをまたんと云て、士卒を勵

ませしは、名將の作略なり、馬を殺して肉を食ふも、糧なしとて悔るべからず、宋の華元は宋の城圍まれ、兵糧盡きはて、子を易へて食する程にありしかども、遂に城下の盟をうけず、晉の國の軍法には出陣より歸陣まで、陣屋を起つ時は、井をふさぎ竈をやぶる、是をなど窮寇と云べけん、又李愬史思明が決して降参せんと料りしを、士卒皆さゝやきてそしりけり、是又李愬衆の心を失ひたりとも云ひ難し、周の世宗平城を救ひ玉ふ時、賞罰を頻りにして將をも卒をも勵まし玉へることあれば、強ちに窘なみ困める故なりとも云がたし、人質を送て謝するとも、油斷さすべき謀に如此せること其ためし多ければ、何とて一概を以てはかるべけん、總て是を云に、相敵の法は醫者の脈經の如し、醫者の脈經を誦んじたりとも、不窮の變を盡さんことは神解妙悟して、病情に通達するにあり、兵もまたしかなりと思ふべきなり、

兵非益多也、惟無武進、足以併力、料敵取人而已、

是と下の條と合せて、二條は上の相敵の法三十三條

などりかるしむるこゝろなり、尤敵を畏るゝは、隠したることなれば、何の用にもたぬ將にて、それは云に及ばぬことなり、大抵は合戦は武道なるゆゑ、武を好み、進むことを好むをよきこと、心得るより、つまびらかに敵を料ることをせぬゆゑ、相敵の法の次にかゝる云へるなり、兵非益多也と云句を、後世の本には、多くは兵非貴益多と作れり、軍の道は多勢を貴ぶに非ずと云意なり、尤道理はさることなれども、一段の文勢聞えかぬるなり、杜牧が注にはわれと敵と人数の多少なく、又武勇なる士卒をも持たぬ時は、賤き下卒の内より材能あるものを選びとりて、今までの軍兵に雜へ、力を併せ敵をはかりて、勝利を得べしと云へり、是は取人と云を人の材能を擇むことに見たるなり、是にても通すべけれども、惟と云字の義立たず、そのうへ下の文にも敵のことを人と云つれば、文例かはるによりて用ひ難し、梅堯臣が説には、武進を繼で進むとよめり、人数敵より多くもなく、つゞきて進むべき様なき時は、奴僕など賤き下卒の力を併せ、敵をはかりて勝を取るべしと云へり、武進をつゞてすすむと見ること、文義いかゞあるべき、其上方の字

を結ぶ詞なり、兵非益多也とは、軍兵は數を増して多くなりたるには非れどもと云意なり、惟無武進、足以併力とは、武進は武を好み進むことを好むことなり、併力は手前の軍兵に力を合せて、少勢が多勢にむかふことなり、人数を多く増したるにはあらで、手前の軍兵に力を併せ、小勢が大勢同前になることは、たゞ武を好み、進むことを好むことなくと云意なり、料敵取人而已とは、敵の上をよく察し料て、敵の働きの上より、吾が勝ちを取出すやうにするまでのことなりと云意なり、取人とは人より取ると云意なり、人とは敵なり、取とは勝利を取ることなり、一段の意、人数を多く増して、みかたの軍兵の力を益すは勿論のことなり、人数は多く益すにてもなくて、味方の軍兵に力をあはせ、前々よりは兵の力強くなり、多勢同前になることは、惟武を好み進むことを好むことなくと、敵をよく察しはかり、敵のすることを此方へ取り用ひて、吾が勝利にする所にあるなりと云意なり、敵の働きを取てわがものにする所、孫子が深意なり、されどもよく敵を察し料るに非れば、敵の働きを取ることあたはず、武を好み進むことを好むは、皆敵をあ

を奴僕のことに見ること、漢晉以後の文にはあることなり、上古の文にはなきことなれば、用ひがたし、直解の一説には、惟の字を雖の字に作て、雖無武進、足以併力、料敵取人而已と云意に見たり、惟と云字にて通じかたきゆへ、かく改めて見たるならん、
夫惟無慮、而易敵者、必擒於人、
是は上の條のうらなり、思慮もなくて敵をあなとり、心やすきことに思ふ者は、必敵に生擒にせらるゝものなりと云意なり、思慮と云は上の文に云へる相敵の法にて、よく敵を料察して、敵の情をよく知り、これに勝つべき道を得て軍をすることなり、武を好み、進むことを好む所より、敵をあなどる心生するなり、
卒未親附、而罰之、則不服、不服則難用也、
是より篇の終りまで、士卒を治る道を云へり、上に相敵の法を説けるを承けて、將たるもの敵をはかりて、敵にかたんとのみする時は、手前を忘るゝ所あるも

のなるゆへ、こゝに又士卒を治る法を説けるなり、孫子が心深きかな、卒は士卒なり、親附するとは、士卒われを親みて父母の如く思ひ、われによく附き従ふことなり、服するとは心より納得して、わが罰を受けることなり、難用とは用にてにくきと云ことなり、一段の意、士卒いまだ我を親み我に心より附き従はざるには、罰を施すべからず、我を親むことなき士卒に罰を施す時は、士卒けすみ畏れて、心より吾が罰を尤なることかなとは思はぬなり、何ほど道理に當りたる刑罰なりとも、元より將を父母の如く思ふことなき時は、其刑罰を心より納得して受ることはなきものなり、刑罰を、心より納得して受るほどの士卒に非れば、軍をさせて用立ることとはなり難きなり、何故なれば、其身に罪ありてさへ死をいやがる人を、いかにして罪なきに殺さるべき、軍にては罪なき士卒を敵と戦はせて、死なしむることなれば、よくく上を親むことあるに非んば、用に立つまじきなりと云意なり、

卒已親附、而罰不行、則不可用

也

士卒すでに吾に親み、よく心より附き従ふての上に、刑罰を行はぬ時は、士卒恩に驕へて法を畏れぬゆへ、士卒わがまうになりて法令を用ひず、軍は法を以て衆力を一致し、勝ちを取るものなれば、如此の士卒も又用に立たぬと云意なり、

故令之以文、齊之以武、是謂必取

故とは上の二條をうけて云へるなり、之とは士卒を指て云、令するとは命令を施すことにて、士卒を下知することなり、文とは文徳にて仁愛恩澤を云、齊とはそろゆることなり、仁愛恩澤ばかりにて刑罰を施さざる時は、君子は上の恩に感じてよく法を守れども、中人以下は却て心安く思ひて法を破るゆへ、法を守るものもあり、守らぬものもありてそろはぬを、今刑罰にて一様に法を守らする様にそろゆることなり、武とは武威にてこゝにては刑罰のことなり、先士卒を下知するには、恩澤を以て士卒の吾になつきした

しむ様にして、其上にてそればかりにては上下一様に法を守らぬゆへ、刑罰を以て上下一様に法を守るやうにそろゆるを、必取の道と云と云意なり、必取の道とは、必勝利をとる道と云ことなり、

令素行、以教其民、則民服

令とは平生の下知なり、教るとは時に臨でする軍中の下知なり、平生の下知もとよりよくゆきわたり、民上の法を守る時は、時に臨で軍中にて下知をなすに、民よく心服して、上の下知を守ると云ことなり、民とは士卒なり、

令不素行、以教其民、則民不服

平生の下知士卒にゆきわたらず、唯軍に臨で士卒を下知するばかりなれば、士卒上の下知を、心より納得せず用ひぬものなりと云ことなり、右の二條は總じて軍の法は、平生士卒によく練熟させて置くべきことなりと云意なり、いとさへ生死不知の場に臨では、人の心紛亂するものなるを、是はかくせよあれはしかせよと、六借しきことを下知せば、士卒會得せざ

らんこととはりなり、

令素行者、與衆相得也

是は上の二段を結びて、平生の下知よく士卒へゆきわたる時は、法と士卒と一致すると云意なり、平生をの法によくなれて居るゆへ、士卒むづかしきことと思はず、合點もはやく、わざもよく働くことを、相得るとは云なり、たとへば吾國の風俗に、男子たるものはあたまをはられては堪忍ならず、男のたゝぬと云こと、中古よりのことなり、よく立ちかへりて考れば、弱輩なることなれどもはや年久しく風俗となり、人々幼少より覚えこみて、男子はかくあるべきはずのことなりと心より納得して、かつてあやしき、是中古の名將士卒の勇氣を養ふ法術より起りて、吾が國の風俗となれり、又武士の大小を挿むことも、中古よりのことなれども、武士たるものは幼少よりさしつけて、如何様なるひはつなるものも曾て重しとせず、厄介ともせぬなり、是又練熟せる所より、令と衆と相得るが故なりと知るべし、

地形第十

此篇は地の形を論せるゆへ、地形篇と名づく、集注の古本には地勢篇と名づく、地勢は地の勢ひなり、形あればその形に随てそれくのいきほひあれば、地形地勢同義なり、されども形と云は定まりたる形なり、勢と云は運動の義あり、故に張預が注には、この篇は地の形なり、下の九地篇は地の勢なりと云へり、此篇の首にも地形有通者と云へれば、地勢と云へるは傳寫の誤なるべし、

孫子曰、地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者、

總じて土地の形にこの六品ありとなり、通するとは通路ふさがらぬ意なり、挂るとはもの、鈎などにかゝりたる意なり、支るとはつきはりて持ちあふ意なり、隘きとは口のせばき意なり、險しきとはけはしくさかしき意なり、遠きとははるかに遠きなり、尙委しく本文に見えたり、

我可以往、彼可以來、曰通、

我可以往とは、この方より敵の方へゆくことも自由なるなり、彼可以來とは、敵の方より此方へ來ることも自由なるなり、是は平地打つべき廣くやすらかなる地にて、諸方の通路よき場なるゆへ、如此き地を名つけて通と云となり、是を四通八達之地と云、四角八方へ通達する地と云意なり、

通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利、

是は通形の地にての軍のしやうと云へり、高陽とは高はたかき處、陽は高き處を背に負たるを云なり、通形の地は廣場なり、廣場にても少しの丘陵など地の高き處あるべし、それを敵にとられぬ先きに、先づ早く陣を取るべしと云ふことを、先居高陽と云なり、行軍篇に平陸は高を右背にすと云へる意なり、總じて廣場は戰地なり、かけはなしの合戦をするに場も廣くてよきなり、されども勢ひの順逆によりて勝負あることなるゆへ、高陽の地を敵にとられぬ様にす

るなり、敵にとられず味方へとるところ、虛實篇に、先處戰地、而待敵者、佚すと云ひ、致人而不致於人、と云へる意なり、利糧道とは、糧道とは兵糧を本國よりとりよするみちなり、通形、地は要害難所なき廣場なれば、敵自由に往來するゆへ、吾が後へまはり、本國よりの兵糧の道をたぢざるべきこと第一の氣遣ひなり、故に何れの地にても兵糧の道を氣遣ふべきことなる中にも、通形の地に限り、第一にこの手當てをすべきなり、利するとは、利は通利の意にて、糧の道の塞がらぬ様にすると云ふことなり、糧の道のふさがらぬ様にすると云は、或は小荷駄備を堅固にして是を守護し、或は異國にては、甬道を作て兵糧をはこぶなり、甬道とは十里も二十里も兩方に築地をつきて、中を兵糧をはこぶることなり、以戰則利とは、如此して戰ふときは勝利ありと云意なり、

可以往、難以返、曰挂、

可以往とは此方よりゆくことは自由なるなり、難以返とは此方へかへるとは不自由なるなり、如此なる地は物にひきかゝりたる意ゆへ、是を挂形の地と

云なり、張昭杜牧が説には、險阻之地、與敵共有犬牙相錯と云へり、犬牙相錯とは、犬の牙はがんぎの如く、上の牙は下の牙の間へ入り、下の牙は上の牙の間へ入てあるものなるゆへ、敵地と味方の地と入り組であるを、犬牙相錯ると云、險阻なる地にて敵味方の地入組であるゆへ、往易くて返り難き地なりと云意なり、劉寅が説には、前低く後高き地なりと云へり、味方の方は高く、敵の方は卑ければ、高きより卑き方へ人數を出すは順にしてやすく、卑き方より高き方へ人數を引取るは逆なれば難きゆへ、往易くて返りがたきと云意なり、何れにしても往やすく返りがたき地は、物に引きかゝりたる様なるものなるゆへ、挂形の地と云なり、

挂形者、敵無備出、而勝之、敵若有備出、而不勝、難以返、不利、

挂形者敵無備出而勝之と云は、油斷したるを無備と云、挂形の地はとかく返りかたき地ゆへ、敵に油斷ありて、たしかに敵の不意を撃て勝つべき圖を見れば、この挂形の地へ人數を押し出して敵を撃つべし、軍に勝

ちさへすれば味方の地になるゆへ、引く時にも誰も妨るものなく、自由に引るゝなりと云意なり、敵若
有備出而不勝、難以返不利とは、敵もし油断なく手
あて備をよくして、撃ちても勝たれまじきは人数を
引上げにくき地ゆへ利なきなり、如此ならば必この
挂形の地へ人数を押し出すべからずと云意なり、とか
く一舉に勝たるゝならば、此地へ人数を出すべし、さ
なくば必人数を出すべからずと云戒なり、陳暉が注
に、もし萬一この地へ陥りて返ることならずんば、敵
の糧を掠め、久しく陣を取る謀をなし、其内に勝利の
圖を伺ひて撃つべしと云へり、されども孫子が戒め
明白なれば、必此地に陥らぬ様にすべきなり、

我出而不利、彼出而不利、曰支

我出而不利とは、我も人数を此地へ押し出しては勝利
なきなり、彼出而不利とは、敵も人数を此地へ押し出
しては勝利なきなり、曰支とは、如此き地をば支形
の地と云となり、敵味方ともに人数をこゝへ押し出
しては利なきゆへ、兩方よりならみあひて居る地なる
ゆへ、兩方よりつきはりさゝへて居る意にて、支形の

地と名つくるなり、杜牧が注には、敵も味方も高く險
阻なる處に陣を取り固めて居んに、其兩軍の間の地
平地なれども、狭く長く、人数を押し出しても備を立
る場所なく、敵をかさに受る地なるを云と云へり、劉
賓が説には、敵味方兩軍ともに高く險阻なる要害の
地に陣城を構へ居んに、其中間の地又節所にて足場
あしく、備の分合もならず、又相互に救ひあふことも
ならぬ地なりと云へり、とかく兩方よりならみ合ひ、
支へつめて居るべき地の、人数を出して働くことは
ならぬ所を云べし、尤敵味方ともに、其陣城を取りた
る地より内へ敵を入れては叶はぬ地なりと知るべ
し、

支形者敵雖利我我無出也、引而去之令敵半出而擊之利

支形者敵雖利我我無出也とは、敵より我が勝利の
あるべき様なることをしかくるを利我と云、張預
説には、敵が陣城を構へたる要害の地を棄去ること
なりと云へり、支形の地は兩方より要害の地を守て、
ならみあひて、それより内へ互に入れぬ様にするこ

となり、其要害の地を奪はるゝ時は、奪はるゝ方地の
利を失ひ、奪ひたる方地の利を得るゆへ、これを棄る
を見ては、必奪はんとすべきことなるを、敵が知てわ
が人数を陣城より出して、敵の棄たる陣城の地を奪
んとて來るを伺ふは、兩陣の中の惡地にてうつべき
爲の計なり、是我に利を與へて我を誘ふことなるゆ
へ、是を利我と云と、張預が云ひたるなり、されども
其吾が陣城を構へたる地を棄て、去るばかりに限
りたるには非ず、或は敵方に虚なる處ありて、陣城を
乗りとらるべき様なることを拵へて味方に見せ、或
は偽てうら切りをすべき様に内通をする者ある類
も、同じ道理なり、されば何ほど味方の利となるべき
ことありとも、必容易にその我が籠りたる陣城の地
より先きへ出づべからずと云ことを、敵雖利我、我
無出也と云へるなり、引而去之令敵半出而擊之利
とは、味方の籠りたる陣城を明けて引去るべしと云
ことを、引而去之と云なり、然る時は敵必これを知
て、その持固めたる陣城より人数を押し出して、味方の
明けたる陣城を取りに來るべし、其時敵が人数を半
分くり出して、半分ははまだ其陣城を出ぬさかひを

伺ひて、是をうつ時は、勝利ありと云意を、令敵半出
而擊之利と云へるなり、尤敵味方の間の地、人数を立
てられず、分合變化のならぬ地なれば、人数を皆押し出
したりとも、うたば勝利あるべけれども、人数を皆押
出す時は先へ進むこともならず、後へ引くこともな
らず、ゆき方のなき軍兵なるゆへ、死地になるなり、
敵良將なれば死地に人数を置く時は、窮鼠却て猫を
かむ勢ひにて、是を打て勝利を得がたく、勝利を得て
も味方の人数損するなり、人数を半分くり出して、半
分は城内にあるときは、士卒の心いまだ定まらず、備
も立て固めぬゆへ、是をうちて必勝利あることなり、
是孫子が軍法に老たる所なり、

隘形者我先居之必盈之以待敵、若敵先居之盈而勿從不盈而從之

隘形と云は、せばきくちなり、兩方より山のでさき出
合て、口狭く中廣き地を云、曹操は兩山間通谷也と云
ひ、張預は左右高山にて中に平谷ありと云ひ、又大谷

の口なりと云へり、兩山の間に平地ありて、其口狭きに其口より通路する意なり、中の平地を山に對して谷と云たるなり、大谷の口と云時は、中廣く口狭き意おのづから見ゆるなり、我先居之とは、この地は中廣くて人數をいかほども内におかれ、まわり山なれば要害よく、口せばければ其口へ人數を出せば敵近よることならぬゆへ、敵こゝに陣を取る時は、たやすく撃ちがたし、故に敵の陣を取らぬ先きに、我まづこゝに陣を取り居るべしと云意なり、必盈之以待敵とは、谷の口をふさぐことを盈ると云なり、必この谷口へ人數をはり出して是をふさぎ、敵のこの谷口へ入らぬ様にして待つべしと云意なり、子細は敵この谷の内へ入る時は、この地の要害はこの谷口一種のとなり、谷口を守るによりて敵より手をさすことならず、是地の利なり、今敵この谷口より内へ入る時は、地の利の詮たゞす、合戦の巧拙を以て勝負わかれて、地によりての勝利はなし、故に敵を入ぬやうにすることとなり、若敵先居之盈而勿從とは、もし敵が我より先きに此谷へ人數を入れ、この谷口を塞かば、たとへば人數を袋の中へ入れ置き、袋の中より一つ宛とり

出して合戦をさせ、疲れたるものをば又袋の中へ入れ、荒手を又袋の中より取出して働かする如くなることなれば、敵は安穩に氣遣ひなく合戦をして、致人而不致於人の道理に叶ふゆへ、必とりかくること勿れと云ことを、勿從と云たるなり、從ふとは敵の居る處へとりかくることを云なり、不盈而從之とは、敵もし此谷の中に陣取りたりとも、人數を出してこの谷口を塞かすんば、敵のあとを追て谷の中へ入るべし、然る時は谷口の要害破れて、地の利なくなるによりて、平地の合戦も同じことなりと云意なり、諸注の意みなかくの如し、今按するにこの隘形の地を此方へ取り、この谷の内に入る時は、兩方の山までもこの方の物になるにより、敵はこの谷口ばかりと思へども、山へ人數を取り上げ、山上より奇兵を以て働かすべきもわが心まゝなり、故に是を勝利の地としたることなり、又人數を谷口に盈て、谷口を塞くと云も、あながちに谷の口へ人數をたてならべて塞ぐことには非ず、谷の入口に人は一人も居らぬやうに見えたりとも、此谷の口より敵の入りぬやうに守るを、孫子は盈ると云たるなり、故に賈林が注には盈ると云

を實すると見、不盈と云を虚と見たり、畢竟敵に虚ありて此谷口の守りを奪ふべくんば、守らぬも同じことなれば、賈林がかく注せるなり、
險形者、我先居之、必居高陽、以待敵、若敵先居之、引而去之、勿從也、

險形とは曹操は地形險隘と云へり、險はさかし、隘はせばしとよむ、杜牧は山峻しく谷深しと云へり、劉賓は溪澗坑坎、困車阻馬、不便馳突、險阻難行と云へり、溪澗はたに川なり、坑坎はあな、り、困車阻馬とは車も馬も行がたきことなり、不便馳突とは馳引不自由なることなり、險阻難行とは節所にてありき難きなり、總じて節所難所を名づけて、險形の地と云べし、我先居之とは、右の如なる節所ならば、敵にとられぬ先きに、味方より先づ陣取るべしと云意なり、平陸の地さへ先きに陣取る時は、致人而不致於人の得あり、まして節所は、往來かけ引自由ならず、山間谷がけなど奇伏を置くべき地も多く、平地など

の見えわたりたる通りなるやうになれば、先きに陣を取れば、地形の案内もよく熟し、陣も取り固めてひまになれば、心も定り氣もおちつき、以高擊下、以佚擊勞、以先擊後の得あり、以高擊下と云は、われは先きに陣を取るゆへ、心まゝに高き處に陣を取布くに、敵は後なれば高きよき處をばわれに取られて、ひき、處に陣を取るゆへ、高きより卑きをうつ時は、勢ひ順にて勝利あるなり、以佚擊勞と云は、佚はとくと落着きて辛勞をやすめたるなり、勞は始めておりつきたるみぎりなれば、草臥れたる最中なるなり、さればくたびれを休めたる兵を以て、草臥れたるを打つことなり、以先擊後とは、先きに陣取るものは物ごとに先きなり、後に來るものは物ごとに後なり、とくと陣を取り、おちつきて居るゆへ、敵の來るを心靜かに待うけ、よき圖を見て、此方より先をしかけて打つことなり、如此き得あるゆへ、我先居之と云へり、必居高陽以待敵と云は、險阻の地ならば必高き處にて山を西北にうけ、東南へ向きたる處に陣を取て、敵をまつべしと云意なり、平地にさへ陣場は高陽をよしとす、まして險阻の地は不自由なる處なれば、隨

分に味方に地の利を取らねば叶はぬことなり、高ければ敵を見おろし、東南に向たる處は、冬は温かに夏は涼く、濕氣すくなく疾を生せぬなり、杜牧が説に、可捨陽而就高、不可捨高而就陽と云へり、高陽の二つをろはぬことあるものなり、地形は高ければ、山を東南にうけたる地あり、山を西北にうけたれども、地形卑き處あり、然る時はたとひ山を東南に受けて陽地には非ずとも、地形高くて高地に叶ひたるに陣取るべしとなり、峭澗の地を證據に引て云へるなり、又高き地を第一とすると云に付て、張預は裴行儉がことを引けり、行儉突厥と云夷をうつ時、日晚に陣を取り、土手をもつき堀をもほり出來けるに、急に陣處を高き岡に移しけり、諸將同心せず、何れも草臥待ると云ひけれども、行儉きゝ入れず、急に陣處を移しけるに、其夜風雨暴かに來て、始めに陣を取し處へ水をおし上げ、水の深さ一丈餘ばかりになりければ、諸將我ををりけるとありと、されば陣所は高きをよしとす、殊に節所は皆山中なれば、山中には水のはかに出ることなどあるものなれば、いよく高きを第一とすべきなり、若敵先居之引而去之勿從也と

は、もし敵が我より先きに高陽の地に陣を取らば引きさるべし、敵と同一此地に居るべからずと云意なり、引去るに二つの意あり、一つは前に云へる如く、敵に以高擊下、以佚擊勞、以先擊後の得あるゆへ、われは卑きを以て高きよりうたれ、勞を以て佚にうたれ、後を以て先にうたると、失あり、一つは敵の地に陣を取て我をまつに、我はこゝに留らず引去る時は、敵に先をとられず、敵につかはれぬなり、其上敵わが引去るを見ては、こゝに陣を取り居て所用なきゆへ、敵もこゝを打起ちて、我が陣を取る處へ來るべし、是敵の取置きたる地の利を奪ひ、要害をはなれさせて、而もわれは先きへ陣を取りかためて居る處へ敵來るゆへ、以高擊下、以佚擊勞、以先擊後の勢ひは却て此方にあるなり、是この地を引去るを以て、敵の方へとりたる先を、此方へとりかへす道理なりと知るべし、

遠形者勢均難以挑戰、戰而不
利、
遠形とは敵味方の陣間遠きを云なり、勢均難以挑戰

とは、敵味方人数の多少同きを勢均しと云、敵の陣を固めて居るに、人数を敵の陣處へ遣し、合戦をしかけて敵を引出し、戦はする様にすを挑戰と云なり、敵味方の陣間はるかに遠くて、人数の多少敵味方同じことなれば、人数を遣して敵へ合戦をしかけ、敵を引出すことなり難しと云意なり、兩方の陣處の間遠く隔りたるに、此方よりゆけば此方勞して敵安佚なり、敵來れば敵勞してこの方安佚なり、されば寄せ來る方疲るゝゆへ、待て軍をするに利あり、是以佚擊勞の道を用る場處なり、然るに味方の人数敵より多勢なる時は、往來の路遠く、人数の勞する程を考へて、荒手を入れかゆるなり、敵陣へ人数を遣し戦を挑むことも、正兵奇兵救應の手分け、并にわが陣處を守る人数澤山なるゆへ、是又やすきことなり、人数敵より多くもなきには、第一に人数の手分けなり難きゆへ、難以挑戰と云なり、戰而不利とはたとひ人数の手分けもなりて、敵を挑て合戦を始めても利なきなりと云意なり、是敵は安佚にて、味方は勞す、以佚擊勞の利を敵に得さするゆへなり、本文の遠形と云を、杜佑は本國をはなるゝこと遠きなりと云へり、それは九

地篇の重地にて、遠形の地に非ず、誤りなり用ゆべからず、又杜牧が注に勢均と云は、總じて遠形の地は敵より寄すれば敵勞し、味方より寄すれば味方勞するところ、敵味方何れも同じことなるを云と云へり、然れば近地にても敵味方の勢均しければ、遠形の地の處にはばかりかく云べからず、故に今外の諸説に従て、遠形の地なる上に、敵味方の人数同じ位なることにするなり、杜牧又遠形の地にて戦んと思は、陣所を移して敵陣へ近よるべしと云へり、又遠形と云は、大抵敵味方の陣所の間三十里と云へり、日本路の三里なり、尤三里以上を云べし、

凡此六者地之道也、將之至任、不可不察也、

是は上の文を結びたる詞なり、凡此六者とはすべて上に云へる通形、挂形、支形、隘形、險形、遠形の六は、地形に備はりたる自然の道理なり、故に地之道也と云、將之至任とは、將は大將なり、至任は至極のやくめなり、地形をよく知るは、大將たるものゝ大切のやくめに極まりたることなれば、地形をばよく察せず

して叶はぬことなり、故に不可不察也と云へるなり、
故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者、凡此六者、非天地之災、將之過也、

上に六地の利害を云へるを承けて、こゝには敗北の道を六つ説けり、總じて右にとける六地の利害は、地形の上に具はりたる道理までのことなり、合戦をするに至ては、地形の上に又人のわざ加はるによりて、地形の利害に具はりたる常法の上に、きはまりなき變あり、故に前の行軍篇にも、後の九地篇にも、地の利を説たる次には、必人事を説けり、是孫子が深意なり、意をつけて見るべし、走とは足早ににぐることなり、弛とは弓の弦を弛したる如く、しめ繩ゆるまりて用に立たぬことを云なり、陷はおちいるとよみて、堀川おとしあなとへ落るに喩へて、生擒になることを云へり、崩はくづるとよみて、山などのくづれ落るこゝろゆへ、われ／＼になることを云、亂はみだるゝとよみて、右往左往にらちもなくなることを云、北

はにぐるとよむ、敵に面をむけず引くことなり、前の走と同じやうなれども、走はあしはりに引取る意なり、凡此六者、非天地之災、將之過也とは、總じてこの走弛陷崩亂北の六しなは、天のめぐり時の運にてふり來りたる災にも非ず、又地の利にそむきたる所より生じたる災にも非ず、將たる者の、兵道をしらぬ所より出たる咎過なりと云意なり、

夫勢均以一擊十、曰走、

夫は發語の詞なり、是より下に六敗を説けるゆへ、孫子がこゝろに事を大切に思て、語の端を更めたるなり、勢均と云は、將の智謀も敵味方同じ位なり、兵の剛脆も敵味方同じ位なり、天の時地の利兵糧の多少も敵味方同じ位なり、又士卒の疲たると疲ざるも同じ位なるを云なり、以一擊十とは、右の如く一切のこゝと何もかも敵味方同じ位なるに、十分一の人數を以て、十總倍の敵へ取りかくるを云なり、曰走とは、右の如なる時は、必戦に及ばずして味方敗北すべきなり、敗北とは云ずして走ると云は、敗北と云は戰て上ることなり、走と云時は或は戰ひ、或はいまだ戰はざ

る前になりとも、逸足を出し引くことなり、又戰はずして足ばやに引くべしと云意もあり、總じて古より十分一の人數を以て、十總倍を打ち、勝利を得ること其數少なからず、周瑜が三萬の兵を以て曹操の八十萬を破り、謝玄が八萬の兵を以て苻堅が八十餘萬を破りし類なり、されども人數十分一と十總倍と懸隔の違ひあれとも、將の智謀か、兵の剛脆か、天の時地の利か、地の利か、兵糧の多少か、又敵味方勞すると勞せざるとの違ひか、人情の一致するかせざるか、勢の鋭なる所かぬけたる所か、是等のことを目算に入れて、引きおとして見れば、人數の多少各別なるも或は等分になり、或は味方却て十倍になりて、敵は十分一になる道理ありて、大きな勝利を得たることなり、その考へもなくて、十總倍の敵にとりかくることをば、孫子が戒めてかく云へるなり、

卒強吏弱曰弛、

卒は士卒なり、吏は將吏にて大將物頭諸役人なり、卒つよく吏よはきと云は、士卒には大身なるものもあり、豪強なるものもあり、或は君の出頭人など勢のあ

る者もありて、將吏の手にまわり難きを云、是卒強きなり、將吏懦弱なるか、又は智謀少く氣にはたはりなく、或は君は疎遠なれば、おのづから君の寵愛し玉ふものを心まゝに取りさばくことならぬ、是を吏弱と云、總じて上は下を帥ひ、尊きは賤きを統るものなるによりて、百萬の士卒にもだん／＼に頭をつけて、是をしめぐる時は、百萬の兵も吾一人の手足を使ふ如くになりて、上下一致するゆへ、合戦に利を得ることなるに、かくの如く頭はよはく組子はずよければ、たとへば、強弓につるなくて弛し置きたる如くなり、なにほど強き弓なりとも、弦と云ものをかけて是を引くによりて、吾が手に入れて自由に用にか立たん、弦なき弓は引くべき様なければ、何の用にか立たん、將吏弱く士卒強きは、弓の弦を弛したる如くにて、毫髪も敵を碎くたりにならず、何の用にもたぬゆへ、是を弓の弦を弛したるに喩へ、弛と名付けて孫子が戒めたるなり、孟子に云へる如く、鄒と魯と戰ひたるに、有司は三十三人まで打死したるに、士卒は一人も死なずと云ことあり、又唐の長慶のころ、田布と云大將を魏州の節度使として、王延濬を伐ちたることあり

りしに、魏州の者とも田布をあなどり、驢馬に乗り乍ら陣中を行きけれども、田布その無禮なることを禁ずることもならざりしが、果して合戦に及びし時士卒田布が下知を用ひず、軍破れて田布自害せることあり、是皆卒強吏弱曰弛と云へる類なるべし、

吏強卒弱曰陷

吏強卒弱とは、將吏は勇猛剛強に士卒は懦弱なるを云、是を陷と云は、陷はをちいるなり、たとへばおとし穴へ入り、或は海川へおち入れれば、出ることあたはざる如なる喩へなり、將吏たる者おのれが勇猛剛強なるに誇て、曾て士卒の上を知らず、士卒つかるゝか煩ふか、或は太平日久しくて合戦のことになれず、人々奢て手足をうまし、弓馬をも嗜まねば、人おのづから弱くなる、或は衣服食事家宅等平生奢を極め、夏は笠をかぶり、冬はこたつにあたり、物ごと公家上臈の如にそたちて、幼少より艱難なることを知らねば、軍中の栖居に退屈し、險阻の地に至ては歩行もならぬ様なるを、將吏又勸辨なく、如何様なることもすればなるものなりと思ひ、なりにくき戦ひ、かゝるまじき

場をかくる時は、必士卒を死に陥るれども、是を死地より出すことならず、そのはては士卒用にたゞぬゆへ、其身ばかりの武勇を働き、つき従ひ守護する者なれば、やがて生擒になる故に、士卒をも陥れ、其身も陥る道理にて、是を陷と云なり、昔楚の莫敖が羅國を伐ちし時、羅國小國なれば、莫敖これを見あなどり、而も元よりしやうのこはき生れつきにて、我れ一分の勇氣を奮ふくせありしゆへ、軍中のこと何にても諫めたらんものを刑に申し付んと、堅く法令を出し、味方の士卒の弱きをも顧みず、無理なる合戦をして羅國と虜戎との兩軍に敗られたることこの類なり、故に陳師が注に、人皆血氣あれば誰か闘ふ心なからん、將に威も徳もなく、士卒にならしなければ、人皆懦弱になると云へり、誠に人の氣質にはさましくありて、強きもあり弱きもあり、勇なるもあり臆したるもあれども、兵のならしを以て、百萬の勢も一致の力を合せ、よはきも臆したるも、皆一様に勇にしてつよくなること、大將の教にあれば、吏強卒弱と云は、畢竟平生の教のたらぬ故なりと知るべし、

大吏怒而不服、遇敵愾而自戰、將不知其能、曰崩

大吏とは總じて大將を將と云ひ、將の下にて司る所あるものを吏と云、侍大將より諸役人までなり、今大吏と云は、吏の内にておもだちたるものを云、侍大將物頭なるべし、怒而不服とは、總大將の命令下知をなすに、侍大將物頭怒て心服せぬことなり、遇敵愾而自戰とは、侍大將物頭の腹立ち心服せぬ所あれば、敵にあふたる時は、必總大將の命を用ひず、われ一分の合戦をするなり、是上を怨る所あるより出たることなるゆへ、對面自戰と云なり、われ一分の合戦をするとは、軍の總體にかまはず、或は自身一己の功名を心がけ、或は總大將にふてゝすまじき合戦なれども、總大將の命なるゆへ、是非なしとて戦ひ、或は戦死することなり、將不知其能と云は、大吏のかくの如く怒愾る所以を説けり、其手の内にも侍大將となり、物頭となる程のものが、何とて怨怒るなれば、總大將たる人、其人の才能器量を知らざるゆへ、是を怒り腹立ること、是本根なり、侍大將物頭の才能器量を知らぬと

云は、或は總大將に最負偏頗あるか、或は我を立て、老功の者の了簡を用ひぬことなり、大吏の述懐これより生じて、義心なきものは敵へ屬し、義心あるものはとて滅亡に及ぶことなれば、馬革に尸を裹て死を潔くし、見ぐるしき死をすまじきとて必戦死するなり、是を將不知其能と云へり、曰崩とは、右の如なるは山などのわれて崩るゝ意にて、大吏と將と心一致せず、われゝなる所より、備しまらず破るゝことを云なり、昔漢の李廣はすぐれたる良將にて、匈奴よりも飛將軍と號しておちられたる者なるを、大將軍衛青その材能を知らず、先手を願ひけれどもゆるさざりければ、李廣これを愠り、合戦身にしますして功なかりし類、又春秋の時楚王鄭の國を伐ちし時、晉の國より鄭の國へ後詰をしけるに、楚の臣伍參楚王に申して云やう、晉の方の將軍皆新役にて、下その下知をきかず、副將先殺むまれつき勇剛を好み、人にもどる者にて、大將の命を用ひず、このたびの戦ひは晉の方打負んこと治定なりと云、この時晉の大夫に、魏錡、趙旃と云ものあり、魏錡は公族たらんことをかねかね願ひけれども許されず、是に立腹して、この度晉

の軍の敗んことを心に願ひ居たり、趙盾も卿の位を望みけれども、許容なかりしを腹立て、居たりしを知らず、兩人を楚の陣へ使者に命ず、卻克と云もの兩人使者にゆくことを聞て、必晋の方の敗軍せんことを知りたり、案の如く兩人の使者、楚王の怒るやうに云ひかけ、楚軍よりとりかけ合戦をはじめ、遂に晋の方中軍下軍の二手、大きに敗軍せるなり、此時隨會と云もの、上軍の將軍なりしが、兩人のもの使にゆきなば、必楚王を怒らせ味方へとりかけさすべし、味方の大將は、もとより盟會にて事を静めん、了簡なる處へ、楚軍とりかけば、敗軍必定なりとて、鞏朔韓穿兩人に云ひ付け、敖山の下に伏兵を七手備へ置て、敗軍をもちかへし、上軍ばかり事故なかりしなり、

將弱不嚴、教道不明、吏卒無常

陳兵縱橫曰亂

將弱不嚴とは、總大將柔弱にて、下これを畏れず、法令嚴肅になく下法を守らぬことなり、教道不明とは、軍術を教道と云、軍術明かなると云は、分數形名など分明にて、士卒覺へ易く、しかも平生より練熟してた

しかにしなれ、紛れ取りちがゆることなきを云、されば明かならぬと云時は、平生習しなくて、組分合圖の作法混亂して、わけ分明ならぬを云なり、吏卒無常とは、吏は頭役人なり、卒は士卒なり、今まで頭役人とするものが忽士卒になり、士卒がにはかに頭役人となり、すべて役儀ひたものうつりかはりて、定まりなきを云、陳兵縱橫とは、備を立ることを陳兵と云、縱橫とは亂れたることなり、備のたてやう埒もなく亂れたることを云、大將柔弱にて威嚴なく、賞罰明かならぬゆへ、軍中法令たえず、平生練熟するやうに教へならはさぬ故、軍術明かならず、人の取成しまかせに役替をさするゆへ、吏卒無常なり、軍術明かならぬゆへ、陳兵縱橫なるなり、亂と云へる所以なり、是皆大將懦弱なるゆへと知るべし、吏卒無常と云を杜牧は、吏卒皆常ののりに拘らざるなりと云へり、劉寅彭繼耀は、吏卒皆職分に一定したる守りなしと云へり、施子美は吏卒皆定りたる次第なしと云へり、皆意はかはれども義は同じことなり、

將不能料敵、以少合衆、以弱擊

強、兵無選鋒曰北

將不能料敵とは、將に智慮なきゆへ、敵の虚實を料り察すること能はぬなり、不能と云ことは意を付くべし、智慮なき時は敵の虚實を料んとすれども、明かに知ること能はぬなり、以少合衆とは、敵と合戦することとを合すると云、少勢を以て多勢と合戦することなり、以弱擊強とは、弱兵を以て強敵をうつことなり、兵無選鋒とは、選鋒はえらべるほこさきとよみて、えらみすぐりたる武勇の兵を先手にすることなり、軍兵の内に剛もあり、臆もあり、強もあり、弱もあり、様々ありて一様になきものなり、三軍の士何れも武勇の士ならんことを願ひても、是又世界になきことにて、而もならぬことなり、故に軍には必武勇なるものを選て、是を先手にしてた、かふ時は、殘る軍兵には剛臆さまなくありと云へども、先手の勢ひにつれて、皆勇になることなるゆへ、必選鋒なくて叶はぬものなるに、愚將は其わけを知らずして、軍兵の中に選鋒なきゆへ、兵無選鋒と云なり、一段の意は、軍をす

の虚實をはかりて實を避け虚をうつ時は、少勢にて多勢にかち、弱兵にて多勢の勢ひを以て強敵をも敗ることなるに、愚將は其道理を知らず、虚實を料らず、選鋒もなくとも、少勢にて多勢にもかたるものなり、弱兵にて多勢にもかたるものなりと覺えて、浪りに戦ふ故、必敗北す、是を北と云と云へる意也、總じて古より、軍をするには必選鋒あり、春秋の時分、齊の國にて伎擊と云て劍術の上手を用ひ、魏の國にては武卒とて強力の兵を用ひ、秦の國にては銳士とて首功を以て士卒を勵まし、漢の代には是を俠客奇才と云て、男たてのものを用ひ、其外吳には解頰と名付け、齊には詠命と名つけ、唐には跳盪と云ひ、宋には拐子馬と云、皆選鋒のことなり、或は先手に用ひ、或は親兵とて大將の手廻りに用ひ、或は奇兵伏兵に用ること、古今の定法なり、殊に中軍を中堅と云こと、大將の旗本は用心をきびしくする道理、又危に臨ては、如何様の強敵幾百萬の敵に圍まれても、打破て通るやうにして置くゆへ、中軍は堅きを貴ぶ道理にて、中堅と名付るなり、こゝには入らぬことなれども、選鋒のついでに是を記す、忽にすることな

凡此六者敗之道也、將之至任、不可不察也、

是は右の六敗を結べる詞なり、總じて右に云へる走弛陷崩亂北の六は、何れも敗軍の道なり、走は敵味方の勢の多少を考へぬ所より起り、弛はかしら弱くして士卒強きより起り、陷は頭強くして士卒弱きより起り、崩はおもたちたるもの怨を含むより起り、亂は大將柔弱なるところより起り、北は選鋒なき所より起る、されば此六は大將たるもの、我が任とすべきことにて、明かに了察せずしてかなはぬことなりと云意なり、將たるものは、軍の勝負を我が大切の役目と思ふべきことゆへ、至任と云なり、

夫地形者兵之助也、料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也、

此篇前に六地を説き、次に六敗を説く、六地は地の形にて六敗は將の道を失へることを説けるを承けて、是より末は、重きところ専ら將の道にあることを明と云意なり、上將と云は、春秋の時は、大國の諸侯は、三軍の軍役を勤る時、上軍、中軍、下軍とわけて、上軍は先手、中軍は旗本、下軍は後陣なり、その上軍の將を上將と云、されどもこゝにては上軍の將のことにはなく、總大將は諸將の上に位するゆへ、上將と云へるなり、總じて地形を知ること、後漢の馬援が光武の御前にて、米を以て山谷の形として、敵地の要害より道路の往來、合戦の方術まで、手にとる様に申せし如くならば、誠に戦には勝利あるべきことの様なるも、地形は知り難からず、合戦の道變に應ずるを難とす、秦の穆公孟明視を大將にして、晋の國を撃しめたる時、孟明かならず殺と云處にて敗れんと、蹇叔前方につもりしが、案の如くなりける、又韓信は陳餘を伐つ時、左軍が計にてかならず井陘と云山口を守らんとはかり、又仲達は蜀の姜維が糧を運ぶべき道を知て、兼て伏兵を置きて、かてを奪たる類、是皆地形の上にて、宜にかなひ變に應ずる方略を知り、敵をはかること鏡に向ふが如にて、たゞ平地は騎馬の戦に宜しく、險阻は歩兵に宜く、此の如き地にては何とす、彼の如き地にては如何様にする、傳授おしかた

さん爲に、こゝに語の端を更め、夫と云字にて發語して云なり、地形者兵之助也とは、この篇は地形の篇にて、前に六地のことを説きたれども、地形の利を得れば、必勝つとこゝろうべからず、地形の利は合戦の助けになるまでのことなりと云意なり、助けと云時は手つだひまでのことにて、主とする所にてはなきなり、料敵と云は敵の虚實強弱を料り察することなり、制勝とは敵に勝つるの道を制作して、方略をなすことなり、險阨遠近とは、險はさかしくとよみてせつしよなり、阨はせばしとよみて地形のせばく迫りたる處なり、遠近は遠きと近きとなり、押前より陣取り防戦の場所、いつくは節所なり、こゝは難所なり、遠近はなに程ありとはかりつるを、計險阨遠近と云なり、上將之道也とは、總大將の道なりと云ことなり、されば地の形は合戦の助けとなるまでのことにて、其地の形の上につきて、敵の強弱虚實、并に敵はいかやうに働くべきと云ことを料り察して、敵に勝つるの方略を、わが方寸の胸中より作り出し、土地の節所、難所、道路の遠近を目算して、兵糧より兵具人馬の用度まで、一つものこるることなきを、總大將の道とするなり

を覺えたる如のことには非ず、是孫子が貴ぶところにて、地形ばかりに拘るべきに非るゆへ、地形者兵之助也と、上將之道をならべ舉て云へるなり、故に地形を知ても用に立ると立てぬとは、大將の智不智によると知るべし、

知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗、

此と指したるは上の文に云へる、地形者兵之助と、上將之道との二つなり、知此而用戰とはこの道理を明かに知て、而もよく是を合戦の上にて用ひて用ひて用ひる人は、必勝利を得ると云ことなり、たとひ此道理を知りたればとて、戦の上によく取り用ひざれば、必勝と云ひ難し、知て用るをよしとすべしと云意なり、不知此而用戰者必敗と云は、此道理を知らず、なをさら戦の上にて用ることのならぬ人は、必敗北すると云ことなり、知ると云を杜牧が注には、地形を知ることなりと云へり、梅堯臣、張預が注には、地形と上將之道とを知るとなりと云へり、杜牧が注は用ゆべからず、

故戰道必勝、主曰無戰必戰、可也、戰道不勝、主曰必戰無戰可也、

是は上の六地のことを説ける末にも、六敗のことを説ける末にも、皆將の至任也と云へるを承けて、合戦の道は將たるもの、わが至極の任なりと身にひきうけて勤むべきことを云へり、戦道必勝とは、合戦の道理に於て、必勝すべき道理あらばと云ことなり、主曰無戦必戦可也とは、主は主君なり、主君より戦を抑へ玉ふとも、將たるもの、我が心に戦は、決して勝利あらんと思ひはまりたらば、君命に違ふことを願ひみず、必戦てよきと云意なり、戦道不勝とは、合戦の道理に於て、必勝つまじき道理ならばと云意なり、主曰必戦無戦可也とは、主君より戦へとの玉ふとも、將たるもの我が心に戦てあしきと思はり、君命に違ふことを願ひみず、必戦はすしてよきと云意なり、畢竟君命に違ふことを將の職分とするには非ず、將は大切の役なれば、身を棄て、思ひはまり勤むべしと云意なり、故に黄石公も、出軍行師將自專と云へ

身一己に立ち反りたる上にて云へば、罪過を逃れて、身を全くする了備もなしと云はどなる詞なり、惟民是保而利於主とは、たゞ餘念なく一すぢに、民を安んじそこなはぬ様にして、主君の爲めを第一にすること、忠義ある將の心なりと云意なり、民をも思ひ君をも思て、心君と民と兩方へ跨がり、一すぢになき様なれども、民を安んずること君たる職分の第一にて、一切の事とくと詮議しつむる時は、民を安んずるより外はなし、合戦をするも民を安んずべきためなり、君の爲になること是にすぎたることなし、民を安んせねば終には國亡ぶ、民をやすんずれば國おこり君榮ゆるなり、されば民をやすんずる所、すなはち餘念なく一すぢに、君の爲をするると云ものなり、餘念なく一すぢに君の爲をするものは、民を安ずるを極意とす、故に孫子がかく云へるなり、然るに後の世に道理を明かにせざる人君は、民とわれとを二つに思て、民を安んせんとする將をば、己が人に思ひ付かれん爲に、主君を次にして民の最負をするると云て、却て是を罪に行ふ、又道理を明かにせざる將は、民と君とを二つにして、君のためと云ては民をそこなひ傷ること

り、既に人數を押し出して後は、將の心まゝにすべしと云ことなり、昔王彰の將烏桓と云えびすを攻めし時、深く敵地に攻入るべからずとある命を受けたりけれども、勝利のある所、何ぞ節度に従はんやと云て、深く敵地に攻入り、一日一夜烏桓と戦て大に收りしことあり、是君命を用ひずして戦ひし例證なり、又趙充國勅命をうけて、抱罕の羌を撃ちし時、充國合戦をやめ、軍兵に田を耕させ、位詰にして勝けり、是君命を用ひずして戦はざりし例證なり、

故進不求名、退不避罪、惟民是保而利於主、國之寶也、

是上の文をうけて忠義ある將のことを云へり、進不求名とは、武功を立て、名高く世に呼ばれんことを求めぬと云意なり、退不避罪とは、君命にたがひて、我が罪科になることを避逃れぬと云意なり、進と退とは詞なり、軍のかけ引には非ず、求名はやりたる了備なり、避罪は引込たる思案なり、故にかた／＼には進むと云ひ、退くと云たるなり、世間へおし出したる上にて云へば、武功を立て名を求むる料簡もなく、

を管せず、孫子をかゝる世に生れさせたらば、却て不忠の名を得んと思はる、察すべきことなり、國之寶也とは、右の如く名聞の心もなく、身を大事がる心もなく、唯一すぢに主君のために打はまりて忠を盡くす將は、國の寶と云ものなりと云意なり、まことに明君賢王は、寶を以て寶とせず、人を以て寶とす、寶を寶とするは、匹夫の事にて富商のわざなり、天子諸侯の上にては、寶を持ちたればとて國廣くもならず、鄰國も畏もせず、兵威も強くもならず、一毫も國に益あることはなし、故に昔梁の惠王と齊の威王と寶をくらべたりける時、惠王は珠玉の珍しきを持ちたることを、自贊ありければ、威王の曰く、某が臣に檀子と云ものあり、南城を守らしめたりしかば、楚國より手をさすことならず、泗水の上の十二諸侯皆齊の國へ出仕す、勝子と云ものあり、高唐城を守らしめければ、趙の國より國界の河にて漁をたもせず、黔夫と云ものあり、徐州を守らしめければ、燕の國趙の國の者ども七千餘家徐州へ徙る、種首と云ものあり、國中の盜賊のことを命じければ、道遺ちたるを拾はせと云へり、梁の惠王大に慙て、一言の答なかりしなり、又

秦の國より楚國へ使者來て、楚國の寶物を所望して見物せんとす、楚國の大夫昭奚恤、その使者に向て曰く、楚國の寶物は賢臣なり、百姓を理めて國を富ますことは令尹子西なり、幣帛をさへげて鄰國の交りを結ぶは子方なり、國の境を守て、鄰國より手もさへぬは子高なり、伯王の道を胸にをさめ、古今治亂の事に涉獵するは、この昭奚恤なりと對へたり、大學にも勇犯が語を引て、仁人は寶なることを云へり、こゝに至ては兵家儒家その理二途なし、諸家の注に、進退をかけ引のことに云へり、泥みたる説なり、引て戦はずして武名を得ることもあり、強ちにかゝりてばかり武名を取るべきに非ず、君より進めと命じ玉ふ時退けば、退くを以て罪を得、君より退けと命じ玉ふ時進む時は、進むを以て罪を得るなれば、退くに限て罪を免るゝことに非ず、故に進退の二字事の進退には非ず、廣く世間へおし出したる上にて云ことを進むと云、身一己の上へたかへる處を退くと云と心得べし、夫地形者と云より此段までは、前に將之至任なりと云へるを承けて、合戦をば大將の身に引うけて、己れが任とすべきことを云へり、

視卒如嬰兒、故可與之赴深溪、視卒如愛子、故可與之俱死、

是より下の二條は、士卒を治る道を云へり、卒は士卒なり、嬰兒は三歳已下のみどり子なり、愛子は寵愛の子なり、視卒如嬰兒とは、士卒を三歳已下のみどり子の如く見ると云ことなり、視卒如愛子とは、士卒をわが寵愛する子の如に見ると云ことなり、士卒をみどり子の如に思ふと云は、隨分に心を碎き、こゝろをすみ／＼までへ付けて介抱することなり、三歳より内の子は物をもとくと云ことならねば、萬事萬端みなわきより心をつけて、其寒きかあつきか、うえたるか食過ぎたるかと云ことを察せずして叶はず、又心に物のわきまへなければ、わきより考へて抑へ控へをせねばならぬものなり、士卒もその如し、士卒と上とは貴賤の位へたゞりぬれば、何事も思ふまゝに云ことならず、故に其衣食萬端隨分こゝろを付けて、不自由になき様にすべきなり、又位卑ければ了簡全體へわたらず、たとひ智慧ある人なりとも、士卒の位になりて居れば、おのづから其智はたらかず、司

ること小きゆへ、全體の上を知るべき様なきこと、嬰兒の愚かなるが如し、故に上たる人より、隨分に抑へ控へをせねば叶はぬなり、是を視卒如嬰兒と云なり、士卒をわが寵愛の子の如に見ると云は、愛子のすることとは、たとひ惡しきことをなしても、惡しと思ふ者はなきものなり、是眞實に愛する故なり、士卒をもその如く、眞實に愛する時は、罪咎を犯すも皆其智の足らぬ故なりと思ひ、孔明が涕を流して刑を行ひたる如くなるべし、是を視卒如愛子と云なり、可與之赴深溪とは、之とは士卒を云、右の如く士卒をあらはれむ時は、千尋に深き溪の底へ飛入とも、彼も元來わが恩に感じて居るゆへ、少しも斟酌することなしと云意なり、可與之俱死と云も、之とは士卒なり、右の如くに深く愛すれば、士卒も其恩に感じて、死するをも少しも厭はぬものなりと云意なり、如嬰兒如愛子とは、文を互にして同じことなり、可與之赴深溪、可與之俱死もまた詞は異なれども義同じ、吳起魏の將となりて、士卒の内にて、すぐれて賤きものと同じやうなる衣服をき、同じやうなる食物を食し、夜臥にもしきものもしかず、行くにも馬車にもものらず、

自身士卒と同じやうなる腰兵糧をさげ、士卒の辛勞することあれば、われも同く其事をしたり、士卒に難を煩ふ者ありければ、吳起自身に其難の膿を口にて吮ひ出してとらせけり、其難を煩ひたる士卒の母、故郷に傳へ聞き、なげき悲むこと類なし、人何故ぞと問へば、母の曰く、彼のものが父某が夫なるものも、先年難をわづらひて膿出かねたるを、大將の自身膿を吮てとらせ玉へれば、父の如くうちじにせんと思て、彼が難をすひ玉へば、父の如くうちじにせんと思て、大將の御慈悲にて夫の死するのみならず、子まで死なんと悲しきなりと答へけることあり、又後漢の段熲破羌將軍の官となり、邊塞にありけるが、士卒の劍を蒙るものをば、自身見舞て手づから其手疵を襲み、膏藥など付けてとらせけり、十餘年軍中にありしかども、一目も褥をしきて臥すことなく、諸將卒士と同く勞苦して、少しも差別なかりければ、士卒みな合戦に命を惜まず、是により大功を立てたることあり、このるい後世の手本となるべし、

厚而不能使、愛而不能令、亂而

不能治譬若驕子不可用也

是は上に士卒には恩愛を施すこと第一なることを説けるを承けて、恩ありて法令なき時は、却て害あることを云へり、厚くするとはねんごろにすることとなり、不能使とは下知し使ふことのならぬことなり、士卒をねんごろに養ふばかりにて、屹と下知を加へ使ふことのならぬを、厚而不能使と云なり、愛するとは不便に思ひ憐むことなり、不能令とは、令は教令にて軍の法式を教へしいることなり、士卒に憐を加へ不便に思ひたるばかりにて、軍の法式を教へ、懸引の道をよくしいることならぬを、愛而不能令と云なり、亂而不能治とは、右の如く士卒をねんごろにし養ひ、不便を加へ憐みたるばかりにて、作法亂れども是を仕置きすることならぬを云なり、譬若驕子不可用也とは、驕子はあまへおごりたる子なり、人の親の子を愛するは天性の道なれども、愛するばかりにて仕つけをせねば、親の恩にあまへ、心驕りて親の命を用ひず、士卒もその如し、厚くして使はず、愛して令せず、亂れたるをも治めざる時は、士卒上の

恩にあまへて、おごり高ぶりて下知を受けず、法を守らず、何の用にもたず、是を不可用也と云なり、故に昔馬謖、孔明が節度に背きて敗軍しければ、孔明涙を流して誅戮し、曹操は田畠を損したらんものをば誅すべきと、法を立をきたるゆへ、自分の馬はなれて、田畠を踏みければ、自分の髪を切て刑罰におてける類、右の良將皆法令を嚴にせずと云ことなし、よく思ふべきことなり、張昭は良將撫御、畏愛俱行と云へり、良き大將の士卒を撫御する道は、畏と愛との二つを並べ行ひて、一つもかけぬやうにすることなり、たとへば春と秋との如し、春ありて秋なければ萬物實のらず、秋ありて春なければ萬物生せず、仁ありて義なく、恩ありて法なければ、春ありて秋なきが如し、義ありて仁なく法ありて恩なければ、秋ありて春なきが如し、など其一つをもかくべけんや、されども前の行軍篇に説ける如く、恩は先にして法は後なり、恩は主にして法は助けなり、天地の道も春を先きにして秋を後にし、聖人の道も仁を主にして義を助けとす、萬事皆かくの如し、道理は符節を合せたるが如くなり、故に此段にも法なき時は士卒の用にたぬ

ことを、驕子にたとへて云へるは、親の子を思ふ如く士卒を愛すること、根本なるが故なりと知べし、

知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也、知敵之可擊、而不知吾卒之不可以擊、勝之半也、知敵之可擊、知吾卒之可以擊、以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也、

是より下は一篇の總結なり、右篇の文六地は地形を云ひ、六敗は吾が軍のととのぬと、敵の虚實を料らぬことを云たるを承けて、こゝには吾と敵と地形との三つをかね明かにせざれば、全き勝を得がたきことを云へり、吾卒とは味方の士卒なり、可以擊とは味方の士卒の恩を感じて、心專に法を守り、分數形名奇正分合の術をよく練熟し、兵糧豊かに、安佚にして力足りたる、是を以て敵をうたば、十倍の勢ひあるべき

ことを云なり、いまだ如此あらざるを吾卒之不可、以撃と云なり、敵之可撃とは敵に虚なる所ありて、撃たば勝つべきを云、敵之不可撃とは、敵に虚なる所なきまなくて、撃つても勝つまじきを云、地形之不可、以撃とは、右の六地の法を以て察するに、戦ふまじき地形なるを云、勝之半也とは、いまだ十分に全く勝つことを得がたく、勝つべきところ半分、負くべき所半分なることを云へり、されば味方の士卒の敵に勝つべきと云所を知りたるばかりにて、敵の方にも虚なる所なきまなくて、撃つても勝つまじき所あることを知らずして戦ふ時は、全き勝ちを得がたし、敵の方に虚なる所なきまありて、撃たば勝つべき所あることをば知れども、味方の士卒に、いまだたしかに、敵にまじまじき所あることも見えぬに戦ふ時は、全き勝を得がたし、又敵にも撃つべき虚あり、味方の士卒もたしかに敵に負くまじき所ありて、是を知りて戦ふとも、地形の上に於て戦ふまじき道理あることを知らざる時は、是又全き勝を得がたし、敵と味方と地形と三の上を明かに知て、三つともに戦ふべきに極まりて戦ふ時は、全き勝を得ると云意なり、昔七國の時齊楚燕韓

魏趙の六國、精銳の兵を以て秦の國と戦ひしは、吾が卒の以て撃つべきことを知て、敵の撃つべからざることを知らざるゆへ、勝利なかりき、陳涉が秦を攻めたりしは、敵に撃つべき所あることを知て、吾が卒の以て撃つべからざることを知らざるゆへ、是又勝利なかりき、曹操が赤壁の敗れは、吾は八十萬敵は三萬、對揚すまじき勢なれば、吾卒之可以撃敵之可撃をば知たれども、陸地を離れてしなれぬ舟戦をしたるは、地形之不可以戰を知らぬゆへ、遂に勝利を得ざりしなり、高祖の韓信が言を以て、楚漢の強弱を知り、敖倉の粟に據て天下を爭ひ玉ひしは、敵をも知り吾をも知り、地形をも知り玉ふゆへ、五年の内に帝業を成就し玉へるなり、孫子が言まことに萬世の龜鑑に非ずや、

故知兵者動而不迷、舉而不窮

是は右の結語なり、知兵者とは、敵をも味方をも、地形をも知たる人を云なり、動とはうごき働くことなり、舉とは兵を舉げ合戦をおこすことなり、知兵者は、明かに敵味方地形までに通達して、無理なる戦を

せざるゆへ、動き働くこと妄りにせざれば、迷ひ誤まることなく、兵を舉ること輕くしく、率爾なることなければ、窮りゆきつまることなきと云意なり、迷と云は見そことひ、勝つまじきを勝つべきと取ちがゆることなり、窮とはひしとゆきつまりて計の出ぬことなり、此二つの失は、知兵者にはなきことなりと云意なり、一本には不迷と云を不困に作り、不窮と云を不頓に作る、困ますと云は窮せずと云と同じ意なり、頓せずと云はくるしまぬ意なり、是にても通ずるなり、

故曰知彼知己勝乃不殆、知天知地勝乃可全

此四句は古語なり、孫子古語を引て一篇を結びたるゆへ、故曰と云たるなり、彼とは敵なり、己とは味方なり、勝乃不殆とは、あやうき勝ちなく勝ちのたしかなることなり、知天知地とは、天の時をも知り、地の利をも知ることなり、勝乃可全とは、十分の勝をするることなり、この四句は文を互にしたる語にて、知彼知己知天知地時は、勝乃不殆、勝乃可全と云こ

とをかく云へり、講義には、この文法に暗くして、知彼知己はいまだ一偏を知たるものゆへ、殆きことなきと云までのことなり、天地まで知たる時は、萬全の勝を得ると云たるは誤れり、勝の不殆と云は、あぶなき勝ちなしと云ことにて、全き勝ちと云と同じことなり、又この一篇は地形のことばかりなるに、こ

には知天と云ことあり、是は五事の内に、道天地將法とありて、天と地との二つ何れも知らずして叶はぬことなるゆへかく云へり、されども天地の二つの内にて、地形尤肝要なるゆへ、一篇の内には地形のことばかり云へり、孟子の語にも天時不如地利、地利不如人和と云へり、まことに千萬世兵家の至理と云つべし、集注の古本には、知天知地勝乃可全と云を、知天知地勝乃不窮に作る、梅堯臣、王皙、張預皆是に従ふ、杜佑以下の諸説は、今の本に同じ、何れも道理には異なることなし、

九地第十一

九地とは九つの地なり、前の地形篇には地の形

に六つあることを云へり、此篇は地の勢ひに九つあることを説くゆへ、九地と名づく、

孫子曰用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有圍地、有死地

是は九地の目録なり、用兵之法とは、軍の法なり、軍の法にこの九つの地あり、散はちるなり、散地とは士卒の心ちりわかれて専一ならぬ地なり、輕はかるきなり、輕地とは士卒のはまり輕き地なり、争はあらそふなり、争地とは敵よりも取んとし、味方よりも取んとして互に争ふ地なり、交はまじはるなり、交るとはいれちかふ意なり、敵よりも往來し、味方よりも往來し、敵味方いれまじはる地なり、衢はちまたとよむ、ちまたとは道のちまたなり、衢地とは諸國へ通ずる地なり、四方よりの道のちまたの地と云意なり、重はおもきなり、重地とは士卒のはまり重き地なり、圯はやぶるゝとよむ、水などの出て、押破りたる處を云、圯地は險阻にてありきにくき地なり、水などの押

破りたる地は、高下ありてありき難きものなればなり、圍はかこむとよむ、圍地は袋の口をしめたるやうなる地を云、まわりを圍まれたる意なり、死地とは進むこともならず退くこともならず必死の地なり、くはしきことは尙下に見ゆ、

諸侯自戰其地爲散地、

是より末は九地のありさまを云へり、是其第一なり、諸侯自戰其地とは、諸侯の自分の持國にて戰ふことなり、是を散地と云は、士卒の妻子家居近く、所の案内をもよく知り、吾が家への通路も自由なるゆへ、心にひかる、所ありて、合戰の方へ其心が專一に赴かぬなれば、心のちり分るゝ地と云意にて、散地と云なり、

入人之地而不深者爲輕地、

是九地の第二なり、入之地とは敵地なり、敵地に攻め入ても深く攻め入らず、いまだ淺き時は士卒の氣もいまだ強く、方も草臥れぬ得あれども、引くことなり、やすく自由なるゆへ、士卒の心のはまりかろきなり、

水とは山と川なり、阨口はせばきくちなり、險固は險阻にて堅固なる意なり、山道にても、又海の舟つき、大河の渡しは、或は四方を險山大河にて塞ぎて、一處通路ある様なるを、山水のせばき口と云、是險阻にて要害堅固にこゝを守れば勝利ある地なり、何氏が注には便利之地と云、勝手てつがひのよき地と云意なり、凡是等の類皆敵味方の争てはしがかる地なるゆへ、争地と云べし、

我可以往彼可以來者爲交地、

是九地の第四なり、我可以往とは此方よりもゆかるゝなり、彼可以來とは敵方よりも來らるゝなり、敵味方ともに往來して、ゆきちがふ場所を交地と云、敵味方いれまじはる地と云意なり、前の地形篇の六地の内の通形の地と似たることなり、されども地形篇の六地は、地形にて云たるものなるゆへ、平地つゞきて道に難所もなく、山川もなく、敵よりも味方よりも、通路自由なる地を通形と云なり、此九地篇は地の形に非ず、地の勢にて云たるものなり、平原にても、山川ありても、難所にて、道いくすぢもありて其道を

故に曹操は輕返也と注し、何氏李筌は皆輕於退と注せり、そののみならず一切の事皆かるゝやすき意あり、故に輕地と云なり、

我得則利敵得亦利者爲爭地、

是九地の第三なり、我其地を取り得る時は我に勝利あり、敵其地を取り得る時は敵に勝利ある地は、敵味方ともに是を取得んと争ふゆへ、争地と云なり、曹操の注には、可以少勝衆弱擊強と云へり、少勢にて多勢に勝べく、弱兵にて強敵に勝つべき地を云と云意なり、李筌は扼喉守險地と注せり、喉を扼るとは人の身の内にては喉ほど肝要なる處はなし、柔かにして骨もなく、力を出されぬ處にて、呼吸の通ふ道なれば至て肝要なる處なり、故に強力なる人なりとも喉をしめられては動くことならず、それを喻へにしてそこに人数を置く時は、殊の外に敵の難儀する場所を云、險を守る時は險阻の地を守ることなり、一騎打ちなどのせつしよは人を一人置ても大軍をも防がるゝなり、古語にも一夫當關萬夫莫進と云へる類なり、杜佑が注には、山水阨口有險固之利と云へり、山

とめにき地なれば、敵味方入れまじはるなり、又敵の出城もあり、味方の出城もありて、兩方より詰控の手あてをする手つかひよき地、又敵の味方をするものもあり、味方の味方をするものもありて、兩方よりの通路互にとめにきなり、此類みな地の勢ひの上にて云へる交地なり、曹操の注には、道正相交錯也と云へり、道兩方より入れちがふことなり、交錯はいれまじはることなり、杜佑が注には有數道交相と云へり、道いくすぢもあることを數道ありと云、道のいれちがふを交相すると云なり、何れも其義同じ、

諸侯之地三屬先至而得天下之衆者爲衢地、

是九地の第五なり、諸侯之地三屬とは、諸侯は敵にてもなく味方にてもなく鄰國の諸侯なり、三屬は三方へつゞくなり、屬は連屬にてつゞくことなり、先至而得天下之衆とは、先きにかくの如き地に至れば、敵にても味方にても、さきに往きたる方へ右の諸侯つき従ふゆへ、それより勢ひ強くなり、天下も歸服するやうになりゆくことを云なり、天下之衆とは、天下

の人民なり、得るとはわが手に入ることなり、天下の人民わが手に入るとは、天下の歸服することなり、されば諸侯の地三方へつゞきて、諸方の通路よき地は、先きに其場へゆきたるものに、彼三方の諸侯歸服して力を合はするゆへ、遂に天下も我に歸服する勢出來るなり、かくの如き地は、たとへば四辻などの諸方へ通路よきが如し、故に衢地と云、衢はちまたとよみて四辻のことなり、李筌施子美は三屬と云を、敵と我と外に鄰國の諸侯一人、この三方へつゞく意なりと云へり、されども天下の歸服すべき地と云時は、外の諸侯の國三面につゞくと云方宜しかるべし、かくの如き地も要害よく、諸方の津にて諸侯へ通路よき處を云べし、

入人之地深、背城邑多者爲重地、

是九地の第六なり、入人之地深とは、人之地は敵地なり、敵地へ深く攻め入ることなり、背城邑多とは城邑は敵の城邑なり、城はしろなり、邑はさとともよみむらともよむ、城なくとも郡代にても差置たる所

を云、敵地へ深く攻入り、敵の城などをいくつも越え行きて、我が背の方に敵城多くあることを背城邑多と云、かくの如き地を重地と云ことは、士卒の心のはまり重く、一切の事いきほひ重く大切なる意にて重き地と云なり、曹操は難返之地と注せり、敵地へ深く入て後に敵の城いくつもあるゆへ、本國へかへること容易になり難きなり、李筌は堅志也と注せり、本國へかへること容易にならぬと士卒思へば、志堅固に心のはまり重きなり、梅堯臣は重難之地と注せり、諸事重く大切に難儀なる意なり、王哲は事勢重也と注せり、事の勢ひ一切みな重く大切なるなり、

行山林險阻沮澤凡難行之道者爲圯地、

是九地の第七なり、山林はやまはやしなり、險阻は險難せつしよなり、沮澤は沮は水つきの地、澤はさわとよみて、湖海のるいなり、凡難行之道とは、右の山林險阻沮澤に限らず、何にても總じてありきにくき道と云意なり、圯地とは元來大水に押し破られたる地

のことなり、破れ崩れたる道はありきにくきもの故、それを喻へにして總じて人數を押しがたき地を云なり、險難せつしよと云時は、前に云へる争地に似たることなれども、其内に争地は要害よく、其處を取れば敵より攻ることなりにくき地を云なり、この圯地は人數を押し難き處を主として云たるものなり、要害の堅固なるとはなくて、唯足場のあしき地なり、山林險阻の地にて、人數を止め置き陣を取るべき様な場處はなく、道の體かたくづれになりてありきにくく、又は卑濕の地にて水などつく處、湖海のほとり、濱邊の沙場などのやうなる處を云べし、故に曹操の注にも、何氏が注にも少固之地也と云へり、要害堅固に固められぬ所なり、前の行軍篇に云へる、絶澗天井天牢天羅天陷天隙等の地、みな此圯地なるべし、彼の文をも合せ考ふべし、

所由入者隘、所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者爲圍地、

是九地の第八なり、所由入者隘とは入り口のせばきを云、所從歸者迂とは、歸る路のめぐりて遠きを云、

彼寡可以擊吾之衆者とは、彼は敵なり、敵少勢にて味方の多勢を撃つべきを云、圍地とは山にても川にても、四方を圍み繞りてある地なり、其内へ入るには入口せばく、それより本國へ歸るには、山川をめぐりまがりて道はるかなり、されば進むにも退くにも、其地へ入るも其地より出るも、艱難なる地なり、如此なる地にては、敵の小勢にて味方の大勢を撃て勝つべき地なり、この地は地形篇の險形に似たるものなり、險形の地はまわりの山近く峻しく、其隘口へ入たるもの、手前の要害になるなり、又この圍地はまわりにある山にても川にても、遠くめぐりてあるゆへ、此方へ取て味方の利となし難し、敵の方のたよるとなるゆへ、敵より圍まれたる意にて圍地と云なり、故に地形篇の險形とはうらおもての相違なり、總體地形篇は地形を小さく見たる上にて云へるなり、この九地篇は地を小さく見たるものなるゆへ地の形なり、九地篇は大きな上にて云ゆへ地の勢ひなり、其上九地篇は散地を除きて外は、多くは客戰のこと、心得べし、

疾戰則存、不疾戰則亡者爲死地、

是は九地の第九なり、疾戰則存とは、火急に戰へば命を全くするなり、不疾戰則亡とは手のひなることなれば滅亡するなり、死地とは必死の地なり、曹操の注に、前有高山、後有大水、進則不得、退則有碍と云へり、高山大河を前後にうけて、先きへすむこともならず、あとへ引くこともならぬ地なれば、至極の惡地にて、必死すべき處なり、かくの如き地にては、身命をなげうちて火急に戰ふ時は、却て士卒の心一致するゆへ、萬死を出で、一生を得るなり、擬議に及ぶ時は、其内に士卒の氣もくじけ兵糧も盡て、滅亡疑ひなきなり、李衛公是を論じて曰く、或有進軍行師、不因鄉導、陷於危敗、爲敵所制、左谷右山、東馬懸車之、逕前窮絶、雁行魚貫之、岩兵陣未整、而強敵忽臨、進無所息、退無所固、求戰不得、自守莫安、駐則日月稽留、動則首尾受敵、野無水草、軍乏資糧、馬困人疲、智窮力極、一人守險、萬夫莫向、如彼要害、敵先據之、如此之利、我已失守、縱有驍兵利器、亦何以施其用、

乎、若此死地、疾戰則存、不疾戰則亡、當須上下同心、併氣一力、抽腸瀝血、一死於前、因敗爲功、轉禍爲福、と云へり、進軍行師とは、人數を押し行くことなり、不因鄉導、陷於危敗、爲敵所制とは、鄉導は案内者なり、危敗はあやうくやぶるなり、人數を押し行く時案内者を用ひざれば、危く敗軍すべき地へおちいり、敵に取切らるることなり、左谷右山は、左右に高山又は大きな谷あることなり、東馬懸車之逕とは馬車のとをらぬ山中の細道を云、東馬は馬をつかぬるとよみて、山中の細道にては馬の足をくづりて、足をひろく歩ませぬゆへ、東馬と云、懸車は車をかくるとよみて、車のとをらぬ路ゆへ、車をば繩を付け切岸よりつるして下へさぐるなり、かくの如く左右に高山大谷ありて、車馬のとをらぬ細道と云意なり、前窮絶は、前きわまり後たゆるるとよみて、前後に行べき所なきことなり、雁行魚貫之とは、雁行は雁のつらなり、魚貫とは魚を串に貫ぬきたる體なり、雁の行列はすぢかへなるものなり、直にゆかれぬ道ゆへ士卒横すぢかへにつらなりて進むなり、又魚を串に貫きたる如く、一處へこぞりて山などを上るてい

なり、前後たえはなれて行くべき處なく、山のそわなごを横すぢかへに雁の連なる如くに上り、又は一處へこぞりて、魚を串にさしたる如になりてのぼる岩道なり、兵陣未整而強敵忽臨とは、右の如なる場所にて、わが備をも立固めぬ處へ、忽に強敵高みより見おろすなり、進無所息、退無所固とは、先へ進ても休息すべき處はなく、あとへ引ても要害を固むべき場所はなきなり、求戰不得、自守莫安とは、戰て勝負を決せんとすれば敵山上にありて戰ふべき様なく、されば自我を守り固めんとすれば、たしかに守り固めて安堵すべき様なし、駐則日月稽留とは、この處に留まらんとすれば前後左右皆敵なるゆへ、出つべき時節をしらず、月日久しく留まらずして叶はぬなり、動則首尾受敵とは、少し所をはなれて働くとすれば、前後に敵を受けるなり、野無水草とは、野には馬に飼ふべき水もなく、草もなく、軍乏資糧とは、軍中にも兵具兵糧乏くなるなり、馬困人疲とは、人馬ともにつかれはて、智窮力極とは、智慧も勇力もつきはてたるなり、一人守險、萬夫莫向とは、かくの如き地は一人險を守り要害を取切れば、萬人なりともこへ向ふこと

ならぬ地なりと云ことなり、如彼要害敵先據之とは、右の如なる場所を敵にとられたるなり、如此之利我已失守とは、右の如なる場所を守らば利あるべきを味方は是を失ふなり、縱有驍兵利器、亦何以施其用乎とは、驍兵は勇士なり、利器は弩弓佛狼機のるいなり、如此なる時はたとひ勇力武剛の士ありても、弩弓佛狼機の如きものありても、用ひて用に立つべき様なし、若此死地疾戰則存、不疾戰則亡とは、右の如なる地を死地と云、急に戰へば命たすかり、手のひなれば滅亡するなり、當須上下同心、併氣一力とは、如此なる場に於ては、上下心を一途にして、餘念なく勇氣をはげまし精力を合せよとなり、抽腸瀝血一死於前とは、わが腸をぬき出し、わが血をしぼるほどに身をうちはめ、なまほねを碎く程に働き、味方のこらす枕を並べ、目の前にて一度に死せんと心がけよとなり、因敗爲功、轉禍爲福とは、右の如くせば敗軍をたてなほして大功を成就し、禍を轉化して福となすこともあるべしと云意なり、詞長けれども、よく此本文の意を説ける論ゆへこゝにのするなり、

とは、敵の意つかぬ所より切て出で、油断したる所へ
とりかけよとなり、

輕地則無止

輕地は前に云へる如く敵地へ攻入ることいまだ淺きを云、敵地へ攻入てもいまだ深くは攻入らざる時、士卒の心堅固ならずはまり薄きゆへ、一處に踏留るべからずと云ことなり、引くこと易きことを士卒皆知て居るゆへ、一處に踏留りて居る時は、心にたゆみ付て勇氣ぬくるものなり、速かに進むを以て利とすと梅堯臣云へり、劉寅は小利を貪て一處に留まることなかれと云へり、されども是皆敵地へ深く攻入られば攻入らんと、元より覺悟をきはめたる軍のことなり、元來敵と國境を争て、戦ふ上のことを云たるに非ずと心得べし、張預何氏が注に載せたる吳王孫武が問答、吳王曰、士卒思還難進易退、未背險阻三軍恐悞、則如之何、この問の意は敵地へ攻入ることいまだ淺くて、士卒の心にはまりつかず、本國へ還んことを思ふにより、進むことをいやがり退くことを好む、いまだ敵地の險阻を越て深く攻入らねば、後に險阻な

く引けば引るゆへ、三軍の心專一ならぬ所より、敵を恐るゝ心ありて合戦に利を得がたし、如此なるをば如何様にせんと言意なり、武曰、軍在輕地士卒未專、以入爲務、無以戰爲故、無近其名城、無由其通路、設疑伴惑示若將去、乃選精騎衝敵先入掠其六畜、三軍見得進乃不悞、分吾良卒密有所伏、敵人若來擊之勿疑、若其不至捨之而去、これ答の辭なり、軍在輕地士卒未專とは、軍兵敵地へいまだ深く入らざる時は、士卒の心專一ならぬなり、以入爲務無以戰爲とは、かくの如く士卒の心いまだ專一ならぬに戦ふ時は勝利を得がたき故、たゞひたもの敵地に押入ることを第一の務めとすべし、合戦を以て勝利を得んとすることなかれとなり、故無近其名城とは、名城は要害のよき城なり、敵の城の要害堅固なるあらんに、それへは必近するべからず、近よりては必取合ひ始まり、取合ひ始りても名城なればたやすく落ちず、士卒の心專一ならぬに、敵城落ちぬ時は、士卒の心いよく引支度になるゆへ、名城へ近よらずならぬ様にすべしとなり、無由其通路とは通路は往還の通路にて、敵より人数を出すべき道を云、敵よ

り人数を出すべき路へかゝる時は、敵味方出合ふによりて、必合戦になるなり、輕地にては合戦を嫌ふゆへ如此なり、設疑伴惑示若將去とは、敵より疑ふやうなることをこしらゆるを設疑と云、伴惑とは、道にまよひて進むことならぬやうに伴はるなり、是は路に迷て深く攻入ることならず、引去るべき様にすることを見せかくることなり、乃選精騎衝敵先入とは、精騎は騎馬の達者なり、騎馬の達者を選ぶは敵より人数を出して、はらはぬ前に深く入るべき爲なり、衝敵とは敵は箸のやうなるものなり、兩方にひばを付け中を口にくわへ、ひばを後へまわし項にて結ぶゆへ衝敵と云、士卒にもものを云はせまじき爲なり、枚をふくむ時は馬の舌をも布にて裹むなり、人馬に聲をたてさせぬは、敵に知らせまじき爲なり、先入とは味方の諸勢に先立ちて、騎馬の達者に枚を嚼ませて先きへ遣すなり、掠其六畜とは、牛馬犬羊雞豕の六畜と云、牛はうし馬はむま犬はいぬ羊はひつじ雞はにはとり豕はぶた、牛馬は物を負はせて用にたつものなり、犬羊雞豕は食物になるなり、掠るとは民家にある六畜を亂妨するなり、是を亂妨して

士卒に與ふれば、士卒の心面白くなり、與に乗じて深く入る意あり、少しのことにても士卒の心を轉するなり、三軍見得進乃不悞とは三軍の士卒に、なにゝても所得のあることを見すれば、進みて深く入ることとを悞れぬと云意なり、分吾良卒密有所伏とは、良卒とは物なれたる勇士なり、物なれたる勇士を手分けをして遣し、伏兵にして置くと云意なり、總軍はひたもの深く攻め入て、ひそかに伏兵をかくし置て敵を待つなり、敵人若來、擊之勿疑とは、如此して待つ處へ敵來らば、疑ひなく撃つべしとなり、若其不至、捨之而去とは、もし敵來らずんば、其地にとりまらず、尙深く攻め入るべしと云意なり、捨之而去と云は、其地を捨て去て進みゆくことなり、

爭地則無攻

爭地は上に云へる如く險阻要害の地にて、敵味方ともに是を得れば利あるゆへ、皆争てはしがかる地なり、無攻とは敵より先きにこの地を占めて、敵に攻めらるゝやうにすべし、もし敵われより先きに此地を取て陣を固めて居は、必せむることなかれと云意なり

り、吳王問曰、敵若先至、據要保利、簡兵練卒、或出或守、以備我奇、則如之何、これ間の詞なり、敵若先至とは、敵もしわれより先きに争地に至りてと云意なり、據要保利とは、要は要害なり、敵この要害の地をとりしき勝利の地を守ることなり、簡兵練卒とは、士卒をすくりえらむことなり、或出或守とは、或は右の要害の地より人数をはり出し、或は要害の地をかため守ることなり、以備我奇とは、此方の奇兵の横をうたんとする備へをすることなり、是敵に要害の地を取られたる時のことを吳王の間へるなり、武曰争地之法讓之者得求之者失、敵得其處、慎勿攻之、引而伴、走建、旗鳴、鼓趣、其所愛、焚柴、揚塵、惑其耳目、分吾良卒、密有所伏、敵必出救、人欲我與、人棄我取、此争先之道也、これ答の詞なり、争地之法讓之者得求之者失とは、争地にての軍法はこの争地を争ふべからず、敵この争地を取ればよくこそ取りたれとて、是を争はず攻めず敵に譲り與ふべし、敵に譲り與れば遂にわが物となるを讓之者得と云、敵にとられて此方より争ひ求る時は、はや先づ敵にとられたる上に争ふゆへ、此方は後になりていつまでも取りかへす

ことならず、此地を失ふなり、是を求之者失と云、敵得其處、慎勿攻之とは、敵この要害の處を得たらば、必慎て是を攻むべからず、敵は味方に攻めさすべき爲に、この要害の地を取りたるなり、敵にとられて後にこの要害の地に處る敵を攻る時は、敵に引つけられたるなり、敵の計中に落ちたるなり、引而伴、走建、旗鳴、鼓趣、其所愛とは、其場を引去りて偽りにぐべし、建、旗鳴、鼓は、敵に外の方を攻ることを明かに知らすべきためなり、其所愛は敵の見棄ることのならぬ處を云、敵の見棄ることのならず、大切に思ふ方へ味方の人数をむけ、旗をたて鼓を鳴らして攻めかゝるべし、是敵要害の地を取りたるを此方よりは争はず、引ちがへて外の處の、敵の大切に思ふ處を攻る時は、敵始取りたる要害の地に居ることならぬものなり、是敵と争はずして敵のとりたる要害の地をとりもどす計ごととなり、焚柴揚塵惑其耳目とは、たきやを多く焚くはあらぬ方に人数の多くある様に思はすためなり、塵を揚ると云はごみを起ることなり、是もあらぬ方に人数の向ふやうに見するなり、鼓を鳴すは耳を惑はすなり、旗を建て、柴を焚き、塵を揚るは敵の

目を惑はすなり、分吾良卒密有所伏とは、わが士卒をすぐりて伏兵にするなり、敵必出救とは、かくの如く敵の見棄ることのならず、大切に思ふ方へ此方の人数を向るやうに見せ、太鼓を夥しく鳴し、旗をたて、朝夕の烟りをも夥く見せ、ごみほこりを夥く立て、汗馬入れちがへて合戦するていに見する時は、敵必始めの争地をすて、其方へ人数を出し、後詰をするなり、其時始の地を取りかへすべしと云ことなり、人欲我與人棄我取此争先之道也とは、敵この要害の地を欲するを我も是を敵に取らるまじきと争ふ時は、敵先にしてわれ後なり、敵が欲するならば我は争はず、御用ならば進ずると敵に與へ、われは敵に構はず、敵の見棄ることのならぬ方を攻るなり、是を人欲我與人棄我取此争先之道也とは、敵この要害の地を欲するを我も是を敵に取らるまじきと争ふ時は、敵先にしてわれ後なり、敵が欲するならば我は争はず、御用ならば進ずると敵に與へ、われは敵に構はず、敵の見棄ることのならぬ方を攻められて、始の要害の地を守ること能はずして棄て去らば、其時敵のすてたるあとにて、其要害の地をこの方へ取るべし、是軍法にて先を取る道なるゆへ、争先之道也と云なり、若我先至而敵用此術、則選吾銳卒固守其所、輕兵追之、分伏險阻、敵人還闘、伏兵旁起、此全勝之道也、これも孫武が答の詞なり、上の文は敵に争地を

取られぬる時のことを云へり、是は此方より争地を取らるに、敵より上の文の計を用る時のことを云へり、若我先至とは、もし敵より先きに彼争地に至て、要害を守ん時にと云意なり、敵用此術とは、上の文に云へる趣、其所愛の計を敵が用ひたらばと云意なり、選吾銳卒固守其所とは、銳卒はするどなる士卒と云ことにて、健かなる士卒をえらびすぐりて、固く要害の地を守らることなり、輕兵追之とは、輕兵は重荷をもたぬ士卒なり、かけ引自由なるべき爲なり、此方にて大切に思ひ見棄ることのならぬ方へ攻行く敵をば、輕兵を以て追かけさするなり、分伏險阻とは、人数を分て伏兵とし、險阻の地に隠し置くなり、敵人還闘伏兵旁起とは、敵が輕兵に追はれて引返し闘ん時に、彼險阻の地に隠し置たる伏兵四方より起きたちて、敵を打取ることなり、要害の地をとられずして、敵を打取るゆへ、全き勝ちと云意にて、全勝之道也と云へり、

交地則無絶

交地は敵方よりも味方よりも、道いく筋も入れちが

ひてある地なり、かくの如き地にては、敵横合より不意に出て、横を打ち、味方の先陣と後陣の間をたちきり、或は兵糧の道をたちきるなり、いかさまにも敵にたちきられぬ様にすること、交地にての心得なるゆへ、無絶と云へり、古來の注に味方の先陣後陣の間のきれぬやうにせよと云へり、一應は如此なれども、たとひ人数連屬してきれずとも、敵横合より不意に出て、是を攻めば、前後隔絶して前後後陣を救ふことならず、後陣前陣を救ふことなるまじ、唯敵の兵を出すべき處を考へ、押へを置てとをるべきことなり、又張預が注には、敵の人数をとすまじと絶ちとむること勿れと云へり、敵のかゝる場所をとらん時、是を絶ちおほせたらんは、敵の前後二つになりて味方の利莫大なり、されども道いくすぢも入れちがひである所なるゆへ、却て敵に打れて利を失はんと云意なり、然れどもこの本文の意は、味方の兵の此地をとる時のことなれば、此説は本文の本意に非なり、吳王曰、交地吾將絶敵使不得來、必令吾邊城修其守備深絶通道固其險塞若不先圖之敵人已備彼可得而來吾不得而往乘寡又均則如之何、これ

間の詞なり、交地にての軍法はこの方より敵の通路を絶ちきりて、敵の來ることならぬ様にすることなり、その仕様は必令吾邊城修其守備深絶通道固其險塞なり、邊城とは境目の城なり、守備を修むるとは城を守る手當てをするなり、通道とは敵の往來の道なり、境目の城を固め敵の通路を絶ちきり、要害を固めて敵兵の來る路を押るは、交地にて敵より往來をさせぬ計ごとなり、若不先圖之敵人已備とはもし此方より右の如のてあてをせぬ内に、敵より却て右の如のてあてをする事となり、彼可得而來吾不得而往とは此方より右の如の手當をせぬ内に、敵より手當をしつれば、敵よりは攻來ること自由にて、味方よりは攻ゆくことならぬと云ことなり、乘寡又均則如之何とは、それにては敵小勢にて味方大軍なれば仕形もあるなれば、勢の多少敵味方同じことなる時、いかすべきと云意なり、武曰既我不可以往彼可以來、則分卒匿之、守而易意示其不能、敵人且至、設伏隱、出其不意、可以有功也、これ孫子が答の詞なり、既我不可以往彼可以來とは、敵に通路を押へられ、われは往くことならず敵は來ることなるを、吳王

は難儀に思へども、孫子は却て是を計ごとのためにしたるなり、その敵の自由に攻め來る所こそ、此方の調法なれと云意なり、則分卒匿之とは、わが士卒を分け何方へも匿しおきて、小勢なるやうに見するなり、守而易意とは、國境又は要害の地、又は城々の守りのてい、敵をあなどりて油断するていに見することなり、示其不能とは不能は材能なき意にて、軍旅に拙きていをして敵に見することなり、敵人且至設伏隱、出其不意、可以有功也とは、敵より攻め來る時伏兵を設け隠し置きて、敵の思はず知らぬ不意の場を打て功あるべしと云意なり、隱廬と云は、廬は百姓の田舎にあるかりいほなり、かりいほなどの内に人数をかくすことなり、

衢地則合交

衢地は上に云へる如く、三方に諸侯の國つゞきたる地を云、合交とは交りは諸侯の交り好みなり、合すとは諸侯に交を結び好みを通じて、其諸侯を助けにするやうにすべきなり、この諸侯は敵へもつかず味方へもつかぬ諸侯なり、又味方へつきたる諸侯にて

も、敵より交を合せらるれば敵の強みとなり、敵につきたる諸侯にては、味方へ交を合するやうにすれば、味方のつよみとなるなり、吳王問孫武曰、衢地貴先若吾道遠發後、雖馳車驟馬至不能先則如之何、これ問の辭なり、衢地貴先とは衢地は諸侯の助ある地ゆへ、最初にこの地へ來るもの其諸侯を手前へつくるによりて勝利あり、故に貴先と云へり、若吾道遠發後とはかくの如く衢地は、先きへゆきたるもの諸侯の助を得ることなるに、もし此方より其地へ道遠く、且へ敵の出陣よりは此方の出陣遅くんばと云意なり、雖馳車驟馬至不能先則如之何とはかくの如く路も遠く出陣もおそくんば、車馬を馳せて道をいそぐとも、敵より先きに彼地にゆくことあははじ、此時は如何せん、と云意なり、武曰諸侯參屬其道四通、我與敵相當而旁有他國、所謂先者必先重幣輕使、約和旁國、交親結恩、兵雖後至衆已屬矣、我有衆助彼失其黨、諸國掎角震鼓齊攻、敵人驚恐莫知所當、これ答の辭なり、諸侯參屬其道四通とは、他國の諸侯の領分三方に連屬し、往還の道四方へ通達してあるなり、我與敵相當而旁有他國とは、我と敵と對陣をする場所

の旁外の國へ近きなり、相當るとは對陣することなり、所謂先者と云より下は、孫子先の字の意を説けり、必しも軍兵の敵より先きに其地に至ることを云には非ず、軍兵は遅く至るとも、諸侯の國々へ心を先きへ通することなりと云義を説けり、必先重幣輕使、約和旁國、交親結恩とは、必敵より先きに、この方より彼諸侯の國々へ心を通ずるなり、重幣とは音物を重くすることなり、輕使とは卑辭と云と同じ意にて使者の口上禮儀に向ひをうやまひ此方を輕くすべし、輕くするとはひきくすることなり、約和旁國とはあたりの國々へ和談の約束するなり、交親結恩とは親みを交へ恩愛を結ぶことなり、或は縁などを結ぶことなり、兵雖後至衆已屬矣とは、如此する時は味方の軍兵は遅く其地へ至るとも、衆人の心はずでに味方へ屬してあり、是を先と云たるなりと云意なり、我有衆助彼失其黨とは、衆助は衆人の助けなり、黨は黨類なり、かくの如くわれは先へ使者を遣して諸侯と一味を結ぶゆへ、我は衆人の助をえ、敵は黨類を失ひて獨立ちになると云意なり、諸國倚角震鼓齊攻とは、諸國はわれと一味したる諸侯の國々なり、

倚はあしとるなり、角はつのとるなり、獵をするに鹿を角や足を前後より捕ゆることなり、それを喻へにして敵を前後より打つことなり、震鼓は雷のなりわたる如く太鼓を打ちたつることなり、諸侯と一味をなすゆへ諸侯われと心を合せて、敵を前後よりはさみ打ちにし、諸手の太鼓の聲百千の雷のなりわたる如にて、力を合せて一度に攻めかゝることなり、敵人驚恐莫知所當とは、如此する時は敵の軍兵驚き恐れて、うちむかひて戦ふべきを知らず、前後を失ふと云意なり、

重地則掠

重地は前に云へる如く敵地へ深く攻入り、敵の城をいくつも越え行きて、引ことも引かれず事の勢ひ重く大切なるを云、かくの如き地にて事の勢ひ重きゆへ、士卒の心却て專一にはまり強くて、何のあふなげもなく勝利もあるものなれども、味方の地遠ければ、難儀の第一は兵糧なり、敵城をいくつも後にして越え來りたれば、糧の道を敵に絶るゝと必定なり、掠むるとは亂妨することなり、かくの如く難儀なること

は兵糧一事なれば、因糧於敵の道理にて、敵の兵糧をわが兵糧に用るに非れば勝利を得がたし、故に敵地を亂妨せよと云へるなり、李筌が注には、重地則掠と云を、重地則無掠と云に作れり、其意は深く敵地へ入ては非義無道なることをなして人の心を失ふべからず、必亂妨などをして民間の米穀財寶又は男女を生擒り、非義不作法なることをすべからずと云へり、王道の軍にては尤李筌が注の如くなるべし、然れども孫子は兵家者流にて、合戦の道を第一とす、因糧於敵と云ことすでに作戦篇にも見えたれば、この本文無掠に非ると明白なり、李筌が説は用ゆべからず、吳王曰重地多逾城邑糧道絶塞設欲歸還勢不可過則如之何、これ問の辭なり、重地は敵へ深く攻入りたるを云なれば、數多く敵の城邑を逾えゆくによりて、糧の道も絶え塞がるなり、城邑は城はしる邑はさとなり、敵の城郭郡郷を數多く越てゆきたることなり、もし本國へ歸んとすともたやすく歸りがたし、軍に勝利ありてこそ其勢に乗じて歸るべけれ、さなければ又數多く敵の城郭郡郷を越て歸ることなり難きなり、不可過とはとをられぬことなり

り、如此なる時如何様にかせんと問の辭なり、武曰凡居重地士卒輕勇、轉輸不通則掠以繼食、下得粟帛皆貢於上、多有賞、若欲還出深溝高壘示敵且久、敵疑通途私除要害乃令輕車衝敵而行揚其塵埃、餌以牛馬、敵人若出鳴鼓隨之、陰伏吾士與之中期、内外相應其敗可知、これ答の辭なり、凡居重地士卒輕勇とは、總じて重地にては士卒の心專一にはまり付くものゆへ、平生より一倍手輕く物早く勇氣なるものなるゆへ、合戦の上には却て氣遣ひなきものなりと云意なり、轉輸不通則掠以繼食とは、轉輸ははこびいたすとよみて兵糧の運送なり、轉輸不通とは兵糧の道断ゆることなり、掠以繼食とは、亂妨をして食物をつとめることなり、兵糧の道塞がらば敵地の民間を亂妨し、糧を奪て味方の食の絶えたるをつげと云意なり、下得粟帛皆貢於上とは、亂妨に法あり、士卒亂妨して得たる者を内證にたくはへ置くことあるべからず、粟はあわとよみて五穀の總名なり、帛はきぬとよむ、是も布にても帛にてもとかく衣服のるいを云べし、下たるもの亂妨して五穀又は衣服を取得たらば、皆上へ奉るべしとなり、貢はみ

つぎものとよみて下より上へ物をさぐるを何にても貢と云なり、多者有賞とは、亂妨をして澤山に米穀衣服を得たる者には褒美を興ふるなり、重地の肝要この一事にとりまるゆへなり、若欲還出深溝高壘示敵且久とは、もし陣所を出で、本國へかへらんと思は、陣城の普請をして尙久しく逗留すべきやうに敵に思はすべしとなり、深溝とは陣城の要害堀を深くさらゆることなり、高壘とは壘は土手なり、陣城の土手などを前よりは又高く築きたて、久しくすむべきていにするることなり、示敵且久とは久しく居るべきていを敵に見することなり、敵疑、通途とは、通途は往還の海道なり、敵には引かば往還の海道をとをらんと思はすることなり、私除要害とはひそかに要害の地をとをりて歸るなり、要害の地とは險阻の地なり、除ふとは路を作ることなり、大軍のとをるには路を作らで叶はぬものゆへ、要害をとをること、を要害を除ふと云なり、乃令輕車衝枚而行とは、兵糧器物をのせぬ軍車を輕車と云、衝枚は前の注にあるごとく、忍びて押し行くには枚と云ものを口に含ませて音をたてさせぬなり、右の如く本道にてなき

要害の路へかゝり、輕車を以て忍て引くべしとなり、揚其塵埃、餌以牛馬とはあらぬ方にてごみほこりをたて、味方が其方へ押ゆくかと敵に疑はせ、又敵の追來る路に牛馬などを棄置て、それを奪ふとて敵に手間をとらせなどすることなり、敵人若出鳴鼓隨之とは、敵がもし打て出て、太鼓を鳴らして追來らばと云意なり、陰伏吾士與之中期とは、陰かにわが士卒を伏兵にして置て、中にて敵を打つべしと、合圖を定め置ことなり、中期の期は期約とて約束合圖のことなり、内外相應其敗可知とは、かくの如く内外より牒し合せて打つならば、敵の敗北疑ひあらじと云意なり、

圯地則行

圯地は前に云へる如く難所にて、人數を押しがたき地を云、行けとはかくの如き地には必陣を取るべからず、急に押行きて踏留まるべからずと云意なり、戰ても守ても利のなき地なるゆへなり、吳王問孫武曰、山川險阻難從之道行久卒勞、敵在吾前而伏吾後、營在吾左而守吾右、良車驍騎要吾隘道則如之

何、これ間の辭なり、山川險阻難從之道行久卒勞は、山川ありて地形險阻に行きがたき道にて、しかも長途を經來りて士卒草臥たらん時にと云意なり、難從とは行き難きことなり、敵在吾前而伏吾後とは敵わが前に來り、對陣をして我が後に伏兵を置くことなり、營在吾左而守吾右とは吾陣所の左に敵陣をとりながら、人數をまわして吾陣の右を守らするなり、皆われを挾んで打つべき爲なり、良車驍騎とは良車はよき車なり、かけ引き手軽く丈夫にこしらへたる軍車なり、驍騎は驍勇の騎馬と云意にて、騎馬の勇士を云、要吾隘道とは隘道は袋の口をくゞりたる如のせはき處なり、要するとはそこへ人數を出してわれを打んと待ちかくることなり、かくの如く難所にて敵につけられたらば如何様にせんか云意なり、武曰先進輕車去軍十里、與敵相候、接期險阻、或分而左、或分而右、大將四觀、擇空而取、皆會中道、倦而乃止、これ答の辭なり、先進輕車去軍十里とは、先づ總軍より十里ほど置て先きへ軍車を押すべし、與敵相候とは相候はものみなり、敵のやうすをこの軍車を以て伺ひみることなり、接期險阻とは互に救ひあふこ

となり、險阻の處にては互に救ひあひ、敵かゝらば横やりを入るゝやうにすべしとなり、或分而左或分而右とは、人數を幾手にもわけ、或は左或は右に分れて押すべし、大將四觀とは、總大將は高き處へあがり、四方をよく見すまして下知すべし、擇空而取とは、空は敵なき方なり、敵のなき方を擇て大將の旗本を押しすべしとなり、皆會中道とは、諸勢みな押行く半途にており合ふことなるやうにすべしとなり、さなければ互に救應することならぬ故なり、倦而乃止とは、如此の道をは隨分に押行てはやく立去るべし、れども士卒殊のほか倦みたらば暫く止まるべし、草臥たる人數を強て押行き、敵に逢ふ時はおくれを取らるなり、

圍地則謀

圍地は前に云へる如く四方に山か川がありて、入口隘くわきへ行くべきやうもなく、又入口を敵守りて引くべきやうもなく難儀なる地なり、謀れとは計策を以て勝つべしと云意なり、この地は敵少勢にて味方の多勢に勝つべき地形なれば、力わざに勝ちがた

きゆへ、智謀計策にて勝つべき道理なり、吳王曰、前
有強敵、後有險難、敵絶我糧、道利我走、勢彼鼓謀、不
進、以觀吾能、則如之何、これ問の辭なり、進まんと
すれば前に強敵ありて進むことを得ず、引んとすれ
ば後に險難切所ありて引くこともならず、敵わが糧
の道を絶ちて兵糧を斷絶し、敵わが走勢を利して士
卒の心堅固ならず、走勢はにぐる勢ひとよむ、利する
とは順利にする意にて走ぐる事の自由なるやうに
思はするなり、是士卒の心を堅固にすまじき爲の策
なり、鼓謀不進とは鼓謀はつみみうちさわくとよみ
て、太鼓を打ち聲をたて、おめさきけんで味方の氣を
奪ふやうにすることなり、以觀吾能とは能は才能な
り、この方の才能のほど働きの次第を見るべきため
に、みだりに攻めかゝらず様子を居るなり、智謀
あるむつかしき敵なり、如此なる場にて如此の敵に
あはは如何様にせんと言問なり、武曰、圍地必塞、其
門示無所往、則以軍爲家、萬人同心、三軍齊力、并
炊數日無見、火烟故爲毀亂、寡弱之形、敵人見我備之
必輕、則告勵士卒、令其奮怒、陳伏良卒、左右險阻、擊
鼓而出、敵人若當疾擊、務突、我則前圍後拓、左右倚角、

これは答なり、圍地必塞、其門示無所往とは、塞門と
云は問の詞の走勢と云へるを承けたるなり、其地へ
入りたる口をば敵より塞ぎて、あらぬ方に味方の引
口を敵よりつけ置たるなり、敵はこゝより引處をう
たんとたくみたるを、士卒は知らず、こゝを明け置く
時は引處ありと思て其心一致せず、故にこゝを塞ぎ
て味方の士卒の引く處なきやうにすれば、心專一に
なるなり、以軍爲家とは、如此すれば味方の士卒陣中
をわが家の如く思ふなり、外にゆき處なきゆへ、士卒
の心の必死に落着くことを云へり、萬人同心、三軍齊
力とは、萬人の士卒も心を一所に合せ、三軍の兵も
力を一途にあはすることなり、是圍地の要法なり、是
極惡の地なるゆへ、士卒の心一致せざれば勝利を得が
たきなり、并炊數日無見、火烟とは數日の飯を一度に
たきて置て、火の氣の見えぬやうにするなり、是兵糧
されたりと敵に思はすべき爲なり、故爲毀亂、寡弱之
形とは、故はわざとくになり、毀亂はやぶれみだるゝ
なり、寡弱はすくなくよはきなり、わざと味方の勢の
やぶれ亂れて、人數もへり少くなりたるやうに敵に
見するなり、敵人見我備之必輕とは、敵わが如此な

るを見て、必用心怠り油斷するなり、則告勵士卒、令
其奮怒とは、敵かくの如く油斷したると見ば、士卒
を勵まして士卒の怒て勇氣の出るやうにすべしとな
り、陳伏良卒、左右險阻、擊鼓而出とは、良卒はよきつ
はものなり、陳伏は或は敵にさし向けて陣を張り、或
は伏兵にするなり、士卒の怒りのやまぬ内に手分け
をして、よき兵を或は先陣、横鎗に備へ、或は伏兵に
し、或は險阻を左にうけ右にうけ、險阻をかたどりて
太鼓を鳴して打て出るなり、是前方は火の氣もたゝ
ぬやうに至極弱き形を敵に見せ、こゝに至て俄に變
じて、かゝり太鼓を以て打て出る時は、敵の不意に發
して迅雷耳を蔽ふに及ばざる勢ひなり、敵人若當疾
擊、務突、我則前圍後拓、左右倚角とは、敵もし急に擊て
かゝらば、味方は前後左右ともに身命を抛て、死戦し
て切て出で、其勢ひに乗じてこの場を立ち去るべしと
云意なり、疾擊とは急に打てかゝるなり、務突とは味
方の備を突きちらさんと無二無三に切かゝることな
り、前圍後拓は先陣圍へは後陣は鳥の跖の如く働く、
左右は倚とり角とり、先陣後陣左備右備ともに力を
併せて働くとなり、大事の場なれば、一軍残らず粉骨

の勢を竭さずしては勝利を得がたき道理を云へるな
り、又曰敵在吾圍、伏而深謀、示我以利、索我以旗、紛
紜若亂、不知所之、奈何、これ吳王の再問へる詞な
り、上の問答はわれ圍地に陥りたる時のことを云ひ、
こゝには又敵圍地に陥て、圍地則謀と云へる意を用
ひて働く時のことを云へり、敵在吾圍、伏而深謀とは、
敵わが國の中の圍地に陥て居て、伏し隠れて深き謀
を運らすことを云へり、示我以利とは、我を誘きて
利を我に略はすることなり、索我以旗とは、わが旗
を見てわが軍情を察し索むることなり、紛紜若亂不
知所之とは、元より智謀ある敵なるゆへ、其備を亂し
紛々紜々としてはかり難く察し難きゆへ、我もせん
かたを知らぬ時は如何すべきと云意なり、不知所之
とはすべきやうなきことなり、武曰、千人操、旌分塞、
要道、輕兵進、挑陣而勿搏、交而勿去、此敗謀之法、これ
答のことばなり、右に云へる如く敵が圍地に陥て圍
地則謀と云法を用る時の仕形は、人數を千人分ち遣
はし、旌をもたせ要害の道を塞がせ置き、敵をとをさ
ぬ様にして、さて進退自由なる輕兵を遣し、敵陣へ取
かけ戦を挑み引出すべし、陣而勿搏とは、きつと備を

立て敵の動を見るべし、妄に進んで敵をうつこと勿れと云意なり、交而勿去とは交ると云は交和の意にて對陣することなり、きつと對陣をして居て、其場を立ち去るべからずと云意なり、此敗謀之法とは、右の仕形は敵の謀略をやぶる軍法なりと云意なり、

死地則戰

死地は前に云へる如く、先きへ進むこともならず、あとへ引くこともならず、わきへ立去ることもならぬ場所にて、必死にきわまりたるを云、されどもかくの如き必死の場にては、士卒も必死の場なりと云ことを知るゆへ、其心專一になりやすきものなり、精力を勵まして戰ふ時は百倍の勇力出るものなるゆへ、必勝利を得ることなり、故に戰へと云へり、吳王問孫武曰、若師出境軍於敵人之地、敵人大至圍我數重、欲突以出、四塞不通、欲勵士激衆、使之投命潰圍、則如之何、これ問の詞なり、若師出境軍於敵人之地とはわが國境の軍兵を押し出して、敵地に陣とる時のことなり、敵人大至圍我數重とは、敵の軍兵夥しく來て、四重も五重も取圍むなり、欲突以出四塞不通

とは、突はつきやぶることなり、四塞は四方の塞がることなり、敵兵の圍を突破て出んとすれば、四方の路塞りて通路なきなり、欲勵士激衆使之投命潰圍則如之何とは、義理を以て兵士を勵ますことを勵士と云、又下卒をば計を以て腹立たせ怒りに乗じて働らかするを激衆と云、命を投うつを投命と云、敵の圍をつきやぶるを潰圍と云、醫書に腫物の膿の出るを潰ると云よりして、圍を破て外へ出るを潰圍と云なり、されば義理を以て兵士を勵ませ、怒を以て下卒を勇め、其の勢ひにのりて命を投うち身を捨て、敵の圍を破て出んとする時は如何すべきかと云意なり、武曰、深溝高壘示爲守備、安靜勿動以隱、吾能告令三軍、示不得已、殺牛燔車、以饗吾士、燒盡糧食、填夷井、窟削髮、捐冠、絶去生慮、將無餘謀、士有死志、於是砥甲礪刃、併氣一力、或攻兩旁、震鼓疾譟、敵人亦懼、莫知所當、銳卒分行疾攻、其後、此是失道而求生、故曰困而不謀者窮、窮而不戰者亡、これ答の辭なり、深溝高壘示爲守備とは陣所の堀をさうゆるを溝を深くすと云、陣所の塙をかけ柵の木等を堅固にするを高壘と云、守備は守りの備へなり、合戰をせず陣城に入

籠りて居ることなり、陣城をしつらひ長く引込て居て、出で、働くまじき様にして敵に見することなり、安靜勿動以隱、吾能とは、安靜は動かぬことなり、吾能はわが材能と云意にて、合戰をして勝利を得べき武の働きを云、陣城に引込み静かにして働き出ずして居る時は、戰ふべき仕形を失ひたるゆへ、合戰をばせぬと敵が思て、味方を見侮る意出るなり、是われに死戰をする働なしとするところ、吾能を隠して敵に見せぬ意なり、告令三軍示不得已とは、告令は下知することなり、總軍の士卒に下知するには、是非に及ばず死戰をするを云ひ含むるなり、士卒の勇氣を專一にさせん爲に、必死になると士卒に思はする時は、其勇氣心まで專一にならぬものなり、故に士卒までに吾が心の底を知らせず、唯運盡きて是非に及ばぬ次第なり、唯命をすて、戰ひ死すべきと云ひ合め、士卒を人々心より必死の心になすなり、殺牛燔車、以饗吾士とは兵糧をつけたる車を燒すて、其牛を殺して士卒にふるまふことなり、今日を限りの一戰なれば、後日の兵糧はいらぬと人に思はするなり、燒盡糧食、填夷井窟とは、兵糧をやきすて、井をもう

め窟をも打破り、陣屋のあとの地を平らにならすことなり、是も今日を限りと思切たることなり、削髮捐冠、絶去生慮とは軍の計にて甲冑をぬぎすて冠を着し、平人にまがひて落行ことあるゆへ、軍中にも冠をもたすることなり、然るに冠をもすて髪をきるは、髪あれば冑をきる邪魔になるゆへ髪をきり、今日を限りの合戰ゆへ冠をすて、生きて返らんとする生慮を絶去るなり、將無餘謀、士有死志とは、將は死戰より外に自餘の謀なく、士卒は必死の志あるなり、於是砥甲礪刃、併氣一力とは、右の如く上下將卒ともに心を一途にきわめて、甲をみがき刃をとき、勇氣をも精力をも、三軍の士卒一途にそろへて打て出るなり、甲をとぐは矢石のとをらぬ爲なり、必死の時までも如此するは、死するまでもよく働き、敵を多く殺すべき爲なり、心ばかり專一になりても氣と力とをそろはぬ時は、百倍の勢をなさぬゆへ、上には心を專一にすることを云たるに、尙又併氣一力と云へるなり、或攻兩旁、震鼓疾譟とは、向よりかゝるか或は敵の兩わきより攻めかゝり、雷の如く太鼓を打ち、火急に叫んでかゝることなり、敵人亦懼、莫知所當、銳卒分行疾

攻其後とは、敵よりも味方を見侮りて居たる所を、思ひの外に右の如くに切て出られて、敵もとはうを失ふところを、鋭卒を分て敵の後を攻るなり、此是失道而求生とは、死地に陥たる所は軍の道を失て如此の地に來るなり、今この一戰にて萬死の中に一生を求るゆへ、失道而求生と云なり、故曰困而不謀者窮、窮而不戰者亡と云は、古語を孫子が引て云へるなり、困而不謀者窮とは、前の條に圍地則謀とある意なり、圍地に陥て敵に困めらるることあらんに、奇計を用ること能はざれば必窮するなり、窮すると云はゆきつまることにて至極にゆきつまりて、すべきやうのなくなるることなり、窮而不戰者亡とは此條の意なり、死地に陥る時は進むこともならず、退くこともならずわきへ行くこともならず、兵糧もなく後詰もなければ久しく守ることもならず、如此ゆきつまりたる處に至ては、唯命をすて、死戰をするより外のことなし、よく命をすて、戰ふ時は百倍の力出るものゆへ、必勝利を得るなり、さなければ必滅亡すると云意なり、

所謂古之善用兵者、能使敵前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊、

上に死地則戰と云へるを承けて、これより戰の道を云へり、畢竟九地は地の上的ことにて、地は外にあり兵家の專要は我にあり、我によく戰の道を會得する時は、九地の術その助けとなる、戰の道を會得せざる時は九地を知るとも其益なき道理なり、所謂古之善用兵者とは、兵家にいはゆる古の名將のことなり、能使敵人前後不相及とは、及と云はとよく意なり、といくと手の手といふことなり、されば前陣より後陣へ手届かず、後陣より前陣へ手とつかぬことを、前後不相及と云なり、衆は多勢のことなれば大備なり、寡は少勢のことなれば小備なり、大備は小備を待て手足とし、小備は大備を待て根本とするものなるに、大備小備はなれくになりて持合はず、互に力となり持みになることなきを、衆寡不相恃と云なり、貴は

たつときに將吏なり、賤はいやしとよみて士卒なり、將吏は智謀を以て士卒をかこひて敵にうたせぬもの、士卒は武勇に以て將吏を守護して敵にうたせぬものなるに、將吏も士卒を救ふことならず、士卒も將吏を救ふことならぬを、貴賤不相救と云なり、上下不相收とは、上と下とのなることなり、收むるとは散りたるものを一處へよすることなるゆへ、不收と云へば上下の心のちりはなることを云なり、卒離而不集とは、士卒ちりくにはなれて一處に集まらぬなり、兵合而不齊とは鋒を合せて戰ふことを兵合と云、鋒を合せて戰ふ時は、衆力をそろへ一度に打てかれば其勢ひ強きものなり、はらくにかれば其勢よはきものなり、はらくになりてそろはぬを不齊と云なり、一段の意兵家に所謂る古の名將は、敵の前陣と後陣とはなれくになりて、前陣よりは後陣に手とつかず、後陣よりは前陣へ手とつかぬ様にし、又敵の大備と小備とはなれくになりて、大備は小備を待み力にすることならず、小備は大備を待み力にすることならぬ様にし、又貴賤上下はなれくになりて、將吏は士卒を救ふことならず、士卒は將吏

を救ふことならず、上下の心ちりくになり、又士卒の間にても其心ちりくになりて一致せず、鋒を合せて戰ふ時も力そろはず、勢ひ一致せぬやうにすること、是古の名將の妙術なりと云意なり、何を以て如此するなれば、その所以は下の文にくはしく説けり、こゝには先づ其しるしを擧げて云へるなり、今大略を以て云はんに、以實擊虚に過ぎず、虚は敵の知らぬ所なり、敵の力の出ぬ所なり、實を以て是を撃つ時は其力猛なり、たとへば人の手足の頭目を守るが如し、物ありて頭目にあたらんとすれば、われ知らず手足を動かして是をふせぐこと自然の妙用なり、されどもやわらの上手は、敵の虚なる處を知て是へ當るゆへ、是をふせぐこと能はず、其上多力の人にてても力を出すこと能はず、此方よりあつる所は實を以て撃つゆへ其力百倍す、この理を明むる時は大小一致にて戰も亦かくの如し、よく味へて其妙を會すべし、此節を李筌、杜牧、孟氏より劉寅、施子美、彭繼耀、梅堯臣等の諸人皆變詐を設けて敵の心を亂すゆへ、敵の前陣後陣大備小備貴賤上下一致せず、離れくになりと云へり、是もさることにて其說非なりと云ひ難

し、されども變詐を設ると云も、其至理を論ずる時は實を以て虚をうつに過ぎず、此方より設けたる變詐にのりて心其方へ向く時は、是すなはち虚なり、動せぬものは實なり、其上軍をすること變詐ばかりに限るに非ず、正兵を以てうつべき圖を伺て打つこと又多きことなるゆへ、變詐ばかりを云時は道理にのこる所あるなり、故に今梅堯臣、王皙、張預が注に従て解するなり、變詐を設ると云説をあしと云べからず、一本に所謂古之善用兵者と云を、古之所謂善用兵者と云に作る、義理少し異なれども、大義に關らぬことなり、

合於利而動、不合於利而止、

是も上の所謂古之善用兵者と云よりひとつづきに見るべし、上には敵の前後多寡貴賤上下はなれなく、なる様にするを云て、こゝには其畢竟を云へり、右に云へるごとく敵の前後多寡貴賤上下のへたゝくになるとは、何故に如此なるなれば、わが戦をするに利に合へば動き、利に合はざればやむ時は、戦ふこと皆よき圖を以て戦ふゆへ、敵は右に云へる如くに

なるなり、合於利とは勝利の道に叶ふことなり、不合於利とは勝利の道に叶はぬことなり、動とは働くと云意にて、戦ふことを云なり、止とは戦はぬことなり、勝利の道とは戦ふべき圖を云、戦ふべき圖とは敵の虚なり、不意をうち備なきを襲ふことなり、不意をうち備なき處を襲ふ時は、前後に備を立て、大備小備を分けて各其救應を專とし、貴賤上下その司りを守ると云へども、睡中をうたれて手足の働なき如く、前後多寡貴賤上下皆その用をなすことを得ず、故に上の條に云へる名將の妙用は、この條に云へる合於利而動、不合於利而止と云二句にあるなり、古來の注に、上の文に云へる如くに、敵亂るゝと云ともみだりにうつことなかれ、尙又利に合ふか合はざるかと考へて、戦をすべしと云意なりと云へり、大きな誤なり、敵の前後後陣へたゝくなり、大備小備救あふことならず、貴賤上下力を合せず、一備の内も其心ちりたゝになり、鋒を合せても衆力一致せざる所こそ、勝利のたゞなかなれ、こゝを打たずして何れの處をか打たん、こゝに至ても尙又利に合ふか合はぬかと考るならば、ひたものに打つべき圖をはづして、戦ふ

べき時節あるべからず、是智なくて智のあるふりをし、決斷なき愚將のすることなり、必ず従ふべからず、古本に動の字の上に不の字ありて、合於利而不動と云へり、不の字衍文なり用ゆべからず、

敢問敵衆整而將來、待之若何、

是は孫子自問自答を設けて云へり、此條は問の辭にて、下の條は答の詞なり、前に合於利而動、不合於利而止と云へるに付て戦ふべき利の見えぬ敵のこゝとを云へるなり、敢問とは物を問ふ時に發端に云ふ詞なり、敢とはさし出たる意なり、進出たることながら、このことを問ふと云て問ひ出すは、自分を謙退したる意なるゆへ、總じてものを問ふ時に、必かくの如く云ことなり、故に何の義理もなく定まりたる詞と見るべし、敵衆整而將來と云は、衆は大軍なり、整はとよみとよみて、備分け行列の次第、軍中の法度皆式々に整て、少しも伺ふべきひまのなきことなり、將來とは、敵の方よりかゝり來るべき體に見ゆることなり、待之若何とは、かくの如き敵を待うけて、戦ひ勝利を得ん道は如何と問ふ意なり、元來大軍小勢

は勢ひ對揚せぬことなれども、整はぬ處あるを以て、小勢の整たると對揚することなり、今大軍にてしかも整たる敵のかゝり來るは、實強の勢ひなれば、是に勝つことあるべからず、これと戦ふこと勝利の道に叶はぬなれば、合於利而動と云ひがたし、戦はずして止まんとすれども敵よりよせ來るなれば、戦ふまじきと云こともならぬなり、是又不合於利而止と云文の意を守るべきこともならぬなり、故に上に云へる合於利而動、不合於利而止と云語にては、如此なる時節に受用すべきやうなし、如此なる時は如何様にしてこの敵を待うけ戦んぞと問たる意なり、

曰先奪其所愛則聽矣、

是答の辭なり、先とは此方より先だつ意なり、其とは敵をさして云、其所愛とは何にても敵の大切に思ひ持みにする所を云、聽とは此方の下知を敵がきくことなり、答の意は、衆整にして寄せ來る敵は實強の勢ひにて、この方より自由に是を制して、上の文に云へる如く前後衆寡貴賤上下のへたゝくなる様にする

ことなるべからず、されども肝要なるき、處を取て制する時は、左へなりとも右へなりとも此方のなしたき様になるものなり、其肝要なるき、處と云は、敵の大切にするものあるべし、或は兵糧か、或は地の利か、或は其主君の居所、或は根城何にても彼が取られず、叶はぬと思ふ物あるべし、寄來る敵を待うけて戦んは、戰て勝利なきと云ことをみす、知りながら、彼が寄來るゆへせんかたなく戰ふ道理にて、戰はざる已前にはや敵に制せられたるものなり、敗北疑なし、孫子はよせ來る敵にかまはず、引ちがへて兵糧の道を絶つか、或は要害の地を奪ふか、歸路を斷んとするか、或は彼か主君の居處、或は彼が妻子の居處、或は臣下旗下の内にても、彼が救はずして叶はぬものあらば是を攻んとし、或は本城へ攻入らんとする時は、衆整の敵なりとも、寄來ることをさしおきて其方へ向ふなり、是合戰に及ばぬ前に、敵はや此方の下知をさく道理にて、敵わが掌握の中に落るなり、是孫子が深意は、この方より先を取て敵に制せられず、大敵なりとも、此方より是を制して、自由にわが手につけてまはす所を主とするなり、先の字こゝろを付けて

味ふべし、總じて肝要なるき、處を取ることに、易にも其意を説けり、大畜の六五に豶豕之牙と云とあり、豶豕とは豕の勢をさりとるを云なり、豕の牙を以て人をかけ物をそこなふを止んと思は、其勢をさるべし、勢をさる時はあらしき心おのづから靜まるゆへ、牙ありても物をそこなふこと能はず、豕の牙にて物をかけあらく躁く時、そのき、處を制することを知らず、牙の上に取り付きて是を制せんとする時は、力を費やして其功なし、其肝要なる所を制するゆへ、牙あるともおのづから其力を失ふと云意なり、この意をよく會得せば、凡天地の間六合の内、わが命をさかざるものはあるまじきなり、是將の將たる所以、なとたいにわが士卒に將たるまでのことならんや、一本に聽の字を得の字に作る、義劣れり、用ゆべからず、**兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也、**是は上の文をうけて先の字の意をとけり、兵之情とは合戰のこゝろゆきなり、速なるを主とすとは、早きを第一とすることなり、前に云へる敵の前後衆寡貴

賤上下のへたゝになるやうにするも、又敵の愛する所を奪ふも、皆速かなるを主とすると、合戰のこゝろゆきなり、されどもいかに早きをよしとすとも、路に遠近あり、事に難易ありて、早くするとのならぬことあり、故にその主速と云意を下の三句にときて、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也と云へり、孫子が云へるはやくと云は、遲速の義に拘はるに非ず、乗人之不及とは人の手のとゝかぬ所あるを見て、其手の届かぬ勢ひにのることなり、由不虞之道とは、不虞ははからずとよむ、人の思ひよらず、氣のつかぬ道すぢをゆくことを云なり、攻其所不戒とは、戒ると云は用心をすることなり、敵の用心をせぬ所を攻ることなり、されば孫子が意は畢竟不意にあり、敵の心つかぬ所は敵の手のまはらぬ所にて、この處は智謀も勇力も多勢も用いたゝぬ處なり、此處を取て制する時は、我はいつも先にて、敵はいつも後なり、されば是を速なるの至極とす、致人而不致於人の至極とす、是を虛の至極とす、兵道の妙處こゝに至て又除蘊なし、一本に主速の下に又一の速の字ありて、兵之情主速、々乗人之不及と云に作る、贅言なり、諸本

に從て今是を用ひず、**凡爲客之道、深入則專、主人不克、**是より末は客戰のことを云へり、旅がけの合戰のことなり、前に云へる九地のこと、多くは旅がけの合戰なるゆへなればなり、凡とは總じてと云意なり、爲客とは客はたび人とよむゆへ、たびがけの合戰なり、專とは心の專一にてはまりつよきことを云へり、主人とは合戰をする地の兵なり、一段の意は、總じて旅がけにて合戰をする道を論ずるに、敵地へ深く攻入るをよしとす、本國をはなれて深く敵地へ攻入る時は、其心專一にて合戰のはまりつよきゆへ、必戰ひに勝利あるものなり、その深く他國より攻來る兵と、自國の兵戰ふ時は、地戰の方必勝利なきものなりと云意なり、地戰の兵は前に云へる九地の内の散地なる故なり、昔韓信張耳趙の國を攻ける時、趙の李左車趙王に告て、韓信張耳國を去りて遠く闘ふ、其鋒當るべからずと云へり、本國を離れて遠く闘ひ入れたれば、兵士の心專一にて其鋒へは向ひ難しと云意なり、此本文

の義と叶へり、虚實篇に致人而不致於人と云へるを、古來主客の勢ひと云ことを以て説きて、致人を主とし、不致於人を客とす、この時は場を先へ取たるを主と云ひ、敵の場を取たる處へよせ来るものを客と云、場をさきへ取たるものは、敵を手まへへ引つけて、心静かによき圖を以て敵を打て勝つなり、場を敵に取られて後に来るものは、敵に其場へひきつけらるる道理にて、進退皆敵につかはるるなり、故に其時の主客の勢ひは、主をよしとして客はあしとす、是は小さく合戦の懸待の上にて云たる客主なり、又この本文の主客は、大きに總體にて云たる詞にて、懸待にかまわず地戦を主とし、旅がけの戦を客とす、詞のさすところ異なれり、

掠於饒野三軍足食謹養而勿勞併氣積力運兵計謀爲不可測投之無所往死且不北

是は客戦の法を説けり、旅がけの合戦の仕様なり、饒野はゆたかなる野なり、米穀多き處を云、野と云は野

原に限らず、總じて田畠ある處をみな野と云、田野も連屬するなり、掠於饒野とは、米穀饒かなる處々にて亂妨することなり、三軍足食とは、如此すれば三軍の人数三萬七千五百の大軍なりとも、食事に事かくことなきと云意なり、總じて旅がけの合戦に難儀なることは兵糧なり、本國より兵糧を取らんとすれば、途中敵地をとるゆへ通路自由ならぬのみならず、本國人民のいたみ甚しきこと、作戰篇に述たる如くなり、故に其處々にて亂妨して、兵糧を本國より運ばぬを以て客戦の法とするなり、謹養而勿勞とは、謹と云は大切にすることなり、養ふと云は士卒の氣力を養ふことなり、勿勞と云はむざと士卒の辛勞し疲るることをすることなれと云意なり、人馬長途を打に勞すること甚し、故に士卒の心は敵地へ深く入るほど專一になるものなれども、辛勞甚しく、氣力つきかぬるところ、是客戦の難儀なることゆへ、随分大切にして士卒の氣力を養て、草臥れぬやうにすべしとなり、併氣積力とは氣は士卒の勇氣なり、力は士卒の精力なり、併すると云は二つをも三つをも一つに合することなり、積むと云は少しづつ、積みた

くはへて、少しのものを多くなす意なり、されば氣を併すと云は、士卒の勇氣を一度くに出させず、二度にも二度にも出さすべき勇氣を抑へ置て、肝要の處にて一度に出さすることなり、勇氣は怒りなり、平生も腹立つことあるに、思ふまゝに怒る時は、そのあとにて氣泄るるゆへ怒りやむものなり、腹の立つことをこらへ居て、二度が三度になり、三度が四度になりて後に發すれば、其怒甚しきものなり、是にて勇氣を併する術を知るべし、力を積むもの如し、士卒に精力をひたもの出さすれば草臥るるものなり、精力をかばひ置て肝要なる處にて出す力を積むと云なり、運兵計謀とは軍兵をめぐらしはこびて、或は分れ或は合ひ、或は火急に攻め、或は靜に守り、或は思ひがけの遠所へとりかけ、或はかけつ引つして敵をなやまし、或は靜に押行て位詰にする類、皆軍兵をはこびめぐらし自由に使ふ上のことなり、是を運兵と云、計謀は計策方便なり、軍兵を自由に使ふは手足のたらしの如く、計策方便は心の思慮の如くにて、かたくかけて叶はぬゆへ、運兵計謀と云へるなり、爲不可測とは、はかりしられぬことをすると云意

なり、計策方便を以て軍兵をはこびめぐらし、自由に運用すること敵もはかり知らず、又使はるる、味方の軍兵もはかり知らぬやうにするを、客戦の極意とするなり、尙この爲不可測と云句の意を、下の將軍之事靜以幽と云文より末に委しく説けり、投之無所往とは、之とは味方の軍兵を指して云、無所往とは敵と戦ふより外は何方へも行き處なき場を云、投ずるとはなげ入ることなり、味方の軍兵を敵と戦ふより外には、何方へもゆきどころのなき場へ投入る場へ士卒を置くまでは大將のすることなり、如此なる場へ打入れられて後、士卒の命をすて、働くことは、大將の下知に非ずして、士卒がわれとみづから戦ふなり、是を何にても物をなげ出すには、わが手をはなして先きへなげ出すに喩る詞なり、尤如此なる場に士卒を置くゆへに、士卒が身命をすて、働くなれば、士卒の身命をすて、働く處までも大將の作用なれども、それは如此なる場に士卒を置く所より生じたる働きにて、士卒のわれと心より働くなり、かくの如く士卒に心よりはたらかすところ客戦の至極

なるゆへ、そのころを明さん爲、投ずると云字を以て説くなり、死且不北とは、たとひ死に及ぶともいぐることをばせぬとなり、何ゆへなれば、敵と戦ふより外には、何方へも行方なき場に士卒を置くゆへ、死に及ぶにもいぐることなきなり、

死焉不得士人盡力、兵士甚陷、則不懼、無所往則固、入深則拘、不得已則鬪、

是は上の投之無所往死且不北と云意をくりかへして説けるなり、死焉不得とは、死に覺悟を極めたる上は、何事にもならぬことなしと云意なり、士人盡力とは、士人は士はさぶらひ人はたみなり、平生は士と民との差別ありて、士は羞を知るゆへ義のため命を輕んじ、民は廉恥の心なく、義をかへりみずして死すべき場をはずすものなれども、必死の場へ打入れられたる時は、士と民との差別なく、皆精力を盡くして働くと云意なり、兵士甚陷則不懼とは、兵士は士卒なり、陥るとは死地に陥るとなり、死地に陥ん

とする時か、或は半陥る時は是を出んとすることあるゆへ、敵を懼れ死を懼るゝ意ありて弱みあるなり、されども至極陥りきりて出づべきやうなき時に至ては、懼るゝころなくなりて、勇氣出づるものなりと云意なり、無所往則固とはわきへゆく方ある時は、何とぞしてそこへゆかんとするゆへ心專一ならず、心專一ならねば備堅固なきものなり、何方へもゆくべき所なき時は、士卒もおのづから其心納得して、外へゆくべきころなくなるゆへ、其備おのづから堅固なるものなりと云意なり、入深則拘とは、拘と云は縛られすくめらるゝ意なり、敵地へ入ること深き時は、前後左右皆敵の中なれば逃去るべき處なきゆへ、繩などにて縛て置たるころもちにて、制せずとも、自然と逃散ることなきものなりと云意なり、不得已則鬪とは、鬪はずたゞ處ることならぬことを不得已と云、たゞかはすしてたゞ處ることならぬ場へ士卒をおしむくる時は、下知せずとも鬪ふなり、なほ草臥れても鬪ふなり、勢の自然を以て使ふ故なり、是皆敵地へ深く攻入りて、味方の心自然と專一になる道理をくりかへして説けるなり、直解の一

説と講義の説に、死焉不得士人盡力と云を二句に分たず、一句となして見る、其時は死焉んそ士人力を盡くことを得ざらんとよむ、必死の場へ入りては、何として士人の力を盡さぬことあらんと云意にて、義理にかはることなれども、二句に分けて見る方文義穩なるなり、

是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信、

是は上の投之無所往と云へる其しるしを説けり、其兵とは之を往ところなきに投じたる軍兵なり、修と云は軍法に亂れたる所あるか、調はぬ所あるかと、ひたものにしらへ見るとなり、戒ると云は、命令教戒の意にて、士卒に軍の勝利を云ひふくむることなり、軍法の亂れて調はぬ所あるかとひたものにしらへて、軍の勝利を云ひふくめたることをせねども、とくと軍の勝利を云ひふくめたると同然なることを、不修而戒と云、不求而得とは、必死の働をなせと士卒に求めねども、おのづから必死の働を得るなり、不約而親とは誓約をすることを約すると云、一和する

を親むと云、誓約をさせ神水を吞せ血判などをさせざれども、士卒おのづから一和して、互に父子の親しき如く、見すて見はなすことなきこととなり、不令而信とは、號令を下し、賞罰の定めを云ひ渡すを令すと云、信すとは士卒上の號令を信じ、賞罰の定めを金石のかはらぬ如く思て、よく上の下知を守ることを云、かくの如く號令を下し、賞罰の定めを出さねども、士卒賞罰の掟を守て、深く是を信する如くに、其心堅固なるなり、是皆士卒を往く所なき場に置て、彼が心より必死になるやうにするゆへ、かくの如く下知號令に及ばずして自然と堅固になる道理なり、故に是故と云字を以て、上の文を承けて云へるなり、

禁祥去疑、至死無所之、

祥は妖祥なり、總じて巫山伏など又は平人にもさままゝの吉凶を云ひふらし、是は目出度前表なりなど云ことを信じ、夢の告げ神佛の託宣、或は胸さばぎし或は耳熱くなり、或は目跳り、或は小便の色の清濁、沫の有無を以て、運の盡き盡きぬを占ひ、或は脈を取ら、音律を考へ、雲の景氣星の立合ひ、鳥の鳴聲狐の

叫やう、馬の乗りすまひなどの類さま／＼のみゆ
／＼しきこと、皆是を妖祥と云て妖怪の類なり、是を
禁制して軍中にて如此きことを云はせぬを祥を禁ず
ると云、去疑とは、右の如くなるみゆ／＼しきことは
皆人の心に疑ひを付るものなるゆへ、是を禁制すれ
ば士卒の心の疑を去るなり、至死無所之とは、右の
如くなる妖怪なることを制禁して、士卒の心の疑を
去る時は、士卒死に至るまで其の心わきへちること
なしと云意なり、之とは心の他處へゆく意にて、心の
わきへちり分るゝを云、總じて士卒死地へ陥りて、人
事の上にては何ともせんかたなき場に至りて、人の心
の習ひにて、神佛を頼み、天道を頼むゝるゝなるも
のなり、人事の上にてすべきことなくなるゆへ、必人事
をはなれたる不思議奇妙の方へ赴くこと自然の道理
なり、故に必死の場に於て佛神天道の奇瑞を頼て、是
を深く信するより、心專一になりて必勝を得たるも
も、世にためし多きことなれども、既に佛神天道の奇
特を頼て勝利を得るなれば、又佛神天道の奇特に迷
てこの罰なり彼の災なりと云所より、勇氣もちりみ
志も挫けて、必死の場に入ても其心必死にならず、敗

北を得ること治定なり、故に孫子は是を禁ずることを
云へるなり、昔李孝恭と云大将、輔公祐を征伐するに
て、士卒に首途のふるまひをしける時、杯中の酒忽ち
血に變じければ、一座みな色を失ひたり、孝恭少もさ
はかず、是れは敵の味方に誅罰せらるへき前表にて、
敵の血の色となるなりと云て、軍士を勵まし合戦し
て遂に勝利を得たることあり、又田單は一人の士卒
を神師と稱して是をあがめて、燕のいくさを破り、朱
矩は子産の神靈託宣して、神兵を降して加勢ありと
巫に云はせて、是を以て列賜を攻破りしこともあり、
畢竟將の心に妖怪奇特を信せざれば、妖怪奇特をか
りて士卒の心を一致することもあるなり、唯將の心
惑はざるを本とすべきなり、
吾士無餘財、非惡貨也、無餘命、非惡壽也、
吾士はわが士卒なり、餘財なしとは餘財はあまるた
からなり、兵糧などをやきすて、明日の食物は入ら
ぬなり、勝負は今日の戦にありと思切ることを無
餘財と云、是貨を惡み嫌ふには非ず、戦はざれば死

す、戦へば萬死の中に一生ありと明かに知るゆへ、今
日を限りと思へばなり、無餘命とはあまる命なしと
云ことなり、今日を限りと思ひ切るなれば、明日まで
餘る命はなきなり、かく思ひ切るは壽命を惡み嫌ふ
に非ず、命を惜む時は命を失ふ、命を棄る時は萬死の
中に一生あることを明かに知て、餘念なき故なり、

令發之日士卒坐者涕霑襟、偃

臥者涕交頤、

令發之日とは令は號令なり、士卒への云ひ渡しなり、
生死存亡は今日の戦にきはまるとなり、もし下知
を用ひずんば尸を原野にさらして鳥獸の食となら
ん、命をすてゝよく戦はゞ萬死を出て、一生を得、敵
にかち運を開んことこの戦にありと士卒に云ひわ
たすことなり、かくの如く號令を云ひ出す時、坐した
る者は涙襟をうるほし、臥したるものは涙頤になが
るゝことは、士卒みな感激して涙をながす故なり、偃
臥はふすこと也、涕交頤とは、兩眼よりながす涙流
れて頤のあたりに、たてよこに入れちがひて見ゆる
ことを交ると云なり、講義に士卒涙を流すは、死を畏

るゝには非ずと云へり、されどもたとへ勇士なりと
もいきとしいける人、など死を悲み命を惜まざらん、
今日を限りと思ふ時は、故郷に残し置く父母妻子の
ことを思ひ、功業を立てずして、空しくくちはてんこ
とを悲て、涙を流すこと人情の常なり、されども今日
の計ごと無二無三に敵陣にかけ入り、身命を擲て戦
より外のことなし、戦ふ時は萬死の内にも一生を得る
道あり、戦はざれば居ながらに餓死し、或はやみ／＼
と敵に壓しされんは、無念なる次第なりと悲嘆の内
より勇氣奮發し、將の麾に隨て人々みな一人當千の
働きをなすも、皆この悲みの内より出ることなり、荆
軻が燕の太子丹が命を捨て、秦の始皇を刺殺さんと
首途する時、易水の上にて餞別の宴を催せしに、送る
者も行く者も皆涙を流してなきけり、酒宴半にして
なごりを惜て歌ひ、皆勇氣を發し、大きに怒て皆裂け
髪は倒に立ちたりと云も、皆生涯を思ひ切る情の親
切なる所より、勇氣を發することなり、

投之無所往者諸劇之勇也、

者と云字を一本には則の字に作る、又一本には者の

字も則の字もなし、投之無所往とは、上に云へる文を又掲げて云へるなり、諸劔とは諸は專諸、劔は曹劔なり、專諸は戰國の時分の勇士なり、吳の公子光吳王僚を殺さんとたくみける時、伍子胥に相談ありければ、此專諸はすぐれたる勇士なりとて公子光にすめり、公子光が宅にて吳王僚をふるまひ、料理に出したる魚の腸の中に劔をかくし置き、專諸これを取て吳王僚を刺殺したり、前後左右みな吳王僚の供のものなれば、早速に殺されたり、是吾が命をすて、一國の王たる人を刺殺したるゆへに、勇者のためしにはこの專諸を引くことなり、又曹劔は春秋の時分、魯の莊公に事へし將軍なり、三度齊國と戦ひまけ、魯國の地を失ひたるを無念に思ひ、其後魯の莊公齊の桓公と和談にて、國にて會盟ありし時、曹劔小脇指をぬき桓公を手こめにしてたいしやうを請ひ、吾が戦ひ負けて失ひたる地を取り返したることあり、是又死を物のかすとせず、恥辱をすゝきたる人なるゆへ、勇者のためしに引けり、されば一段の意敵の方へ赴て合戦するより外には別にせんかたなく、ゆき所なき場合へ軍兵を打はむれば、一軍の士卒ことごとく、皆

專諸曹劔が如き勇士となると云意なり、故善用兵者譬如率然、率然者常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至、

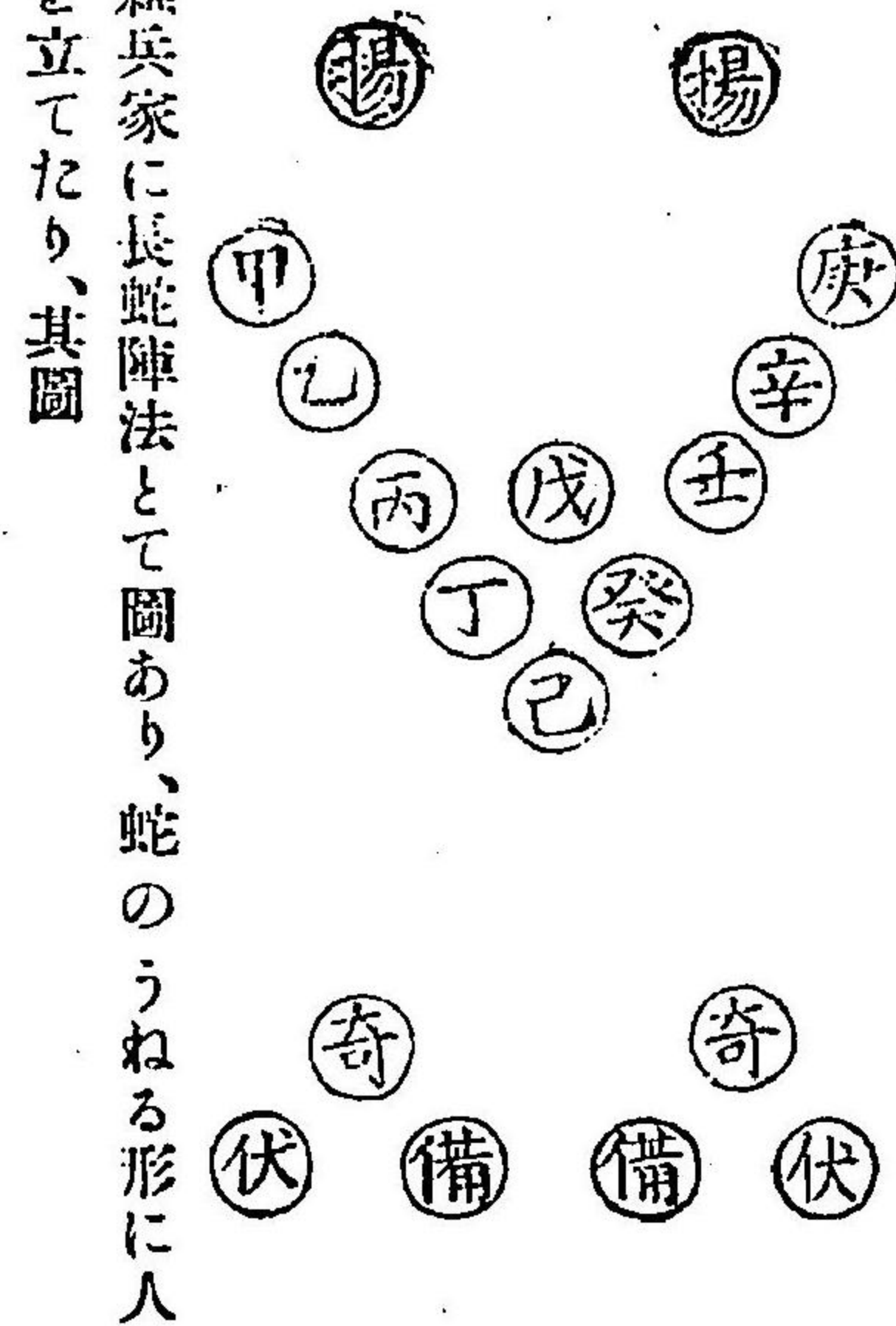
是より末は上の文に、士卒を死地に置いて戦はざれば滅亡することを人々に知らずれば、自然と其心一致になりてはなれなくならず、よく前は後を救ひ、後は前を見つぎ、左は右を助け、右は左を見すてぬことを云へるを承けて、こゝに率然の蛇勢のことを云へるなり、故善用兵者譬如率然とは、右に云へる道理なるゆへ、よく士卒を使ふ大將の備は、譬へて云は率然と云もの、如くなりとなり、率然者常山之蛇也とは、その率然の如しと譬へたる率然とは何のことなれば、常山と云山にをるへびなりと云意なり、常山と云は異國に五岳とて五つの大山あり、東にあるを東岳岱山と云ひ、西にあるを西岳華山と云ひ、南にあるを南岳衡山と云ひ、中にあるを中岳嵩山と云ひ、

北にあるを北岳常山と云、中岳嵩山は洛陽の都の傍にありて、東岳南岳西岳北岳とも中岳嵩山より東西南北へ千里づゝへだてゝある大山なり、古は天子巡狩の時にはこの山々の麓へ行幸なりて、其方角の諸侯をあつめ、仕置をなし玉ふ處にて、何れも名高き山なり、北岳常山のことを古は恒山と云、漢の文帝諱を恒と云たるより、是を避けて、漢の世より後恒山を常山と云、恒も常もつねとよむ字ゆる、字義の通するに隨て改め名つけたるなり、されども孫子は漢の文帝よりはるかに前の人なれば、其時分には常山と云詞はあるまじ、漢の世にかき改めたる本、後の世に傳はれるなるべし、されども何れの書にも皆この事を引くに常山の蛇とありて、恒山の蛇とは云はず、故に今恒山と改めがたし、擊其首則尾至とは、常山の蛇の首をうては彼の蛇尾を出して是を拂ふなり、擊其尾則首至とは、其尾をうては首來りて是を拂ふなり、擊其中則首尾俱至とは、其蛇の真中をうては首も尾も一度に來りて是を救ふなり、右の喩へは一備の内にては總軍にても、前後左右中共に一人の手足の運動する如く、しかも通利自在なると彼の蛇の如

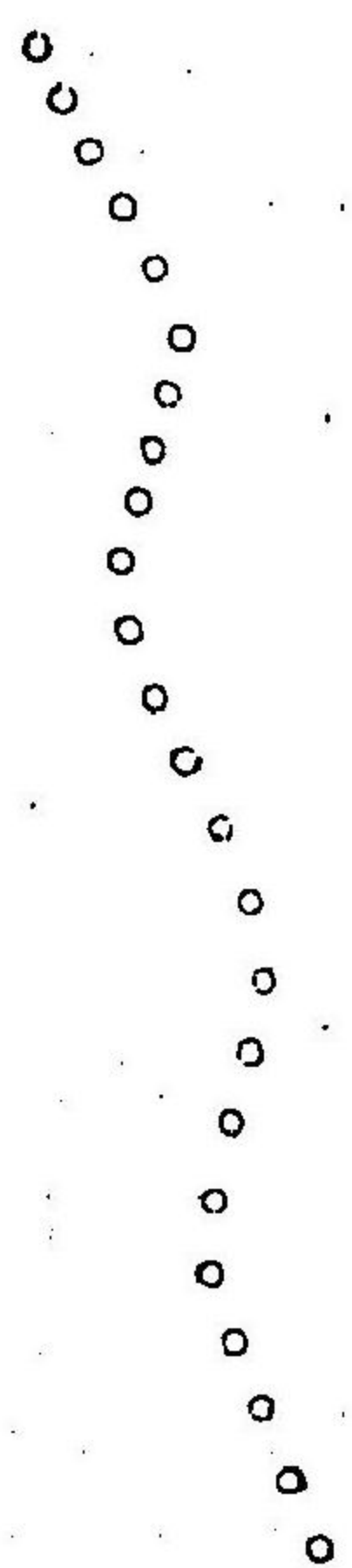
く、相互に救ひ助けて、横を入れ、後を詰め、先陣となり二の見となり、環のはしなきが如く圓轉無碍なることを云へり、扱この蛇を率然と云たるも、率然にはかともみて速なるとなり、此蛇の首の尾を救ひ、尾の首を守護し、首尾の中を助くること神速にて、よくにはかなるに應ずるゆへ名つくるなり、兵もその如く、前後左右中の相救ふこと神速なるをよしとするなり、兵に率然を以て喩へると、兵の一和と陣法との二つに皆常山の蛇の勢あり、此本文の意は專兵の一和する喩へに用ひたり、右に云へる如く士卒を必死の地に置き、彼が心に戦より外に運を開くべき道なしと思ひ、必死にはまりて働く時は、自然と常山の蛇勢になると云意なり、常山蛇勢の極意は是に喩たることなし、又陣法の喩へとする時は八陣圖に、以後爲前、以前爲後、四頭八尾觸處爲首、敵衝其、中首尾俱救と云意なり、以後爲前以前爲後とは、敵前よりかゝる時は前陣元より前にして、後陣後なり、敵又後より來る時は後陣を前陣とし、前陣を後陣とす、元より定まりて是は前陣是は後陣と云ことなればなり、四頭八尾と云は、四方八面みな首にもな

り尾にもなるゆへなり、觸處爲首とは敵の來りふれ
當る處いづくなりとも皆首になり先手になるなり、
其外の諸備はだん／＼に二番三番左備右備になり
て、相互に救應す、定まりて是は先手、二の見、三番
手、左備右備中備後備と限りたることなし、何時なり
とも敵に向ふもの正となりて、横を詰め後を詰るも
のは奇なり、奇と敵の合ふ時は奇變じて正となり、正
又變じて奇となる、是皆備のくばり人数の立様、ても
つれなくとぎれなく、遠過ぎず近過ぎず、相互に救ひ
助くるやうにすることなり、其法は分數を以て小組
大組を分け、形名を以て進退分合の度に迷はず、押行
くも勢をたゞむも、備を立るも進むも引くも、敵と戦
ふも備を分くるも合するも、聊手もつれなく、とぎれ
なく、人数のたてやう備々の間友崩れなく、又はしか
りの間數をつもり、諸備の内一備として血脈貫通
せずと云ことなく、一人の身の手足頭腹の運動する
如くにするより外のことなし、然るに武備志に載た
ることく、裴緒と云もの孫子が常山蛇の陣とて、六千
人の兵を騎兵二千、歩兵四千に分け、四千の歩兵を前
後左右中の備に分けて、箕の手の如くに備へ、二千の

騎兵を揚奇備伏に用ひて、揚は敵を桃み戦を始め、奇
は横を入れ、備は後を詰め、伏は物陰にかくれて働く
と名付け、圖を作て是を教ゆ、其圖



又雜兵家に長蛇陣法とて圖あり、蛇のうねる形に人
數を立てたり、其圖



この類皆愚妄不學の輩、世を欺き人をたぶらかすの
しわざなり、必用ることなかれ、昔諸葛孔明井田の法
にのつとり、風后握奇の陣法を考へて魚復と云ふ、江

水の邊りに八々六十四の數に石を疊み、是陣法なり
と云へり、其形皆縦にも八つ、横にも八にて、八々六
十四の數なり、後に桓温これを見て、是常山の蛇勢な
りと云へり、是陣間に陣を容れ、隊間に隊を容れ、四
頭八尾觸るゝ處首となり、奇正變化の窮まらざる妙
あるによりてかく云へるなり、實には如此なる形を
常山蛇の勢ひと云には非ずと心得べし、又風后握奇
の陣法も、元その文ありて圖なきを、宋朝の人文によ
りて圖を作れり、日本にて諸家の備立大形はこの握
奇の陣圖に本づく、握奇陣法の本文古代の文にて、元
來斷文錯簡あれば、たやすく其義を得がたく、後世其
文に因て作れる圖、なにと其眞實を得んや、唯貴ぶ
べきは孔明八陣の圖なれども、是又石をたゞみて其
勢形を示したるまでなるを、八陣のことに付て様々
のことを云へるは、皆後世の人の加へたるなり、八々
六十四陣の數は、漢書に云へる孫子が乘之陣八々六
十四の數なるに本づけども、この數又定格あるべき
に非ず、たゞ陣法の至極を明さんために設けたるこ
とにて、實には八の數に拘るべきに非ず、人数に多少
あれば、何として小勢を六十四陣に分つことを得ん

や、愚なるものは備をばいくつにも分ればよきと思
へども、五十騎を一備とするは極めて小備なれば、そ
れより内にては一備の勢ひを成さず、又五千騎を五
十騎つゝ百備に分てば、備に大小の別なくして輕重の
勢ひを失ふ、是人数に隨て備數を分つことにて、八陣六
十四陣の數には泥むべからず、故に孔明が陣法を明
めたるものは、李衛公にしくはなし、李衛公は八陣を
變じて六花陣とせり、くはしく太宗問對に見えたり、
是數に拘はらざる證據なり、又八陣の圖は、中央と八
方に備を立てたると心得るものあり、されども地形
に廣狹ありて一槩に拘はるべからず、又備の形を方
圓曲直銳の形に作る輩あり、一備の形人数のたてや
うに、形を作りて何の益かあらん、敵にあふ處はみな
一文字になるものなり、備の形と云は備を三つも四
つも合せたる時に、方圓曲直銳の形になるなり、たと
へば先きに一備たてゝ其後にならべて二備立れば、
三角になるゆへ銳の形なり、三備を一備二番三番と
次第して立る時は、直の形なり、四備を四方に立れば
方の形なり、前後左右中央の五つに備れば圓の形な
り、是皆地形に隨て方圓曲直銳の形分ることにて、

幾備も合せたる時の形なり、一備の形を或は鋒矢に作り、或は箕手に作り、或は方面に作り、或は一文字に作るなど、云類、皆この理を知らずして、人は活物なるを死物のやうになりてをこしらへ置て、是にて勝べしと思ふこと愚妄の至り云ん方なし、總じて圖法格式は、皆世の兵家を立る輩、巧みに名色をこしらえ、口に糊ふ媒とす、名將も或は是を借用ひて敵を愚にする術とす、必眞實の會を作すことなかれ、今常山蛇勢のことに付て心得の爲に云なり、

敢問、兵可使如率然乎、

是孫子自問自答を設けて、率然の義を明せり、文の意は軍兵をこの常山にある率然と云蛇の如く、首を打てば尾より拂ひ、尾を打てば首より拂ひ、中を打てば首尾同時に救ふ如くに、運動自在ならしむることなるべきことにやと問ふ意なり、

曰可、夫吳人與越人相惡也、當其同舟而濟、遇風、其相救也如左右手、

是答の辭なり、曰可とは可はべくとよむ、率然の如くならしむべきやと問ふをうけて、なる程その如にならざるべきことなりと云意にて可なりと云なり、夫吳人與越人相惡也と云は、元來中の惡くて、相互に助けあふまじきものを喩へにあげて云へり、夫は發語の辭なり、吳人は吳國の人なり、越人は越國の人なり、吳越兩國は古より敵國にて、其君の國を争ふのみならず、民までも互に意趣を含みて中惡しきなり、相惡むとは相互ににくく思ふことなり、吳越兩國の民は中惡くて、相互ににくく思ふことなり、當其同舟而濟遇風とは、其とは吳越兩國の民をさす、濟るとは河を濟るとなり、吳越兩國の民が一つ舟にのりあひて河をわたるに、大風にあひて舟の覆らんとする時にと云意なり、其相救也如左右手とは、人のいさかふことあるに、左の手をとらるれば右の手これを救ふ、右の手を切られんとすれば左の手これをふせぐ、今吳越國の民たがひに中惡けれども、一つ舟にのりて大河をわたる時、大風にあひ舟覆らんとすれば、平生の意趣を忘れて、互に力を合せて救ひ助くること、左右の手の如にて、少しも疎略にすることなし、此道理をよ

く會得すれば、常山蛇勢の妙處ここにありと云意なり、其意は吳越は中あしき國なれども、一つ舟にのせて大河の中ほどにて風にあはするゆへ、平生の怨を忘れて親子の如になるなり、今士卒をも必死の地に置て、互に力を合せ戦はざればならぬと云ことを知らずるゆへ、たとひ力を合すまじと思ても、精を出すまじと思ても、いやとも力を合せずして叶はず、精を出さずしては叶はぬなり、是必然の勢を以て士卒を使ふ道なり、是を以て常山蛇陣の神理を悟入すべきなり、

是故方馬、理輪、未足恃也、

方馬とは曹操は縛馬也と注せり、馬をいくつもならべ置き、くさりあはせて、別々にならぬやうにすることなり、杜牧が注には縛馬使爲方陣と云へり、備の形を四角に作て、利のある時に何としても崩れて四角にならぬ故に、軍車をかけた馬をしばりて、動かす崩れぬやうにすると云へり、此説は方の字の外に縛ると云義をそへて見るゆへ、文外義を生ずるなれば用ゆべからず、曹操の説をよしとすべし、直解の

一説には、方馬の方の字は放の字の誤なりと云へり、馬あればかけ出すものゆへ軍崩る、によりて、馬を放ち去る意と云へり、是又僻説なるべし、方の字は方舟の方の字なり、方舟とは、舟をならべてくさり合せて船橋にするとなり、故に方の字はならぶるとく、り付るとの二義をかねたる字なり、理輪とは車の輪を地へほりうめて動かぬやうにすることなり、この方馬理輪は、後世にて柵をふるこゝろもちなり、一段の意は備を敵にやふれまじきとて、戦車の馬をならべて備を立たるに、その馬をくさり合せ、車の輪を地にほりうめて、人をうち殺されても備の崩れぬやうにするも、是にて崩れぬと恃みにはならぬと云意なり、萬づの仕形模様にて備を堅固にすることは、至極の恃みにはならず、恃む所はたゞ士卒の心の必死にかたまる所なり、必死に住したる備を至極の堅陣と云と云意なり、

齊勇若一、政之道也、

齊勇とは勇氣をそろゆることなり、勇氣をそろゆると云は、勇なるものも獨り進むことならず、臆せる者

も獨り引くことならず、剛臆共に懸引き一同そろひて、三軍の士悉くに勇者になることを云、是は何を以て如此なるぞと云に、政之道なり、政とは軍中の號令法度なり、軍中の號令法度と云は、即形名分數より其外軍の法を云、軍の法よく其道を得る時は、百萬の軍兵も一様にそろひて、皆勇者になることなり、

剛柔皆得地之理也、

剛柔と云は、古來の注には皆士卒の強弱のことに云へり、されども剛柔の二字古皆地上用字なり、易にも立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義と云へり、故に剛とは山阪丘陵の地を云ひ、柔とは海川沮洳の地を云、剛柔皆得とは、山も川も高みも卑みも、何れの地にても皆それ／＼に其宜きを得ておくむことなきは、何を以て如此なれば、地之理なり、地之理とは土地の上に具はる道理なり、前より地形篇行軍篇并に此篇に云へる如く、土地によりて各それ／＼其道理具はりてあるものなり、此道理をよく會得すれば、剛柔皆その宜きを得て、山にても川にても、險阻平地によらず、皆手にあまることなり、

きなり、扱上の條とこの條は、此篇の首より死地則戰と云までは地之理を説き、所謂古之善用兵者と云より下は、政の道を説きたるゆへ、こゝに此兩條を以てこれを結び、剛柔皆得と云ふ皆の字を、一本には相の字に作る、義にかはりなし、

故善用兵者、携手若使一人、不得已也、

善用兵者携手若使一人とは、合戦の上手の人を使ふは、千萬人を使ふも手をとりに引廻して使ふ如く、唯一人を使ふ如くなり、三軍の士百萬の兵士も、力を合せ、心を一にして將の命令を承り、かけ引き一同に齊ひて、悉くに皆勇者なるが如し、是何故なれば不得已也、やむことを得ずとは勢ひの自然にて、如此せざればいやともには叶はぬ勢ひになり來るゆへ、三軍の士百萬の兵、剛なるものも臆せる者も皆一同に如此なり、前の文は軍兵を死地に陥れて、必死の戰をなさしむることを云より、次第にときひろめたる故、こゝに至て又本に歸て、已むことを得ざる勢ひを以て、士卒を使ふことを云たるなり、

將軍之事、靜以幽、正以治、

前に不得已の勢を以て、士卒の餘念の生せぬやうにするを云へるを承けて、是より末は皆大將の作略を以て、士卒を如此に使ふことを云へり、將軍之事は大將のわざなり、總じて物頭已下の諸役人より、下士卒に至るまで、皆それ／＼のつとむるわざあり、唯大將のつとむるわざは、その如くに一事をわが役目としてつとむること、何もなきなり、靜以幽と云は、靜は聲もなく臭もなく、測り伺はれぬことなり、幽とはくらき意にて、くらき所を見る如く、外よりは何とも見るべき様なきことなり、正以治とは、正は正大の義にてきつとたしかなることなり、治るとは軍中の作法でもつれなく、式々に調ひて、前後を取ちがへ約束のあはぬ様なることなきを云なり、測り伺はれぬ所を以て、靜以幽と云ひ、あなどり輕しめられぬ所を以て、正以治と云なり、此注に曹操杜牧は靜なるを清淨の義とし、施子美は恬澹無事の義とし、彭繼耀は無欲の義とす、是皆老莊の意にて武將の本色に非ず、尤古の良將張良蕭何曹參皆老子の意を得、孔明

も澹泊安靜を貴びたれども、それは各々の好むところ學ぶ所によりて、さることあるべけれど、孫子が意を以て見れば、其將の好む所學ぶ所は、何にもせよそれに構はず、唯はかり伺はれぬ所を取て、靜以幽と云たるなり、又正以治と云をも、曹操杜牧は平正と注して、その心の平らにかたつりになく、ろくなるなりと云へり、張預は公正と注して、私なく正しきことと云へり、施子美は守一不變と注して、道理の正しく堅固なることに見たり、是皆腐儒の見にて、又武將の本心にそむく、唯直解に正者嚴厲方持人不敢犯と云ひ、開宗には正大整治使、人不敢犯と云へる説勝れるゆへ、今その意を以て解するなり、孫子の内に正の字の意堂々之陣正々之旗と云へるなど、皆きつとたしかにして犯しがたき意なり、他書の字義を以て見るべからず、下の文の意皆この靜以幽なる所にて、敵に限らず、士卒も將の上をはかり伺ふことのならぬことを云へり、正以治と云意は、下文に見えぬやうなれども、是尤深意ありと知るべし、丈夫にたしかなる所なければ士卒命を用ひず將を畏れずして、わが合點のゆかぬことを將のするをばあなどりて用ひず従はぬ

所あるゆへ正と云へり、軍中の事式々に調ひて手もつれなく、前後を取ちがへ、約束のめはぬやうなることなきに非れば、士卒の合點せぬことをして、進退戦守のわりふ亂れぬやうにはならぬことなるゆへ治と云へるなり、この靜以幽正以治と云六字、まことに將たるもの、能事ここに具れり、

能愚士卒之耳目使之無知

士卒の耳目を愚にすると云は、大將の心事をば士卒には知らせぬことなり、吾がすべきと思ふことは士卒に知らせず、士卒の耳には別のことに云ひ聞かせ、士卒の目には別の事をして見せ、當分かれが納得するやうなることをして思慮了簡なく、何の餘念もなく大將の命に従ふやうにすることなり、軍の勝負は危きことにて、其さかひ間に髪を容れず、明智の人に非れば疑ひなきこと能はず、故に怒に士卒に是を知らせつれば、却て疑ひ畏るゝ心を生じて、其心專一ならず、其心專一ならねば合戦の勝利も覺束なし、是すなほち前の條に云へる靜以幽なることなり、後漢の光武滹沱河と云へる河をわたり玉ふ時は、先へ行

きたる物見のもの還て、滹沱河の水とけ水漲て、たやすく渡るべきやうなしと云、光武さはあるまじとて王霸と云ものを再物見に遣はさる、王霸かへり申すは、水堅くはりつめていと渡りやすかるべしと云、光武さあるべしと思ひつるとて、遂に滹沱河をわたし、難を免れ運を開き玉ふことも、士卒の耳目を愚にする一つなり、聖人も民可使由不可使知との玉へるなり、されどもこの本文は能と云字にころを付けて見るべし、此能の字下の使人不得慮と云までへかゝりて、かくの如く士卒に知らせず、思慮了簡を出させぬことなることを云なり、是上に云へる靜以幽正以治と云に叶へる將に非れば能はざることなり、なまかしこき大將のこのまねをして、士卒に知らせまじきとてするとは、吾が智淺きゆへ士卒見取て却て將の智慧のほどをはかり、將の智の及ばぬ所を見付けて却て其命に従はず、又士卒に了簡思慮をさせず、一向に將の命に異議なく従はせんとては、法令を嚴にして無體に士卒を驅り使ふ、如此しても戦に利なければ、彌士卒の上に従はぬころの長ずる根となるなり、されば士卒を如此なし得ること尤將の器量

に備はる道理なるゆへ、能の字を置たるなり、味ふべし、

易其事革其謀使人無識

其事とは何にても其なすことを云、其謀と云も何にても其なせる計策を云、古來の諸注に、易其事革其謀使人無識とは今までなしたることをしかへ、今までの計策を變じて、別の計策をすれども、何故に如此しかへ改めたりと云ことを士卒の知らぬやうにすると云ことなりと云へり、又一説には、士卒は唯何心なく上の命に従て居て、將の今までの事をしかへ、今までの計策をなしかゆるを士卒の知らぬやうにすることなりと云へり、されども是はかへ改むるに限らず、一切の計策を皆士卒の知らぬやうにすることなるに、かへ改めたる上ばかりに如此云べきに非ず、兩説ともに誤りなるべし、王哲、何氏、張預が説には、始め勝利を得たる事をばせずして、別の計策をする時は、敵も士卒も將の胸中をはかり知ること能はぬなり、故にいつも同じやうなることをせず、ひたものに改め更ふべしと云意に云へり、此説最妙なり、今これに

從ふ、

易其居迂其途使人不得慮

其居とはわが陣處なり、或はわが寢處をも云べし、其途とはわがとをる道路なり、是も時々にはひたもの變じ易へて一様にすべからず、迂其途とは始めは直路をゆきたるものが、今度は又引かへてまわり道をすることなり、すぐ道をとをることもあり、まわり道をとをることもあり、居處も道路も前々の格轍を守らざ、度々に變じかへて、敵も士卒も思慮了簡することのならぬやうにすることを云なり、昔劉裕、朱齡石に命じて蜀の國を攻させられたる時、凡蜀の國へ江南より攻入るには、内水、外水、中水とて三つの舟道あり、初め劉敬宣と云大將を遣はして蜀を征伐ありし時、内水より攻め入り、勝利なかりける、劉裕朱齡石に書付け一通封のまゝにて渡し、蜀の入口白帝城に至りて封を開き見るべし、軍の方便具に此書中にありと命せらる、それより朱齡石出陣すと云へども、三軍の將卒皆いかやうに働くと云ことを知らず、白帝城に至り、封を開き見れば、總軍は皆外水より蜀の都成

都までますますに攻入るべし、臧熹が如きの副將をば、中水より廣漢城へ向け、弱兵をすぐりて大船十餘にのせ内水より向ふべしとあり、斷石すなはち其處分を守り、見せ勢を内水へ遣はし、自身は總軍を率ひて路を急ぎ外水より攻入りけるに、案の如く敵内水へ人數を出し、見せ勢を眞の敵と思ひ、外水中水の兩處をばさまで用心もせざりし故、たやすく成都を攻落したることあり、是の本文の意なり、王皙が注にては、易其居と云を、其居を易にすとよめり、易は平地なり、平地に陣を取ることなり、平地に陣を取るは敵を引付て戰ふべき爲めなりと云へり、尤計の千變萬化する内には、如此き計もあるべけれども、一段の文義に叶はぬゆへ今是を用ひず、又賈林が注には易其居と云は、此方の計を以て敵の陣處をかへさすることなり、迂其途とはこの方の計を以て、直道をとる敵にまわり道をとをらすことなりと云へり、是は二つの其の字を敵を指して云と見たる説なれば、前の條の二つの其の字と碍るなり、故に用ひず、

帥與之期如登高而去其梯、

帥はひきゆるとよむ、之とは士卒を指す、期するとは戰期なり、戰期とは合戰の約束なり、この場所にて如何様に戰へと云ことを士卒に云ひ含め、約束を牒し合するなり、帥與之期如登高而去其梯とは合戰の場所をも仕様をも、始めの内は士卒に知らせず、其場に臨ではかに士卒に合戰の手つかひ、約束を申し合の戰はすること、たとへば高きやねにのぼせて、梯子を引たるが如し、士卒にはかに死地へ押入れられて、わきへ行き處なきゆへ、命をかぎりて戰はでは叶はぬなり、是即前に云へる士卒の耳目を愚にして、其心を專一にする道なり、帥の字を講義にはにはかよみて、率然の率の字に用ゆ、文義穩かならず、直解には將帥と見て大將のことと云ども、前後には將軍と云て、こゝにばかり帥と云こと文例穩ならず、

帥與之深入諸侯之地而發其機、若驅群羊驅而往驅而來莫知所之、

帥の字の義前の條と同じ、發其機とは兵機を發する

ことなり、機とは弩弓の引手なり、發するははなつて弩弓の引手を切てはなつことなり、是軍によき圖よきぐあいを見て、石を千仞の溪へおとす勢を發して、勝負を決することに喩ふ、群羊はむらがるひつじなり、一段の意士卒をひきゐるともに同く敵國の地へ深く攻め入るまで、合戰の仕形を士卒に知らせず、よき圖に臨で、兵機を發して、勝利を一時に決するなり、是を喩るに、牧童のむらがる羊をかりたて、追行くに、或はかり立て、かしこへゆき、或はかりたて、こへ來れども、羊は愚なるものゆゑ何くへゆくこと、云ことを知らず、たゞ牧童のかるまゝにありくが如し、士卒はたゞ將の下知のまゝに何心なくゆきて、今こゝぞと云下知にまかせて、命をすて、戰ふゆへ、是を以て喩とせるなり、昔戰國の時、魏の國より龐涓と云へる大將を遣はして、韓の國を攻めけるに、韓の國より後詰を齊の國へ乞けり、齊の主威王諸臣を召て、後詰をせんかすまじきかと評議ありける時、成侯鄒忌と云臣は後詰をせざるを上策とす、田忌と云臣はこのたび後詰をせずんば韓の國は魏の國に従ふべし、さすれば味方を失ふなり、後詰をせでは叶はぬこ

となりと云、孫臏と云へる臣の曰く、今韓魏兩國の合戰始まると聞て、早速後詰を遣さば、魏國の兵もいまだ戰ひに疲れず、韓國の兵も戰に骨折らぬ内に、後詰に遣はしたる此方の勢魏の兵と戰はん、韓の兵は骨折らずして味方の兵ばかり骨折るべし、是韓に使はるゝと云ものなり、是を以て見る時は、早速後詰を遣はすこと宜しからず、又魏王の思ひ入れ全く韓の國を亡ぼすべき所存なり、然るに後詰を遣はさずんば韓の國忽滅亡せん、韓の國滅亡せば、魏國の勢盛んになりて、吾が方へ取かけんこと治定なり、是を以て見る時は、後詰を遣はさても叶はぬなり、愚存は韓の國と魏の國をあくまでに戰はせ、兩國疲れたらんころほひに後詰を遣すべし、然る時は魏兵の疲れたるに、此方の荒手をかけば戰ひ勝んこと治定なり、韓の國も難儀に及ば、彌この方を重んずべしと評定して、韓國の使には後詰をなしこすべき由を返答して、出陣を延引する内に、韓の國は後詰を待み合戰して、五度勝利を失ふと聞て、田忌を將とし孫臏を師として後詰の軍兵を發す、將とは總大將なり、帥は軍師のことなり、孫臏は刑に逢て足の筋をきられ、馬上も歩行

も叶はぬゆへ、將軍の職に備らざりしなり、孫臏が計にて韓の國にかまはず、まつすぐに魏の都へ攻入ると寵涓聞て、韓の國をうちすて、本國へ歸陣す、孫臏が計に韓魏の士卒はもとより武勇の聞えありて、齊の武士は慮せりと平日侮なり輕んずること、よき方便のたねなれと思慮して、魏國の境へ入りし日は、陣處に十萬の寵をぬらせ、其明日は五萬の寵をぬらせ、其明日は二萬のかまどをぬらせたり、寵涓が方よりもかねて間のものを遣して陣處を伺はせければ、其由を注進す、寵涓喜て元より齊の國の士卒は臆病なりと聞しが、云に違はず、此方の國境に入て三日もたぬに士卒過半本國へ逃げかへり、心安しとて、歩たちの軍兵をば棄置き、騎馬をすぐり道をはやめて追かけたり、日暮れに馬陵と云處をとるべしと孫臏かねてつもれり、馬陵は道隘き難處にて、かたはら險阻の地多く、伏兵を置くべき場所なれば、弩弓一萬張そろへて道の側に伏せ置き、日の暮んころ火を燃すを見れば、それを合圖に弩弓を一度に發つべしと合圖をきわめたり、扱路のほとりの大木のかたぐいを白げて、寵涓死此樹下と大文字にかき置たり、案のこ

とく寵涓日暮れに通りにけるが、大木を白げて文字の見えけるを不審に思ひ、明松をともさせて其文字を讀む所に、弩弓萬張一度に發し、魏軍大きに亂れければ寵涓も自害す、勝に乗て魏軍を攻めやぶり、太子を生擒にす、孟子の内に梁惠王齊と戰て長子を失ひたりとて、孟子に向ひて憤り物語りせられしはこのことなり、是孫臏伏兵に敵を打てと約束せしに非ず、唯火をとぼすを見れば弩弓をはなせと下知したるなり、又韓信が背水糞沙の陣なども、川を後にあて、陣を取らせたりし時、又ほしい袋のはしひを棄てさせ、沙を入れかへて士卒に面々に持せし時、敵も味方も怪みて窺かに笑ふものも多かりけれども、たしかなる勝利を得たり、是皆群羊を驅る意なり、一本に發其機と云下に、焚舟破釜と云四字あり、されば深く敵地に入て、船地なれば乘て來りて舟を焚棄て、陸地なれば朝まで食事を拵へたる釜を打破てすて、必死を示すこと群羊を驅るが如しと云意なり、まぎわにならねば必死を知らせぬ意なり、
聚三軍之衆、投之於險、此將軍

之事也、

三軍之衆は總軍の軍兵なり、聚むるとは殘さぬ意なり、險は危き地なり、投ずとはなげ入るゝ意なり、上の文に云へる如く、士卒に事のわけを知らせず、群羊を驅る如く總軍を殘さず、戦へば生き戦はねば死する危き地へ打ち入れて、專一にはまりて合戦をさすること、これ大將のわざなりと云意なり、前に將軍之事と云へるより是まで、皆大將たるものゝ第一とする務を説けり、大將の第一とする務は、士卒を常山の蛇の如く使ふことなりと云意なり、よく前後の文勢を貫通し味へて、孫子が深意を得べきなり、

九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也、

上の文はみな死地則戰と云へるに付て、戦ひの道は皆將の應にあることを云ひ廣めて、こゝに至て又本に返て九地のことを云へり、上の文に説ける皆九地の常法なり、九地の内一地々々に皆無窮の變化あり、是を九地の變と云、屈伸之利とは屈はかゝむ伸はの

ぶるなり、利は勝利なり、九地の變化さまじくありと云へども、畢竟かゝむとのぶるとの二つなり、易に尺蠖之屈以求信也と云へり、尺とり蠖のかゝむは、さきにてのびんがために先づかゝむと云意、是天地萬物の道理皆かくの如し、日の地中に入るはかゝむ意なり、地中へ落ち下る勢にて朝又地上へ升る、是伸る意なり、秋冬に至て草木も枯れ、天地の氣もしままるは屈む意なり、春夏に至て、草木花さき實のり、生長するは伸る意なり、冬屈するゆへ春發生するも、伸んが爲めにかゝむなり、冬大雪ふれば豊年の瑞なりと云も、冬の陰氣つよければ春の發生厚く盛んなる道理なり、屈することよはければ伸ることよはし、屈することつよければ其勢にて伸ること又盛んなり、人の呼吸を以て云へば、吸氣は屈む意なり、呼氣は伸る意なり、吸氣つよければ呼氣長し、人の歩行するに先きへ出す足は伸る意なり、ふみとむる足は屈む意なり、ふみとむる足なれば先へ伸ること能はず、あとへのふみはり強ければ先へ出す足も遠く伸る、萬事の道理如此にて、屈伸をはなれたる道理なし、聖人の易の一部皆此屈伸の道理を明かせり、細かに體認

して其妙を神悟すべし、合戦にて云へば待つは屈するなり、かゝるはのぶるなり、待中に懸ありて其勢銳なり、おりしくは屈するなり、かゝるは伸るなり、進退坐作の節ありて其鋒とむむべからず、士卒を死地に陥るゝは屈の至極なり、此内より發動する勢百倍のつよみをなすは、屈極りて伸ること猛なる道理なり、屈のあととは伸、伸のあととは屈、屈極りて伸ひ、伸ること極りて屈まる、晝夜四時の循環してやまざるが如く、人の呼吸も環のはしなきが如し、此道理に徹する時は、兵の勢はこの屈伸の二字に出でずして、勝利こゝに備はる、九地の様々なるに付ても、皆それ〴〵の屈伸あるゆへ、九地之變屈伸之利と云へるなり、人情之理とは、人情は敵味方の人情なり、敵味方ともに人なれば、人には自然の人情と云ものありて、その人情の上には具はる理屈伸の二つに超えず、是を察せずして叶はぬことなりと云意なり、即前に云へる甚陷則不懼、無所往則固、入深則拘、不得已則闘と云へる類、皆自然の人情なり、

凡爲客之道、深則專、淺則散、

九地は客戦に限らざれども、段々に淺より深きに次第して、大抵客戦を主として説たる者故、下に九地のとを又述べたために、客戦の淺深をこゝに擧て、其大意を括れり、凡爲客之道とは、總じて旅がけの合戦の道はと云意なり、深則專とは深く敵地へ攻入る時は、其心專一になると云意なり、淺則散とは敵地へ攻入るといまだ淺きときは士卒の心ちるなり、ちるとは心の專一にはまらずちり分るゝ所のあることを云なり、

去國越境而師者、絶地也、

去國とはわが本國を去り離るゝなり、越境とは國の境を越す意なり、師するとは陣を取る意なり、絶地とは絶はたゆるるとよむ、本國と絶えはなれたる地と云意なり、されば一段の意わが本國をはなれ、國境をこえて陣を取るは、皆本國とたえはなれたる地なるゆへ、其心得あるべしと云ことなり、其こゝろえと云は、本國とたえはなれたるこゝろもちにて、心の專一になる様にすべきこゝろなるべし、此外の九地には皆如何様なるを何地と云と説て、下に其地々々にての手當てのしやうを云へるに、是ばかりに手あての

仕様なきは、この絶地と云は、國境を越したるなれば、九地の内の散地を除きて外は皆絶地なり、然れば下の八地の下に説く所、すなはち此絶地の手あての仕様なり、然らば下の八地にて事すむことにて、別にこゝに絶地と云ふことを云すしてもよきを、別して絶地と云名目を出したる意は、八地ともに本國を離れたる地なれば、この絶の字にこゝろを付くべき爲めなりと云ことなるべし、尤古書なれば脱簡もはかり難けれども、此篇は九地篇にて、絶地は九地の數の外なれば、八地を合せて絶地と云とこゝろうべきなり、古來の説に多くは九地の外に別に絶地ありと云へり、梅堯臣は輕地と散地の間にありと云へり、此説は去國越境と云詞にはよく合へども、絶の字の意に叶はず、其上輕地散地の間に又一段立ること、あまり瑣細なることなれば用ひがたし、王皙張預等は、わが國をもはなれ、敵國をも一つも二つも打こして先きへ働くことなりと云へり、絶の字にはよく叶ひたる説なれども、越境と云詞に合はぬなり、境と云字を敵の境を越ると注したれども、境の一字にて敵國の境と見ること蛇足を添へたる説なり用ひがたし、又直

解の一説には、本國と通路のはなれきりたる地と云へり、是等は九地の内の重地圍地のいなれば、別に此箇條を出さずともすむべきことなり、故に今諸説ともに用ひず、司馬法に書親絶是謂絶願之慮と云へり、書は書狀なり、親は親類なり、本國の書狀親類の便宜をも絶ちて、士卒の本國へひかるゝ心を絶つべき爲めの計なりと云意なり、絶願は願をたつとよみて、かへりみるとは本國をかへりみる意にて、本國への心の残ることなり、慮とは計なり、此文を直解にこの條下に引けり、絶地の手あてにはよく叶へりと覺ゆ、

四達者衢地也、

これより下くりかへして又九地を説けり、反覆丁寧の意なり、四達は四方へ通達する意にて、東西南北に外の諸侯の國ありて、往還の道通達する地を云なり、即前に諸侯之地三屬、先至而得天下之衆と云へる意なり、

入深者重地也、

敵地へ深く攻入りたるを云なり、即前に入、人之地、深、背城邑多者爲重地と云へる意なり、

入淺者輕地也

敵地へ攻入ることいまだあさきを云なり、即前の入、人之地、而不深者爲輕地と云意なり、

背固前隘者圍地也

背固とは要害堅固の地をうしろにあつることなり、前隘とは一騎打の細道を前にあつることなり、如此なる地城郭の如くなる地にて、敵もたやすく攻め難ければ、味方もたやすく出ること叶はず、出入の口少なければ、敵よりも其口をさへ塞げば、二重三重に四面を圍みたると同じことなるを圍地と云、即前に所由入者隘、所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者と云へると同じ意なり、

無所往者死地也

前後左右皆塞がりて、わきへ往くべき所なき地は、絶命の地なるゆへ死地と云、即前に疾戰則存、不疾戰

屬は連屬にてつゞき意なり、陣を取るときは、手々の陣屋のはなれぬやうにし、人数を押すときは、前陣後陣のきれぬやうにすることなり、輕地にては士卒の心にはまり付かず、心はまだ浮きたちて居るゆへ、前後にてみ合て相助げざれば心しまらぬものなるゆへ、如此する道理なり、前には無止と云ひ、こゝには連屬する様にせよと云事はかはれども、理は同じきなり、

爭地則吾將趨其後

爭地は要害の地にて、敵より取れば敵の勝利となり、味方より取れば味方の勝利となる地なるゆへ、敵を引出して敵の此地をはなれたるあとへ趨き、奪ひ取るべしと云ことを趨其後と云、敵の此方へ取かけたる後に趨く意なり、趨くとは急にはしりゆく意にていそぎ取かくることなり、前に無攻と云は、敵の地に人数を取り上げて居ば、此方より取かけて攻ることをすべからずと云意なり、是は敵を此地を引出してあとのことなり、事はかはれども道理同じきなり、此條を古來さまざまに注せり、曹操は當速進其後

則亡と云と同じ意なり、四達者と云より是までは九地の内にて五地舉げたり、文を略したるまでにて、別に義理なし、

是故散地吾將一其志

志を一本に心に作る同じ意なり、志と云はこゝろの向ふところあるを云、是より下九箇條は、九地の手あての仕様を云へり、是も大形前にあることなるを、くりかへして云へるは、反覆丁寧の意なり、散地はわが自國の地にて、士卒の心ちりわかれ專一ならぬ害あるゆへ、散地にて戰をせば士卒の志を專一にして、一途にはまり心のちらぬ様にすると云意なり、吾將と云へるは前の文を承けて屈伸の利人情の理に通達したる上は、この九地に於てそれごとくにわが手あてありと云たる文勢なり、前に九地を説たる所は、地の利の上ばかりにて云て、こゝに至て將の上へかけて、地の利と人の情と一なる道理を明せるゆへ、吾と云へるなり、吾とは將なりと心得べし、末の八地皆同じ、

輕地吾將使之屬

と注して、いそぎて後陣をすゝめて、敵より先きに爭地を取るべしと云意に見たり、李釜は趨の字を多の字の誤りと見て、備を益して多くすることと云へり、杜牧はわれ敵より後に至らば、疾く趨りおもむきて此地を争ひ取るべしと云へり、何れも文義穩かならず、今陳俾が説と直解の一説に従ふなり、

交地吾將謹其守

道幾筋も入れ交りたる地は敵より不意に取かくる氣遣あるゆへ、道筋々々へ人数を置きて、敵を押ゆるを守りと云、守りを油断せぬことを守りて謹むと云、前の交地則無絶と云と同じ意なり、

衢地吾將固其結

隣國數箇國へおり合ふ地にては、其國々への交りを親くすることなり、結とは其國々と交りを結ぶことなり、固くするとは敵へ心を通せず、此方への交りの結びの堅固なるやうにすることなり、前の衢地則合交と云と同じ意なり、

重地吾將繼其食

重地は敵地へ深く入りたるを云なれば、兵糧のつゞきを第一とするゆへ、其食物のつゞく様にすべしと云意なり、

圯地吾將進其途

圯地は足場あしき地にて、陣を取るにも又嫌ふゆへ、其道にとまらず先へ進みゆくべしと云意なり、圯地則行と云と同じ意なり、

圍地吾將塞其闕

圍地は敵に圍まれたる如の地なり、敵より必落る道をあけ置くものなり、落る道あれば士卒の心一致せず、落るみちなければ士卒の心一致す、故にその落る道を塞ぐべし、闕はかくるとよみて、まわりを敵より圍みたる時も、又は險阻にて屏風をたてまわしたる如の地にても、一處通路ひらけて、味方の落行くべきやうなる處あるを、物のかけめに喩へて闕と云、それを塞ぎて味方の心を堅固にすると也、前には圍地則謀と云へり、計策をめぐらして勝つは廣きことにて、一言はとき盡し難し、こゝには圍地の手あての中

にての肝要なることを説けり、圍地にての第一肝要なることは、この闕を塞ぐにあり、

死地吾將示之以不活

死地に至ては士卒に必死を知らするより外のことなし、士卒これは必死の地なりと云ことを知て、身命を抛て戦ふ時は勝利あるなり、之とは士卒を指して云、示すとは知らすることなり、士卒に必死の地にて活ることのならぬと云ことを知すると云意なり、前に云へる死地則戰と云と同じ意なり、

故兵之情圍則禦不得已則闕

過則從

是は上の九地の軍法の大意をくゝりて云へり、兵之情とは軍兵のこゝろいきなり、總じて軍兵士卒のこゝろいきは、敵に四方より圍まれていきる場なしと思へば、精力を出してふせきたゝかふなり、故に圍則禦と云、又戰はずしてたゞ居られぬ場に踏みこむ時は、下知なく共よく圍ふなり、故に不得已則闕と云、過と云字は疑らくは過の字の誤りなるべし、事の逼

交不知山林險阻沮澤之形者不能行軍不用鄉導者不能得地利

この條は前の軍争篇に出たる語なり、又こゝに云へるは、軍争も多くは客戰の上のことにて九地も亦しかなり、故に又こゝに云へり、丁寧反覆の意なり、

四五者不知一非霸王之兵也

四五は九なり、總じて數に大數と云ことあり、小數と云ことあり、大數はかけ算なり、小數はまし算なり、大數にて云へば四五二十なり、小數にて云へば四五九なり、こゝは小數にて九つの者と云意にて九地のことを云、この九地の變を一つも知らずして戰ふは、霸王の兵に非すと云意なり、霸王と云は天下の主を王と云、諸侯にてありながら天下の權をとるを覇と云、霸王の兵に非ずとは、天下を一統するとはならぬと云意なり、天下を一統するには客戰をせずして叶はねば、九地の利を知らずしては叶はざる道理なり、

是故不知諸侯之謀者不能預

りて火急なる場に臨て下知する時は、よく將の下知に従ふなり、事のいまだ過らず火急になき場にては、思ふやうに下知をきかぬものなり、事急に逼て危き場にては、人々料簡もつかず度を失ふものなるゆへ、其時に勝利の道をたしかに知てたしかに下知する時は、人々頭燃をはらふ如なるこゝろになりて將の命に従ふなり、此三句も皆前の甚陷則不懼、無所往則固、入深則拘と云へる意なり、屈伸之利人情之理と云へるは是れなり、過則從と云一句古來の注解分明ならず、多くは深く死地に陥る時は將の下知に従ふと云へり、深く死地に陥ることを過ると云へること覺束なし、又直解の一説に、敵兵吾が陣處の前を過ぎとをらば跡につきて追べしと云へり、是は愚將のすることなり、其上軍の法にして兵の情に非ず、非説なり、又一説に其場に臨ては士卒上の下知をきかぬるものなり、事すでに過去て後勝利のあるを見て始めて尤と從ひ同心するものなりと云へり、前後の文意に通徹せぬ説なり、

夫霸王之兵伐大國則其衆不得聚威加於敵則其交不得合

九地の利を知らざるは霸王の兵に非ずと云へるを承けて、九地の變、屈伸の利、人情の理に通達したる霸王の兵のことを云へり、伐大國則其衆不得聚とは、其衆と云は大國の軍兵并に其一味徒黨の小國をさして云、不得聚とは、一處に力を合せて敵對することのならぬを云、右の如なる霸王の兵大國を征伐する時は、其國の一味徒黨の小國も、其國中の軍兵も、一處に聚り力を合せてわれを防ぐこと能はぬと云意なり、是地の利人の情に通達して、屈伸自然の勢を以て働くゆへなり、威加於敵則其交不得合とは、威の加はると云は此方の威勢敵の上におほひかゝる意なり、其交とは其大國の鄰國と一味徒黨の交りを結ぶことなり、不得合とは離れちることなり、我が兵威敵の上におほひかゝる時は、この威にのまれて自然と鄰國一味の諸侯も敵に方人をせず、はなれなく、なるに云意なり、此條を張預は誠の詞と見て、其衆不得聚と云を、わが民のはなれちること、見、其交不

得合と云を、鄰の諸侯われを恐れてわれと交を結ばぬと見たり、其意なればわが威勢をたのみて、妄に大國を伐つ時は、わが國困窮し、民皆上をうらみて其心はなれちり、又わが威勢敵の上におほひかゝる時は、鄰國の諸侯われを恐れてわれと交りを結ばぬと云意なり、前後の文勢と貫かず用ゆべからず、

是故不爭天下之交不養天下之權信己之私威加於敵故其城可拔其國可墮

交りを争ふと云は、天下の諸侯と交りを結び、味方を多くこしらへて、其威勢を以て天下を取んと思ふ時は、敵と争てわれ先きにと鄰國の諸侯に交りを結ぶ、是を天下之交を争ふと云、權を養ふとは天下の諸侯の權をこの方へ取るやうに、計を以て自然に仕かけ、そる／＼と五年にも十年にも威勢のわれにつくやうにする、是を天下之權を養ふと云、信己之私とは鄰國の諸侯の力もからず、合戦の外に何の仕形をもからず、わが一己の兵威を以て思ふまゝに働くこと

なり、のぶるとは抑へ屈めらるゝ所なく、思ふまゝに働くことなり、城を抜くとは城を落すことなり、國を墮とは國を破ることなり、一段の意は右の如の道理なるゆへ、眞實の霸王と云ものは、天下の交りを争て鄰國の諸侯の一味與力の力もからず、合戦より外のことにて、天下の權を取るべきやうに自然としかけて、其勢ひを以て天下を取にも非ず、唯われ一己の合戦の威勢を思ふまゝに施て、其威敵の上におほひかゝるゆへ、敵の城をも自由に落し、敵の國をもたやすく攻破るなり、孫子は合戦の名人にて、其書も合戦の道を説けり、古より合戦の道この孫子の書に出ることなし、故に此條にも外のことからず、專合戦の武威を以て天下を取ること至極とせり、張預が説には、此段をも戒の詞に見たり、天下の交をも争はず、天下の權をも養はず、己が私欲を逞くして威勢敵をおほふたぐひの輩は必滅亡するゆへ、其城可拔其國可墮と云へり、義理はさることなれども、前後の文勢に叶はず用べからず、

施無法之賞懸無政之令

上に將の一心を以て、士卒を一致させ勝利を得ることと云へるを承けて、是より末皆大將の作用を云へり、孫子一篇の中尤肝要なりと知るべし、無法之賞とは法外の褒美を云、賞罰ともは常格にかゝはらず、常法に外れたることに非れば、非常の勝利を得ること叶ひがたし、其内にも罰を以て士卒の心を一致させるは、士卒の心にちりみつくるものなるゆへ、賞を以て士卒の心に勇みを付るには劣れり、故に賞罰ともは格外なるべけれども、本文には無法之賞と云て、無法之罰をかねたり、是罰よりも賞の方にこゝろをよせたる詞なり、されども本文に賞と云ひたればとて、必罰を用ひざるには非ず、無政之令とは、無政は常の政道に外れたる意なり、令とは、號令にて下知のことなり、常の政道に外れたる號令下知をすることを、懸無政之令と云、懸と云は、總じて法度掟は板にかきて高き處にかけ置くゆへなり、吾邦の高札などの類なり、梅堯臣、王哲、張預が注には、時に臨み敵を見かけて褒美をも與へ、下知をもするを無法之賞、無政之令と云と云へり、時に臨てする褒美下知はかりを云にはあるまじけれども、時に臨て褒美下知をする

も格外の一つなり、前方より申し付る下知法令をば、敵より間をつけ置て聞かするものなるゆへ、敵に知らせまじき爲には必時に臨ですることなり、曹操の語にも令不預施懸之と云へり、司馬法には見敵作誓、功行賞と云へり、吳子は北る者に賞を與へ、馬隆は戦はざる前に賞を與へたる類、無法の賞とも云つべし、李愬が元濟を伐し時、出陣をするにいつ方へ向ひ何れを伐つと云ことを云ひ渡さず、諸將いつ方へか旗を向んと問ひければ、東へと答へ、六十里ゆきていつくに陣を取んと問ひければ、其時元濟が居城蔡州へのりこむべしと下知しける、い、無政之令と云べし、

犯三軍之衆、若使一人、

犯の字は用るとよむ、右の如の格外の賞罰を以て士卒を使ふ時は、三軍の大勢も一人を使ふ如なりと云意なり、尤三軍の衆を使ふこと一人を使ふ如なることは、兵勢篇にとける如く、形名分數を以て是を使ふこと、是平生の修煉にありて本なり、されどもそればかりにては士卒の氣を引き立て、非常の功を立てる

ことはなり難きなり、故に時に臨て格外の賞罰を用ることなりと知るべし、

犯之以事、勿告以言、

之とは士卒を指て云、事とは合戦のわざなり、言とは如此するは何故ぞと其子細をかたることなり、士卒を使ふにはかゝれ引けいつくにて如何様にせよと、唯そのわざを下知するまでのことなり、何故にかくの如く働くと云其子細をしらせぬものなり、士卒謀を知る時は必疑を生ず、疑生すれば心專一ならず、心專一ならぬは敗北の本なり、文宣王の語にも民可使由不可使知との玉へり、

犯之以利、勿告以害、

利のあることを云ひ聞かすれば、士卒の心勇み生じて專一になるものなり、害のあることを云時は、心にちみ付くものなり、利害は離れぬものにて、一事の上にも如此すれば勝利あり、如此せざれば害あると云ことあり、其時は其利のあることばかりを云ひきかすべし、害あることを云ひ聞かせて、これくの害

あるほどに如此すべしと下知する時は、士卒の愚なる心には害を恐るゝことつよきゆへ、將の下知し玉ふとをりにするより外にも、別に又この害を逃るべき道やあらんと思ふによりて、疑心生ずるなり、疑心生ずれば心專一ならずして、專一ならぬところ敗北の本なり、故に勝利のすぢばかりを云ひ聞かせて、害のあることをば云ひきかすまじと云意なり、

投之亡地、然後存、陷之死地、然後生、

亡地は滅亡すべき場なり、死地は命を失ふべき場なり、投ずるとはなげ入るゝ意なり、陷るとはふみかふらす意なり、なげ入るゝと云もふみかふらすと云も、皆前方には士卒に知らせずして、今死亡の場所へ士卒を打入れて働かすることなり、然後存とは、如此せざれば滅亡を免れず、かくの如く滅亡の場へ士卒を打入るゝ時は、身命をすてゝ戦ふゆへ其心專一になりて、士卒ことごとく一騎當千の勇力出で、却て滅亡を免るゝことなり、然後生とは如此せざれば士卒命を失ふことを免れず、かくの如く命を失ふべ

き場へ士卒を打入れて、其後士卒の心專一になり、身命をすてゝ働くゆへ、却て身命を全くすることなり、

夫衆陷於害、然後能爲勝敗、

衆とは士卒なり、害とは前に云へる亡地死地なり、三軍の士卒を亡地死地へ打入れて、其後必勝の働き吾が手に入ることを云へり、能爲勝敗と云は、勝はかちなり、敗は敗北なり、かつべきこともまくべきことも此方の自由になると云意にて、畢竟の働わが手に入ることを能爲勝敗と云なり、士卒の一致してよく吾が手につくことは、彼れを死地亡地へ打入れねばならぬことなり、されば勝負の道又この上の一重關なり、故にこゝにも勝敗をなすと云て、下の文に必勝の作用を説けり、是孫子が骨髓なり、前には士卒に害あることを告げずと云ひ、こゝには害におちいると云へり、害あることを云はず知らせずして、害の中へうち入るゝ意なり、是即士卒を愚にして其心を專一にする道理なり、爲勝敗と云は味方勝てば敵やぶるゝゆへ、必勝のことを勝敗と云と直解説約にとけり、又講義には凡そ勝つと云は已に敗れたる敵に勝

つことなるゆへ、敵にかつことを勝敗と云と云へり、皆能爲の二字を會せざるゆへ、如此の僻説をなせり用ゆべからず、

故爲兵之事、在順詳敵之意、并敵一向千里殺將、是謂巧能成事、

これより下合戦の作用を明す、爲兵之事とは或は戦ひ、或は守り、或は進み、或は退き、或は敵を誘き、或は奇伏を用ひなどする如くに様々のわざをすること、是兵家のわざなるゆへ、兵之事と云なり、順詳敵之意とは順はしたがふにて、敵にさかはず敵をうけて敵の思ふやうにさすることなり、詳はつまびらかにするとよみて、とくと念を入れて敵の意ゆきを、見ることなり、一本に詳の字を伴の字に作る、いつはるとよむ字なり、敵の意にうけ順て、伴りて敵をたぶらかすことと云へり、義理はさもあるべけれども文義穩かならず、并敵一向とは、敵の意をひとむきにするることなり、一向はひとむきなり、并するとは動かさ

る敵は、方々へ心をくばりて一向にならぬを、敵を引動かして一方へ向け、其意を方々へくばるをやめさせて、心を一方へよする様にするをあはすと云、たとへば法藏院が十文字の術に八本がらみと云ことあり、八本の槍を對手にして一人にて是にかつことなり、あひての八本のやり奇正を分ちて相助けば、何としてこれに敵すること能はんや、軍もしかなり、敵に動き付きて一向になりたる所、味方の必勝の場なり、故に方々に心をくばる敵を、一方へ其心をよせざるを并敵一向と云なり、一本に敵の字を力の字に作る、其時は力を併せて一向すとよみて、注意は上の句にあるなり、敵之意を順詳してかつべき圖を見つけたらば、擬議思量に及ばず、力を方々へ分たす一所に併せて專一向ふべしと云意なり、是も面白き説なれども、上の句の順詳の二字の上にはいまだたしかなる勝利なければ、并力一向と云は何を目あてに如此すべき、そのうへ下に巧能成事と云へるに相應せず、故に古本の并敵一向と云に隨ふべし、千里殺將とは千里のあなたに居る敵なりとも、取かけて合戦し、其將を殺すこともやすきと云意なり、將を殺すと

云は軍に大勝ちをして、士卒も夥しくうたれたる上のことなり、故に夥しき勝ちのことに云なり、巧能成事とは巧と云はもの上手にて、人のならぬことをして利を得るを云、上手に軍をして勝利を成就したることなり、一段の意は、兵家のさまに、にわざをするは敵のころゆきをよく察して、敵のころにうけ順ひ、敵に進む意あれば進ませ、退く意あれば引かせ、驕る意あればよく驕らせ、畏る意あればよくおどし、とかく何事も敵のするなりにしてとくと敵の情を考へ、勝つべき圖と云はとかく敵を引動かして一方へ引ひけ、一方へさへむけば、こゝに敵の虚あり、この虚を打つ時はたとひ千里あなたに居る敵なりとも、はなしかけて押寄せ、將も討死するほどの大勝利を得ることなり、如此するを上手に軍をして、勝利を全く成就すると云ものなりと云意なり、

是故政舉之日、夷關折符、無通其使、

政舉之日とは軍政舉動之日と云意にて、出陣の日を

云、軍政とは軍中の法度なり、舉動は兵を擧げ兵を動かす意なり、軍中の法度を定め、只今兵を動かして立つ意なり、故に出陣の日のことなるなり、夷關とは關所をふさぐことなり、關所をふさぐとは關所の往來をとむるなり、關所は人の往來する道なるを、是を塞ぎて人をとをさぬは關所をなくする意ゆへやぶると云、折符とは符はわりふにて關所手形のことなり、異國にてはわりふを用ゆるなり、是を折てすつるは是も關所の往來をとむることなり、出陣の日よりは關所の往來をとむると云は、一つには軍中のことは君より、いろひ玉は將に打まかするゆへ、軍中へは君よりの使も將よりの進進もなし、二つには士卒の本國を思ふころを引動かすゆへ、使の往來をとむるなり、三つには本國より軍中へ使の往來あれば、是に雜りて敵の間者來るゆへ、往來をとむることなり、是皆上に云へる如く、千里あなたに勝を見切て出陣するゆへかくの如し、

厲於廊廟之上、以誅其事、

是は出陣のあとにて、在國の君臣の上を云へり、廊廟

と云は朝廷のことなり、廊は回廊なり、回廊作りにか
を作るは君の御坐所ばかりのことなり、廟とは君の
宗廟なり、君の先祖のやしるを云、大事の政道は先祖
のやしるにて沙汰することなり、故に廊廟之上と云
時は朝廷にて政道を沙汰することを云、厲むとは國
の仕置を勵み、精を出して勤むることなり、其事とは
軍の事なり、誅るとは軍の事を將に打任せて、成功
の上にて賞罰を沙汰することなり、一段の意、君は軍
の事にはかまひ玉はず、朝廷に於て政道をばげまし
沙汰して、軍の事を將に打まかせ、その成功の上
に賞罰するなりと云ことなり、

敵人開闔、必亟入之、

是より下將のわざを云へり、敵人は敵なり、開闔は動
靜と云んが如しと注せり、動靜はうごきしつかとよ
めども動きのことを云、開闔もひらきとづるとよめ
ども開くことなり、開くとはすさまの見ゆることな
り、敵にすさまあらは必亟かに其すさまへ入るべし
と云意なり、すさまへ入るとはあながちに合戦をし
かくることばかりにも限らず、わが計を敵のすさま

へ入るゝとなり、すさまなき所をば何ふべき様なし、
すさまのある所これ敵の動きなるゆへ、こゝへ我が
計を入れてこゝより勝を取るべきなり、一説に開闔
とは間者のことなり、敵の間をばすみやかに開闔
とをして此方へ入るべしと、是計をする便りとなる
ゆへなり、是は下の用間篇の五間の内の反間と云は、
敵の間を味方の間に用ることあり、其意を以て云へ
り、されども此一段は合戦のことを云たる所なれば、
前後の文と相應せず、

先其所愛、微與之期、

其所愛とは何にても敵の好む所を云、先んずるとは
何にても敵の好むことをまづ吾が心に氣をつけて居
ることなり、微與之期とは期は約束なり、微かとは
心の内にて人に知らせずひそかにすることなり、敵
のこのむことは何にても是わが勝利の場なり、故に
最初よりこれへ意をつけ置き、人に知らせず心の
中に約束して置くと云ことなり、是すなはち前に云へ
る敵を一向にあはする術なり、總じて人には好むこ
とあり、この好む所にひかれて目もくらみ智も迷ふ

ゆへ、こゝを以て勝利の場と定むるなり、名を好み、
利を好み、酒を好み、色を好み、貨を好むより、合戦の
上にも人々の好む手筋の働きあり、何にても一種
好む手筋ある時は、敗北の道こゝに具はる、敵をばか
るのみならず味方の上をもこゝろつくべきことな
り、一説に微の字をなしと訓ず、其時は其愛する所を
先してこれと期することなしとよむ、此時は先づ此
方より敵の愛する所を取て勝つべし、何それと前方
より約束を定むることなく、臨機應變のはたらきを
なすと云意に見るなり、此説にても通ず、

踐墨、隨敵、以決戰事、

墨は繩墨とて大工の墨なり、定りたるかねのことな
り、軍の法に一定したるかねあるに喩へたり、踐とは
足にてふむ意にて、軍の働き千變萬化すと云へど
も、軍法のかねははづさず、分合進退みなこのかねあ
ひを以てすること、喩へて云は、大工の引たる墨の
上をはこびゆきて、外の處をふまざるが如し、故に踐
墨と云、隨敵とは前に云へる順詳敵之意と同意な
り、我を守る所は踐墨なり、敵を制する所はいかやう

になりとも、敵の意に隨て其虚を見て勝負を一戦に
決するゆへ、以決戰事と云へり、一説に踐の字は刻の
字のあやまりなりと云へり、刻はけづるなり、墨をけ
づると云はすみかねをけづり去る意にて、規矩法度
にかゝはらぬことなり、敵に隨て變化するところ、千
變萬化して一定したるのりなし、故に墨を刻ると云
へり、是賈林が説にて面白きやうなる説なれども、變
化の極意を知らざる説なり、千變萬化臨機應變のは
たらきは、一定不易なるもの主となりて、是を以て千
變萬化するなり、この妙處を明ん爲めに、孫子が墨を
踐み敵に隨ふと云へるなり、規矩法度の上をはこび
行き、千變萬化の妙をなすことなり、故に墨を踐むは
まけぬ位なり、敵に隨ふはかつ道なりと知るべし、

是故始如處女、敵人開戶、後如

脫兔、敵不及拒、

處女はいまたよめ入りせぬ女を云、極めて柔弱なる
姿に喩へたり、開戸とは油断することなり、脱兔はも
ぬくるうさぎなり、兔のはしり出る勢ひ何にてもぬ
け出たるが如し、故に脱兔と云、不及拒とは拒く間の

なきことなり、孫子が合戦の妙この四句に極まる、敵に打ち向ふ始には極めて柔弱にて處女の如なるゆへ、敵あなどりて油断す、その油断の處敵の戸をあけて招く所なり、此方より無理なる戦をばせず、敵の方よりこゝをうてと打ち處をこしらえて渡すゆへ、そこを打てかつなり、その打つべき圖の出たる所を打つことは、脱兎の如く速なるゆへ、敵これを拒くべきひまなし、是亦將も士卒も一致して、形名分數よく熟し、圓轉自在の兵を以て自然の勢ひに乗て發するゆへ、其迅速にして網をもぬくる兎の如く、これをふせぐに度を失ふなり、是戦法の極妙この四句の外さらになし、故に孫子の一部この四句にて終るなり、下の火攻用間の二篇は、合戦の法に非ず、合戦のことは此篇を終とするゆへ、この四句最味ふべきなり、

火攻第十二

火攻は火を以て攻るなり、元來兵は國家を有つもの、好む所に非ず、已むことを得ずして合戦に及ぶことなり、火攻の一事は、其中に就ても又

彌やむことを得ずして用ることなり、その故は火を以て攻る時は、敵の士卒兵糧城郭家居に至るまで、暫時の間に皆のこらす焼盡くして、ちり一つほどのものこることなし、戦勝ちて其國をとりて吾がものとなして見る時に至て、人民のなげき諸品の損亡あげて云べからず、故に名將の合戦には火攻を下策として、せんかたなき時に至て用ることなり、好みてすることに非ず、それゆへ九地篇に深く死地に入りて戦ふ上のことを云へども、少しも戒る詞なきに、此篇には戒の詞丁寧なり、是にて孫子が深意察すべきことなり、

孫子曰、凡火攻有五、

總して火攻の法に五つの品ありと云ことなり、五の品は下にあり、

一曰、火人、

是五火の一つなり、火人は人に火つくとよみて、敵の士卒をやき殺すことなり、力わざにて勝ち難き時にすることなり、

二曰、火積、

是五火の二つなり、積は積聚とよみつけて、兵糧をつみ貯へたる處を云、火積は積に火つくとよみて、兵糧をやきすつることなり、敵を飢すべき爲めなり、或は兵糧に火をかくる時は、敵より必これを拂んとて人數を分くるなり、故に敵の人數を分つべき計にも用るなり、

三曰、火輜、

是五火の三つなり、輜は輜重の車なり、衣服兵具のする車を云、火輜は輜に火つくとよみて、衣服兵具の荷物をやくなり、敵に難儀さすべき爲なり、人數を分くる爲にも用ゆ、

四曰、火庫、

是五火の四なり、庫はくらなり、財寶器物を入れたるくらを云、火庫は庫に火つくとよみて、財寶器物兵具の類を入れたるくらを焼くことなり、上の火輜と同じことなり、敵の人數を押し行く時なれば輜重をやく、城郭に籠り居る時なれば庫をやくなり、意上に

同じ、

五曰、火隊、

是五火の五なり、隊は隊伍にて備立てのことなり、火隊は隊に火つくとよみて、備だてを亂すべき爲に火をかくることなり、前の火人と同じやうなることなれども、火人は勇猛の兵は力わざに殺し難き時焼殺すことにて、その人へかゝるなり、是は人をば殺さずとも其備を亂すべき爲に火をかけて、備立をかきみだすなり、この火隊と云にさまざまの説あり、隊は隊仗なりと注して、兵仗武器をやくことなりと李奎、梅堯臣、張預云へり、それにては前の火庫火輜と同じことなり、そのうへ隊仗と云時は、備を立てたる時士卒の手に持たる兵仗を云なり、手にもちたる兵器をややくべきやうなれば非説なり、又賈林は隊の字を隊の字と通用す、隊は隊道とて、地をほりて兵糧往來の道を作ることあり、是を焼きくつすこと云へり、是又一説なり、杜佑は隊は墜の字と通ず、墜はおとすとよむ、火矢のるいを以て敵の陣屋へおとし入ること云へり、前後の文例と合はず、畢竟は隊の字の義

理、五火の差別、分明に分ち難きゆへ諸説あり、孫子が本意この五火の品は、唯火をかけて敵をやくにさまぐの心得ありと云ことを明したる迄のことにて、五の品は明かになくてもすむことなり、前の九地などの如の肝要なることには非ずと知るべし、又張昭杜佑が五火と云ことあり、火兵、火獸、火禽、火盜、火弩の五つなり、火兵と云は驍騎とて勇兵の騎馬、夜中に枚を銜み馬の舌を縛へ、背に一束の薪を負ひ、懷中に火を持ち、敵の陣所へ近寄りて陣屋へ火をかゝることなり、火獸と云は瓢箪の内に艾と火を入れ、瓢箪に孔を四つあけ、猪鹿の類をとらへ其項にくより付け、敵陣近處の草野の内へ逐入るゝ時は、風に從て火出るなり、火禽と云は雉などのるいを捕へて、胡桃を二つにわり中に艾と火を入れ、胡桃の殻に孔を二つあけて、其胡桃をもとの如く合せて雉の首にくより付けて、是も敵陣近き草野へ追入るゝなり、火盜と云はしのびものに申し付けて、ひそかに敵陣へ忍び入り火をかゝることなり、火弩と云はふくべの内に入火を入れ、矢のさきに付けて弩弓を以て是を射る、矢立つ時はふくべわれて火出るなり、是は後世の

火矢のるいなり、此外にも武備志の内にさまぐの火薬あり、其中の佛狼機鳥嘴銃は今いふ石火矢鐵砲のことなり、其外に神火薬、毒火薬、無敵毒龍神火薬、烈火薬、飛火薬、法火薬、煙火薬、逆風火薬、三火合一薬、一炷香、萬般毒、三十六天罡、水火薬、五里霧、神噴霧、白雲神水、九龍噴水、小神沙、神烟、神火、結烟、青煙、白烟、紅煙、紫煙、黑煙などて諸の薬方あり、烟霧を出し沙石を飛し、目に入り膚に付て忽に潰亂し、或は風に向てもえゆき、或は水中にて彌もえ、或は白雲を出して前後左右見え分かず、或は青黄赤白黒の五色の煙を出し、或は其煙のかゝる處井の水までも悉く毒となる類なり、其器を云時は遠く用るには火砲、火箭、火銃、火彈、近く用る時は火鎗、火刀、火牌、火棍、そのほか宋火砲、威遠砲、百子連珠砲、虎蹲砲、迅雷砲、燒天猛火無欄砲、飛雲霹靂砲、轟天霹靂猛火砲、毒霧神煙砲、鑽風神火流星砲、西瓜砲、造化循環砲、群蜂砲、八面旋風吐霧轟雷砲、六合砲、無敵竹將軍、紙糊圓砲、飛礮砲、荔枝砲、風塵砲、擊賊神機柘榴砲、天墜砲、轟雷砲、鉛彈一窩蜂、飛空擊賊震天雷砲、車輪砲、攻戎砲、葉公神銃車砲、千子雷砲、子母百彈

銃、衝鋒追敵竹發煩、翼虎銃、擊賊砭銃、神威烈火夜叉銃、神仙自發排車銃、大追風鎗、五雷神機、五排鎗、飛刀箭、飛鎗箭、飛劍箭、燕尾箭、神機箭、神鎗、弓射火柘榴箭、火弩流星箭、長蛇破敵箭、群鷹逐兔箭、一窩蜂箭、雙飛火籠箭、二虎追羊箭、五虎出穴箭、七箭箭、九龍箭、九矢鑽心神毒火雷砲、四十九矢飛廉箭、百矢弧箭、百虎齊奔箭、群豹橫奔箭、飛天神火毒龍鎗、梨花鎗、竹火鎗、神機萬勝火龍刀、倒馬火蛇神棍、蕩天滅寇陰陽鎗、飛火降魔鎗、雷火鞭、鏢銃、流星砲、毒藥噴筒、滿天噴筒、毒龍噴火神筒、一把蓮、飛空砂筒、鑽穴飛砂神霧筒、神水噴筒、神行破陣猛火刀牌、虎頭火牌、神火箭、滾毬、引火毬、漢黎火毬、霹靂火毬、神火混元毬、燒賊迷目神火毬、煙毬、毒藥煙毬、平曠步戰隨地滾、風雷火滾、大蜂窠、火妖、天火毬、火磚、火彈、鏢嘴、火鶴、竹火鶴、燕尾炬、飛炬、衝陣火葫蘆、對馬燒人火葫蘆、猛火油櫃、太平車、九牛釜、鑽架、遊火鏢箱、鏢火牀、火龍捲地飛車、衝虜藏輪車、火櫃攻敵車、屏風車、萬勝神毒火屏風車、萬全車、架火戰車、破敵火風鼎、神火萬全鏢圍營、楊風車、鏢汗油車、盛油引火車、行爐、火船、火龍出水、水底龍王砲、八面神威風火砲、飛空滑水神油

罐、既濟雷、渡水神機砲、隔河神捷火龍陣、地雷連砲、合打砲、地雷炸營、自犯砲、炸砲、石炸砲、萬彈地雷砲、無敵地雷砲、穿山破地火雷砲、伏地衝天雷砲、神武點機火箱、鋼輪發火、鋼輪伏火櫃、伏雷砲、太極總砲、隱跡火陣の類さまぐの仕形ありて、玉を飛し石を飛し、沙を飛し、烟をふき、或は刀劍を飛し、矢を飛し、蜂を飛し、鳥を飛し、さまぐの物を出し、或は天に飛し、或は地を走らし、或は地中より發し、或は水中より發し、或は器物の中より發し、都て人の思ひかけぬ所より發し、或は二つ三つ四つ五つより百千の玉を一度に飛ばするい、恰も神變の術を得るが如し、時により事に臨て是を用ひば合戦の一助となるべし、專これをたのみて軍をせんとせば、まことに愚なることならん、或は火の加減制度の違ひにて、敵を燒んとして却て味方をやくこともあり、其上天の時地の利の助けによらざれば、火攻も全き利を得がたし、其方法具さに武備志を考へて、とくと知るべきことなり、

行火必有因

行火とは火攻を用ることなり、因はよるとよむちなむ意なり、何にてもらなむ所なくんば火を用ゆべかず、或は敵方に内通のものあるか、或は日てりついきて世間燥きたる時、或は茅草葦竹木などを積かさねたるあたり、或はかや野の邊など、或は敵の陣小屋すきまなくついき、或は舟戦にて敵舟をもちひて、舳艦ついきたる時に火を用ゆれば利あるなり、故に火を用るには必ちなむ所あるべしと云意なり、

煙火必素具

煙火とは火の道具を云、火の道具とは煙硝、硫黄のるいの火薬、並に油並に石火矢、大筒、其外火薬を用る火器、蕪菟草の類たきつけになるもの、火繩、水明松、總じて火攻に入る道具なり、素具とはかねて支度して置くことなり、火薬火器は時に臨では才覺ならぬことあるものなり、

發火有時、起火有日

發するると云も起すと云も同じことなり、火攻の法を用ること、時日の考へあるべきことを云へるなり、時者天之燥也

夜に三百六十六度四分度の一なり、日のめぐりは三百六十五度四分度の一なり、月のめぐりは天のめぐりに十二度九分度七つ不足なり、それゆへに天のめぐり日のめぐりよりは月はあとへありく道理にて、二十七日五十五刻百分刻の四十六にて、天と月ともとの處に出合ふなり、日と月とは二十九日五十三刻にてもとの處に出合ふなり、懐胎に九箇月を十箇月にするも、二十七日を一月にしてつものることにて、二十七日を十合はすれば二百七十日にて、常の九箇月のつもりなるゆへなり、日と月と出合ふを以て月の大小を定め、月と天と出合ふを以て月のやどりを定むるなり、李奎が注には月の數に日の數を加へて、室宿より順に數ふれば、其日は何の宿にあたること云こと知るゝと云へども、此説にてはあはぬことなり、又今の新曆に二十八宿を日に配當することあれども、是又術家演禽の法にて道理なきことなり、此本文に云へる月のやどりに非ず、月のやどりのことは、天文曆數に通達せねば、そらにてはくり難きことなり、されども大概を以て云はゞ、正月元日を室宿にあて、室宿三丈二尺四寸九分、壁宿一丈六尺三寸四分、奎宿三

是は上に發火有時と云へるをうけて、其火を發する時と云は、天の燥きたるを云と云意なり、天のかわきたる時とは、雨久しくふらず世上の燥きたる時なり、

日者月在箕壁翼軫也、凡此四宿者風起之日也

是は上に起火有日と云へるをうけて、その火を起す日と云は、月のやどり二十八宿の内、箕壁翼軫の四宿にある日を云となり、何ゆへに此四宿にあたる日を火を起すにまさり日とするなれば、月この四宿にやどる日は必風ふくものなる故なりとなり、總じて星に風を好む星あり、雨を好む星あり、雨を好む星は畢宿なり、風を好む星は本文の四宿なり、日は陽精、星と月は陰精と云へり、されば星と月と同氣なる故、月その星にやどれば其はし方を得る道理にて、月のやどり畢宿にある時は必ず雨ふる、本文の四宿にやどる時は必風吹くなり、詩經にも月離于畢俾滂沱矣と云へり、滂沱は雨ふりて大水流るゝ貌なり、さて月のやどり何れの宿にかゝると云は、周天の度數三百六十五度四分度の一にて天體の運すること、一日一

丈一尺五寸四分、婁宿二丈二尺四寸二分、胃宿二丈九尺六寸四分、昂宿二丈一尺四寸七分、畢宿三丈三尺零六分、觜宿九分五厘、參宿二丈一尺零九分、井宿六丈三尺二寸七分、鬼宿四尺一丈八分、柳宿二丈五尺二寸七分、星宿一丈一尺九寸七分、張宿三丈二尺七寸七分五厘、翼宿三丈五尺六寸二分五厘、軫宿三丈二尺八寸七分、角宿二丈二尺九寸九分、亢宿一丈七尺四寸八分、氐宿二丈零九寸七分、房宿一丈零六寸四分、心宿一丈二尺三寸五分、尾宿三丈六尺二寸九分、箕宿一丈九尺七寸六分、斗宿四丈七尺八寸八分、牛宿一丈三尺六寸八分、女宿二丈一尺五寸六分五厘、虛宿一丈七尺零零五厘、危宿二丈九尺二寸六分、かくの如く周天の度數を定め置て、月の行り一日一夜に一丈四尺七寸とつもあり、一時に一尺二寸二分五厘とつもあり、右の周天の度數を次第の如く引おとせば、何れの日の何れの時より、月のめぐり何れの宿にかゝると云と大形は知るゝなり、されども月のめぐり月頭と月末は、次第にはやくなり、月中は次第に遅くなる、是を月行の遲速と云、日月と天のめぐり、一歲十二箇月にてもとの處へ合ふと云へども、少々の有餘不足ありて、それを積

是も上の條の意をくりかへして、敵陣のさはがざる時のことを云へり、極其火力とは、其火の勢力一ぱいにもえさせて其様子を見ることなり、従ふとは其火の變に從て攻入ることなり、可從而從之とは、攻入りて攻めよと云ことなり、不可從而止とは攻入るまじくんば攻ることを止めよと云意なり、攻入てよきと云は、其火力を極め火の勢かぎり燃えつゝのりて上に敵にさわぎの出たるを云、せめ入るまじきと云はかくの如く火の勢ひ限りにもえつゝのりても、敵曾て仰天せず騒かぬを云なり、上の條の待と云意を、此條に極其火力と云へるなり、

火可發於外、無待於内、以時發之、

火可發於外とは、敵の陣内城内に内通ありて火を付るにはあらねども、敵の陣所茅野葦原の近邊か、又陣小屋をくゞりつゞけ、船戰をもやゐたる時など火を付けて焼立たらば、大利を得べき見切りあることを云なり、無待於内とは如此の見切りあらば、内に内通のあるを待つことなく外より火をかくべしと

なり、又一説には内に居る内通のものゝ火をかくるを待ちあはせず、それに構はず外より火をかくべしと云へり、大抵外よりは火をかけ難きものなるゆへ、内通のものに火をかけさすことなり、外より火をかくるに便りあらば内通は待つまじきことなり、又内通によりて火をかくべきと云相圖ありとも、時刻遅なはらば、或はあらはれて敵に殺さるゝこともあるべし、或は擬議して決せぬこともあるべし、然る時は内の火を待たず外より火をかくべし、あらはれて敵に殺されたる所なれば、内通のものはばかりに非ずと思ひて、敵の疑心やまず、是敗北の根なり、内通のもの擬議したる所なれば、内通のものも外の火に驚て内よりもかくるゆへ、其勢猛烈にして敵の亂れ甚し、如此の利あるゆへ無待於内と云へり、以時發之とは、前に云へる天の燥ける時分か、風の出る時を考へて火をかくることを云なり、講義には無待於内と云内を、胸中のことなりと見て、速かに決断して火をかくべし、胸の内にて思慮工夫して時刻を待つべからずと云へり、字義穩ならず用ること勿れ、直解には以時發之と云を、時に應じて速かに火を發す

ると見て、もし遅遲して火をかけざる内に、敵近邊の草野に火をかけて手前をやきはらひたらば、其後は火をかけても何のせんもあるまじと云へり、是は軍にあることなり、敵より風上に火をかけた時、われは風下へ火をかくる時は、敵のかけたる火二町も燃來る時はわが付けたる火又二町も燃ゆくなり、其時その焼あとに陣を取る時は火のつくべき草なきゆへ、敵の付けたる火われをやくこと能はず、この意を以て云へるなるべし、されども以時發之と云一句を速に發することゝ見ること、穩ならぬなり、

火發上風、無攻下風、

上風は風上なり、下風は風下なり、敵の風上に火出たる時、風下へ人数を向けて攻むべからずと云ことなり、敵と同一焚かるべき矢あり、敵一方を火にて塞がるゝゆへ死戰する矢あり、風上より攻る時は風火の勢にのる得あり、

晝風久、夜風止、

是は風の見やうなり、晝吹出したる風はやみ難きも

のなり、夜吹出したる風は止やすきものなり、火攻をなすにはこの考へあるべしと云意なり、張賁が説に、久の字は從の字の誤りなり、從の字の古字は人を二つならべてかくゆへ、久の字に似たるによりて書きたがへたるものなり、晝の風に從へとは、晝の風にはおこらば取かけて攻むべしと云意なり、夜の風には止めよとは、夜の風に火おこらば取かけて攻むべからずと云意なり、そのゆへは夜は伏兵のあらんことを畏るゝ故なりと云へり、信用しがたき説なり、

凡軍必知五火之變、以數守之、

この條は火を以て敵を攻るばかりに限らず、味方に五火の變あらんことを慮て用心をせよと云ことなり、凡軍とは總じて軍をするにはと云意なり、必知五火之變とは、五火の變と云ことありと云ことを知て、油斷すべからずと云意なり、以數守之とは、數は術數にて兵術の總名なり、随分と兵術を盡くして味方を守り、五火の變の起らぬやうにし、又五火の變あるときの手當てをせよと云意なり、前には敵にある五火の變を云ひ、こゝには味方にある五火の變を云

へり、數の字を古來の説には多く箕壁翼軫の星の度數のことなりと云へり、數の字は星の度數には限らぬことなり、

故以火佐攻者明、以水佐攻者強、水可以絶、不可以奪。

是は水攻と火攻の不同を云へり、水火ともに敵を攻る佐なり、たとひ火をかけて焼くべし、水をせきかけて水攻にしたりとて、そればかりにて兵を以て攻めざれば勝利を得がたし、水火は合戦に力を合するものなり、力を合はするを佐と云なり、故に以火佐攻以水佐攻と云へるなり、明かなりと云は火はあかるきものなり、火をかけてやきたつる時は何ほどの大軍なりとも明松に及ばず、然るゆへに味方の人數を見すかざる、失あり、得失ともに明かなる所より生ずるゆへ、以火佐攻者明と云へり、強しと云は水は至て柔かなるものなり、天地の間に於て至て柔なるものは至て強し、故に水よりつよきものなし、川水をせきあげて城を浸し、或はせきたる水を切てはなして敵陣をおしながす、其いきほひ如何様なるこ

とにても是をふせぎと、むることあたはず、是水攻の徳なり、故に以水佐攻者強と云へり、水可以絶、不可以奪と云は、右の如く水は至て強きものなれども、火に劣りたる所あり、水を以て糧の道をたち、或は敵の先陣後陣の間をたちきることとはなるべけれど、敵の兵糧城郭を奪ひ取ることあたはず、火にて焼く時は山の如に積みたるものも一炬に灰燼となる、水は物をなくする徳なし、是水火の異同なり、故に水可以絶、不可以奪と云へるなり、一説に明なりと云を、火攻の法は五火の變箕壁翼軫四星の數明かなりと云へり、迂遠なる説なり、

夫戰勝攻取而不修其功者凶、命曰費留、故曰明主慮之、良將修之。

是火攻の法はやむことを得ずして用ることを云へり、戒の詞なるゆへ語の端を更めて夫と云へり、修其功とは、功はわざなり、戦て勝ち攻めて取るわざなり、水攻火攻のるいを云へし、修とは是をとり行ふこと

なり、水攻火攻のるいは多くの人民を殺し、多くの財物をそこなふ、殊に火の猛烈なること、是に過ぎたるものなし、不仁の甚しきわざと云へし、されども既に軍を取り起すことは、戦て敵に勝ち、攻て敵を取るべき爲めなり、戦ては敵に勝んと思ひ、攻ては敵をとらんと思ふならば、敵に勝ち攻め取るわざをなすべし、不仁なるわざなりとて軍をする上は厭ふべきに非ず、然るに戦ては勝んことを欲し、攻ては取んことを望みながら、火攻は不仁なることなりとて、戦ひ勝ち攻め取るわざをなさざる者は、いまくしきことなり、凶とはいまくしきと云意なり、軍をするほどにて勝利を得ざる時は忽に國の滅亡となるゆへ、いまいましきことなりと云へるなり、命曰費留とは、不仁なることをするを厭ひて、速かに勝利あるべきことをせざる時は、國家の費えを知らず、長陣をして月日を経るゆへ、是を名つけて費留と云となり、費はついでゆるなり、留は逗留の意なり、ひと軍さにも國家の費え人民のなげき夥しきに勝利あるべきことをせずして、長陣逗留すると云意なり、されば敵の人民財物を惜みて、味方の人民財物を費す時は、不仁を厭ふと

云へども、却て不仁の過ちに陥るゆへ、孫子がかく云へるなり、まことに不仁をさらはば、合戦をせずして敵を手につくる道を工夫すべし、すでに合戦をする上は不仁なるわざとて厭ふべきにあらざることなり、故曰明主慮之、良將修之と云は、古語を證例に引たるなり、明主とは徳の明かなる君を云、慮之とは軍を率爾にせず深く思慮を運らして後に軍をすることなり、良將はよき大將を云、修之とは上の文の不修其功と云をうけて、戦勝ち攻め取るわざをすること、云、火攻なども其内にこもるべし、軍をする上には不仁なることをもせでは叶はぬことなるゆへ、徳の明かなる君は妄に軍を興さず、深く思慮を運らさず、又軍の大將を承はる身は軍に勝つを主とするとなるゆへ、良き大將は必戦勝ち攻取るわざをつとめて、不仁なることをもかへりみずと云意なり、古注に修其功と云を、軍功を賞することを云へり、火攻に限て軍功を賞することを云へきに非ず、僻説なり用べからず、今梅堯臣が説に従ふなり、

非利不動、非得不用、非危不戰。

上に火攻をばむさと取り行ふべからざることを云へるを承けて、是より一篇の終りまで、總じて合戦はむざとすまじきことを云へり、始計篇の始に兵者國之大事とかき出したる意なり、孫子が深意尊ぶべし、非利不動とは勝利あるべき所を見切らすんば、靜に守て敵の變を待つべし、妄に働くべからずと云意なり、非得不用とは、得と云はわがものとし吾が手に握りたることとなり、たしかに手に握りたるほどのこととなくんば、水攻火攻を用べからずと云意なり、非危不戰とは一呼吸の間に勝負の分る、危き場へ引きつめて合戦をばすべし、さなければ全き勝ちを得がたしと云意なり、三句畢竟一意なり、

主不可以怒而興師、將不可以以愠而致戰、合於利而動、不合於利而止、

主は主君なり、國の主たる人師を興して敵國を伐つには、五事七計にてとくと目算して、勝利をたしかに見て師をおこすべし、一旦の怒りを以ていくさを

興すべからざるなり、是は出陣の前を以て云へり、將は大將なり、主君の命を承りて其軍の總大將をする人なり、大將たる人は、勝利をたしかに見切て戦ふべし、一旦の愠りを以て戦ふべからず、是は出陣已後を以て云へり、愠とは或は主君に對して鬱憤あるか、或は敵より恥辱を興へられ、それに腹立て、戦ふことを云へり、合於利而動とは、勝利あるべき圖にとくと叶は、動き働くべしとなり、不合於利而止とは、勝利あるべき圖に叶はずんば合戦をやむべしとなり、主君も大將も勝利のあるとなきとに、ころを付けて、軍をして怒愠を以て軍をすまじきことなりと云意なり、

怒可以復喜、愠可以復悅、亡國不可以復存、死者不可以復生、

これは上をくりかへして云へり、怒可以復喜、愠可以復悅とは、腹の立ちたるは機嫌のなざる時節あり、故に一旦の怒を以て軍を起すべからずと云意なり、亡國不可以復存とは、合戦に利を失へば、主君は其國を亡ぼす、亡びたる國はまた再びとりたてら

れぬと云意なり、死者不可以復生とは、合戦に利を失へば、大將は其命を失ふ、死したる人は又再び生きかへることなしと云意なり、勝利を見切らすしてする戦ひを深く戒めたる詞なり、

故明君慎之、良將警之、此安國全軍之道也、

右の道理なるゆへに、徳の明かなる主君は軍を起すことを慎て、妄に軍をおこさず、是國を安んずる道なり、よき大將は戦ふことを警めて妄に戦はず、是軍を全くする道なりと云意なり、されば孫子が主とする所は、勝利をたしかに見切ると見切らぬとにあり、誠に慎むべきことなり、

用間第十三

用間は間を用るなり、間とはしのびのもの、ことなり、間はひまよむすまの意なり、敵のすまより敵の中へ入りて、敵の情を伺ふものなるゆへ間と名づく、一名を諜と云、又細作とも

游偵とも云、總じて軍は敵の情を知ずしては叶はぬことなり、敵の情を知るとは間にしくはなし、されども其人に忠と不忠とあり、其才に用立つと立たぬとあり、其詞に虚實ありて其云へる事の有無はかられず、故に間を用ること軍の一大事なり、趙奢と云名將秦の國と戦ひし時は、秦の間趙奢が軍中に入りしかども、其情を得ること能はず、楚の間高祖の軍中に入りしかども、陳平が情を得ること能はず、されば間はこれを用る人にあることなるゆへ、用間と篇に名づくるなり、

孫子曰、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、內外騷動、怠於道路、不得操事者七十萬家、相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將

也、非主之佐也、非勝之主也、

是は軍に間を用ひざることをそしれり、凡とは總じてと云にて總して間を用ひずして叶はざることを云へるなり、興師十萬とは十萬の軍兵を興して軍を企つことなり、出征千里とは、本國を押し出して千里もあるへき遠國を征伐するなり、百姓之費とは民より出す軍役もやひなり、公家之奉とは公儀の入り目を云、奉は奉養にて軍兵を養ふ兵糧等なり、日費千金とは一日に千金の目かゝるなり、内外騷動とは内は國にのこるもの、外は軍に打立つもの、皆騷動してやすむひまなきなり、怠於道路不得操事者七十萬家とは、古は井田の法にて、八軒の家より一人つゝ兵を仕立て、出すゆへ、のこり七軒の家は國に居り、或は兵糧をはこびて、右一人の兵のもたひをするなり、故に道中をひたもの往來して道に疲るゝことを怠於道路と云、怠とは疲るゝことなり、不得操事とは軍のしたてもたひに勞して、農業をせぬことを云、十萬の軍兵を出すゆへ、國元にて農業をやむるもの七十萬家なり、相守數年以爭一日之勝とは、相守ると云は

十萬の軍兵、敵とにらみ合ふて對陣して居るなり、かくの如く數年にらみあふて居ることは、其内に一旦勝利を得て、敵軍を破んことを欲するなり、對陣は數年にも勝利は一日のものなり、而愛爵祿百金不知勝之情者とは間を使はぬことなり、間のものは其しなにより、或は官爵を興へ、俸祿を興へ、輕きには百金の褒美を興ふ、愛はおしむなり、間の者に官爵俸祿百金の褒美を興ふことを惜みて、間を入れぬゆへ、敵の情を明かに知ること能はぬなり、不仁之至也とは、間を用る時は早く敵の情を知るゆへ、勝利を得ること速かなるに、間を用ひざるゆへ敵の情を知りがたく、對陣に手間をとるなり、對陣に手間をとるほど本國の民の疲れ夥しきこと也、民の疲を考へざるは不仁之至なりと云意なり、非人之將也とは、多くの人の支配をして大將といはるゝ人にてはなきとなり、非主之佐也とは、主は主君なり、佐は輔佐なり、大將は主君の輔佐として全き勝利を得る役なり、然るに其將たる職分を失ひて、主君の輔佐たる人には非るとなり、非勝之主也とは、軍の勝ちは將のする所なり、故に將は勝の主なり、然るに間を用ひずし

て得べき勝利を得ぬれば、此將は負の主にて勝利の主にてはなきとなり、一段の意總じて合戦をするると云は、千乘の國なれば十萬の軍兵を催して、路の千里もあるへき遠國へ働んに、下は百姓のつゐえ、上は公儀の入り目、合ては一日に千金の入り目かゝり、それのみならず國內國外ともに、民百姓騷動して安堵の思ひをなさず、兵糧兵具を運ぶとて國元より軍中までの道中に疲れたはれ、一國の百姓是のみに力を竭して、おのがわざとする農業を營むことを得ざるもの、十萬の軍兵を以て軍をする時は、七十萬軒の家皆かくの如し、如此なる莫大のつゐえ民の難儀をしても、せで叶はぬ軍なればすることなるに、敵の情を知ること又たやすからねば、軍の勝利は一日の戦にて分るゝことなれども、その一日の勝利を得がたきまゝに、右の如の費をしながら、數年對陣に及ぶ、數年の對陣なれば數年の間日に千金を費やし、數年の間七十萬軒の百姓道路に奔走して農業をつとめざるは、まことに國の主となり、民の上にする身にてはいたまじきことに非ずや、間を用ひて敵の情を得る時は軍の勝速かなり、その間を用ると云は、或は官爵

或は俸祿、或は百金の褒美の入るまでのことなり、然るにそれを惜みて間を用ひず、間を用ひざるゆへに敵の情を知らず、敵の情を知らざるゆへに合戦の勝利明かならねば、數年の對陣にて百姓の疲となる、故に間を用ひぬ將は、官爵俸祿僅に百金の褒美を、百姓の疲に思ひかゆるゆへ不仁の至りと云べし、されば仁徳を以て萬民の主となるに不仁なる人は人の將に非るなり、主君は其こゝろつかずとも、將たるものは心付きて主君にすゝめ間を用ひさすべきを、それに味きは、主君の輔佐の臣には非るなり、勝利は大將の職分なるに、速に勝利を得ること能はねば勝利の主と云ひがたし、然れば間を用ひずしては一つとしてよきことなしと云意なり、

故明君賢將所以動而勝人、成功出於衆者先知也、

明君は明智の君なり、賢將は賢才の將なり、動而勝人とは、働くとすれば必敵に勝つことなり、成功とは軍に勝ち功を成就して、敵を亡し國郡を廣くするを云、出於衆とは衆人に超えすぐれ、もぬけ出ることなり

り、先知はさき立ちて其事の來らぬ前より是を知る
となり、一段の意右に云へる如く、爵祿百金の賞を惜
て長陣をし、國を費やし民を勞するは不仁なること
なるゆへ、明智の君賢才の將は働くとすれば必敵に
勝ち、國郡を取り、其軍功を成就するところ衆人にも
ぬけ出るなり、勝負決せずして長陣をすることなし、
かくの如く働くとすれば必敵に勝て、軍功衆人にす
ぐるゝ子細はなにゆへなれば、事に先立ちて其事の
來らぬ前に明かに知るゆへなりと云意なり、

先知者不可取於鬼神、不可象
於事、不可驗於度、必取於人、知
敵之情者也、

前に先知也と云へるを承けて、こゝには其先知する
ゆるんをとけり、取於鬼神とは鬼神の託宣或は卜筮
などにて知ることなり、敵の情を鬼神のつげより取
來りて知る意なり、象於事とは、人事の上にて其事
のすがた面影にて悟ることなり、象はものゝすがた
面影なり、驗於度とは陰陽造化風雲のかたち星月の

めぐりに自然の度ありて、それにたよりて知ること
なり、度はかねあひなり、驗むるとは其かねあひを
覺えてそれにて知るなり、取於人とは人の告る所よ
り敵の情を知るなり、取於鬼神取於人と云二つの
取の字は、見えぬ所より物を取出す意なり、一説に不
可象於事と云へる事の字は、士の字になをして見
るべしと云説あり、講義に其誤りを正せり、一段の意
は右に云へる如く、明君賢將の軍をするとなれば、必
勝利を得て功を成就することは、先立ちて其事の來
らぬ前に其事のいはれを知るゆへに、如此の功を成
就すと云へるを承けて、その先たち知ると云は、如何
様にして知るとなれば、鬼神の託宣卜筮などにたよ
りて、目に見えぬさきのことを知ることともならぬ
ことなり、又人事の上にて、其事のすがた面影にて
悟りしることもならぬことなり、又陰陽の造化、
星月のめぐり、風雲の形を以て、自然の度数を見覺え
て知ることともならぬことなり、唯人のする所云ふ所
より、吾が知を以て取り出して、敵のこゝろゆきを知
ることなりと云意なり、取於人とはすなはち間な

故用間有五、有郷間、有内間、有
反間、有死間、有生間、

是は上に取於人と云へるにつきて、間に五つのしな
あることを云へり、用間とは間を使ふと云ことなり、
右に云へる如く人のいふ所する所より、敵の情を取
出して知ると云は間なり、其間を使ふに五つの使ひ
様ありと云意なり、郷間とは敵の郷民を此方の間に
用ることなり、この郷間を集注本には因間に作る、賈
林が注に因間を讀て郷間となすと云へり、張預が注
には郷間の誤なりと云へり、直解には舊本に因間を
郷間に作と云へり、説約には郷間とあり、開宗には下
の文に郷間可得而使と云へるを擧げて、因間に作る
誤をたゞせり、講義には因間とあり、諸本を考るに、
郷間に作るかた道理も宜しく、下の本文とも合ふゆ
へ今これに従ふ、内間とは敵の内にある人を此方の
間に使ふなり、敵の家來を云べし、反間と云は敵の方
よりさしこす間を、反て此方の間に用ることなり、死
間と云は此方より遣はず間を、敵に殺させて用に立
ることなり、生間と云は此方より遣す間の、生きてか

五間俱起、莫知其道、是謂神紀、
人君之寶也、

へるやうにすることなり、
五間俱起るとは右に云へる五つの間を一度に使ふこ
となり、張預が注には五間を循環して用ゆと云へり、
しかし違へるにや、尤同時に五つの間を皆用ゆるこ
ともあるべし、循環して一つづつ用ゆることもあるべし、
又二つ三つ用てのこりを用ひぬこともあるべし、本
文の主意は畢竟間を用て敵を伺へども、ひたすらに
間のいふ詞を信用するに非ず、方々の事を合せて、間
のいふ詞の實否を考へ、この間の云ふ詞を以て外の
以てわざを考へ、あれこれとする内に敵の情を全く
知るなり、たとへば醫者の病人の腹の内を知るには、
望聞問切の四つあり、望は顔色を見て知るなり、問
は病證を問て知るなり、聞は聲をききて知るなり、切
は脈をとりて知るなり、この内一つを用ることあり、
二つを用ることあり、三つ四つを皆用ることあり、
四つながら皆用ひずして知ることあり、畢竟

この四つを以て知ることなれども、あながち此四つに泥み拘はらず、間を用て敵情を知るもその如くなることなりと知るべし、莫知其道とは、敵の情をはかり知るを敵の方より如何様にして知られたり云ふ、その道すちを知らぬなり、是間を用ることの上なる人のすることなり、是謂神紀とは、右の如にして敵の情を知ることとを贊美して云へるなり、神紀と云は紀は法なりと見たる説もありて、敵を右の如く用ひて敵の情を知るは、神妙なる法と云べしと云意に云へり、直解には紀はしるすとよむ字なり、鬼神のあらはれ出で、かきしるしたる如く、不思議なる意を云と云へり、賈林は紀は理なりと注して、神妙なる道理と云へり、説約には紀は條理なりと云て、ものすちみち分れてあることなり、間を用て敵情をはかり知るところ、神妙なるに似たりと云へども、神變不思議にも非ず、其道理のすちみち明に分れてあることなりと云意に云へり、何れの説にても通するなり、大義の關かる所に非れば、何れなりとも心次第に取用ゆべし、紀の字を一本に絶の字に作るは誤りなり、直解、講義、説約、大全、武經開宗、武經通鑑、軍行紀略

何れも紀の字に作る、人君之寶也とは、この間と云ものは敵の情を知る道にて、敵の情を知る時は久しく對陣すべきをも、速かに勝負を決して國家の疲れとならず、されば君たる人の寶とするところなりと云意なり、

郷間者因其郷人而用之

是より下つぶさに五間を説けり、この郷の字も亦因の字に作りたる本あり、今郷の字に従ふ、解上に見ゆ、其郷人と云ふ其の字は敵を指す、郷人は郷民なり、因とはちなむ意なり、敵の郷民は敵の國中のものなるゆへ、敵の内外虚實をよく知て居るものなり、されども敵國の人なれば、吾が用には立ちがたし、因ると云字にこゝろを付べし、郷民は敵の官祿をうけたるものに非れば、義心はすくなし、只よく恩澤を以て撫で養ふ時は、恩になづきて敵の虚實をわれに告るなり、賤きものは當分の金銀布帛にまどひ、或は始終その國を治めたる時、民の爲めになるべき君と思はせ、或は又當座の威を以ておどして云はせなどするなり、是郷民の欲心にちなむか、或は郷民の義心なき

所になむかする意なり、或は郷民の内に、時を失ひたるより士のかくれ居たるなどあるべし、その如くなる人は才能をあらはし官祿をも得たきこゝろあるものなるゆへ、其名聞の心に因みて是を用るなり、彼れにある所にちなみて取用する時は、皆この方の用に立つなり、昔後漢の光武の大將に岑彭と云人、秦豊と云敵を伐し時、敵陣強くして輒く進むことを得ず、徒らに數日を送りしことありしに、岑彭夜中に總軍に下知して、明朝秦豊を打つべしと云ひ、敵方より生どりのもの一人をとりにがしたる様にして返しけり、かの生どりのもの秦豊が方へ歸て、明朝とりかくべきと云ふ支度専らなりと具につげれば、秦豊さかよせにすべしと人數を出す、岑彭引ちがへて別陣を攻て大にやぶりしことあり、又晋の祖逖豫州の刺史となり、雍丘と云處に城を構へて居たり、この時大亂の後にて盜賊國內にみちみち、みな人數を聚め、陣城を取りたて、敵へも味方へもつかずして居たり、是を其時の詞に塙主と云、この塙主とも内に前方より人質を遣はして置たるものもあり、祖逖恩信を施し、禮義を厚くせしかば、人皆こゝろをよせける時、塙主

どもの内に人質を敵方へつかはし置たるものは、敵味方兩方へ従ふべし、敵方に人質を置たることなれば、一向にこの方へ従はし人質を殺さるべしとて、時々遊軍を遣はして、其陣のあたりを偽て亂妨などをするまねをして、此方へ志を通せぬと敵方に思はする様にしたりけり、諸の塙主みな是を感じて、敵の方便はかりごとを見及び聞及ぶにしたがひ、皆祖逖に知らせたりけるゆへ、戦ふごとに勝利を得たりしことあり、又西魏の韋孝寛と云もの、齊の國を攻めける時、金銀布帛を齊の國の郷民に與へ、ひそかに恩信を施しければ、敵の虚實を悉皆しらせけり、韋孝寛が下の大將に許益と云ものありしが、一城をあづけ置たるに、許益城兵ともに敵へ降参したり、孝寛大に怒て忍びを遣して敵方の郷民へかくと知らせければ、暫時の間にかの許益が首を打て、郷民の方より贈りたることあり、此類みな郷間の益なり、

内間者因其官人而用之

其官人とは敵の官人なり、官人とは役員のことにて、祿あるものは皆役あるなれば、敵方の士を云ふべし、

羅尙が方の軍兵火の手を見て攻め来るをば、伏兵を設けて撃ち破り、軍大利を得、それより李雄が子孫五代まで蜀の國を治めたり、是又内間を以て却て敵をわざむく計なり、

反間者因其敵間而用之

是は敵より間をさしこす所にちなみて、それを此方の間に用るなり、或は敵の間に厚く賂ひを興へて、そのもの心を傾けて此方の用に立たせることもあり、或は其間を留め置て返されば、彼れが勢窮まり計盡きて、其實情を云こともあり、或はこれは敵の間なりと云ことを知らぬ様にもてなし、其間に來る人にもしすましたりと思はせ、兼て敵をたばかるべしと思ふことをして見せて、その間をだまし本國へかへして、あらぬことを云はすることもあり、其方便さまぐあるべし、とかくに敵の將智あるに似て愚かに、間を深く信じ、間に泥む所あるに此計用に立つことなり、昔楚漢の戰に、高祖滎陽城に於て項羽に圍まれ難儀し玉ひ、滎陽城より東をば項羽へわたさんと云て和談を乞はれしかども、項羽き入れず、其時諶

軍の尉陳平、まへかた項羽に事へて項羽の人となりを知れり、項羽は人を氣遣ひ、人の武功をそねむことありて、讒言を信用する人なりとて、高祖に申し、黄金四萬斤を以て反間を行ひける、項羽の間のものどもに金をとらせて、范增、鍾離味を讒言させせたり、項羽果して兩人を疑ひ、滎陽城へ使者をさしこされたることありしに、漢の方にて太牢の滋味を以て馳走しけり、馳走にかゝりたる役人、後に項羽の使とさきて仰天したる體にて、料理にはかに粗相になる、范增の使なりと思ひしに、項羽の使なりと云ふこと内證にて聞えければ、使者大に腹立て、本陣に歸り項羽の前にて范增を讒したり、范增かくとは知らず、急にこの城を攻落すべしと云けれども、項羽用ひず、遂に軍にまけたること陳平が反間の力なり、又趙奢が秦の方の間のものに、よき料理をくはせて誑かしたることもあり、又燕の樂毅昭王の命を銜て齊の七十餘城を攻落し、莒即墨の二城残りたる時、昭王薨じて惠王位に即きたり、齊の田單即墨城にありしが、反間を以て燕の方へ云はせけるは、齊の愍王も生害あるに、莒即墨を落さぬは樂毅齊の地に留まりて齊王となる

べき心根にて、落しもたらぬ莒即墨を、わざと落さずして月日を送るなりと、燕の惠王の耳へ吹入れしかば、惠王げにもと思ひ樂毅をよび返し、騎劫と云ものを樂毅が代りに向けられける、田單又反間を以て降兵を殺させ、城中の者どもの先祖の墓を掘出させ、士卒の怒に乗じて燕軍を攻め破り、七十城を取り返へせしも反間の力なり、又宋の世に王荆公新法を取り立て、天下萬民のなげきを生じ、程明道、程伊川、司馬溫公などの賢者、東坡兄弟などの才人を貶謫せしより、賢者才人をば皆徒黨のものと名つけて、小人朝廷にみち／＼たれば、契丹のるびす其隙を伺ひ、汴京の都を追落し、徽宗欽宗の二帝を生どりにし、宋帝は九州の内僅に三州を領して江南に栖み玉ふ、こゝに至て王荆公が餘黨みな小人なることを悟て、君子又世に用られ、宗澤、岳飛、韓世忠、張俊など云へる名將忠義の志をふるひ、忠臣義士齒がみをなして怒り、合戦數度の利を得て、恢復の功をなさんとする勢ひ見えしかば、契丹の帝ときの勢ひを考へ、いまだ南朝のいきはひ強ければ、合戦をやめて二十年過るを待ち、忠臣義士の勇氣のきはひぬくる時節に、一舉に功を成

すべしと思へどもせん方なかりし處に、秦檜と云もの、宋の方の士にて才智辯舌のものなりしが、契丹の方にとらはれてありけるを尋出し、密詔を下して南朝へ遣はしけり、秦檜敵にとらはれて中々歸るべきやうに非れども、やう／＼と敵をたばかり逃來ると稱して、再び宋帝に仕へ云ふ處する所、まことに忠義才智兼備のもの見えけるゆへ、段々に立身して宰相の位に備はり、天下の政を執行ふ、かねて契丹の帝と約束せしことなれば、和談の謀をめぐらし、宗澤李綱、岳飛以下の名將忠臣、其外にも和議を破る輩を悉くに或は殺し、或は貶謫し、南北二朝の和談になるやうにして年移りければ、後は合戦の沙汰を云ものもなくなりて、宋朝ひたものに衰微したるも、是又反間の術の巧なるものなり、

死間者爲誑事於外令吾間知之、而傳於敵間也

誑事とはいつはり事なり、敵をもたばかり、味方の間をもたばかりのべきことなるゆへ誑事と云、爲誑事於外とは、内には是を用ひねども、唯外むきを如此す

るゆへ、外になすと云、令吾間知之而傳於敵間也
とは、右の如くなる誑事を、わが間のものは是を知て、
是を敵の間のものに云ひ傳るゆへ、敵の間のもの本
國に歸て敵將に告るを、敵將は誠と思つてわが計に落
るなり、是間の者は大形はいやしきものなり、故に其
心信じ難く、又近世に所謂すつばと云もの、たぐひ、
相互に其なかまありて敵の間とも内證親切なるもの
なるゆへ、吾が方の間の者までをもちます時は、吾が
方の間の者眞實と思つて、敵の方の間に告るゆへ、敵は
いよく信するなり、其後この方の仕形と、かの敵方
の間の云たる詞と相違するゆへ、やがて其間の者は敵
に殺さるゝなり、故に是を死間と云なり、されどもこ
の死間は是ばかりに限らず、吾が方の間のもの、直
に敵方へゆきて其心に眞と思ふことを白狀するに、
其事いつはりなれば敵に殺さるゝも死間なり、又和
談の使を敵へ遣し油断させ、其使の歸らぬ内に取り
かけ打破る時は、敵怒て最前の和談の使者を殺す、是
も死間なり、皆是死間なれども、本文には敵の間を殺
さするとかきたるは、味方の間を殺させ、味方の使を
殺さすることは不仁なるやうに聞ゆることなるゆ

へ、教になり難きによりて、孫子が詞をまげてかき
て、讀む人のこゝろを以て會得するやうにしたるな
り、昔漢の高祖、齊王を亡さんと思ひ玉ひ、酈食其と云
へる辯説の士を使者にして和談をさせられたる時、
齊王同心して國境の軍兵を本城へくり上げた隙を
伺ひ、韓信とりかけて手もなく踏つぶしければ、齊王
怒て酈食其を釜にいりし、遂に滅亡せり、是高祖は酈
食其を死間に用ひ玉へり、又唐の太宗の時、唐儉と云
ものを突厥へ使に遣はし、和談の義をとりつくりひ
しに、唐儉が歸らぬ内に李靖とりかけて大に突厥を
破りしゆへ、唐儉殺されしも死間と云つべし、又宋の
世に西夏のるびす勢ひ強かりければ、曹大尉が謀に
て死罪のもの、命をゆるし、髪を剃り僧とし、一封の
書を丸め、上へ蜜蠟をかけこの僧に吞せて遣放し、西
夏國へ遣しけり、西夏王やがて拷問させければ、かの
僧蠟丸を吞せられたることを白狀す、即ち下しの藥
を吞せければ、詞の如く蠟丸を下す、蠟丸を破れば内
に一封の書あり、ひらきて見れば、西夏王の國政軍法
の相談のあひてになる臣に、宋帝より下さるゝ詔な
り、西夏王大に怒て、彼臣と僧とを誅せり、智謀の臣

をこの方の謀を以てうたせたるゆへ、西夏の勢ひ衰
へたりしも死間の力なり、

生間者反報也

生間とは此方より遣はす間のもの、生きて返て敵方
の事をくはしく見聞きて注進するを云なり、報する
とは告ることなり、是は内明かに外は愚に、形は劣り
て心は勇に、或は繪をかき或は算數さまゝの鄙し
き事までに通達して、飢寒をもよくこらへ、恥辱をも
よくこらへ、足も達者に路も早く、辯説もすぐるゝも
のを用るなり、敵の方の高官大位にて、権を取り一方
を固むるほどのものとねんごろなるものなど、尤用
に立つことあり、或は巫、山伏、出家、町人、醫者、藝者
などに仕立て、遣はし、或は直に使者にしたて、遣
はするい、歴代そのためし多し、昔南宋の時契丹へ使
者を遣したれば、其使者を馳走ありて、馳走の座敷に
屏風を立て、あり、其屏風南宋の都金陵の地圖なり、
それに立馬金陵第一峯と云句を題してあり、かの使
者舌をまきて歸り、このよしを奏聞せしに、宋朝のも
のども皆敵の計の神妙なることを畏れて、彌合戰を

するこゝろなかりき、是も前方契丹よりの使のもの
ゝ中に繪かきの上手と、算數の上手來りて、金陵の地
形を覺えて歸り、繪圖に仕立て、合戦のてあての助
けとし、又敵をおどす計ごとせることにて、生間に反
間を兼たるなり、總じて五間は分て云時は五なれど
も、相互に用をなすこと前に云へる如く、五間俱起莫
知其道これ名將の妙用なり、李奎が太白陰經には
三行人と云ことあり、行人は使者なり、一には敵國の
行人來りてわが國を伺ふに、賂ひを與へてあらぬこ
とを云はするなり、二つには敵よりはしりこむ者に、
官符俸祿を與へて敵のことを云はせ、其詞合へばよ
く使ひ、合はねば誅するなり、三には吾が行人を敵國
へ遣はし、敵國の君近習のものより、執權大將分のも
のなどまでの人がらかたぎ、智勇の有無を伺はせ、土
地の要害までを伺はするなりと云へり、總じて五間
三行人の數に用處なし、よく間を用る意を會得せば、
何もかも皆わが間になるべきことなり、

故三軍之事、莫親於間

右の如き道理なるゆへに、三軍の内に於て、副將より

以下その司どるわざ様々ありと云へども、其さまさまのわざの内にて、間より親しきものはなしと云意なり、親しきと云は身にする意なり、大將の身にすべきものに、間に過ぎ超えたるはなしと云意なり、身にすると云へばとて、間にはだをゆるせと云ことにてはなし、軍の勝負は敵の情を知るとしらざるにあり、敵の情を知ると知らざるとは間の用ひやうにあり、されば軍中第一の大切なること、是に過ぎたるはなし、吾が手足とたのむ臣子の如にする士卒をも、或は死地におとしいれ、或はだまし欺き、或は餌にかひ、是を使ふこと、芻狗の如くせざれば、軍はならぬことなれば、間とてもその如くなれども、大將直に間の云ふ口を聞き、帷幄の中へ召て事を云ひふくめ、随分とねんごろにせざれば、唯一人敵中へ遣すべきもの、よく眞實を盡し忠節を勵むべき様なし、故に間より身にすべきものはなしと云意をかゝ云へるなり、一本に事と云字の下に又親の字あり、三軍之事親しきこと間より親しきはなしとよむ、義にかはりなし、

賞莫厚於間、

恩賞を興ること又間より厚き恩賞はなしと云意なり、命をすて、敵地へ入るものなるゆへ、恩賞を重くせざれば反て敵の金銀にめて、敵の方へこゝろをよせ、いつのまにか敵の間になるものなり、事の害を以て云時はかくの如し、又そのもの、志を以て云時は剣戟を以て戦ふは、味方をたのみ、剣戟をたのみ、大將のさいはいをたのみ所あれば、勝れたる勇者にても一己のはたらきに非ず、間は獨身にて前後を知らぬ敵中に入て、よく事を成就して歸るところ、志と云ひ、勇と云ひ、拔群のはたらきなり、又功を以て云時は、軍の勝負國の存亡、皆間にあることなり、故に恩賞を興ること間を第一とするなり、されども其事にも輕重あるべきゆへ、一切の間を云には非るべし、尤今時のすつばの類を云には非るべし、

事莫密於間、

軍中一切のこと間より隱密なるはなしと云意なり、往くより歸るまで一毫も其事を泄す時は、却て死罪に行ふべし、將の口より出で、間の耳に入り、間の口より出で、將の耳に入り、一點も外人は聞くこと能

と知るべし、

非仁義不能使間、

はす、是至極の隱密なり、一本に密の字審の字に作る、審はつまびらかとよむ、念を入ることなり、間より大切なるものはなきゆへ、念を入るべきこと、是に過ぎたるはなしと云意なり、是にても通ずるなり、
聖は聖德のことなれども、作者を聖と云の聖にもあらず、たゞ事に於て通せざることなきを聖と云の聖なり、然れば通明の義なり、通明はとをり明かなりとよみて、ぬけとをり見えすきて曇りなき智慧を云、知は智慧にて思慮のあつきことなり、ぬけとをり明かにて、しかも思慮の厚き人に非れば、間をよく取用ひて用に立ることばならぬとなり、間の云ことを一向に信じ用る時は、却て敵の反間に欺かる、間の云ことを信せざれば間はいらぬことなり、間をとり用て用て立るところ、全く大將の明智にあり、故に聖智に非ればならぬことなり、施子美は人の心測り難し、人を知るを聖智と云へり、間に遣す人の心を知ることなり、是も聖智の一端なれども、こればかりには限らぬ

將たるものに仁義の徳なき時は、人の心をつぶことならぬゆへ、間を使ふことならぬなり、仁を以て恩を施し、義を以て人の義心をはげます、深く將の恩に感じて義心ふるひ起る時は、命を塵芥よりも輕んじて君の用に立つなり、されば仁義に非れば、間にゆくも、吾が精力を盡し勵む所うすきゆへ、功を成就すること難きなり、尤軍をするに士卒を用ひ、士卒を使ふことも聖智を以て用ひ、仁義を以て使ふことなれども、間は獨身にて不測の敵に入るものなるゆへ、外に間の心をつぶて長く味方となすべき道なきにより、取りわけて間の上にかく云へるなり、使と云字を武經開宗には用の字に作る、七書、白文集解、講義、直解、説約、正解、武經通鑑、武備志に皆使の字に作る、そのうへ上の條は、通明の智を以て間をとり用ひて用に立ることを云へるゆへ、用の字的當なり、こゝは仁義を以て間の心をつぶ時は、間よくわれに使はることを云へるゆへ、使の字的當なり、用の字は將へ

かけ、使の字は間へかけて云へる詞なり、
非微妙、不能得間之實。

微妙は淵微なり、ふかくかすかなることなり、妙は細妙なりこまかにたえなることなり、もの深くて見えにくくかすかに、又きはめて細かなることを云、將の智かくの如く、微細なる所、ふかくかすかなる所をよく察するに非れば、間の眞實を得ることならぬなり、間の眞實と云は、間のもの反て敵に使はれて偽りを云ことあり、褒美をとり金銀を取てえりわりと遠國へゆき、事成就せずして歸るは面目なくて、自分と偽て云ことあり、又間の心に如在もなければ、將の心微細ならざれば、心得たかひにて眞實を失ふことあり、とにかくに將たるもの、智慧ふかくかすかに細かなるまでもゆきわたらねば、間を敵中へ遣はして其實用を得がたきなり、

微哉微哉、無所不用間也。

微哉々々とは將の智の淵微細妙なるをほむる詞なり、扱も微妙至極なることなるかな、一切のこと何事

にても間に用ひぬと云ことなきは將の智にあることなりと云意なり、無所不用間とは、敵地よりわがもとへ往來する人は、よしもなき田夫山賊木こり、獵師商人のたぐひは勿論なり、總じて目に見ること耳に聞くこと、空吹く風、谷の流、鶏のなく聲、犬の吠る音までをも、名將は是を間に用るなり、あながちに人を選みに間に申し付けて遣すばかりには非ず、是微妙淵の智ある人は、事々の上にて敵情を悟り、事々の上にて敵を計るゆへかく云へるなり、古來の注には何事によらず、事々に間を使ひて知ると云へり、知る所は敵情なり、何そ事々をしることを求んや、敵情は知り難きもの、極りたる間に限らず、一切の上を皆間に用ひざれば明かに知ること難きなり、この道理を劉寅が語に食息起居、何殊對壘、聲言笑貌威可藏機と云へり、まことに戰國の時はわが左右に敵の間ありと知るべし、前の三軍之事と云より是まで間の總論なり、

間事未發而先聞者、間與所告者皆死。

必索知之。

間の事いまだ發せずとは敵國へ間を遣はして、其間歸ていまだ將へ其事を注進せざる已前を云、先聞ふるとは、間のいまだ注進せざる已前にわきより其事のきこゆることなり、間與所告者皆死すとは、其間に行きたる者と、間よりききたる人と、何れも皆死罪に處することなり、所告者とは間に云ひきかされたる人を云、前に云へる如く、事莫密於間の道理なるゆへ、間は事の泄るゝを嫌ふなり、故に事をもらす時は泄らせる間も、聞たる者も死罪なり、間を死罪に行ふは泄したる咎なり、間よりききたる人は間をだましてききたるとがなり、或は間をだまして聞かずとも、外へ又云ひふらすべき氣遣あるゆへ、是を殺してそれきりにして止めて、わきへ流布させぬなり、一本に間與所告者と云へるを、間與所告者に作る、きく者と告たる者と云意にて、此時は所告者と云を間のことに見るなり、

凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將、左右謁者、門者、舍人之姓名、令吾間

軍之所欲擊とはわが打んと思ふ敵軍なり、城之所欲攻とは、攻んと思ふ敵城なり、人之所欲殺とは殺すべきと思ふ人なり、守將とは其城を守る將なり、左右とは左右に召仕ふ近習のものなり、謁者は奏者役なり、總じて取次きをする者を云べし、門者は門番なり、舍人は守舍之人と注して留守居なり、一段の意總じてうたんと思ふ敵軍にても、攻んと思ふ敵城にても、殺すべきと思ふ敵將にても、其敵將の近習のもの取次きをするもの門番留守をするもの、假名實名を、必前方よりとくと知り置くべしと云ことなり、令吾間必索知之とは、もし是を知らずんば此方の間に申し付け、是非とも是をとくと尋ね求めて、知て置かす様になすべしと云意なり、軍中にて計の爲に、いと多きなり、昔楚國より令尹子反を大將として、宋の國を攻めたる時、宋の大夫華元と云もの、ひそかに寄手の陣にしひ入り、夜中に令尹子反がふしたる床の上へ上りて物語りし、寄手を引せたること左傳にあり、杜預が注に、孫子のこの文を引て、軍の法に如

此することなるゆへ、華元この法を用ひて楚の陣中へ忍び入りたりと云へり、上の條とこの條とは、間を用る上に付て必入用のことを云へり、

必索敵間之來間我者、因而利之、導而舍之、故反間可得而使也、

是より下は五間の中に反間尤肝要なることを云へり、此條はまづ反間の使ひやうを云へり、必索敵間之來間我者とは、總じて軍には必敵の方より間をさしこし此方を伺はしむべし、是を敵間之來間我者と云、是非ともにそれを尋ね出すべしと云意なり、因而利之とはかの敵の間を尋ね出して、彼が好むことに因みて、かれに利得を與ふべしと云意なり、導而舍之とは宿所を申付ることを含すと云、かねて役人を申付けおきて、如此の者を尋出しては、面白可笑く道をつけて、彼が宿を取て逗留する様にするを云へり、故反間可得而使とは、如此するゆへに敵方の間を此方の役に立るにより、是を反間と云ふことにて、

反間を使ふことを得ると云意なり、一段の意は軍をするには是非ともに敵方の間のわが方へ來りてわれを伺ふものを探ね出し、かれが欲することにちなみてかれに利得を與へて、彼れが心を惑はし、おもしろおかしく道をつけて、彼が逗留するやうにしかけて、彼が様子でいたらくを伺ふべし、日數を経させねば様子のはれぬことあるものなるゆへ、宿を申付けて逗留するやうにすることなり、如此するゆへに、反間も此方の用に立て、つかはるゝなりと云意なり、直解の一説に、導而舍之と云を、みちびきて是をすつとよみて、偽りことを彼れに云ひきかせて、此方の勝利になる方へ、彼れを導きはなちかへすことをすつと云と云へり、然る時は利を以て彼れが心を奪て、此方へ歸服させるか、それにて歸服せずんば、偽事を以てかれをあらぬ方へ導びきてはなちやるべしと云意なり、巧なる説なれども、文の意穩ならぬやうなり、

因是而知之、故鄉間内間可得而使也、

因是而知之とは、是の字は反間を指して云、之の字は敵の情を云、右の條に云へる如く、敵の間を久しくとめおきて、其人の云ふ所よりして、敵方の郷民又は士の様子をくはしく知るゆへ、敵の郷民を郷間となし、敵の官人を内間にして使ふことも、この反間よりしてなることなりと云意なり、杜牧が説には、因是而知之と云を、敵の間さへ利を與ふれば、此方の反間になるなれば、郷民官人も此方の間になるべき道理を、これにて知ると云意なりと云へり、非説なり、

因是而知之、故死間爲誑事、可使告敵、

この是も反間なり、之も亦敵の情なり、反間にもなみて敵の情を知るゆへ、如此なることには敵が誑かされたると云ふことを知るによりて、死間を遣はし敵をたぶらかすべきことを作りて、敵に告しむることも、この反間よりしてなるなりと云意なり、

因是而知之、故生間可使如期、
これも反間によりて敵の情を知ると云ふことを、因

是而知之と云へり、可使如期と云は、約束の如にせらるゝと云ふことなり、反間にちなみて敵の情を知るゆへ、生間を敵方へ遣はし、思ふまゝに働きて約束の如く事を成就して、日限を違へず歸らすることとなることなり、

五間之事主必知之、

右の五しなの間のことをば、主君たる人かならず是を知らずして叶はぬなり、下の役人などにうちまかせ置くべからずと云意なり、間は敵情を知るものなれば、尤大切なることゆへにかく云へるなり、

知之必在於反間、故反間不可不厚也、

知之とは敵情を知るなり、敵情を知ることには必反間にて知ることなり、故に敵方の間來る時はこれをねんころにして、反間に用ひずして叶はざることなり、と云意なり、厚くするとはねんころにすることなり、總じて間を此方より仕立て、敵方へ遣すは、敵方より來りたる間を、この方の用に立て、使ふには劣れ

るなり、そのゆへは上智の人は少く、不才の人は多し、わが方の間のもの敵方に行きたらんに、金玉美女を以て其心を惑はされ、刑罰を以て其氣を挫る、時は、忿心と死を畏る、心と人々皆あることなれば、眞實を吐露して却て味方の害となること多きなり、たとひ志堅固なるものも、智辨不足なれば日々に敵よりはさまぐくにして伺ひはかるゆへ、ついには云ひ落さるゝものなり、故に孫子反間を第一にせるなりと知るへし、

昔殷之興也伊摯在夏周之興也呂牙在殷故惟明君賢將能以上智爲間者必成大功

是は間に敵國へ遣す人は、必上智の人を用べきことを云へり、昔とは殷の湯王周の武王のことを云によりて云へるなり、湯王の時分は孫子が時分より前千一二百年なり、武王の時分は五六百年前なり、殷之興也と云は、殷の湯王初めは諸侯にて商と云國の主なりけるが、時の天子夏の桀王の惡逆によりて、天下の

諸侯萬民皆桀王にそむき、湯王に歸したるによりて、諸侯より興り出て、王位にのぼり玉ふことを云へり、商の國より天下をたもち玉ふゆへ商の世と云、湯王の子孫盤庚の代に殷と云處へ都を移して、それより殷の代と號す、こゝに殷之興也と云へるは、後世に云ひ習はしたる詞を以て云へるなり、湯王の時に殷の代と號したるには非るなり、伊摯とは伊尹のことなり、伊は姓尹は名なり、字を摯と云、在夏とは、夏は桀王の都を云、伊尹は聖徳の臣なり、初め有莘の野に耕して居玉へるを、湯王呼出して師とし事へ玉ひ、桀王の惡逆を歎き、五度まで伊尹を桀王へ薦め玉へども、桀王用ひずと孟子に見えたり、されば伊尹は桀王の方にも居玉へるによりて、此本文にも在夏と云へるなり、周之興也とは、周の武王初めは是も諸侯にて周の國の主なれども、紂王の無道にて天下皆武王へ歸したりしゆへ、諸侯より興て天子となり玉ふことを云へるなり、呂牙とは太公望のことなり、呂は姓なり、名を尙と云、字を子牙と云へるを略して牙と云たるなり、初め磻溪と云處にて釣をして居られたる時、武王の父文王獵に出玉ひ、是に逢ひ物語し玉ひて聖

人なることを知て、吾太公望子久矣との玉へるより太公望と號せり、武成王と諡す、古今兵家の祖とす、在殷とは初めは紂王が臣なりとも云、又文王姜里に拘はれ玉ひし時、紂の文王を赦さんことを願ひて、久しく殷に逗留したりしことを云とも云へり、一段の意、昔殷の湯王の諸侯より興て天子となり玉ひし時、師とし玉へる伊尹は、夏の桀王が都にありて敵の情を委しく知りたるゆへ、速かに大功を成就せり、又周の武王の諸侯より興て天子となり玉ひし時に師とし玉へる太公望も、殷の紂王が方にありて、敵の情をよく知れるによりて、功をなすこと速かなり、是皆間なり、されども後世の間とはかはり、伊尹太公ともに上智の人なり、上智の人を間とする時は、決定して大功を成就す、されども明君賢將に非れば上智の人を見知ること能はず、たとひ見知ても其心より歸服さずることならぬゆへ、其上智の人を間に用るゆへ、決定して大功を成就すると云意なり、畢竟の意、軍は間を以て利を得と云へども、又間を以て敗るゝことにて、間を用ること甚むつかしきことなり、是上智の人を間に用ひざるがゆへなりと云意なり、上智の人は世

間にされたり、あれども見知り難く、見知れども使ひがたきことなれば、間を頼みて事を成就することたやすからぬ道理なり、こゝろを付くべし、又この本文に伊尹を湯王の間に用ひ玉ひ、太公望を武王の間に用ひ玉ふと云こと、唯間には上智の人を用ひされば却て其害あることを云ん爲りに云へるなり、實には湯王、武王、伊尹、太公望は皆聖人にて、其心専天理に住し、一點の私なし、湯王の桀王を伐ち、武王の紂王を伐ち玉ふも、天下を貪り玉ふ心一點もなく、唯萬民のなげきを悲み玉ふ仁心より、天に代りて誅罰を行ひ玉ふことにて、間などを遣はして敵の情をはかりて軍に勝んと求め玉ふには非るなり、本文の詞に泥むこと勿れと歷代の諸注にも是を論せるなり、

此兵之要三軍之所恃而動也

此條は結語なり、此とは間を指て云、兵之要とは軍法の肝要とする所と云意なり、三軍之所恃而動也とは、三軍の働は間を力に恃て働くことなりと云意なり、されば間と云ものは敵の情を知る道なり、軍法には敵の情を知るを以て要とするゆゑ、間は兵の要な

り、敵の情をよく知る時はかけひき度に違はず、故に三軍の進退も專問を力に恃み力にして、問の云ふ所

につきて働くことなり、忽にするとなかれと云意なり、

孫子國字解終

唐詩選國字解序

自有南郭先生。而世知有唐詩選。然而初學之人。苦不能得其解。北越林玄圭氏。每聽先生之講。此書隨而記其言。積爲數卷。而將歸鄉。謂先人曰。先生常曰。詩之義固泛然。故人欲賴注釋而解之。而竟失其本根。是所以惡詩之有解也。雖然寒鄉無師友。且初學未有所聞者。無解則何因得逆作者之意哉。故我欲公之。悉與吾子。吾子謀之。先人受而藏焉。天明壬寅歲。請縣官蒙許梓行。因以玄圭氏所名之國字解爲題。刻既成矣。無幾罹災。故重刻之。所以弘之云。

寬政三首夏

嵩山房 小林高英

唐詩選國字解目次

序 李樂龍.....	一
附言 服元喬.....	五
五言古 共十四首.....	一七
七言古 共三十二首.....	三七
五言律 共六十七首.....	一〇三
五言排律 共四十首.....	一五三
七言律 共七十三首.....	一九九
五言絕句 共七十四首.....	二六三
七言絕句 共百六十五首.....	二九二
跋 物茂卿.....	二七六
集採共計一百二十八家	
詩選統載四百六十五首	

唐詩選國字解

服部南郭講 林元圭錄

唐詩選序

李滄溟が序をかいて、蔣仲舒が注解した、唐詩選と云があるが、これはもと注はないはずぢや、それゆへ白文の唐詩選を用ゆる、唐詩を選じた全體の意趣はと云に、唐人大勢の中でも、得手不得手がある、また出来たもあり、不出來なもあり、その中でもつんとよいのをえらび出したが唐詩選の選ぢや、倍この序は上手にかいたものでわづかな文字のうちで、唐三百年の間の詩人の評判をした、無調法なものならば、長々とかきそうなものなれども、切り短かによくかいたものぢや、唐の詩人初中晩とわかれて大勢あることなれば大勢あげそうなものなれども、若輩らしく、くどくどと、大勢あげず、たい李白や、杜子美、王維李頎が如きその中の上手ばかり、三四人出して、評判したもので、上手を二人あげてをけばその外は云に及

ばぬ、しかるゆへに于鱗が文の中でも出来た文ぢや、此の文は中でも大へいにかいたものぢや、よく氣をつけて見るがよい、

唐無五言古詩

先づ五言古詩は文選に蘇武が離別の詩また枚乗が古詩十九首ある、これを古詩の原本にとることぢや、此れが漢魏六朝時代の温潤たる風調ぢや、そういへばとて唐には一向五言古詩を作るものがないと云ではない、ありはすれども于鱗が見識を以てみるに文選體の風調をそなへた詩がないによつてとらぬ、それで唐には五言古詩の體をそなへた詩はないと云た、七言古詩などはよいがある、

而有其古詩

漢魏時分のやうな古詩はないが、唐の代の古詩はあ

ると語を轉じて、
陳子昂以其古詩爲古詩弗取也

人々の中でも古詩をつくるもの大勢あれども、五言古詩にをいては陳子昂が一番上手と後世にも傳ふるゆへに、此の一人をあけて唐人大勢をこめて評判したもののちや、その上手の陳子昂が作た古詩といへども滄溟が見識を以てみるに、手前のもので自己了簡で作た詩ぢや、そのものすきで作た古詩を以て文選體に、叶ふた古詩とすれども、滄溟などはそれを文選體に叶ふたとしてとはらぬ、その上手さへるとにたらぬとすれば、その餘は云に及ばぬ、此れまで古詩を評判した、

七言古詩惟子美不失初唐氣格而縱橫有之

さて七言古詩は、初唐盛唐の二體がある、これを作り分るには前後の拍子合を合點せねば作られぬ、初唐體と云は、文字すくなに云てもすむ處をも、文字の美

ないから、誰れも非難をうつものはあるまいと思て、欺いてをいた、

至如五七言絕句實唐三百年一人蓋以不用意得之

こゝらも李白と名を出しそうなものぢやが、李白がとを評判するゆへ名を出さずともきこへる、外のもの、評判をするならば別に名を出さねばならぬ、同人の絶句を評判するから、簡古にかいたものぢや、初唐中唐晩唐の三百年のあひだ、五七言の絶句を作るもの大勢あれども、李白一人が一番の上手ぢや、蓋以不用意得之、なせ李白が絶句がよいなれば、思案功夫せず不圖意にうかむまゝに口に出るにまかせて、作たゆへ、格別にできて、他人がまねることすらぬ、人でもその心得がある、兎角絶句は律とはちがふて、雜駁でもゆかぬ、又古事を用いてこちつけてもごたくとしてわるい、兎角案じて作ては出來ぬ、李白は文雅風雅の身にあまつたものゆへ平生の語が直に詩になつたと云ほどの男ぢや、一斗詩百篇と云た如く心に思惟せず、醉まざれにわれしらす、ふと云ひ

麗なをつかふて、だてに長々と對句などをとつて云たものぢや、又盛唐體と云は拍子合をおもにとつて、上から長句を段々云て俄に短句などで變じたり、又急に韻字をとりかへたりすることがある、縱橫自在に拍子合を云ひなすことぢや、大勢ある中にも、子美のみ妙處を得てゐるゆへに、盛唐體を作れども、初唐の氣格なりふりを知り、縱橫自在にいひなす、

太白縱橫往往疆弩之末間雜長語英雄欺人耳

子美についで上手なれども、子美よりはおとりたる處がある、こゝらが文の妙處と云ものぢや、無調法なものなればこの處へも、七言古詩と出しそうなものなれども、上に七言古詩と出して直に又それを評判するゆへ、こゝにはぬいておいた、これらが左傳などの名文を手本にしたものゆへ此のやうな簡古な筆勢がある、さて七言古詩においては、太白も縱橫自在な處があれども、ところへには疆弩之末間弓勢のつきて、落る如く詩の末へ行ては尾たれになりて、處々へ長語の無用な語をまじへられ手前ほどの上手は

出したが自然の妙境である、

即太白亦不自知其所至

自分にもこのやうに出來たはどふしたことやら知らぬ、

而工者顧失焉

とかく不用意でなければゆかぬ、あちをやらふとすると、ついその妙處を失ふ、その證據は李白もたくみに作たは結句わるい、

五言律排律諸家槩多佳句

五言律排律は、諸家にも大分あつて人々大概はよいどれもと用ひらるゝが、これも滄溟が見識でみれば、全篇つくしたと云ではないと云ふ意で、佳句多しと云評語は一詩の内全篇よいと云はない、間々三句ほどづゝあると、全くほめた語ではない、

七言律體諸家所難

初唐でも盛唐でも、みな唐人は諸體を、かねて、作れども七言律においてはうるはしくつばに作るもの

が見へぬ、然れば至極つくりにくいものさうな、
王維、李頎、頗臻其妙

その内にも王維李頎頗るよほどよい至極つくしたと云ではなけれども、先づ勘忍ごろちやと大へいな云ひぶんぢや、

即子美篇什雖衆、憤焉自放矣

七言古詩がよいとて、どれもよいかと云に、さうでない、こゝで子美をおさへて評判する憤焉はとりしまりのないこと、子美が七言律の篇什多く諸家の集にものせてあれども、憤焉として風調格式がやぶれ、我がまゝに放埒な作りやうが多い、或は平仄があはなんだり韻字がちがふたりして、七言律は子美も餘りよくない、諸體の詩の評判は是れまでぢや、

作者自苦、亦惟天實生才、不盡

さて古から云ふ通り、諸人も随分精を出して、諸體をかねすべし作り、いづれの體も上手にならふと自らくるしみ、骨ををれども諸體はかねられぬものさうな、唐の世には天から才をあたへて、詩才のすぐれた

ものが多いが大勢の内でも、諸體をかねて作るものがない、なるほど一體には達して、よく作れども、諸體をかぬることのならぬと云は、實に天から悉く一人にはあたへつくさぬと云ものぢや、

後之君子、乃茲集以盡唐詩、而

唐詩盡于此

滄溟より後の君子たち、滄溟が唐詩のよいのを、こゝにゑらび出して置ほどに此の集で唐詩はつきた、此の外に唐詩はないと思は、此の集で唐詩はすむと云ものぢやと、大へいに憎く、かいたが、子麟が氣象である、

濟南李攀龍撰

濟南は地名、李は姓、攀龍は名、子麟は字、滄溟は號、

附言

唐山て余献可と云ふ山仕本屋が、唐詩訓解と云ふ本をこしらへて、李滄溟が撰み出した、唐詩選にぬきさしをして、滄溟が選したと偽たゆへにその心をも云ひ子麟が詩を選した本懐をも明かし詩をつくるものゝ心得になることなども云ふなり、

○近體詩盡於唐、盡也者、盡善

之謂

近體とおし出して云へば、五言古詩の體を除てその外の體を云、唐人より前にはない、唐人が上手に作た、唐より已後に元明の時代に至つて、もつぱら唐詩を學で作れども、唐人のやうに云なすことがなんぼでもならぬ、しかれば唐より前後には、よい詩はない、よい近體の詩は唐で盡た、盡於唐と云ふは論語に盡美矣とあるこゝろで至極美しい詩ばかりを選び出したを云、

而莫善於滄溟選

その選と云ふ内に選者が大勢あるが、どれもよいかと云ふに、さうでない外のものは目がないゆへに、斗方もない詩を載せた、滄溟が選より、よきはない、

蓋後世

蓋しそれは、何ゆへなれば、後世は宋元を云ふ、

祖述唐人者、家選、戶論

唐詩をよいと云ふて、堯舜を祖述すると云やうに、昔の唐人を手本として、家ごとに、選び出し、戸ごとに評判したれども、みなわるい、

大抵宋人好自用其調

なせ悪いと云ふなれば、先づ一通り詩人は風雅の道とて、風月にこゝろをよせて、人情をやさしく云ふことなるゆへ詩經三百篇などの體こそちがへ風雅の道は失はぬ、しかるに宋人の學文は理屈を、おもに云ふたもので、丁度山谷が手前の見識をあげて、詩は手前で云ふものなれば、人の手本を借るにをよばぬ、どのやうになりとも人々心におもふ通りを、詩につくがよいと云ふたやうに、宋人は唐の風調格式を用

ひすに、手前のものすきに風調を立て、作るゆゑに、
絶響大雅、即所選若論漆桶掃帚、亦惟摸索而已、

そこで調子をうしなひ、大雅の本體の道を、絶して、
なくするその了簡ゆへに、選論するも胡亂なことぢ
や、それを喩へて云へば、涅槃經に盲人に象を見せた
れば、足をとつては漆桶の如しと云ひ、尾を探ては帚
の如くなりと云ふて、全象をさぐりあつることがな
らなんだことがある、その如く詩の本體を見ぬこと
とが、ならぬゆへにたゞあて推量に、論選しておい

及南宋嚴滄浪、

嚴羽字は義卿、號は滄浪、宋の人なり、

豁然眼目、全象始見、

このときみな盲どうしのより合で、本體を見ること
がならなんだ、それゆへに別して唐詩のすたれてあ
つた時分ちやが、滄浪が出てからもとより明な、眼目
なるゆへに、はじめて詩の本體全象を見出してこゝ

選し出した、詩も、唐詩の内でも、神駿の随分すぐれ
たをぬき出して取たによつて、その餘の詩はあるか
ないかになつた、ちやうど伯樂が冀北の野で、よき馬
を選び目きして、とつてぬいたれば、よき馬がなく
なつたといふが如く、品彙正聲に、ゑらび出したによ
つて、外によつて詩はなきも同前ぢや、

滄浪繼興、

其後明の嘉隆の頃に至て、滄浪が出た、

蓋猶以廷禮、爲旁通多可、芟柞

益嚴、

于鱗がみればまだ、選がとつくとせぬ、旁通多可は嵇
康が絶交の書の字であれも大事ない、これも大事ない
とゆるしすぎてあるゆへにさつぱりとせぬ、柞と云
ふは林の中で大木にもならず、大木の邪魔になる木
を云ふ、まだ選ひがたぬと云ふて、嚴密にゑらむを
邪魔になる木を、かりすつるが如く、なるにたとへ

掄選數百首、唐詩之粹、森如、

で、滄浪詩話と云ふ書を書た、
雖有來者、不能間然、

間然は論語の字すさまを見て人をそしること、後來
元明の世ではいかふ上手に詩を論じて宋人をば都て
うけがはねども、滄浪をば間然し、そしることはなら
ぬ、

然止論之、未遑選詩、

滄浪詩話と云ふを書て、詩を評判したばかりで詩を、
選ばなんだ、

明興、高廷禮、品彙、正聲出、

明の始に高廷禮が、品彙と云ふを選出して大概よい
が、まだ選ひがたぬと云ふて、正聲と云をまた出し

而唐人諸家、玄黃不蔽、

この人は、五言が得手方、七言が得手方と、上手を、明
白に上げて白い黒いが分た、

詩亦簡拔、神駿、冀北、遂空、

高廷禮が撰んだ内でも、わるい吟味のたぬを、随分
きびしく詮義して、材木を擇ぶ如く、極上の詩はか
り、數百首ほど掄選した、掄は材木をゑらび、そろゆ
ることをいふ、そこで唐詩の淳粹が森然と、そろつて
集まつた、

**後有唐仲言、解及十集、要其所
出入、亦惟首鼠、高李間、不足列
之選者、**

首鼠は漢書の文字を出して、鼠が穴より首を出して、
人を恐れてどちらへ出やうぞと、思ふて、うろつきま
わるを云ふ、さてこゝで、選の悪いを云ふて、おかね
ば聞へぬ、かの選しやうを得と、みるに外の者の選
だを、ぬきさして、出した者ちや、しかれども仲言
はわれも選びての内ちやと、思ふてしたもの、そうな
れども、そのぬきさした選を考て、みるにこれは勘忍
ごろちやによつて、入ておけと云ふときに、廷禮が品
彙正聲をいでず又得と吟味して擇んで、これは、李于
鱗が選をいでず兎角どちらへしてよからふかと、ち

やうど、鼠が穴の中から首を出して、四方を見合せる如く、高李が間を思ひ案じうろついで、ぬきさし、たものぢや、かうしたものはなれば、選ひてのうちへは、入れられぬ、

他若鍾氏詩歸以沙投金非再經淘汰無見其眞

鍾伯敬は滄溟と中の悪いもので、滄溟をうわべでは、わるくいはぬふりをして、滄溟が悪いと云ふた詩をば別して入れるやうにした、そこをたとへて、沙を以て金に雜へたやうな選みやうちやといふ、淘汰は金と云ふものは砂の中にまじつてあるを、水にひたしえりわけておいて、さうして眞金にすることぢや、

故唐詩莫善於滄溟選又莫精於滄溟選

滄溟が選は、これも勘忍頭ぢやと云ふて、ゆるしてとるやうなことはせぬ、どれもく、精粹に吟味して究めたのである、

○人或謂滄溟選過刻

前に云てある通り滄溟が選みは、精粹にして、これは勘忍頭ぢやと云ふやうなことをせぬ、それでこれをば入て大事な詩ぢやがあまり過刻とてむごい選びやうぢやと、今どきのものも、さう思ひ唐仲言が心にも、さう思ふであらふ、

然予則謂後世諸家紛然邪路旁徑往往秦塞

然れどもおれはさうはおもはぬ、宋元已來の選者も諸家紛々といふが、どれも、てまへでは、本道があるくと思て居られるれども、さうでない、みな邪路旁徑のわき路ばかりをあるいて居るゆへ、本の道筋には草がしげつて、往々秦塞す、宋元の人々己も、ろくな詩を作ることがならぬゆへ、よきを選び出すこともならぬ、秦塞は、草のしげりたるをいふ、

初學進步一左蹶然陷大澤

史記項羽本記にあり高祖と項羽が戰のとき、項羽が陰陵に至て、道にふみ迷て、田夫に路を問たれば、左

せよと云ふて、をしへたによつて、その通りに行たれば、大なる澤の中へ踏込だと云ふことがあるが、初學者もその通りで、諸家の不目利どもが擇でをいたに隨て、悪い詩をもよいさうなと思ふて、歩をすゝめてそれを學んで、わきみちを行けば、後には大澤に陥ることく、とてつもない處へ踏込で、好い詩を知ることかならぬ、しかればをしへやうが大事ぢや、

故取路之法明爲之標而後不容田夫欺

これよりほどこへの路と云ふやうに、誰が見ても明に知れるやうに傍示の道しるべを立て置けば、田夫のだましをくつて、邪路へは陥らぬ、標は、しるしのこと、その如く、これはむごいと、いふほどに子鱗が選でをいたはこれにある詩はどれもく、よい詩と、誰が見てもつい知れるためなり、後世のをしへになる此選を手本にすれば、詩の本道を行て他の欺をうけぬ、しかれば、はじめ詩を學ぶには随分手せまに學ばねばならぬ、

又譬諸入崑岡采玉玉石磊砢

愚者奚別非棄廉下或襲燕石書經の字を出して、崑崙には玉がたくさんあれども、石とまじつてあるゆへ不目利では見分ることがならぬ、むかし愚者が玉をひろふて玉と云ふことを知らず、夜になれば光に因て、化けものさうなと思ふて、庶下にすてたと云ふことがある、また燕石を持て居てこれはけつこうな玉ぢやと、思て幾重もく包み、大切にしたらと云ふことがある、その如く愚者はよい詩も化けものと思た如く、悪いと思ひ、悪い詩も石を大切にしたら如く貴ぶ、直に連城の壁なることを知り、分ることがならぬ、

必遇卞和氏而後天下知連城

昔卞和と云ふものが、楚山から玉をとり出してから世間で玉石を辨別することならぬやうなものも、卞和が壁は、貴いものぢやと云ふことを知た、そのうち、この壁が趙國の寶物になりしに、秦から十五城ととり換やうと云たによつて、連城の壁と云ふ、それからしてこの壁の貴いと云ふことをしつた、詩もその通り目利の上手なものが得と、吟味しておけばこれ

に選てあるはどれもみなよい詩ぢやと云ことを、天下中で知る、

故學詩、先擇其善者而從之、

詩を學ぶものも詩のみちを、知るは外の學文とは格別で、あれを學び、これをまなびては悪い、随分先づ其好いと云ふ詩ばかりを擇んで、それを手本にしてそれに從て作り習ふがよい、

不必取其億、

手前の億見のものすきにて、わるい詩をも手前がすいた詩なればそれを手本にして、よい詩をも手前が氣に入らねばとらぬやうにする、たとへ氣に入らずとも、よい詩を手本にして、作り習ふたがよい、

準繩一立、離明輪工無施不可、

上に云ふた如くすると自然に格式準繩も定り、手前の旨につてくるぢや、丁度離妻がよくものを見分る如く、公輪が細工に上手なやうに、自然の妙處を得て、眠りながら作てもよい詩が出来る、

滄溟之刻安知非嚴師友哉、

こゝに云ふ處は諸家の内でいつちすぐれた書ぢや詩を學ぶものはこれを讀まねばならぬ、

蔣氏所注二三評語諸家已具、

讀之可不讀亦可、
手鱗が選に蔣仲舒が注をつけて、二三の評語をも添て置たが、是れは皆諸家の云ふことをとりかへ、引かへして注したものでゆへに、讀でもよし讀まいでもよし、

仲言解備之掌故則往往便于、

質訪、
掌故は漢の官名で、故事をくり出す役人ぢや、こゝにては古事に達すると云ふことになり用る唐仲言が解は故事を一々あげて、あるゆへに故事を知る爲にはよい、質訪とはたゞしとふといふことで、これは何から出た故事ぢやと吟味してたゞし知るには善い書ぢや、

至其解詩意謬妄居半不必取、

や、

右云ふ通りなれば人のむごいと云ふほど、滄溟が、るらんだがきつとした師匠きつとした友と云ふものぢや、きつとした友があれば、詩を學ぶにも道筋のよいのを習ふであるゆへに過刻なが至てよい、

○初學熟滄溟選、

不斷常住滄溟が選に熟し絶句を好くものは絶句に熟し律詩を好くものは律詩に熟しそうしてから、

乃後稍稍就諸家讀焉、則左右、

取之無不逢其原、

稍々はやう／＼の義を／＼と云意、滄溟が選は諸家の選よりよいに付てその選を讀ときは、もとより滄溟が選の善いに熟して居るゆへに、左右に諸家の書をとつても、夫の詩の妙處原にいたつて意味合を知る、

諸家則滄浪詩話、品彙正聲、弁州卮言、元瑞詩藪、此其傑然者、亦不可不讀焉、

也、

仲言が解ばかりでもないが凡そ詩を注解するには、この詩はかうと云ひつむるゆへわりの、總體詩意と云ふものはいく様にも見ゆるものぢや、そのうへ解のわるいばかりでない、謬妄のあやまりまさらかしが多い、こゝに書物ゆへに、とるにたならぬ、

且詩貴興象、祗謂擾心、胡用喋喋解之爲、

詩は興象思ひやりを以て云ふこと或は峨眉山月半輪秋など云てあれば、高山の間から月を見た處が、そらもありそらなものと、思ひやられて、景像がかぎりもない、それをかやう、かやうと、注すれば詩もそれぎりになつて、その解を見るものがそれに迷て、心を亂すことぢや、しかればくちやかましよう詩意を解してこれぎり、と、解を定め、おくはやくたいもないことぢや、喋々が多言の貌、やくたいもないことをくちやかましよう云ふことを云ふ、

若夫誦三百篇讀騷讀選、旁及、

歴代諸家、人人知之、不待具論、

詩經離騷經文選その外漢魏六朝歴代諸家の諸作は體を、そなへてあるゆへによまねばならぬ、右の書物をばよまねばならぬといふことは人々しつて居ること、不待具論たれも知て居る委細に云ふに及ばぬこと、

博文約禮、雖小伎亦然、

博文約禮は論語の字とりひろげること、は文にとる我が持ち前をとり、守ることは禮にとる、廣ふ知てそうして拍子合をとり、守つて放埒にないやうに作らねばならぬ、

世有唐詩訓解、其書剽襲唐詩選及仲舒注、仲言解等、

爰では訓解の賈世物ちやと云ふことを明す、その書と云へば、唐詩選ちや、仲言が解等をぬきさしをして、まぎらかし注と云へば仲舒が注を剽襲と、ぬすみとつて、したものでちや、偽選列藝文、

あれこれ集めて、于鱗が選で、袁仲郎が序を書たと偽り、こしらへて、そうして、藝文のきつとした書物の内に列し入れたのである、

而詩全用于鱗選、出入一二、

其所題目、既是不知滄溟者所爲、

その題目する處は、滄溟が學文のかまへを知らぬものゝしたることちや、訓解にのせてあるやうな、人に笑はるゝ胡亂な選びをする男ではない、

序則文理不屬、始無意義、

序は仲郎が序と云てあるが、初心なものがこれを、仲郎が書た序ちやそうなが、どうもすまぬ、初心なゆへにそうかと思ふは、その筈ちや、本より意義もない、文理もやくたいもないこと賈世物ちやと云ふ證據、中間引道子數語出中郎他文、序の中項に東坡が、吳道子が書の評判をした語を載

と云ひ偽るつものちや、

且中郎於滄溟、不啻仇視、則亦不知中郎者所爲、

中郎は明の萬曆時代に出た人、于鱗とは至極中の悪い仇敵のやうに云ふて、于鱗が毒にあてらるゝなと云ふたほどの男ちや、しかれば訓解に載せた詩を、滄溟が選に極て見れば、其やうに中の悪い中郎が序を書ふやうがない、これも中郎をしらぬ、ものゝしたることちや、

總評中、竿濫太甚、

訓解の最初にのせてある總評の中に、まぎらかしが多い、昔齊の宣王が竿を、好まれしに、南郭先生といふものが竿をよく吹ますと云ふてまぎらかして、扶持を取つた故事がある、

評註取蔣唐、頗爲刪補、

その次に蔣仲舒が注、仲唐言が解をとり、集めて頗る爲刪補、よいかげんに切こんだものちや、

唯是拙工代斲、不救傷指其他、

謬妄不可勝計、

斲は削也、老子が云ふた通り拙い大工が、材木を、こなすときに、手前指を傷つくをも、知らずにやたらに削るとあるやうに、詩の善惡も知らぬものどもが、詩の害になるをも、かまはず刪補をなしたるものゆへに、まぎらかしが多い、その外謬妄かぞへられぬほどある、

要之、于鱗嘉隆之間、爲一代文宗、

嘉靖は明朝十一世世宗の年號、隆慶は十二世穆宗の年號、この二代の間には、大勢文人どもが出た、その内から七才子とて、七人組合を立た内に親玉とたてられた、于鱗である、文宗とは文章の宗匠ちやといふこと、

中郎雖後、亦別爲一家、風靡晚學、

學、

袁仲郎は明の神宗萬曆頃の人で、七才子などより後に出たれども于鱗についで尊敬せられて、七才子よりのちに出た書生どもを吾が流義になびかせた、その學問のをしへ方が于鱗などは大にちがつて、于鱗元美などは、詩をつくれば唐の世の人のあとへ付て廻り、文を書けば漢以上の人の尻へ付てあるいて、獨立はならぬと云ふものぢや、文章も詩もてまへの了簡で、一流をかき出すがよいと云ふて、新奇な體を仕出して、晚學を風靡となびかした男ぢや、于鱗仲郎の二人は、この時分名をなした男ぢや、

於是或書賈閻師資一家聲譽、かうした男どもで、名だかいものゆへに、この時分田舎の山儒者山仕の上手組本屋どもがより合て、于鱗仲郎が名の世に鳴るをとりはやしてこの書は、于鱗が選で仲郎が序を書たといへば、うれもする、はやるによつて、そのために、こしらへた、

爲壽張之具

この二人の名を出して、世上の人がうれしがつて、買

やうにして世間のものをたぶらかし、張りひろむるためにしたものぢや、

並署篇端

李攀龍選、袁宏道校すと、

所倩村學究不辨菽麥、廼急求錢、致此鹵莽已、

菽麥は左傳の字を出して、訓解といふ似せものをこしらへた、その儒者と云へば菽麥をも分たぬやうなものどもが、金をとるがよさにこしらへはするが金さへとればよいと云ふて、ろくに吟味もせずさまじらかに、おいたものぢや、

于鱗選貴精嚴毫釐出入或謬千里、

于鱗が選に、一二首づゝもり込で、まぎらかしてある、一二首と思へども、それを手本にして、學ぶものが段々あやまり次で、のちには千里のあやまりとなる、

既具于前

唐本で、蔣仲舒が注のある唐詩選が世上に行はるゝが注本は、悪いその断りは前方に云ふて置く、

方于鱗選時、豈必期後、有蔣注、

于鱗が意には注がなければすまぬなど云ふやうなことは氣にいらぬ、自分の見識で見わけて、すまぬねば意味深い處は見えぬ、おれが擇んでおいたら、のちの世で、蔣仲舒が注をするであらうと思ふて注を、せぬではない、

今所考訂要在見眞面目、何憂無注、

今我が要とする處は、于鱗が選んだ本意の眞面目を見出させやうために、わざと註のない本を用ゐる、初學或味典故、諸書既自巋然、各就考之可、

訓解のやうに故事を引く書物が巋然として大分あ

故今所考訂不得不爲于鱗雪

冤、略贅數語以發其贗、

右の通り于鱗が精嚴にゑらみ出したを、むごいと云ひ訓解を于鱗が選みぢやと云ふから冤を雪めておかねばならぬ、それゆへに長々と數語を付て置て、訓解の贗をあらはす、

若夫寒鄉乏挾書、訓解亦非無一助、

訓解といふ書も、在郷の書物少き所では、故事などを引て、見る爲になる、

要辨其眞不眩其僞、則不必瑕疹、

于鱗が選の眞物なることを、得と辨じ知て、その僞りものに眩せざるときは、訓解も、とりすつる書物でもない、あつても害にならぬ、書物をもたぬものゝ爲には用いたつ、

○唐詩選原本以蔣注行其辨

る、書物でみたがよい、

寒陋之士往往責備一書、蔣注訓解豈備哉、

貧窮な、手せまな學者は、一部の書物で、なにも、すむやうな書物があらふかと、思おふが一つの書で、なにも、かも、すむといふことはないことぢや、偕て蔣仲舒が注があれどもとるにたらぬ、訓解もやくたいもないことを集めたものゆへ便りにならぬ、詩選一通りが此書ですむといふことはないことぢや、兎角あれも、これも故事などの書を、たくはへ置て、廣博に書物を見ねばならぬことぢや、

○原本諸刊頗多、或有增一二三者、今不取也、

唐詩選の版本が唐山には、さまざまある、その内に詩を二三首も、増した本もあれども、それは、とり用いぬ、如字有異多、從原本尤善者、

本によつて、すこしづつは字のちがつた本がある、それは注のない本の内で、字のよい方の本の通りに定める、

兩可難裁、則就品彙、詩刪、詩解、十集考之、從其多且正者、

兩可難裁とは或は盧家少婦鬪金堂とも鬪金香ともありで、どちらがよいかと、いふやうなときは高廷禮が品彙、于鱗が古今詩刪、唐仲言が唐詩解、唐仲言が唐詩十集などの内で、多分につき、正しい方によつて、字を改むる、

服元喬

唐詩選

五言古

偕て序でも云通り、唐には五言古詩の體と云は無い、どれも漢魏の古詩に叶ふたは無い、故に取らぬ、此處で四五首あるに依て、是は漢魏に叶たかと云にそうでない、かたで、序にも云た通り、古詩と云ではないぢや、これが必ず漢魏の詩と同じこととて選び出したではない、詩を學ぶ者が唐の古詩の體は、此やうなもの、と唐の古詩體で、作る時の心得の爲選み出して、おいたものぢや、

述懷

魏徵

先づ詩は實事が有て、其分をよく、合點せねば聞えぬ、此の時の唐の天子は太宗ぢや、時に太宗の兄に、建成と云が有た、然るに太宗の天下を取つたは先づは手柄ぢや、弟が天下を取た故に、建成の臣下どもが、ねたむぢや、太宗の臣下どもが云

中原還逐鹿

中原の字は、詩人の多く使ふは都のことを云へども、是は中國から夷狄などに對して云辭じや、爰では都近處と、廣くかけてみるがよい、逐鹿は誰れが天下をとるやら知らぬと云ことを喩へて云、昔秦の天下を失たは、虞人の鹿をうしなつた如くぢや、時に天下中、鹿を逐かくるやうに、随分足早な者がしてとる、今隋の世滅て、唐の世に成たが、また世がしづまらぬゆへに、誰れが天下を取るやら、知れず、還と云ふは、世のさはがしきも止みそうなものぢやが、またし

投筆事戎軒

後漢の班超が故事で、本と文官で居たが、此やうな手ぬるいことではいかぬと思ひ、持たる筆をなげすて、武官の方に成て、功を立たが吾も其通り、文官は班超と同じことで武官の方へは、かまはぬ官なれども此度は天子より、御意で行て建成功の者どもを、静めてくれよと有に依て、今日文官をやめて、武官となつて、筆を、投戎軒は唯軍と云義、總體このやうな事は、訓解の注に有によつて、それに付て見たがよい、

縦横計不就

古へ蘇秦張儀が、辯舌を以て、向の合點せぬことをも云はどいて、味方にしたと云が、此方が今建成功の者をなだめに行くが、蘇秦張儀がやうに此方へ付るやうにやつてみやうと思ふて行くか、ゆくまいかは知らねども、

慷慨志猶存

さてくながかしいことぢや、まだ世がしづまらぬ、

何とぞ及ばずながら、しづめたいものぢや、これ手前の心にも今文官をやめて、武官となつて、軍事にかつて行は面白ふはなけれども、天子から見立て、仰付られたが重いに依て、行く、

仗策調天子

そこで出立して行を云、天子へ御暇乞に上り、御目にかつて、すぐに我が家へ歸らずに行く、

驅馬出關門

函谷關に出て、行く、

請纓繫南粵憑軾下東藩

終軍が氣性な故事で、吾今何とぞ終軍か、南越王が合點いたさずば首をつないで參らうと云た如く、辯舌を以て、合點いたさせう、もし合點いたさずば首に繩をかけて參るであらう、又酈生が辯舌一つで、齊の七十餘城を、軍をせず味方に下し引付るやうにした、我も此通りの志で行くが終軍や酈生が如くに、仕遂げやうと思ふぢや、此古事は今武勇を以てせず、云ひなだめに行く故に、辯舌のよい、故事を用た故に親

鬱紆陟高岫出沒望平原

山林に草木の茂り込だを云、上では出立の趣を云て、爰では其行く道すがらのやうすを云なり、高い山などを通り、たん／＼ゆけば谷合のやうな處へ入たり、出たり、又平地をも、望み見てゆく、

古木鳴寒鳥空山啼夜猿

其行く道には、古木の太木などが、その中でもの哀れに鳥などが、さむびげに鳴て居る、空山の人も無い處に、一夜も宿すればものかなしく、猿のなく聲などがする、

既傷千里目

此句は、鬱紆の句に應ず、高い處へ上ては、故郷の方を望で必ず感慨がこるもの、これが人情の定りぢや、高い山に上り見望では、故郷の方も遠くなつたと、心を傷る、

還驚九折魂

九折は、至極の難所を通るにはもふ踏はづして落はせまいか、落はせぬさうなと、魂きをもつぶすやうな處を、せつ／＼通る、

豈不憚艱險深懷國士恩

艱難を恐るゝは、同じことなれども、此人多し中に我を器量者ぢや、國士ぢやと、思召下さるゝ、其御恩が捨おきかたさに、今此艱難を、恐れ憚からずに行く、

季布無二諾

此處では天子の命に違はぬことをとる季布と云者は、人の頼たことを承合からは、其詞を易へすに、手前の身を捨て其ことを、なし遂げてやつたと云やうな、たのもしい男ぢや、

侯嬴重一言

此度天子よりの仰付を、なるほど諾して、承け合申てからは、一言を重じて、身易りに立た如くちつとも、引は致さぬ、故事には一諾とあるに二諾と置たは下の一言にさし合によつてひつくりかへしてをいた、

人生感意氣功名誰復論

意氣は、いきかたと云辭、又總體人と云ものは、いきかたが大事のものぢや、今天子から、目利なされ、つかはさるゝ一處の意氣に、感じて難難な處をもかまわずに行くは、功名の爲に行ではない、只何とぞ此と辭づめて、天子にも安穩に御座あれかしと、一筋に思ひ込て、今ゆく、あながち功名立身の爲ではない、唐の五言古詩は、多くは、六句づゝで、意は切れて居るやうなれども、其詩の命脈と云は、始終つゞいて居る、上に段々時のことを云ひ、それから道すがらのことを云ひかうした、難義をもかまはず、何ほど苦勞なことが有と云ても、天子の命が重いによつて、行く、これ功名のためには、ことではないと、句をつゞめたもの此の詩のつり合ひなり、

感遇

張九齡

先づ好い事に逢て、それに感じて、も作れども、大涯は心に思ひ好からぬ迷惑なことに、感じて作くる、

孤鴻海上來

全體手前を孤鴻にたとへて云たもの、なせ孤と云なれば人にはね出されて居ると云義也、

池潢不敢顧

池は城の堀の義、常の鳥なれば、此處へも下りて遊ぶが、廣い處の海上より來た、大鳥は、このやうな處は、振り向もせぬと云こと、手前などの孤鴻の、大器量あれども立身の望はないに依て、三公杯位をこのみはせぬと、比して云たものぢや、

側見雙翠鳥巢在三珠樹矯矯

珍木顛

此池の側より見れば、二匹の翠鳥が三珠樹の結構な木に居る、雙翠鳥は、李林甫牛仙客を指して云、三珠樹の木は、三公の位を云、さて此やうな木に、うつくしい鳥があればとりたいと云、氣が出来て金丸のをそれが有る、常の木なれば、人にも目を付られねども、なにか結構なことで、三公の位で身は、りつばな、形り振りで居れば、人にもねたまれ、害が出来る者ぢ

得無金丸懼

前漢の韓嫣と云ものが、黄金で彈丸をこしらへて、用たと云語があるが、やはり彈丸とみる、なせ金丸と置たなれば、上に段々美しい文字を置てきたから、爰に彈丸と置ては、つり合が悪いゆへに、金丸と置たものぢや、詩人の心得になること、このやうな處では、案じて、このやうに文字を置がよい、

美服患人指

總體人の目になつこと、却て害を招くは、何故なれば、丁度重い身では結構な、衣類などをきて、居ると、はや人が目をつけて指さしをする、これがいやぢや、

高明逼神惡

じんだいでいは、餘り富貴が過ると、鬼神のにくみをうけて、身代を亡すものぢや、盈れば缺る道理で、十分ならぬときは、鬼神が憐れをかける、總體物は十分なは悪いものぢや、

今我遊冥冥弋者何所慕

人の近くへよらぬ鳥は獵師もとることがならぬ、吾も今は、とんと人のしらぬ處へ、行たらば、此方をたれも害する者はない、どこへ行たやらしらぬやうに、かくれ去ふと存する、それでは此方をねたむ、李林甫や牛仙客等が、害することはなるまい、

薊丘覽古

陳子昂

此れは燕の昭王が、賢者を招き禮した處ぢやが、今は其人は跡かたもなく成たと、古のこゝを感じみる意で、覽古と云、このやうな古跡をみて云には、必ず手前の處在を云ひ、我身の上にも、掛けて云が、定まりぢや、

南登碣石山遙望黄金臺

今此薊丘に登り、碣石より向を見望めば、古へ昭王の賢者を招かれた、黄金臺の跡がみえる、

丘陵盡喬木昭王安在哉

さて昭王の、古へ御遊興なされた、丘陵なども、今來て見れば、只小高い木のみある、さしも盛んに云傳へ

たる、昭王も跡方もないやうになられた、實に人と云ものは、はかないものであるとなり、

覇圖悵已矣

諸傳でみれば、昭王も伯と成て、いせいを振た人なれども、覇圖已ぬるかな、悵然として悲み思て我らも何とぞ、このやうな人に仕へて、功を立たいものなれども、此やうな時に出逢はぬは残念ぢや、悲み愁る、こゝろで悵の字をつかふたものぢや、五言ゆへに長々と云はれぬによつて、切て中へはさんだものぢや、覇圖がこうぢやによつて、悵然と愁悲しいと云義を引はなして、みる意である、詩人の辭の廻し上手なが見ゆる、

驅馬復歸來

今も昭王の繁昌な時分のやうならば、逗留しても見やうが、今は何も面白くないによつて、何をあてどに遊ばふやうもないによつて、馬を驅て歸來た、何もないと云て、亂後のことが聞ゆる、是を訓解には歸らうと思ふたが、跡がしたわれて、又

跡へ立歸たと見たは惡しい、

子夜吳歌

李白

もと、子夜と云たも、聞怨向きのこと、子夜と云女中が歌つた歌を、子夜吳歌とも云、

長安一片月、萬戶擣衣聲

一片は片方のこと、一片の月と云は、夜更け方の月と云ことになる、片月窓、片月刀など、稱す、片月は半月のことなり、或は野の、やうならば一面に照らせども長安は家居が續てある故に、一方は照して一方は照さぬものぢや、このやうな、夜深の月は、物の憐みを添るものぢや、其上どこでも、かしこでも、夫の方へ寒氣ふせぎの、衣裳をこしらへてやると云で、夜深け方まで取いそいで、砧の聲がする、月をみるさへ憐なに、其上衣をうつつ聲をきけば、いよゝあはれな、

秋風吹不盡

亦頃しも秋とて、夜深方に風がそよよと吹て止まぬ、玉門關は唐と夷との界ぢや、此秋風の吹時分、我

が夫とは、定めて彼玉門關あたりに出で、居らるゝであらふがこれも、心無い者は月を見、風を聞ても、何ともあるまいが、おれはどうしたことぢややら、何をみるに付、聞に付ても、皆思の種となる、

總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征

此も女の情に何とぞ、胡虜の夷を平らげて、我夫のどこへも旅へ行かず、常住内にばかり、居らるゝやうにしたいものぢや、此二句は、見えた通りやはらかに云たがおもしろい、女中の心にあのゑびすとやら云ものを、平らげらるゝものならば、早くどうぞ平らげて、歸らいでと、女の思ふ情をあぢきなく云が、おもしろい、

經下邳、圯橋懷張子房

本と張良は、韓王に仕て居たときに、秦の始皇に我主君を、つぶされた故に、財寶をまきちらして、諸方に、よい人を求たときに、滄海君と云者

にまみゑて、力士を得てから、始皇が博浪沙を通る時に、御幸を見物の者に、まきれ込て居て、通る處を待かけて近く寄て、鎚を打つたれども、乗かへの車へあつて、終に本意を遂なんだ、何が威勢さかんな、始皇ぢやによつて、どこもさがしたれども、張良は利根なる者なれば、知れぬやうに、下邳と云處に、隠れて居た間に、黄石公と云老人に出逢て書を授けられてから、軍術を得たことがある、今李白が其古跡へ来てみて、張良が志も、我と同じことぢやと、をもふて作る、

子房未虎嘯

虎嘯は、本意を遂たことにとる、をこる心なり、

破産不爲家、滄海得壯士、椎秦博浪沙

我主人も、亡ぼされたによつて、外の者ならば、財寶を取納めて、家をなし、引込意も有さうなものを、財寶をまきちらして、我が身方になる者を求た、そこで滄海君にまみえて、よい、力士を、さもいつてもろふ

た、始皇の博浪沙を通る時分に、間近く寄て、鐵椎を

打かけたれども、あたらなんだ、

報韓雖不成、天地皆震動、

本意を遂なんだは残念なれども此ことは天地の間に
沙汰して、此れはと、きもをつ、ぶすほどのことぞ有た、
鐵椎と云ふは、かなてこの様な物ぢや、其様な重い
物でなければ、殺されぬ、かのつよい目はしの利た、
ものでなければならぬことぢや、是ほどの人なれば
智勇も有て、人に見出されぬやうに、

潛匿遊下邳、豈曰非智勇、

是れ人のならぬこと智勇ある人ぢや、

我來圯橋上、懷古欽英風、唯見

碧水流、

欽は、うらやましく思ひ慕ふを云、

曾無黃石公、

張良に逢て書を授けたと云が、今は水の流ればかり
で其人は居ぬ、

嘆息此人去、蕭條徐徊空、

さて、残念なことぞ、今も張良が如き者あらば、吾
も出會て咄したるものなれども、今は其人のなほは
残念ぢやと、涙を流すのみぢや、此人は張良と見るが
よい、訓解には黃石公と見たが、それではわるい、そ
うみれば、客主の別ちがない、總體文にも、詩にも、客
主と云がある、石公は客のやうなもので、張良は主人
のやうなものぢや、此人を黃石公に云は、題におも
に云ふ張良が外の者に成てしまふのぢや、

後出塞

杜甫

前後の字に、かまはぬがよい、何心ない前出のが
九首あり、後出のが四首ある、是を安祿山がこと
にあて、云はあやまりぢや、邊塞などへ行て、陣
屋を立、陣取りをするを、出塞と云ふなり、

朝進東門營、暮上河陽橋、

此二句都を出る時のことを云、東門は京はづれのこ
と、河陽は、北さかいのこと、朝に東門の大將の、陣屋

悲笳數聲動、

寢すに守りをするを云、證據に、只陣屋で、笳の聲な
どが聞ゆる、

壯士慘不驕、借問大將誰、

を云ると云は、直に頭まかちに出るぞ、是は大將の治
めかたが悪い故ぢや、總體軍に行には、死ぬるに覺悟
を極めて行く、皆是は死ぬるに極めたと云て居るか
ら、驕らぬと云ものぢや、この陣屋の者も、其覺悟で
居るゆへにたのもしいと云ぢや、夫の大將は誰ぞ、大
方漢の霍去病でがな、有らふとなり、

恐是霍嫖姚、

恐らくとは大方と云ふほどのこと、

玉華宮

此宮は、唐の太宗の建られた、至極さつとした、
離宮ぢや、

溪回松風長、

に進み下知をうけて、漸々と暮方に河陽に至る、

落日照大旗、馬鳴風蕭蕭、

大將の陣屋には馬などがいな、き、風などが吹て、蕭
々ともものすごく聞ゆる、蕭々は、風と馬と兩方へ持合
す、

平沙列萬幕、部伍各見招、

大將の陣取るやうすを云、部伍は大勢くみ合こと
を云、伍と云は五人くみ合のこと、こゝではたゞくみ
合のこと、聞て置がよい、大將の陣屋へ申すことが
あれば行く、

中天懸明月、

此陣屋中蕭々たるやうすを云、さて陣屋で、空を仰ぎ
みれば、物すごい景色を云ふ、

令嚴夜寂寥、

大將の治め方がよさに陣屋の者どもが、さはがすに
ひつそりとして居る、さるによつて、人が居るやら、
居ぬやら、知れぬくらいぢや、

詩の上手な者は、纔な文字で、宮殿のやうすを、よく云たものぢや、一句で玉華宮と云は、どのやうな處ぢやと云が、よく知るゝ、先づは門前は往還で宮殿へは四五町もよりと、見ゆるかして、宮殿などをめぐつて行くに松の並木などが、植てあると見ゆる、

蒼鼠竄古瓦

これは人影もない、やうすを、よく云たのぢや、晝なとも死の間から、出て居る鼠などは、人を見付けぬに依て、人が行ば、ひたもの死の間へそろゝと隠る

不知何王殿

此の何王と云は、直に太宗の事なれども、當時のことにあてゝ云故に、直に指ては云はれぬ、それでわざととぼけて云が、詩人の上手と云ものぢや、

遺構絶壁下

くみたてゝあるを云、宮殿のくみたてたが、またくづれずに、のこつて、絶壁の、阻きかけの下にある、

陰房鬼火青

其玉華宮の内に、はいつて見れば亡靈の火などが見ゆる、これ有るまじきことなれども、かのさびしき體を云までのことぢや、

壞道哀湍瀉

昔太宗の、盛んなりし時分、御遊興の時にかうはあるまいが、今は御なり道などもあれば、溪水が道へ溢れて、道も壞れたである、

萬籟眞笙竽

莊子の、籟の字と同じ意で、木草を鳴す風の音も籟の聲がするが、昔太宗の盛んの時分のほんゝもかくかと思はるゝ、

秋色正瀟灑

正には、今最中の意、瀟灑は、ものさびしいこと、

美人爲黄土 況乃粉黛假

人と云ふものは、はかないものぢや、昔太宗にしたがつて居た美人も昔の下露で、しまふた、これに付けてみればあまり色などに、をばれやうものではない、

送別

王維

此れは、世のいとみ榮を、やめて、ゆく隠者を、送る詩ぢや、

下馬飲君酒

先づ人を送るには馬にのり、夫の處の出はづれまで送て、夫から直に馬より下りて、別れの酒盛りなどをするが、定まりぢや、君にと云は、今送る人を云、飲しむと云は、居る者が、向の行く者に飲ましむるなり、

問君何所之 君言不得意 歸臥南山陲

此れは向へ問を、設けて云、其許は、今度どう云ふ所存で、何方へござるぞとゝへば君の云はるゝは、をれも最初のほどは立身をもしようとして居る故に、世に見たれども、不仕合でふらゝとして居る故に、世にうるさく居ようよりは、南山のあたりへ歸臥して、居やうといやるかと、

但去莫復問

當時侍金輿 故物獨石馬

御近處に侍た美人どもは、黄土となり、當時金輿に侍したものは、唯古い石馬の、狗犬が心なく動かすに居るばかりぢや、

憂來藉艸坐 浩歌淚盈把

草を藉て、とつくりと居て、昔のことを、あれこれと考て見れば、自然に感が起て、涙が兩方の手に、一盃にたまる、

冉冉征途間 誰是長年者

冉冉は次第々々に進み行くを云、人の生涯を、旅に喩へて云ふ、人の生涯と云ものは、丁度一日々々と旅をして、あるくやうで暫らくもといまらず、行くものぢや、右の如く昌なる帝王さへかくの如くなればまして我らに於てをや、猶以てのことぢや、これ當時の帝にあてゝ云ことなれども、直にあて付ては云はれぬに依て、御側まわりの美人のことを云が、詩人の眞情ぢや、

南山の遊りに歸臥して、樂しむがよい、必ず再び又官祿などを問尋ねぬやうにしやれ、

白雲無盡時

只山中の事故に、不斷常住白雲などが、晴たり曇たり、盡る時ない、引込でからは、何にも外に求ることなく、秋の風景に對して、樂しむがましぢや、兎角浮世のことはふりすてたがよいと、何のこともなく云捨て、ぞくが面白ぢや、白雲の字、隱者向きに仕ふ字ぢや、白雲と云へば此中には無盡の情が籠て居るぢや、

西山

常建

西方の山といふことぢや、此れは舟に乗り出して東よりして、其日の中に先へ行つたものとみえる、其行着いた日暮より夜迄のやうすを、よく順にいひとつた、

一身爲輕舟

是もかちあるきなれば、心は進めども身が進まぬものなり、路のはかも、ゆくまいが、今日は輕き舟に乗

て、行くことなれば總身に羽がはえて、飛やうに思はるゝ、

落日西山際

惟西山の方を見れば、西山に日も落かゝつて見ゆる、最早日暮をうな、

常隨去帆影

我身より先へ舟が行くやうすを云ふ、先きへ行く舟を目當にして、夫に隨てゆく故に、早い、

遠接長天勢

さて向を見わたせば、水涯まで、また餘ほど遠いけれども、此方から向の西山へ飛付くばかりに思はるゝ、

物象歸餘清

物象と云には、山もあり、川もあり、何もかも籠つているぢや、この句は低みの方を云、歸餘清と云は、日のある中は日のさゝぬ處もありて、どこが、どこやら、さつぱりと見えぬものぢや、日が入りきつてからは、さつぱりとみえる、こゝは、低みゆへ日が早くか

應す、

湖雲尙明霽

湖の空なども日が入りきつてからはさつぱりと見ゆる、また暮きらぬゆへに尙と云ふ、

林昏楚色來

楚色とは屈原が楚辭などに、楚國の風色をみれば、物あはれに物さびしく、見ゆると云ことに直に楚色と云である、これらも其通りの意で、暮方に風色をみればどうやら、暗くして物あはれにみゆる、

岸遠荆門閉

最早段々、暮方になつて、荆門の岸なども見えぬやうになつた、閉と云は、門と云より、もうみえぬと云ことに云ふたものぢや、

至夜轉清迥、蕭蕭北風厲

はや段々夜になつたれば、清迥と、どこもかも、すみわたつて、蕭々と物さびしげに、北風などがはげしく吹く、

ぢや、

林巒分夕麗

高みの方を云、林巒は、たかくそら近い故に、低い處は、日が入りたれども林巒にはまだいり日のかけが、きら／＼と見ゆるのである、

亭亭碧流暗

亭々は、高い貌ち、水の流れも日影のあるうちは、たゞはるかに向低くみゆるものぢやが、日影がなくなつては、向ふが次第に高く暗く見ゆる、

日入孤霞繼

日のあるうちは、見えねども、日が入てから空をみれば、孤霞が一筋についで見ゆる、孤霞と云は夕陽の影のこと、

洲渚遠陰映

向ふの渚の方をみれば、どうやら、あそこかぎり、岸そうながと、さつぱりとは見えねども、陰映と、をぐらくみゆる、舟で、はるかに見る景を云、碧流の句に

沙邊雁鷺泊宿處蒹葭蔽

夜になつた故に、此沙邊に舟をつないであれば、よし、あしが、しげつてある、其間たに、鳥などが泊てある、

圓月逗前浦

そうした上に東方から、月が出て面白い、圓月と云も面白い、水岸からまん丸に出て、暫くやすらうて、見ゆるものぢや、逗と云は月が海上から出る時は、ましまるくみゆるが二三尺も上つてからは、水中に影がうつろうて、滯留して居るやうにみゆる故に逗すと云、

孤琴又搖曳

月が出て面白さに、琴杯を取出して、樂むあまり面白さに、寢ずに居る體を云たものぢや、

冷然夜遂深白露沾人袂

そうするうちに段々、夜が深けたそうなど、驚てさて、あまり面白さに、夜の深くも知らなんだ、

宋中

高適

前漢の、梁の孝王の、都したところぢや、

梁王昔全盛

梁の孝王は、天子からも、大切になされたから、全盛のことでありしが、今名のみこのりて、あるばかりぢや、

賓客復多才

その孝王に付添うて、居た者は、司馬相如の、鄒陽、枚乗のとてすぐれた者どもが、御出入申て御遊び相手に成た、

悠悠一千年陳迹惟高臺

繁昌な孝王も、悠々と久しく千年にも及べば、其人は跡かたもなく成て、唯ある物とては、高臺のみぢや、

寂寞向秋艸悲風千里來

むかし繁昌な、時分は定て、家居なども、立並んで有つらふが、今は跡かたもないやうになつて、あきの時ふんは、唯高臺の邊に草がはへ茂りて、物さびしくな

ない、たゞ天の字のみ入用ぢや、韻字故に、仕ふたものぢや、

登臨出世界

今此塔へ登てみれば、人倫世界を出て、ものしづかな體ぢや、

磴道盤虛空

石坂道のことなれども、こゝでは、常のはしごのことに云ふ、高い塔故に、まつ直に梯がかげられぬ、あちらへ廻り、こちらへめぐりてかけてある、それをそろくと上れば、虚空をめぐるやうにある、

突兀壓神州

歴は上から下をさゆる、安排の字で、目下に見をろす意、都のことなれば、天外に高い家居もあれども、あまり塔が高い故に、都中が一目に見ゆる、

崢嶸如鬼工

このやうに崢嶸と高いは、外の者の細工では、あるまい、大方鬼神の、手きはさうなと、

つた、たゞ秋風が千里より吹來るも、物かなしく聞ゆる、さて、人と云ものはかないものぢや、これも孝王が賓客を、愛したことを羨み望む所存があるけれども、上はべでは、そう云ことも、知らぬやうに、梁孝王のことばかり云てを、

與高適薛據同登慈恩寺浮圖

岑參

唐人の詩は、惣體寺方などへ行ては、風流に佛書の文字を用ひ、唯其本意にかまはず、寺方に親しい字を用ることぢや、

塔勢如湧出

塔をみれば、中々の人のちからでは此のやうに高くは作られまい、大方地より湧出したことそうなど、法華經の文字を用て、驚く體を云、

孤高聳天宮

外に塔も大分あるが、是につく塔はない、大方天にもといくやうにみゆる、天宮と云は宮の字に用處は